
アニマル・マスター

相川 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニマル・マスター

【Nコード】

N0140H

【作者名】

相川 凜

【あらすじ】

明るい未来を夢見て田舎から世界で唯一の魔法学校に入学した少女リリス。彼女が学ぶのは、学園三大不人気学部の一つ、動物学。入学早々、ちょっと危ない人に好かれ、授業では謎の卵を召喚してしまう不運な彼女は無事に卒業することができるのか？

乙女の日常

「リリース、そっちに行つたぞ！」

ああ……誰かが私を呼ぶ声が聞こえる。

けれど、今の私には立ち上がる気力なんか無い。

喉はひりひりとした痛みを訴え、肺は酸素を求めてフル稼働中。にもかかわらず、息苦しさめまいに眩暈さえ覚える。

しかたがなく顔だけゆっくりと上げた私の視界に広がったのは、

白い毛皮……！

「ふぐつ！？」

私はその毛皮を顔面で受け止めた。

……つかまえ、た。

暴れる毛皮をしつかりと顔と両手で押えこみながら、そのまま後ろへと倒れる。獣の体臭に混ざって新緑の香りが微かに鼻についた。

「ふぐうう〜」

跳ねウサギと呼ばれる『その毛皮』は全く大人しくなる様子もなく、私の腕を跳ね除けようともがく。こちらも蹴られようが、噛みつかれようが、離すわけにはいかない。必死で抑え込む。

この最後の一匹を捕まえないかぎり、追いかけてつこは終わらないからだ。すっかり日も暮れかけている。このウサギを捕り逃がせば、次の日の朝まで追いかけてつこを続ける羽目になるかもしれない。

が、ウサギの方も必死だ。なんとか私の腕から逃れようとして後ろ脚で蹴り上げてくる。生地の高い実習着をもろともせず、鋭い爪が私の腕に食い込む。

痛いし、息苦しいし、臭いしで気力が萎えそうになる。

そんな私の苦労も知らずに、口々に勝手なことを叫びながら駆け寄ってくるクラスメイトが数人。

「そいつで最後だ！」

「絶対に離すなよ！」

「また、この前のように徹夜になったら、お前のせいだからな！」
皆の薄情な言葉に怒りがこみ上げてくるけれど、ウサギの胸毛で
口を塞がれていては一言も言い返せない。

「だいたい一昨日の捕獲実習で最後の一匹を捕り逃がしたのは私じ
ゃない！」

「図体ばかりデカイくせに気の弱いグルドが、顎に蹴りを入れられ
たぐらいで離れたせいだ。」

「反論できないもどかしさと、ろくに息もできない苦しさに唸って
いると、誰かの手が私が抱えるウサギに添えられた。」

「よくやった！ もう離してもいいぞ」

待ち望んでいた言葉に、私はゆっくりと手を離して大きく息をつ
く。

目をあけると、沈みかけた太陽を背に一人の少年が立っていた。
今まで私と格闘していたウサギをすっかりと腕の中に抱いている。

「逆光で顔はよくわからない。でも、聞きなれた声から彼が誰かは
すぐにわかった。」

「今すぐお風呂に入りたいよ、リュカ。自分が臭すぎる」

リュカはウサギを抱いたまま、半身を起した私の隣に腰を下ろし
た。今まで逆光で見えなかった姿があらわになる。

夕日に照らされて炎のように赤く煌ほく髪は汗で顔にはりつき、褐
色の意志の強そうな瞳にも疲労の色が浮かんでいた。

「俺も。それと腹減ったよなあ。ウサギ料理以外なら、なんでもい
いから食いたい」

私達が追いかけてまわしていたウサギは、跳ねウサギという名の食
用ウサギだ。一般的なウサギよりも大きく、中型犬程の大きさがあ
る。毛皮は茶色で体の内側、胸から腹にかけての毛だけが白い。

特徴的なのは名前の由来にもなっている後ろ脚だ。体高の倍程も
ある。その後ろ脚の脚力は絶大で、一回のジャンプで軽く10mは
飛ぶことができる。

「いくら食用って言っても、捕まえたウサギがそのまま料理されてでてくるのは気が引けるよね」

私はリュカの腕の中のウサギを見ながら呟いた。ウサギは疲れ切ったのか自分の運命を悟って観念したのか、リュカの腕の中で大人しくしている。つぶらな黒い瞳やふかふかの毛皮が可愛い。ちよつと臭うけれど……。

「いいや。俺はウサギをもう見たくもないだけ」

リュカが自分の腕の中のウサギを見て、うんざりしたような表情を浮かべた。

「何やってんだあ？ さつさとウサギをアール先生のところに持って行こうぜ」

私達が芝生に腰を下ろし一息ついていると、後ろの方から誰かが呼ぶ声が聞こえた。

声が聞こえた方へと顔を向ける。そこには一台の台車を引きながら、校舎へ向かって歩き出している生徒達がいた。どの生徒も土や汗で服と髪を汚し、疲れ切った足取りでフラフラと歩いている。

彼らが引いている台車には大きな籠が乗せてあり、中にはリュカが抱いているのと同じウサギが五羽入っていた。私達が必死になつて追いかけてまわして、捕らえたウサギ達だ。

私とリュカも緩慢な動作で立ち上がると、鉛のように重い足をひきずって彼らの後を追った。

寮に戻るなり浴室に駆け込むと、シャワーの蛇口をひねった。勢いよく湯が流れ出し浴室内に湯気が立ち込める。

「一月前に戻りたい……」

心地よい湯を浴びて溜息がもれた。

ここ、クレスメント学園に入学してから一月が経ったが、もうす

で後悔し始めている。

クレスメント学園は潜在的に魔力を持つ人間だけが入学することのできる魔法学校だ。

この世界で魔力を持つ人間の大半が十六になると、この学園に入学する。魔法を教わることのできる場所が、この学園しかないからだ。

クレスメント学園以外で魔法を教える行為は国際法で禁止されているし、この学園の卒業証書を持たない人間が魔法を使うことも禁じられている。さらに違反者には厳しい罰則が科せられる。

魔法を使いたいと思えば、クレスメント学園に入学するしか道はない。そして学費も三年間の生活費も無料、おまけに魔法を使える者は待遇のいい仕事につけるときたら、必然的に魔力のある者の大半が入学することになる。

私もこの学園に入学したことについては何も後悔していなかった。後悔の原因は学部を選択を誤った事。

魔法と一口に言っても様々な系統の魔法があり、クレスメント学園にも多くの学部がある。生徒は適正検査の結果や、将来につきたい職業、自分の興味のある分野等から入学時に学部を選択する。

私が選択した学部はクレスメント学園三大不人気学部の一つ、動物学。

噂には聞いていた。

あえて評判の悪い学部を選んだんだから、それなりに覚悟もしていたつもりだった。

でも、ここまで評判通りだったなんて……いや、評判以上かもしれない……。

入って一月になるけれど、やる事といえばウサギやらネズミやらを追いまわすことと家畜と騎獣の世話ばかり。

噂通りの「キツイ・クサイ・キタナイ」と三拍子揃った学部だった。

他の学部の子供達だったなら、もう魔法の一つぐらいは使えるようになってるかもしれない。

また一つ大きな溜息をつくとき、シャワーの蛇口をひねって湯を止めた。

ステンドグラスで装飾が施されたガラス戸を押し開き、すぐ傍にかけておいたバスタオルを手に取る。

体に残った水滴をタオルで拭くと、手早く下着と部屋着を身に付けて洗面所を出た。タオルで濡れた髪を拭きながら窓辺に歩み寄り、すっかり日も落ち、窓の外は闇に包まれていた。空には無数の星がきらめき、満月がその模様までわかる程にはつきりと見える。

空だけ見上げていればとてもロマンティックな景色だ。でも視線を下げると……。

月明かりに照らされて幻想的に浮かび上がるのは無数の十字架。合間を縫うように飛び交う青白い光。ときおり浮かび上がる人影。

昼間は青白い光や人影のかわりにカラスが居ついている。

窓の下に広がる風景。それは、まぎれもなく墓地だった。

寮に入った当初は恐ろしくて夜もろくに眠れなかつたけれど、一月でだいぶ慣れてきた。でも、いくら慣れてきたといっても怖いものは怖い。

ちなみに私の部屋と廊下を挟んだ向い側に並ぶ部屋からは、墓地のかわりに獣舎が見えるらしい。そちらも上級生の話では、夏は臭くて窓が開けられないため、今は墓地側の並びの部屋しか使用されていないのだとか。

建物自体は歴史を感じさせるロマンチックな石造りで内装は高級ホテル並という贅沢なものなのに、立地のせいで全てが台無しになっている。

他の寮だったら、窓の外には森が広がり、カラスの鳴き声や死霊の呻きの代わりに小鳥のさえずりが聞こえるのに……。

また溜息をつきそうになってしまつ。

駄目だ！

溜息ばかりついでると不幸になる。死んだ婆ちゃんが、そう言っていた。何か楽しい事を考えよう！

楽しいこと……楽しいこと……。

髪をタオルでガシガシと拭きながら、一人でぶつぶつ呟いていると、

「リリース。いるう〜？」

呼びかけられた人の気が抜けるような間延びした声が、部屋と廊下とを隔てている扉の方から聞こえてきた。

「夜ごはん！」

その声で『楽しいこと』を思い出し、私は勢いよく扉に飛びついた。

勢いあまつて、そのまま扉を思いきり開けそうになる。なんとか思いとどまると、一呼吸おいてから慎重に扉を押し開いた。

危ない、危ない。

声の主の顔に扉をぶつけるところだった。

彼女は間違いなく何も考えずに扉の正面に立っているはずだし、反射的に避けるなどという芸当ができるはずもない。

「リリースってば、本当に食いしん坊なんだからあ」

扉の外には一人の少女が立っていた。私の姿を目にすると、小さく首をかしげて子供のように可愛らしい声で笑う。

首を傾げた拍子に、緩やかなウェーブのかかった淡い金色の髪が微かにゆれた。空色の瞳には優しい微笑を浮かべている。

同じ寮に住むエレザ・バートリーだ。

寮内で同じ学年の女子はたったの三名ということもあって、エレザとは入学後すぐに親しくなった。

「だって、仕方ないじゃん。一昨日は夕飯抜き。昨日は遅すぎて、余りものしか食べられなかったんだから。まともに食べられるのは二日ぶりだよ？」

そう、決して私が人並み以上に食い意地を張っているわけじゃない、と思う。

入学して以来、日課となってしまうた午後からの追いかっこ（捕獲実習）のせいで、夕飯が食べられない日があるのがいけないだ。

私はタオルを肩にかけ、手櫛てくしで髪を整えるとエレザと一緒に食堂へと向かった。

突然のプロポーズ？

クレスメント学園の寮は私達が住む寮を含めて四棟あり、全ての寮が同じ造りになっている。

一階部分が授業で使用される講義室や多目的ホール、二階部分が生活スペース、三階から六階部分が学生達の個室だ。私達の寮は生徒が少なく、五、六階は現在使用されていない。そして三階が男子寮、四階が女子寮に分けられていた。

食堂は洗濯室や談話室と同じく二階にあった。

廊下の中央に位置する大きな階段を降りると、正面に重厚な両開きの扉が見えてくる。その扉の部屋が食堂だった。今は扉は開け放たれ、中からは生徒の談笑する声と、料理の美味しそうな匂いが漂ってきていた。

広い室内の壁際には長いテーブルが置かれ、料理の盛られた大皿が並べられている。セルフサービスになっている為、生徒が列をつくってトレーの上に乗せた小皿に料理を取り分けていく。

私とエレザも食器を乗せたトレーを手にとり、列に加わった。

「三年間は毎日この料理が食べられるなんて幸せだよ〜」

エレザが白身魚のムニエルを皿に盛りながら、うっとりとした表情で「そうだね。この料理って並のレストランより美味しいし、種類も豊富で飽きないし」

「うん。食べた事のない料理ばかりで、びっくりしちゃった。パスタとか、ステーキとか、魚のムニエルとか……」

私はローストビーフを小皿に盛ろうとしていた手をとめて、エレザの顔をまじまじと見つめてしまった。

「え？ パスタもステーキも知らなかったの？」

彼女は不服そうに少し口を尖らせて抗議する。

「知ってたよお。そういう料理があるって話は聞いてたし、本で見ただけもあるし〜。食べたことがなかっただけ」

「一度も？」

「うん。うちは毎日三食、自家製パンと野菜スープだったからあ」

「エレザのうちってパン屋なんだ」

「ううん。親戚に農家の人がいてね、小麦を分けて貰えるんだあ。

粉ひきからやらなきゃいけないんだけどお、うち人手だけはいっぱいあるし」

「そう……」

私はどう言葉をかけていいかわからず、とりあえずトングでつかんでいたローストビーフを皿に盛った。

今どき小麦の製粉からパンを作る一般家庭って……。半端じゃないぐらいの極貧生活を送ってたんだろうか。

病弱な母親。小さい妹や弟達。一家の家計は母親の内職と、エレザが休日や学校が終わった後に近所の店で働いたわずかばかりの収入が支えて……。

「リリースってば、どうしたの？」

急に黙り込んだ私を不思議に思ったのか、エレザが心配そうに声をかけてきた。

私は慌てて顔を上げた。勝手に彼女の貧乏物語を頭の中で作り上げていたので、少し後ろめたい。

「ごめん、なんでもな……」

「リリース!？」

その場を取り繕おうと口を開いた私の声は、食堂中に響き渡るほどの大声で遮られた。

声の主は列の先、私の二人前に並んでいる生徒だった。彼は持っていたトレーを、料理が盛られた大皿が並ぶ長テーブルの上に強引に置き、私の前にいる生徒を無造作に押しつけた。

「おい！ 何するんだよ！」

押しのけられたはずみに生徒が持っていたスープがこぼれて、抗議の聲が上がった。

私の名を呼んだ大声の主は、ちらりと抗議の声をあげた生徒の方

を見ただけで無視し、無言で私の方へと近付いてくる。

「君は、本当にリリースというのか？」

彼は私の前に立つと、値踏みするように足の先から頭の先まで眺めまわした。

「ずいぶん失礼なヤツだ。」

知り合い？ でも、私には会った記憶がない。

細身で中背。青白い顔に眼鏡をかけ、茶色い髪と濃い茶色の瞳をしている。顔は……よく見ると整っている部類に入るかもしれない。

「リリースという名なのかと聞いている」

私が記憶の彼方から彼を思い出そうと頑張っていると、じれたのか彼は私を睨みつけて低い声で言い聞かせるように言った。

この状況は、どう考えても脅迫されているとしか考えられない。

私に何か恨みでもあるんだろうか。全然記憶にないけど、よく恨みを買った方は覚えていないとかいうし。

こういう時は下手に言い訳をすると相手の怒りに油を注ぎかねない、と思った私は、

「そうです。リリースです。ごめなさい！」

なんだかよく分らないけど、謝っておくことにした。

「リリース！」

勢いよく謝って頭を下げたのと同時に、両腕を強い力で掴まれた。掴まれた拍子に手にしていたトレーが揺れて、食器が音を立てる。

びくりと体が強張り、トレーを持つ手が震えた。

謝ったのに……勘弁してよお。

次に彼が口にすると思われる言葉を予想して身を固くする。

「僕と結婚してくれ」

が、彼の口から飛び出した言葉は、私の予想を遙かに超えていた。私は弾かれたように顔を上げ、彼の顔を茫然ぼうぜんと見つめた。

結婚してくれ、と言ったように聞こえたけれど、聞き間違い……だよね？

「あの、今、なんて……？」

「僕と結婚して欲しい、リリース」

少しだけニュアンスを変えて繰り返された言葉が、私の頭の中に染み渡っていく。

聞き間違いないじゃない。間違いないく求婚されている。見覚えの無い男に、寮の食堂で、くたびれた普段着姿で。

ゆっくりと口を開く。

「ヤダ」

他に言葉が見つからなかった。

とにかく、よく知らない人と結婚など出来るはずがない。断らなければ。その思いから咄嗟とっさに出た一言だった。

簡潔すぎる断りの言葉は彼を怯ませたらしく、私の両腕を掴んでいた手から力が抜けた。

私はこの隙に彼の手から逃れようと、ゆっくりと後ずさった。

急に逃げると野生動物は襲ってくる。逃げる時は相手から目をそらさずに、慎重に後ずさり距離をとる。

もちろん、彼は野生動物じゃない。悲しいけど、一月の間に身につけてしまった習慣だ。人間相手にも体が勝手に動いてしまう。

「あの……。人違いだと思っんですけど」

数歩の距離を取ったところで立ち止まると、恐る恐る声をかけてみる。

彼は怪訝けげんそうな表情を浮かべて私を見返した。

「人違いも何も無い。初めて会ったんだから。君がリリースだから、僕は結婚を申し込んでいる」

「初めて……会った？」

ちよつと、待って。何を言っているのか理解できないんだけど。

なぜ初めて会った人に求婚するのか？ なぜリリースという名にこだわるのか？ 聞きたいことだらけだった。

でも、それよりも……。

「どちら様ですか？」

私に求婚している、この男は何者なのか？　それが、一番知りたかった。

「僕はルパート・テイラー。十六歳。悪魔学を専攻している」
悪魔学。

毎年、希望者が十人以下しかない学園一の不人気学部。
奇人・変人の宝庫。

卒業後、犯罪に手を染める者も多いと聞く。それも窃盗や詐欺等という一般的な犯罪ではなく、猟奇的殺人等の常軌を逸した犯罪にだ。

そんな悪名高い学部だけど、卒業後は国際魔法取締局の特別捜査官の職が約束されている羨ましい学部でもある。

魔法がらみの犯罪で最も多いのが、呪術だからだ。魔法が使えない一般人でも生贄を奉げたり、特定の儀式を行うことで悪魔や悪霊の力を借りることができる。

それを取り締まる為に、呪術や悪魔について学んだ者が必要になる。

故に悪魔学を専攻する者は二種類のタイプに分けられるという。

- 一つは国際魔法取締局という世界の中枢で働くのを夢見る者。
- 一つは純粹に悪魔を崇拜する犯罪者予備軍。

この男はどちらのタイプなんだろう？

少なくとも初対面の人にいきなり求婚するような人が、まともな思考を持っているとは思えない。

嫌な予感がする。

自然とトレーを持つ手に力が入る。

子供が困ったときに人形を抱き締めるように、人は窮地ききうちに立つと何かに触れていないと不安になる生き物なのかもしれない。

「君の夢を見たんだ。夜の魔女、リリスが僕の前に現れて言った。

近いうちに僕に会いに行き、契りを結ぶと!」

ルパートは熱を帯びた瞳で私を見つめた。

その瞳は私に向けられてはいるけれど、私を見てはいない。夢で見た「夜の魔女」とやらを見ている。

「夜の魔女って、なに?」

正直言っただけ聞きたくなかった。でも、彼が私を何と勘違いしているのか知らずにいるのも気味が悪い。

「夢の中に現れ、男を誘惑する美しい悪魔だ。その甘美な声で僕に囁いた。共に色欲の大罪を貪ろうと」

嫌な予感は的中した。

彼は近づきたくないタイプの人間だった。

悪魔崇拝者。犯罪者予備軍。

「あの……やっぱり人違いだと思っただけ。私、人間だし」

私のどこが男を誘惑する美しい悪魔に見えるんだろう?

顔は十人並み、体は細身で胸も控えめ、おまけに田舎育ちで言動にも優雅さや色気はない、と思う。自分で言うのも悲しいけれど……

…

さらに今の私はひどい格好をしていた。

ジャージ素材のパンツに色褪せたTシャツ、スウェット素材のジップアップ、学園支給の校章入りスリッパ。肩には白いタオルをかけ、乾ききらない黒髪をたらしめている。

男を誘惑する美しい悪魔というより、風呂上がりのオヤジだ。

「夜の魔女は黒髪に黒い瞳だった。それに三年もの間探したが、リスという名の若い女性に会ったのは初めてだ」

私に会う前にリスという名の若くない女性には会ったんだろうか。

私は会ったこともない同じ名前の女性に、この男を押しつけてしまいたくなった。

「最初に会った人が夜の魔女だったんじゃない? 近いうちに会う

って言ってたんだから」

「彼女は黒髪ではなかった。それに夜の魔女は若く美しいと決まっている。君はその条件を満たしている」

「ちよつと待て。私が満たしている条件は「若い」と「黒髪」だけだ。」

三年も探していたせいなのか、彼の眼には私は自動補正されて絶世の美女に映るらしい。

「とにかく、私は結婚なんてするつもりはないから」

私は人違いだと主張するのを諦めて、今度は結婚する意志が無いことをはっきりと伝えようと思った。

「君が僕と契りを結ぶと言ったんだろ。今さら勝手なことを言うな！」

ルパートが苛立たしげに私を睨みつけてくる。

「言った覚えなんかない。勝手なことを言ってるのはあんたの方でしょ！」

私も負けずに彼を睨みつける。

あまりに身勝手に人の話を聞かない態度に、先ほどまで感じていた恐怖も吹き飛んでしまったのだ。

「いいや、君は確かに言った。今でもはっきりと思い出せる。僕に触れた冷たい手の感触も、耳元にかけられた甘い吐息も」

ルパートが宙に視線を彷徨さまよわせ、けだるげな溜息をもらした。

彼はまた甘い夢の世界を思い出したようだが、私は頭から冷水をかけられたような悪寒を感じて身震いした。

「言っていない！」

「いや、言った！」

私達の会話が押し問答の様相を呈してきた頃、微かに袖を引く気配を感じて振り返った。

エレザが当惑した表情で私の袖を引いている。

「あのね。見世物になつてる気がするの」

目の前の変人に気をとられていて気付かなかつたけれど、確かに私達を囲んで人だかりができていた。皆一様に固唾かたすをのんで成り行きを見守っているようだ。

そういえば、やけに静かになつたなとは感じていたんだ……。

「おい、聞いているのか？ 君は僕と契りを交わすと言つたんだ。忘れたとは言わせない！」

ルパートは人だかりに気付いていないのか、人目が全く気にならないのか、大声で喚いた。

きつと後者なんだろうな。

彼が気にしなくても私はおおいに気になる。

大声で喚いているだけでも恥ずかしいのに、契り、契りと連呼しすぎだ！

なんとかしてこの場から逃げないと……。

その時、視界の隅によく知つた顔をとらえた。

彼の顔を見た瞬間に、上手く逃げる方法が閃く。私の心に住む悪魔が微笑んだ気がした。

「わかつた。確かに貴方と契りを交わすと言つた。でも、結婚はできない」

私は彼の瞳をしっかりと見据えて言つた。

彼の瞳に動揺の色が浮かぶのを確認すると、再び口を開く。

「ねえ、リリスは夜の魔女でしょう？ 貴方だけに約束を交わしたと思つ？」

上目で彼を見上げ、片方の口の端を上げて笑みを浮かべる。

自分の言動に悪寒がはしる。けれど、背に腹は変えられない。

映画の中に出てくる悪女を一生懸命思い出し、それっぽく演技続ける。

「実はね、貴方と約束を交わす前に、約束を交わした相手がいるの。この場にね」

ルパートの眼の色が変わつた。

意外に演技の才能があるのかもしれない。よし、もう一息だ。

「どいつだ!？」

私は躊躇ちゅうちゆすることなく、片手を上げて野次馬の一人を指し示す。

許せ、グルド。

ルパートだけではなく、その場に居た全員が私の指し示す先に顔を向けた。

「えええええ!？」

全員の視線を受けて、自分の顔を自分で指差したまま固まるグルド。

そんな彼に、ルパートが無言で歩み寄って行く。

「エレザ、行こう!」

私はエレザの手を取ると、片手でトレーを持ったまま食堂を逃げ出した。

「ねえリリース。食堂の外にい、食器を持ち出すのってダメじゃなかったあ?」

そう、食器を食堂外に持ち出すのは禁止されている。後で管理人さんに謝らないと。巻き込んでしまったエレザの分も含めて。

ああ、今日についてない……。

不名誉な噂

動物学クラスの新入生の朝は早い。

早朝の五時から獣舎の掃除や家畜・騎獣の世話が待っているからだ。

家畜・騎獣の世話には専門の職員もいるけれど、私達新入生には授業の一環として義務づけられている。

それを朝の七時までには終わらせてシャワーを浴び朝食をすませて、八時までには一般教科の授業がある本館に行かなくてはいけないので、朝は寝ぼけている暇もないくらいに忙しい。

中にはシャワーを浴びるのが面倒だったり、間に合わなくてそのまま本館に行く生徒もいる。そういった生徒は、汗と獣の匂いで他のクラスの生徒から嫌な顔をされる。

それも動物学が敬遠される要因の一つだった。

それでも私は世間ではお年頃といわれる年齢の女の子だ。

さすがに汗と獣の匂いをつけたまま本館に行くのは耐えられない。時間が無い時は、食事を抜いてもシャワーだけは浴びていた。

せめて一般教科の授業が普通の学校のように九時とか十時からだったらいのに、と何度思ったことが。

おかげでクレスメント学園に入学してから朝食がまともに食べられた日は数えるぐらいしかない。

いつも今日ぐらい順調に仕事が進めばいいんだけどなあ。

天気もいいし、いつも気の荒い飛行竜も大人しいし、この分なら朝ごはんも食べられそう！

上機嫌で鶏の玉子を集めていると、ふいに上から恨めしそうな声がかかった。

「リリース。酷いじゃないかあ」

あ、忘れてた……。

「おはよう。グルド」

顔を上げて笑顔で挨拶する。きっと、私の笑みはひきつっていたと思う。

「おはよう、じゃないよ。君のおかげで酷い目にあっただから」
グルドは今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「ごめん。お腹すいててさあ、あの人と関わってたら夕食の時間が終わっちゃうそうだったから。ほら、グルドは空の食器を持っていたし」

「食事が終わってたからいいって問題じゃないよお。誤解を解くの大変だったんだよ？」

よく見るとグルドの小さな目の下には、うつすらと隈があった。

もしかして、あんまり寝てないのかもしれない。

「君からも僕とは関係ないって言うておいてね」

グルドは私に背を向けてフラフラと歩き出したが、思い直したように立ち止ると振り返った。

「絶対に言つてね。あの人には、もう関わりたくないからね」

本館は四方を寮を兼ねた四棟の別館に囲まれている。

別館には私達の住む土の館のように他の三棟にも火、水、風と四大元素の名がつけられていた。

入学初日に学園の敷地内を案内されて説明をうけた時、まるでこの世界の縮図のようだと思った。

私達の住む世界にも、クレスメント島の四方を囲むように四大元素の名がついた大陸がある。

そして世界の宗教的な意味での中心、クレスメント島は『光の島』の別名をもっていた。

学園の本館も光を表す黄色と金色がテーマカラーになっているんだけど……。

なにせテーマカラーが黄色と金色だからとても神々しいのだ。目が痛くなるぐらいに。

調度品は全て金で統一され、床に敷かれた校章入りの絨毯まで黄色。でも、なぜか安っぽく見えたり、悪趣味に見えないのが不思議なところだ。

一歩間違えれば悪趣味になるところを、ギリギリのところまで踏みとどまっている。それが、私が初めて本館に足を踏み入れた時の感想だった。

今日も見慣れた黄金の装飾が施された手すりと白い大理石でできた階段を上り、一年生の一般教養の授業がある第一講義室に向かった。

いつも授業前は開け放たれている両開きの扉をくぐると、なぜか講義室内が少し静かになったように感じた。

まさか、ね。

ただの気のせいだろうと思い、エレザの姿を探す。柔らかい金色の髪を持つ、人目を引く美少女の姿は見当たらない。

まだ来ていないらしいので、適当な場所に座る。近くに座っていた生徒が、私と目が合うと戸惑ったような表情を浮かべた。

なんだろう？ いつもと雰囲気が違う。さつきから感じる視線も、気のせいじゃないのかもしれない。

少し居心地の悪さを感じた時だった。

「よっ！ 魔性の女」

スパーンと後頭部を誰かが勢いよく叩いた。あんまり勢いよく叩かれたので、机に額を思い切りぶつてしまった。

「なに……それ？」

なんだ？ その魔性の女ってのは。

ぶつけた額をさすりながら振り返る。

後ろの席には、意味あり気な笑みを浮かべて身を乗り出すリュカの姿が。

「噂になってんぜえ。結婚を約束した男がいるのに、二股かけて修羅場になっただって」

「なにそれ！」

いつの間にそんな噂が広がったんだ？ 冗談じゃない！

今度は私が立ち上がった後ろの席に身を乗り出した。

「あれは勝手に変な奴がプロポーズしてきただけ！」

「噂って、勝手に大きくなっていくものだからねえ。リリースってば可哀そう」

私が声を荒げてリュカに詰め寄っていると、あまり心配してなさそうな間延びした声が聞こえて、一気に身体中の力が抜けた。

この声はエレザに違いない。

隣で椅子をひく音が聞こえて、視界の隅に淡い金色の髪が映る。

「そうそう、リリースちゃんってば可哀そう」

こちらは完全に面白がっているリュカが、私の頭をポンポンと軽く叩いた。

「人事だと思つて……」

「リリース……」

リュカの手を乱暴にはねのけ文句を言おうとした時、エレザが私の制服の裾を小さく引いた。エレザは講義室の出入り口を見つめている。私は彼女の視線の先を追って言葉を失った。

あいつだ。

私に食堂で求婚したあの男が、講義室の扉付近で何かを探していた。たぶん彼の探し物は私だ。

慌てて机の影に隠れようとした時には、もう遅かった。

彼は私が姿を隠すより早く気付いてしまったらしく、まっすぐにこちらへと向かってきた。

「あれが例の、お前にプロポーズした物好きかよ？」

小声で囁きたリュカに、私は小さくうなずいた。

「あの大男が君とは関係がないと言っていたが、本当なのか？」

ルパートは私の前で立ち止まると両手を机に置き、身を乗り出し

た。

「うん。その……勘違いだったかなあ、なんて……」

笑って誤魔化そうとしたけれど、酷く乾いた笑い声しかでない。

「では、僕と君との間には何も障害はないわけだ」

まずい。

このままだと冗談抜きで結婚させられてしまう。

「ええっと。本当は後ろの席にいる……」

そうだ！ さっき馬鹿にされた仕返しもかねて、リュカに押しつけてしまおう。

そう思ってから後ろを振り向いたが、グルドと違って感と要領のいいリュカは逃げた後だった。

もう誤魔化すのは無理だ。開き直るしかない。

「障害はなくても、私は結婚なんてしないから！」

リュカに押しつけ損なった私は、ルパートに向きなおると八つ当たり気味に強い口調で宣言した。

しかし……。

「君が夢に現れて僕に言ったんだろう。僕と……」

ルパートの口からは、昨日の夜に何度も聞いたセリフが……。

ああ、何を言っても無駄だったんだ。

「だから君は僕に対して責任が……」

なにやら一人でぶつぶつ続けるルパート。

このままじゃ埒が明かない。この男なら結婚を承諾しない限り、一日中だって呟き続けるかもしれない。

もう、うんざりだ。いいよ、認めてやるよ。

「ああ、もう！ わかった！ あんたと結婚する！」

私は半ば自棄になって机を叩いて叫んだ。

しまった……。

叫んでしまってから急に冷静になって、私はルパートを見つめたまま固まった。

ここは講義室でも多い。食堂のとき以上の視線を感じる。

普段なら生徒の談笑の声でざわついている室内は、この時だけは異様に静かだった。

周りを見るのが怖くて、ルパートから視線を外せない。放心したように私の目を見つめていたルパートの顔に笑みが広がる。

嫌な予感しかしないんだけど……。

「やっと、わかってくれたんだな！ さっそく僕の部屋で……」

私は追い討ちをかけるように歓喜の声を張り上げるルパートの口を慌てて片手で塞いだ。

「ただし、卒業してからね」

私はルパートを軽く睨みつけると、周囲に聞こえないように、なるべく低い声で言った。

これだけは絶対に譲れない。

本当に結婚なんかしてたまるか。卒業と同時に逃げ出してやる。

「卒業してからだと？ まだ三年もあるじゃないか？」

私が口を押さえていた手をどけると、ルパートが不服そうな声をもらった。

「私はここに魔法使いになるために来たの。あんただって、そうでしょ？ 勉強以外のことに夢中になって無事に卒業できると思う？」

クレスメント学園は少しでも魔力があれば誰でも入学できる。

でも、卒業するのは大変だった。

入学した生徒の三分の一は、まず進級できずに留年する。無事に進級できた生徒も次の年に留年したり、卒業試験に落ちたりして、ストレートで卒業できる生徒は入学時の半数以下だった。

当然だけど、ルパートも卒業はしたいらしい。

「わかった。卒業するまで待とう」

渋々ながら納得してくれた。

絶対に卒業式の日には逃げ出そうと固く誓ったとき、授業の始まり

を告げる鐘が鳴った。

謎の玉子 1

一般教養の授業は、私たち動物学クラスの生徒にとっては地獄の時間だ。

授業内容は他の学校でも教えている歴史や数学などの他に、魔法史や古代語の授業なんてものもある。

一年生全員が受講するので人数が多く、一つの講義室に入りきれないので二つのグループに分けて授業が行われるんだけど、それでも講義室内は生徒でいっぱいだ。

一コマ九十分で午前十一時三十分までに三講義おこなわれる。授業スタイルは基本的に先生が講義し、生徒がノートを取るという形。これが、早朝から起きて肉体労働をしている身には堪える。眠くてたまらない。

今日の授業は数学と歴史、そして古代語だった。

一時限目の数学は眠気が襲ってくることもなく無事に終わった。

次の歴史は途中で意識を途絶えさせながらも、なんとか授業の終わりを告げる鐘まで耐え抜いた。

ただ、ノートには解読不可能な暗号が記されている。授業の内容も前半の数分しか覚えていない。

三時限目の古代語になると、もう意識が完全にシャットダウン。鐘の音で起きられれば上出来というありさまだ。

どの科目も二時限目以降に授業があると、同じような状態になってしまう。私のノートは暗号で埋め尽くされていた。

試験前にエレザにノートを借りるしかないなあ。

私は役に立ちそうもないノートを眺めながら、席に座ったまま『ある物』を待っていた。

他の生徒も授業の終わりを告げる鐘の音を聞いても、講義室から出て行こうとしないどころか、立ち上がりさえしない。わずかに窓際の席の数名が、終了の鐘の音とともに立ち上がり窓を開けたぐら

いだ。

待つこと数分。

開いた窓から、白、黒、青、黄色、赤、緑、鮮やかな色の一群が教室の中へなだれ込んできた。

長い尾と派手な色の翼を持った、小さな鳥達だ。それぞれ頭に小さなベレー帽をのせている。ベレー帽の色は黒、赤、青、緑の四種類。

生徒たちの間で『伝令くん』と呼ばれている鳥たちだ。

正式名称は確か、クレスメント・セキセイ・オナガンとか……。クレスメント島にのみ生息する鳥で、知能がとても高く人間とも会話ができる。

彼らはクレスメント学園でアルバイトをしていた。

学園が彼らの食事と安全な寝床を提供するかわりに、学園内の伝令係として働いてもらっているのだ。

私とエレザの前にも黒いベレー帽をかぶった伝令くんが舞い降りた。

黒いベレー帽は土の館の生徒担当の証だ。

さらに彼らの中で細かく担当を決めているようで、私とエレザには、目の前に舞い降りた彼がいつも伝令を届けてくれた。リュカの担当も彼だ。

伝令くん達は生徒の交友関係を把握していて、仲のいい人間をまとめて担当にしているみたいだった。その頭の良さと要領の良さはすごいと思う。

私達の担当は、真っ白の体と翼の一部に黒いラインが入り、長い尾だけは黒一色という、伝令くんには珍しい落ち着いた色合いをしていた。

そこで私たちが彼（彼女かも）につけた呼び名は「シツク」。他の生徒には違う名で呼ばれているのかもしれないけれど。

「オハヨ、オハヨッ。オシラセ、ダヨ」

シツクはちよつと小首をかしげながら高い声で言った。

「マズハ、エレザ、サン」

ちよんちよんと両足で飛ぶようにエレザの前に数歩移動する。

「キヨウノ、ゲンジユツガク、ハ、ツチノヤカタ、ダイイチ、エンシユウシツ！」

そこまで言うと、羽をモゾモゾと動かして小休止。

小鳥つて独特の動作が可愛いくて、いつも見入ってしまう。

「ピチチツ。カゲロウ、ツクル、ジツケン。ガンバツテ」

シツクはエレザに伝言を伝えると、今度は私の方へとやってきた。やっぱり両足を揃えて、ちよんちよんと飛びながら机を移動する。

「ツギ、リリース、チャン」

なぜかエレザはさんづけ、私はちゃんづけだ。ちなみにリュカは呼び捨て。扱いの差が多少気になるけど、可愛い姿を見ているとどうでもよくなってくる。

「キヨウ、ノ、ドウブツガク、ツチノヤカタ、ダイニ、エンシユウシツ！」

「ええ？ 中庭じゃないの！？」

第二演習室！

私は聞き慣れない言葉に驚いて身を乗り出した。

シツクは驚いた私に驚いて、パタパタと羽ばたく。

「ピッ、ピピィ〜。オドカス、ヨクナイ。コワイッ、コワイ！ チチチツ」

「ごめんね。いつも中庭で捕獲実習だったから、びっくりして」
すっかり忘れていたけど、伝令くんはとても臆病な生き物なのだ。
かわいそうな事をしちゃった。

「キヨウハ、ダイニ、エンシユウシツ、デ、シヨウカン、ジツシユウ……ダツテサ！」

シツクは気を取り直したのか、また私の前に降り立った。

まだ、ちよつと羽がふくらんで毛羽立ったままだ。

「捕獲実習じゃないんだ……」

私がシツクを見つめて、ほっとしたような声を出すと、

「ヨカッタナ、ヨカッタネ！ オメデト」

シツクも私の前でピヨピヨと跳ねて祝ってくれた。

彼はしばらく跳ねまわった後、ピタリと止まって小首をかしげて私とエレザを交互に見上げた。

「アレ？ キヨウ、リュカ、イツシヨ、ナイ？」

私たちがうなずくと、シツクはきよるきよると辺りを見回し、

「アツチ、イタ。マタ、ネテル。アレニモ、シラセル。マタネ」

リュカの姿を見つけたのか、慌ただしく飛び立っていった。

入口付近の席で机に突っ伏している見慣れた赤毛頭に止まる。ここからではよく見えないが、つついているらしい。

「うわつ。痛てっ」

リュカの悲鳴が聞こえてきた。

土の館の第二演習室は、本館の講義室を少し小さくしたような造りだった。

天井まで届く大きな両開きの扉。大理石でできた床。扉のある面の壁の中央にかけられた大きな黒板。その上には飾り気のない丸時計。

内装は、本館は金と黄色をベースにしているけれど、こちらは黒がベースになっている。床の大理石も白一色だった本館とは違い、こここの大理石は白と黒の市松模様だ。

ただ、教室にある物の配置は本館の講義室と全く同じだった。

大きく違うのは、本館の講義室は教壇を一番下にして、座席が階段上に一段ずつ高くなっていたが、こちらは段差が無い普通のホールになっているところだ。

「他の別館の演習室も同じような造りなのかな？」

誰かがぼつりと呟いた。

「だろうね。寮の部屋も同じ造りだって火の館の奴が言ってたし」

「ここって、第二だよな？ 第一って、どんな感じなんだろう？」

皆一様に物珍しそうに辺りを見回している。

私も観光客のように落ち着きなく、天井を見上げたり机に触れてみたりしてしまう。

土の館の演習室に入ったのは入学してから初めてだ。

ずーっと、中庭でしか動物学の授業はなかったから。

実習着ではなく制服を着たまま授業を受けられるのも嬉しい。

私達がうろつくと演習室内を歩きまわっていると、授業の始まりを知らせる鐘が鳴るのと同時に先生が入ってきた。

動物学の講師の一人、アール先生だ。

私たち一学年担当の講師で、淡い金髪に鳶色とびいろの瞳をした、穏やかな先生だった。歳は講師の中でも若い方で、まだ二十代後半か三代前半ぐらいだと思う。

いつも私たちと同じ実習着姿の先生も、今日は講師用の制服を着ていてちよつと新鮮だ。制服姿のアール先生を見るのは入学時に学園内を案内してもらった時以来かもしれない。

講師用の制服は上下ダークグレーの細身のスーツに濃い紅色のネクタイで、胸には校章がつけられている。

黒い台座に十字架に巻きつく白い竜。土の館の講師の証だ。あかし校章は生徒と同じもので、所属する寮によって台座の色が変えられている。

「もう、伝令くんから聞いて知っているとありますが、今日は召喚術を行います」

先生は黒板に白いチョークで『召喚術』と書いた。

書いたといつても手で直接書くわけではなく、宙に浮いたチョークが黒板に文字を記していく。

チヨークに魔法がかかっているのか、講師が魔法を使っているのかはわからないけれど、この先生は誰もが手を使わずに黒板に文字を書く。

だから、教室には人の手では届かないほどの高さまでの大きな黒板があり、その黒板に書かれる文字も大きかった。おかげで後ろの席でもよく見えた。

「召喚術といっても入門というか、体験のようなものです。召喚術は高度な魔法ですので、本格的に学ぶには早すぎますから。今日は私が術をかけますので、みなさんには使い魔を呼んでいただきます」
演習室中がざわめいた。

召喚とか使い魔とか、魔法使いいっぱい！

今までの授業は魔法の勉強というよりも、農場か動物園の仕事って感じだったから嬉しくて涙がでそう。

「喜んでいるところに悪いのですが、みなさんに授業の前に言うておかなければならないことがあります」

やっと魔法学校らしい授業が受けられると浮かれていた私達を見回して、ちよつと言いつらそうに先生は口を開いた。

「今日の授業は、進級試験の始まりでもあります」

進級試験のはじまり？

私は思わずグルドに視線を移す。

二度も進級試験に落ちた彼なら何か知っているかもしれないと思つて。

そう思ったのは私だけではなかったようで、ほとんどの生徒が彼に注目していた。

グルドは演習室中の視線を集めたことにも気付かずに、なにやらひどく沈んだ様子だった。大きな背も小さく見える。

グルドだけではない。

よく見ると、何人かの生徒が同じように沈んだ表情を浮かべている。留年組の生徒だ。

なんか……嫌な予感がする……。

「進級試験の始まりというのはですね。みなさんには、今日呼び出した使い魔と一年を過ごしていただき、学年末に使い魔と共に進級試験を受けていただくからです。試験の内容は毎年異なりますが、判定する基準は同じです」

黒板の上にチョークが文字を記していく。

契約。

信頼関係。

制御。

「使い魔と本契約を交わすこと。完全に意志の疎通ができ、信頼関係を築いていること。使役者が優位に立ち、使い魔を制御していること。この三点が進級する為の条件になります」

私はこの時、この三点の条件を満たすことが誰よりも大変なことになるなんて、まだ知らなかった。この後、すぐに知ることになるんだけど……。

謎の玉子 2

足元を白い小動物が横切った。

「誰かつ！ つかまえてくれー！」

それを追つて、くすんだ金色の髪の毛の生徒が息を切らし、机やらイスやらにつまずきながらこちらへとやってくる。

「こいつか？」

隣にいたリュカが白い小動物をあつさりと捕まえると、息を切らしながら机にしがみついている金髪の毛の生徒に差し出した。

リュカが摘みあげたものは、白いネズミだった。首の後ろをつかまれたネズミは、キィーキィーと高い声で鳴きながら手足をじたばたと動かしてもがいている。

「あ、ありが、とう……」

金髪の毛の生徒がリュカからネズミを受け取って、安堵の息をついた。

先生の『進級試験のはじまり』宣言の後、召喚術や使い魔についての講義が四時限目の一コマ（九十分）をつかって行われ、五時限目に実際に使い魔の召喚が始まった。

その結果がこれだ。

小動物が走りまわり、鳥が演習室中を自由に飛び交い、それらを小型の肉食獣が追いかけてまわす。床には動物達の糞尿や毛や羽が散乱していた。

すっかり演習室はサファリパークと化している。

まだ、肉食獣に襲われて無残な姿で床に転がる動物が出ていないことが、せめてもの救いだっただ。

生徒たちは悲劇が起こる前に自分たちの使い魔をつかまえようと必死になって追いかけていた。もちろん、追いかける方も必死になって逃げる。野生動物の中では、捕まることは死を意味する。

もう、演習室内はすごい騒ぎになっていた。

その混沌とした状態の中で、また一人の生徒が先生の助けを借りて使い魔を呼び出そうとしていた。

先ほどまで青い顔をして、首からさげた十字架を握りしめて神に祈っていたグルドだ。

「おっ！ グルドの番かよ。面白れーもんが見れるかもな」

「面白いもの？ 今まで十分面白いものを見てきたけど……」

面白いというより、自分の番が不安になるようなものだけだ。

トラを呼ぼうと意気込んでキジトラ柄の猫を呼ぶなんてかわいい方で、大トカゲを呼ぼうとしてアマガエルを呼んでしまい霧吹きが手放せなくなつた者や、何を思ったのかカタツムリを呼んでしまつて途方にくれる者までいた。

「わかつてねーなあ。あいつは二浪してんだぜ？ 二回も召喚に失敗して。他の奴より面白れーもんを呼びそうだろ」

「そうやって人の不幸ばかり喜んでたら、とんでもないものを召喚することになるんだから」

誰かが失敗する度に、爆笑して喜んでいたりリユカを睨む。

こいつは、自分の番が不安じゃないのか？

「俺は、そんなへましねーよ。お前と違って優秀だから」

リユカはちらりと私を見て、薄く笑つた。その目には、明らかに私を小馬鹿にした笑みが含まれている。

嫌な奴！

「失敗したら絶対に涙流して大笑いしてやる！」

私がリユカの胸に指をつきつけて宣言した時、

「うわあーっ」

情けない悲鳴が演習室内に響き渡つた。

「ど、ど、ど、どうしよう！ 死んじゃうよぉ」

悲鳴が聞こえた方を見ると、おどおどと周りを見まわすグルドと、彼の足元で小さな赤いものが跳ねているのが見えた。

「大丈夫、落ち着いて。誰かコップに水を入れて持ってきてくれますか？」

先生が慌てるグルドをなだめている。

「仕方ねーなあ。食堂行つてもらつてくるから、踏むんじゃねーぞ」
リュカがグルドに声をかけながら演習室を出て行った。

コップに水？

魚介類だろうか？

不思議に思つた私は、その赤い『何か』を踏まないように気をつけながら慎重に近づいて傍に屈みこんだ。

大理石の床の上で跳ねる、小さな赤い物体。

よく見ると、それは金魚のようだった。赤く小さなフナに近い形の金魚だ。よく大型の鑑賞魚のエサとして売られているアレ。

ふいに、隣に刺すような気配を感じた。殺気に近い緊迫した気配。ゆっくりと隣へと視線を移した私の目に映つたのは、キジトラ柄の猫だった。姿勢を低くして、少し上げたお尻と尻尾を微かに振っている。

まずい。間違いなく彼（彼女？）の獲物はグルドの金魚だ。

私は、そーっとキジトラ猫に手を伸ばすと、そのまま一気に押さえ込んだ。

猫が私を見上げて不服そうに唸る。

すぐに飼い主……じゃなくて召喚主が、慌ててこちらに駆け寄ってきた。

「ありがと。もう興奮して手がつけられなくってさあ」

ネズミを追いかけた少年よりも鮮やかな金色の髪をした少年だった。彼は人懐っこい笑顔を浮かべて手を差し出す。

私が彼に猫を渡していると、リュカが水の入ったコップを持って演習室に駆け込んできた。

金魚は無事にコップの中に救助され、グルドは小さな瞳に涙をいっぱい溜めて赤い金魚を見つめた。

「何を呼ぼうとして、金魚なんか呼んだんだよ……」

リュカが、その姿を呆れ果てた顔で見上げて声をかけた。笑う気力も失せたらしい。

「鶏にわとりを呼ぼうと思つて、赤いトサカを思い浮かべてたんだ。鶏なら飛んでいなくなったりしないと思つて」

赤いトサカが赤い金魚になつたのか。

不幸なグルドは、去年は呼んだ小鳥が渡り鳥だつたらしく、冬が来る前に暖かい地域に渡つてしまつて試験に落ち、一昨年はマードーアンツという大蟻を呼ぼうとしてイナゴを呼んでしまい、冬が来る前に寿命がつきて天に召されて試験に落ちた、と涙ながらに語つてくれた。

グルドの話聞いていたら、ますます不安になつてきた。失敗したら留年決定なんだよなあ。

「こらつ。何、ぶつさいくなツラしてんだよ」

「不細工つて……。ひどい！」

叩かれた頭よりも心が痛い。

美人じゃないけど、不細工呼ばわりされるほど酷くない！……と思つ。

「ほら、お前の番だ。お前の！」

リュカは私の抗議の声になど全く関心も示さずに、私の肩に両手を置くと前に押し出した。

よろけるようにして、数歩前にでる。

ちよつと魔法陣の真ん中に乗つてしまった。

「私、もうちよつと後でいい……です」

私は慌てて先生を見上げて訴えた。

継すがるような目をしていたんだろう。

先生は困つたような顔をして私を見返した。

すみません、先生。

でも思いつきり失敗したグルドの後だし、今まで成功した人なんて数えるぐらいしかいないんだもん。

もつと成功例を見たい。

他人の成功した姿を見たからって、自分も成功するとは限らないんだけど。

「あのなー、後回しにしても今日中にはやらなきゃなんねーんだぞ。さっさと済ませてすっきりした方がいいだろ」

「グルドとかカタツムリ呼んじやった人とか見てると、なんか私もナメクジとか呼びそうな気がして……」

私が床の魔法陣を見つめて言うと、盛大な溜息が聞こえてきた。

「わかったよ。順番代わってやるから、そこで見学してる」

おもむろに手をとられ、後ろに強く引かれた。

「わっ！」

すっかり油断していたのと気力が萎なえていたのとで、よろめいて転びそうになってリュカにしがみついてしまう。

顔をあげるとリュカの褐色の瞳と目が合った。その瞳の中に、驚いて目を見開いた自分の姿が映っている。

「うわっ、近い！ っていうか、近すぎる！」

「ごめん！ ありがとう」

「……べつに」

私は慌てて目をそらすと、戸惑いながら体を離れた。

急に指一本動かすのさえも気になってしまうような気まずさを感じて、私はリュカの制服の胸の辺りを見つめて固まってしまった。

何も言葉が出てこない。それどころか、顔も上げられなかった。

この微妙な空気をどうしようかと思案していると、アール先生のものびりとした声が気まずさを一瞬忘れさせてくれたんだけど、

「仲がいいのは構いませんが、そろそろ召喚術を始めてもいいですか？」

「……よくない！」

反論しようとした言葉が見事にかぶってしまふ。

せつかく吹き飛んだ微妙な空気が倍になって戻ってきた感じだ。

気まずすぎて、リュカの顔だけじゃなく、アール先生の顔まで見ることができなくなってしまった。

「クレスメント学園は恋愛禁止ではありませんので、気になさらないくても大丈夫ですよ」

「誤解です！」

「さっさと始めてくれませんか？」

先生の笑いを押し殺した声に、私はむきになって否定し、リュカは無然^{ぶぜん}とした声で召喚術の開始を促した。

謎の玉子 3

結局、私の代わりにリュカが魔法陣の中央に立つことになった。さすがに「俺は、そんなへましねーよ。お前と違って優秀だから」と豪語していただけあって落ち着いている。

その余裕にちよつと腹が立つけれど、順番を代わってもらった負い目もある。ここは素直に成功するように応援してあげよう。

「これから私が術をかけますので、呼び出したい動物を思い浮かべて強く念じてください」

先生の声に、リュカは頷いて目を閉じた。

その様子を見て、先生は魔法陣に両手をかざすと呪文を唱え始めた。

私達が日常的に使う言語とは違う、聞き慣れない言葉が先生の口から紡ぎ出される。

まるで音楽のように淀みなく流れる言葉。その言葉に呼応するように、魔法陣が淡い青色の光を発し始めた。

青い光は徐々に強くなり、魔法陣もリュカもすっかり飲み込んでしまった。

中の様子は全く見えない。

先生の前に一本の青白く発光する柱が現れたみたいだった。青い光でできた柱は、上にいくにつれて徐々に光が弱まり、消えていく。その様子は、水の大陸の北部で発生するオーロラと呼ばれる現象のようだった。

実物を目にした事はないけれど、映像でなら何度か見た事がある。雪原の夜空にかかる光のカーテンだ。

ここは雪原でも夜空でもなかったけれど、青白く揺れる光の柱は幻想的で美しかった。

でも、その青い光の柱が現れていたのは、ごく短い時間。ほんの数分ぐらいだったと思う。

先生が両手を下ろして小さく息をついたときには、淡い青色の光も薄くなって消え始めていた。

薄くなった光越しに、魔法陣の中に二つの影が見える。

人影はリュカだ。

もう一つは何だろう？

シルエットは犬のようだ。が、犬にしては大きい。リュカの胸の下辺りまでの体高がある。全身は白い毛皮で覆われているようだ。

「雪原オオカミですね！ これは、驚いた」

先生が興奮して上ずった声を上げた。

「せつげんおおかみ？」

私はその真つ白な狼を見つめたまま誰にともなく聞いた。あまりにも美しかったから目が離せなかったのだ。

「水の大陸北方に生息する狼だ。狼の中でも一番大きな種類で、頭もいい」

私の問いに答えるように、リュカが白い狼の頭を撫でながら微笑した。

そうして、もう我慢できないとでもいうように、彼は嬉しそうに白い狼の首に抱きついた。

「ガキの頃に映像で見て以来、ずっと憧れてたんだ！」

その姿は、まるで無邪気な子供みたいだった。

雪原オオカミの方はというと、大人しくされるがままになっていく。

私は白い狼に近付くと、ゆっくりと片手を狼に差し出した。手に狼のしめった鼻先があたり、生暖かい鼻息がかかった。

一通り匂いがかがせた後、そつと狼の首の横を撫でてみる。柔らかくてふわふわとした毛の感触が心地いい。

「すごい。ねえ、コツとかあるの？ 私にも、ちゃんと使い魔を呼べるかな？」

「大丈夫だって。教わった通りにやりゃいいんだよ。意識をしつかり集中させれば誰にだってうまくやれる」

いつもと違って優しいリュカの声に私は強く頷いた。

強く頷いたものの……。

魔法陣の上に立つと、やっぱり緊張して逃げたくなってしまつう。

「準備はいいですか？ 注意事項はきちんと覚えていますね？」

「ちよつと、待って！ 思い出しますから」

先生の声に慌てて答えると、今日の授業内容を思い出そうと宙を睨んだ。

えーつと、確か……。

何があつても呪文が終わるまでは魔法陣から出てはいけない。

魔法が失敗するだけではなく、集まつたエネルギーが全て召喚者に向けられるので、何が起るかわからない。

これだけは厳守すれば危険なことはないって言つてたはず。

自分の力量以上の動物は呼び出せない。

一部の例外を除いて、自分の潜在的な魔力や精神力の強さ以上の動物を呼ぼうとすると失敗する。

雑念が入ると失敗する。

これは、当然だけど。

でもグルドみたいに、赤とか一部のイメージだけを強く思い浮かべてもダメそう。気をつけよう。

「よろしいですか？」

「うん。だいじょうぶ……だと思つ」

「どんだけ、自信ねーんだよ」

リュカの呆れた声を聞きながら、私は小さく深呼吸して目を閉じた。

呼び出す動物は決めている。

この土の館の周辺にいて、手頃な動物。

その動物のシルエットを頭の中に思い描いたとき、先生の呪文が聞こえてきた。

辺りが徐々に明るくなってくるのが、目を閉じていてもわかった。同時に暖かさを感じる。

私は不思議な感覚に包まれながら、黒い羽根を思い浮かべていた。光にあたると青く煌く濡れたような黒い羽根。よくみると可愛いつばらな黒い瞳。

どれぐらい経っただろう？

リュカの時と同じで数分しか経っていないはずなのに、数十分ぐらい魔法陣の上に立っている気がする。

時間が気になり始めた頃、周囲が暗くなったように感じた。先生の声も聞こえない。

呪文が終わったんだと思った私は、ゆっくりと目をあけた。すぐに目に飛び込んできたのは、先生とリュカの顔だったんだけど……。

彼らは、なんとも言えない表情でこちらを見ていた。

先生は私の足元を怪訝な表情で見つめ、リュカは私の顔を茫然と見ていた。口、開いてるし。

失敗した……っぼい？

私は泣き出した気分ですリュカを見返した。

「お前、腹でも減ってたのか？」

ふるふると力なく首を横に振る。

「何でしょう？ これは。私も講師を務めて五年になりますが、こんな事は初めてです」

先生が首を傾げて、とても不安になるようなことを口にしてくれた。

見たくない。

でも、見ないわけにはいかない。

私は恐る恐る俯いて、足元に視線を移した。

そこには、流線型をした白い物体が転がっていた。

赤ん坊程の大きさと横倒しになっているけれど、どう見ても玉子にしか見えない。

屈みこみ、その白い物体を抱えあげてみる。ずっしりとした重みがある。

「これって、玉子だよな？」

「玉子だろ」

「玉子でしようね」

私達は茫然と玉子を見つめていたけれど、リュカが思い出したように口を開いた。

「何を呼ぼうとしたんだよ？」

「カラス。その辺にいっぱいいるから、呼びやすいかなあと思って」

「カラスにしては、大きすぎませんか？」

「カラスって言うより、ダチョウの卵だよな。いや、もっとデカイか……」

カラスの親鳥よりも大きい。

何の卵なんだろう？

「やっぱり、腹減ってて、ゆで玉子でも思い浮かべたんじゃねーの？」

「だーから、お腹なんか空いてないし、玉子を連想するものなんて思い浮かべてないって！」

私達がくだらない言い合いをしていると、卵を不思議そうに眺めていた先生が口を開いた。

「もしかしたら、卵の親があなたに預けたのかもしれないね」

「あー、動物の方に強い思いがあって、勝手に呼ばれてくるってやつ？」

「ええ、卵に意志があるとは思えませんが、卵の親がリリースさんに思い入れがあるのかもしれないし」

そんなことつてあるんだ。

でも、鳥に好かれるような覚えは無い。

田舎で飼ってた鳥は鶏トリと鶉ウズだけだし、それだってペットじゃなくて家畜としてだ。

「ダチヨウに知り合いとかいねーの？」

「そんなの、いるわけないじゃん」

「ダチヨウの恩返しじゃねーのか……」

「恩返しで托卵たくらんされても……」

ホオジロとかモズがカツコウの卵を暖めるみたいに、この卵を暖めて巣立つまで面倒みないといけないんだろうか？

そこまで考えて、私は大切なことを思い出した。

卵のインパクトが大きすぎて、すっかり忘れていたけれど……。

「先生」

「なんででしょう？」

私の沈んだ声とは対照的に、明るく優しい声が返ってくる。

ああ、こんなこと思い出さなければ良かった。でも、いつまでも知らないふりはできない。

「進級試験つて、どうなるんですか？」

「そうですね。卵が孵かえらないと不合格になりますね」

意を決して尋ねた私の質問に、先生はあっさりと答えてくれた。

それも予想通りの冷たい留年宣告。

「やり直しとか、出来ないですよね？」

「授業の初めに言いましたよね？ チャンスは一度だけです。やり直しは認められません」

聞いていたけど、聞かなかったことにしたかったんです。

やっぱり駄目かあ。

玉子との生活

今日で進級できるかどうかが決まってしまっなんて厳しすぎる。

「残念ですが、倫理的な問題からやり直しは認められないんですよ。先生が落ち込む私をなだめるような声音こわねで言った。

「どうということですか？」

「授業でお話した、使い魔との契約が無効になる条件は覚えていますか？」

覚えている。つい一時間前に教わったばかりだ。

「使い魔側が拒否する。使い魔が使役者の死。の二つのみですよね？」

「そうです。使い魔と使役者の間には、まず仮の契約が結ばれます。お試し期間のようなものですね。その間に使い魔が使役者を見定めて、自分の主に相応しくないと判断した時は使役者の元を去ります」

私は先生の言葉に頷いた。

呼び出した動物が必ず使い魔になってくれるとは限らない。

使い魔が使役者を試し、本契約を結ぶかどうか決めるのだ。お試し期間には期限は無く、使い魔の気分次第だった。中には何年も仮の契約を続けている者達もいる。

「そして、もう一つの条件はパートナーの死です。これは、どうしようもありませんね。死んだ者と契約を結べるのは死霊術士だけです」

死霊術士以外の魔法使いが召喚できるのは、生きている動物だけだ。

私は抱えていた卵を見つめた。

この卵も生きている。

一般的に市場で売られている鶏の玉子のように無精卵ではなく有精卵で、暖めさえすれば必ず孵るはず。

「この二つの条件しかないということは、使役者が召喚した使い魔

を拒絶することはできないということです。召喚したのはいいけれど、やっぱり帰って下さい、とは言えません。術が失敗して本意ではない動物を喚んでしまった場合でも」

先生はいったん言葉を切ると、私達を交互に見て言った。

「ですが、使役者が使い魔を拒絶する方法が一つだけあります。気付きましたか？」

気付くつて、何を？

急に問いかけられて答えに詰まった私は、助けを求めるようにリユカを見た。

リユカが眉を寄せて吐き捨てるように言った。

「使い魔を殺せばいいんだろ」

殺せばいい。

私はリユカが吐き捨てた言葉を聞いて、胸が締め付けられるような嫌な感覚に襲われた。

確かに使役者が使い魔を拒絶するにはそれしか方法は無い。

でも、それって……。

「勝手に喚び出して連れてきて、殺すつてか。最低だ」

「そう。だからチャンスは一度きりなんですよ。そういうルールにしなければ、何度もやり直しをする生徒が出てくるかもしれないから」

『やり直しとか、出来ないですよね？』

軽い気持ちで言った自分の言葉が、蘇ってくる。

もし、何度でもやり直しができるルールだったなら、私はどうしただろう？

どんなに本位でない動物を召喚したとしても、動物だったなら私には簡単に殺すことは無理だ。

でも、虫や魚や生まれる前の卵だったら？

この卵は無理やり親元から奪い取ったようなものだ。卵や卵の親から見れば、そういうことになる。

それを、割って殺してしまったかもしれない。私が奪ったりしな

ければ、無事に孵って天寿を全うしていたかもしれないのに。

私は思わず卵を抱き締めていた。

「解ってくれたようですね。なにも進級できないと決まったわけではありません。大変かもしれませんが、卵を暖めて無事に孵せばいいのです。私もできる限り協力しますので、頑張りましょう」

「そうそう。なんか面白いもんが生まれるかもしれないねーし」

こうして、私は謎の卵と一緒に学園生活を送ることになった。

晴れ渡った青空の元、二人の生徒が口論をしていた。

一人は短めの赤い髪を風になびかせ、太陽の光の下で眩しいくらいに煌く純白の狼の頭をなでるリュカ。

もう一人は肩まである艶やかな黒髪を後ろで一つに束ね、眼鏡の奥の瑠璃色の瞳でリュカを見下ろす少年。リュカよりも頭半分くらいは背が高い。

彼の身長が高すぎるというよりも、リュカが平均より少し小さいのだ。女性の平均身長である私とほぼ同じぐらいしかない。彼の名誉のために言うなら、私より5cmは高いらしい。あくまでも本人の主張だけだ。

眼鏡をかけた黒髪の少年は、隣に大きなヒヨウを従えていた。

大きさも体型も確かにヒヨウだ。だが、その体毛はヒヨウのそれよりも長く密集して生えている為、全体的にふっくらとして見える。

そして、普通のヒヨウと決定的に違うのは、その体色だった。

黄褐色おうかつしよくに黒斑こくはんの見慣れた体色ではなく、彼が連れているヒヨウは灰白色に不鮮明な黒斑を散らしている。

土の大陸北方と水の大陸全域に生息するユキヒヨウだ。

リュカが雪原オオカミを召喚して先生を感心させたように、彼もユキヒヨウを召喚して先生を感心させていた。

ようするに、二人は動物学クラスのエリートだ。

その二人が何を口論しているのかと言うと……。

「俺のシロは何分でも待てができる！」

「はん。なんだよ、それくらい。俺のローなんか死んだふりが出来るんだぜ」

雪原才オカミとユキヒヨウ。どちらの方が格上かというくだらないことだった。

それでも最初は、瞬発力がどうの、持久力がどうのとマニアックな知識を披露しあっていたんだけど、ついにネタも尽きてただのペツト自慢になり果てていた。

白熱した口論を続ける二人を尻目に、雪原才オカミのローは大あくびをし、ユキヒヨウのシロは後ろ脚で耳の後ろを掻いている。まるでお互いに「やってらんねー」と言っているみたいだ。

それを暇つぶしに見学する私ともう一人、

「いいなあ。ジャンの奴」

私の隣でキジトラ猫を膝に乗せて胡坐あぐらをかいているミケーレが呟いた。

ジャンというのはユキヒヨウを従えた黒髪の生徒の名だ。

「いいねえ。羨ましい」

私は芝生の上に体育座りをし、足とお腹の間に抱えた玉子に顎を乗せながら呟いた。今は実習用のつなぎを着ているので「パンツが見えるかも」とか余計な心配をしなくていいから楽だ。

「俺もネコ科の大型肉食獣を使い魔にしてえー」

ミケーレは虎を呼ぼうとして失敗し、キジトラ猫を召喚していた虎に未練たつぷりなんだろう。その猫につけた名はタイガーだった。

「本当に羨ましい。あの直毛」

私はジャンの後頭部を見つめて吐息を漏らす。

太陽の光を受けて輝く天使の輪。幼い頃から、どれだけ夢にみたことか。

なんで同じ黒髪なのに、こつも違うんだ。

私の髪質はジャンの高値で売れそうな髪とは違って、強いくせ毛

だった。

ミケールの柔らかなウェーブのかかった髪とも違う。硬く太いうえに、強いウェーブがかかっている。今のように肩ぐらいまでの長さがあればなんとか落ち着くけど、短くすると悲しいことになる。

美術館によくある古代の彫刻のような髪になってしまふのだ。クルンと丸まってしまふ。

私とミケールが羨望の眼差しをジャンに向けていると、一人落ち着きなく立ったり座ったりしていたグルドが泣きそうな声を出した。

「ねえ、止めなくてもいいの？ 中休み中、喧嘩してるけど……」

「いいんじゃない？ 止めるのめんどーだしさあ」

「あれは喧嘩じゃなくて、じゃれてるんだよ。好きにさせとけば？ 私達は気のない返事を返す。」

それを聞いたグルドは、「どうしよう、どうしよう」と呟きながら、落ち着きなく歩き回った。そんな彼の手には、小さな赤い金魚が泳ぐガラス製の金魚鉢が収まっている。

「でもさ、二人を見てると使い魔が逆な気がしてくるよね」

「逆って？」

ミケールがタイガーの喉を撫でながら私を見た。タイガーは喉をぐるぐる鳴らしながら、うっとりとした表情を浮かべている。

「自由奔放なりユカがユキヒョウで、真面目なジャンが雪原才オカミって感じがする」

人は自分に似た動物を好むのか、使い魔はどこことなく呼び出した生徒に似ていた。

臆病で優しいグルドは、その性格から不自由な思いをすることも多く、金魚鉢の中でしか生きられない小さな赤い金魚は彼を象徴しているみたいだった。

いい加減で飽きやすく面倒くさがりな性格なのに、どこか飄々（ひょうひょう）としていて、なんでも上手くこなしてしまうミケール

レには虎よりも猫の方が合っている。

「んー、俺は今のままでぴったりだと思っけどなあ」

ミケーレはそう言っつて、大きく伸びをした。そのまま、頭上上げた手を頭の後ろで組むと芝生に寝転がる。

胡坐をかいていた足も伸ばしてしまったので、胡坐の中にすっぽりと納まっていたタイガーも大きく伸びをした後、ミケーレの胸の上に乗直した。

「リュカはああ見えて空気読むのが上手いし、人づきあいが得意だろ？ 一人でいるよりも大勢でいた方が楽しそうだし」

まあ、確かに。長い間一人でいるのはつらそうなタイプだ。

「逆にジャンは一人でいる方が好きそうだよなあ。あいつつて、自分のこだわりを大切にするタイプだから団体行動は苦手じゃねーの？ 特に上から命令されんのはダメだろ」

「そう言われると、ぴつたりな気がしてきた。よく見てるね」

「ついでにリスちゃん精神分析もしてあげようか？」

私がミケーレの洞察力に関心すると、彼はにやっつと笑ってこちらを見上げた。

「いい。絶対に変なことしか言わないだろうから」

私は慌てて目をそらして首を横に振った。

使い魔の召還の授業から二ヶ月が経っていた。

入学してからは三ヶ月になる。

この時期になると、動物学クラス内でもなんとなく一緒に居る人達が決まってくる。

仲がいいんだか悪いんだか良くわからないリュカとジャン。

その二人を何をしてもなく、ぼーつと見守る私とミケーレ。

一人で一生懸命に喧嘩を止めようと悩むグルド。

気がついたら、このなんとも間抜けな構図が出来上がっていた。

友達と呼ぶにはまだ早いかもしれないけれど、私はこの四人と一緒にいるのが好きだった。

午後からの授業は騎獣の扱い方だった。

今日が初めての授業ではなく、この一週間はずっと騎獣についての講義や実習を受けていた。天気が良ければ四時限目に講義、五時限目に実習というのがいつものパターンだ。

私たちは四時限目と五時限目の間にある十五分間の中休みを、土の館の校庭で過ごしていた。

土の館へと延びる道を挟んだ向かい側には墓地が広がり、時折風によつて土の館の裏手にある獣舎から獣の匂いが流れてくる。

他の館の生徒から見れば、あまり快適とは言えないだろう。それでも私たちにとっては、天気の良い日に校庭で過ごす時間はとても楽しい時間だった。

そろそろ五時限目の授業を知らせる鐘が鳴る頃かと土に館の時計を見上げていると、開け放たれていた大扉から淡い金色の髪の男性がこちらに向かって歩いてくるのが目に入った。

アール先生だ。

どうしたんだろう？

先生は私達を見つけると大きく手を振った。その様子は、まるで親しい友人でも見つけたかのようなようだ。教師の威厳などどこにも感じられない。

「次の授業は中止になりましたー！ 薬学部から要請があつて、お手伝いに行きますー！ ちょっと説明があるので、第三演習室にもどってくださいーい！」

先生の明るい声が抜けるような青空の下に響き渡った。

他の学部から頼み事をされることは珍しくない。

動物学は医学部と並んで重宝される学部で、他の学部よりも呼び

出されることが多いのだ。

薬学部や医学部で使用される実験動物の調達、ネズミや害虫の駆除、騎獣を使つての送迎。初夏には全校舎に虫除けの魔法をかける一大行事まである。

実用的で使い勝手の良いクラス。それが動物学だった。

中でも薬学部はお得意様だ。ついこの前も新薬の実験用にヒメアシナガグモが欲しいと言われ、クレスメント島中を探しまわったばかりだ。

でも、今回の依頼は少し風変わりなものだった。

「薬学部からの要請で、研究中の新薬を投与されたマウスの捕獲に行きます」

研究中の新薬って……。

先生がさらりと言つた言葉に不安を感じたのは私だけではなかったよつで、皆が不安げに顔を見合わせていた。

「ああ、新薬と言つても危険な物ではありませんよ。安心して下さい」

私たちの不安を感じ取つたのか先生が微笑を浮かべる。

「マウスに投与された新薬は『欲望を増幅させる薬』だそうです。まだ実験段階の薬で、人間の持つ欲望や願望の一部のみを増幅させることができるように改良中だったようですよ」

「そんなもの、何に使つんですか？」

生徒の一人が不思議そうに訊いた問いに皆が頷いた。

「ダイエツトや禁煙、試験勉強の補助になる薬を作りたいそうです。ただ、今の段階では増幅された感情を制御することができないそうです。睡眠欲を増幅させたマウスは餓死するまで寝続けてしまつたとか」

「逃げ出したマウスは、どんな欲望を増幅させてあつたんですか？」
また誰かが声をあげた。

「それは、後で詳しく説明しますね。まず先に、皆さんにはマウスを探す為の新しい魔法を習得してもらいます」

新しい魔法という言葉が先生の口から出た途端に、皆の表情が明るくなった。小さな歓声を上げた生徒までいる。

まだ入学して三か月。魔法を教えてもらうのが楽しくて仕方がないのだ。

もちろん私も嬉しくて、隣にいるリユカやミケールと意味もなく顔を見合わせては笑い合っている。先生に名前を呼ばれたことに、すぐには気付けなかったくらいだ。

「おい、リリース。呼んでるぞ」

背中をつつかれて振り返ると、ジャンの眼鏡の奥の緑色の瞳と目があった。彼が顎で指し示す先には、アール先生が柔らかな笑みを浮かべて立っている。

「リリースさん。こちらへ来てもらえますか？ この魔法陣の中心へ」

「ええ？ なんで私!？」

思わず自分の顔を指差して大きな声を上げてしまった。声、裏返っちゃったし。

なんで私なんだ？

「リリースさんはエリザベスちゃんと仲がいいでしょう。今回の魔法にはエリザベスちゃんと、ミケールくんのタイガーの協力が必要なんです。エリザベスちゃんも最初から知らない生徒に協力するよりも、リリースさんの方が大人しくしているとと思いますから」

先生は何故かとても嬉しそうに私を見つめている。

「仲はあんまり良くないと思いますけど……」

「まあ、そう言わずに。あれでも協力してくれているだけ、あなたのことは気に入っているんですよ」

先生は、そう言うのと短い呪文を唱えた。

何もない空間に淡い青い光が現れ、光が消えた後には一匹の白いペルシャ猫がぽつんと座っていた。

「ちよつとお、気持ちよく昼寝してたのに。なんの用なのよ？」

ペルシャ猫は先生を見上げて、ふわふわした尻尾をばんっと強く床に叩きつけた。ご機嫌はかなり悪いらしい。

彼女がエリザベスちゃんだ。

「まあ、あんたの実習に付き合えっというの？」

彼女は透きとおるような青い瞳で私をじろりと睨んだ。

私が卵を召喚した日、先生はできる限りの協力はすると言った。

その『協力』の一つがエリザベスちゃんだった。

使い魔と一緒に受ける授業のときに、卵がパートナーでは見学するしかない。そこで先生が自分の使い魔の一匹であるエリザベスちゃんを貸してくれるのだ。

協力して貰えるのは嬉しいんだけど……。

「リリース、わかっているでしょうね？ 後でブラッシングと爪の手入れをするのよ。ブラシはニゼルア製の専用ブラシ。ラベンダーの製油を配合したブラッシング用のスプレーも忘れないでね」

後が大変だった。

「わかりました。お嬢様」

私はにっこりと笑みを浮かべて即答した。

絶対に逆らってはならない。それが、アール先生に教えて貰ったエリザベスちゃんと上手く付き合うコツだ。

「わかっていればいいのよ。リリースのブラッシングは丁寧に気に入っているしね」

私がお嬢様と呼んだとことで機嫌を直してくれたようだ。エリザベスちゃんは前足を一舐めすると、優雅に先生を振り返った。

「今日は何をすればいいのかしら？」

「エリザベスちゃんには、リリースが呪文を唱える間座っていて欲しいのです。寝ていてもかまいませんが、動かずにじっとして貰えますか？」

「まあ、そんなこと？」

エリザベスちゃんは身軽に魔法陣の中央に置かれた机の上に飛び乗ると、私を見上げた。

「さあ、どうぞ」

首に下げている真珠の首輪がキラキラと輝いている。とても高価そうだけど、先生に買わせたのか？

「それでは、始めましょうか」

先生はエリザベスちゃんの様子を見て頷くと、私に一枚のメモを差し出した。

メモには現代の言葉でルビがふられた古代語が書かれている。

魔法を使う為に必要になる呪文だ。

先生ぐらいの魔法使いになると、メモなんて必要なくなるどころか古代語で日常会話もできるだろう。でも、古代語も魔法と同じように習い始めたばかりの私達には、メモは必需品だった。

「これから教える魔法は、動物の能力の一部を借りる魔法です。正確に言うと、借りるといってもコピーすると言った方がいいでしょう。動物の方には何も負担はありません。まず、エリザベスちゃんの体のどこでもいいですから手を触れてください」

私は先生に言われた通りにエリザベスちゃんの頭に手を置いた。

「今回はネズミを探す為に、猫の視覚と聴覚を借りましょう。そのことを心に念じてメモの呪文を唱えてください」

猫の目と耳ね。

白いふわふわの毛に覆われた耳と青い瞳を記憶に留めようと、私はエリザベスちゃんを覗き込んだ。

人間と同じで動物も個体によって美醜が異なる。

性格には難があるけど、エリザベスちゃんは美猫だった。ペルシヤの特徴の顔の中心に寄った大きな瞳とつぶれた鼻ではなく、エリザベスちゃんはバランスのとれた整った顔立ちをしていた。ペルシヤとしては減点だろう。でも、私はこっちの方が美しいと思う。

エリザベスちゃんを少し見つめた後、メモに視線を落とす。

共通語でルビがふられた呪文を声に出して読み上げる。初めて絵本を朗読する子供のようにつたないけど、間違えなければいいんだから大丈夫、だと思う。

なぜか呪文を唱え始めてすぐに頭がむず痒くなった。視界も揺らいで、周囲の景色が色褪せていく。

呪文の詠唱が終わると、頭の痒みも視界の揺らぎも収まった。ただ、辺りはぼやけて焦点があわず、なにか色がおかしい。それに、急に騒がしくなったようだ。

私は妙な感覚に眩暈を覚えて、胸に抱いていた卵を抱きしめてしやがみ込んだ。壊れものだから転んだりしたら大変だ。

卵はエレザが作ってくれた特製抱っこ紐を使って抱いていた。とても目立つ上になりに間抜けな姿だけど、落して割るよりはマシだ。そう自分に言い聞かせて毎日恥ずかしさに耐えている。

「だいじょうぶですか？」

うっ、先生の声がデカイ。頭に響く。

「あんまり……。周りがよく見えないし」

私は卵を抱きしめて蹲ったまま、小声で答えた。自分の声も頭に響きそうだったから。

「そうですね。視覚を少し調和させましょう」

調和させるってどういうことだろう、とぼんやりと考えているうちに先生の呪文が聞こえ、視界が徐々にはつきりとしてきた。

あれ？

今までは視界がぼやけていて全くわからなかったけど、なんだか皆の様子がおかしい。

嫌な予感がする。こういう雰囲気、前にもあったような……。

「どうですか？」

「うん……。よく見えるようになりました。でも、音がうるさくて……」

ゆっくりと立ち上がると、少しでも騒音から逃れようとして耳を塞ぐと両手を上げた。

「ひゃっ!?!」

両手は耳に触れるはずだった。

でも、手に触れたのは耳ではなく、滑らかな肌。そこにあるはず

のものが無かった。

どういうこと？ 何が起こっているの？

困惑して自分の両手を見つめて立ち尽くす私に、ミケーレが声をかけてくれた。

「うーん、もうちょっと上の方。このへんかなあ？」

彼は両手を自分の頭に乗せ、ぽんぽんと叩いている。

「う、上の方？」

彼のジェスチャーに従って、手を頭の上の方へと移動させると妙なものに触れた。

ふわふわの毛に包まれた薄っぺらくて温かいもの。前の方にはあまり毛がなくて、下の方に空洞がある。

これって……。

「あら、意外と似合うじゃないの。黒い髪に白い耳は映えていいじゃない」

私が突然頭に生えた妙なものを触って呆然としてしていると、エリザベスちゃんの満足そうな声の下から聞こえてきた。

エリザベスちゃんと研究室のネズミ 2

エリザベスちゃんを肩に乗せた先生を先頭に、様々な動物を従えて猫の耳を生やした一団が横切っていく。

とても異様な光景だ。

笑いたくなるのもわかる。わかるけれど……。

指差して大笑いしたり、あからさまに避けて通ったりしなくてもいいじゃない！

「あれって、動物学の生徒？ 遊園地か保育園のイベントにでも行くのかよ？」

「何あれ？ 恥ずかしくないの？」

「女子って一人だけなんでしょ？ ほら、いつも玉子抱えてる変な子。よく辞めずに頑張れるよねー」

「ちよっ！ 後ろから三番目のデカイ奴。猫の耳って、ありえねーだろ」

そして悲しいことに、猫並の聴覚を備えてしまった私たちには、小声で囁かれる悪口を全て漏らさず聞き分ける事が出来た。

もう、帰りたい……。

「だから絶対に嫌だって言ったんだ。なんで俺が晒し者なんかに……」

隣を歩くジャンが、俯いて白い耳を両手で隠した。

ジャンは最後まで嫌だと主張していたけれど、先生の「単位が取れなくなってもいいんですか？」という脅しに屈して渋々ながら行列に参加していた。

先生が言うには、この魔法は状態変化の魔法の基礎で、上達すると動物に姿を変えたり種類の異なる動物を組み合わせて新種の動物に変身したりできるのでさうだ。この『動物の能力の一部を借りる魔法』を習得しないと上級魔法は習得できないし、基礎なので何度も練習することになるから拒否したままでは多くの単位を落としま

すよ、ということらしい。

プライドが高そうなジャンには地獄だろうなあ。

あまりプライドの無い私でさえ、恥ずかしくて逃げ出したいんだから。

私は、まるで絞首台に連行される死刑囚のように重い足取りで、俯いて歩くジャンの横顔を盗み見た。

そういえば、ジャンって何で動物学を専攻したんだろう？

こういう肉体労働系よりも、もっと研究者寄りの薬学部とか医学部の方が似合っっていそうなのに。

「ねえ、ジャンって何で動物学を専攻したの？」

「えっ？」

ジャンは不意をつかれたような、驚いたような顔で私の目を見た。でも、それは一瞬のことで、すぐに私から視線をはずして俯いた。

「動物学は一番潰しが効く学部だろう。卒業後の進路の選択肢が最も多いのも動物学だ。優秀なら一国の軍部に高官として仕える道や、後から医学を学んで獣医になることもできる。才覚が無かったとしても、騎獣を使つての運搬業や害虫駆除等、他の道が色々ある。他の学部なら有能で無い者は魔法で生計を立てるのは難しいだろう」

「そう……だね」

とても現実的で無駄の無い彼らしい答えを聞いていると、未熟で幼稚な自分の志望動機が恥ずかしくなってくる。

私はそこまで将来のことを考えずに学部を選んだから。

「リリスは何で動物学を学ぼうと思っただんだ？」

「その……動物が好きだから。将来、動物に接する仕事に就けたらいいなあ、と思っただけ」

「そうか。リリスらしいな」

消え入りそうな声で言った私の言葉に、思いのほか優しい言葉が返ってきた。

絶対に馬鹿にされるか説教されると思ったのに、意外だ。

「時々、リリスやミケールが羨ましくなるよ。俺も、もっと自由に

生きてみたくなる」

ふと、ジャンが別人のように感じられて、私は驚いて彼を見上げた。けれど、隣を歩いているのは私のよく知っているジャンだ。

白い耳を隠して俯きながら、のろのろと皆について歩いている。さつき盗み見た時と変わらないジャンが隣に居る。

でも……。

ぼつりと呟いた声に含まれた、あの暗い響きはなんだったんだろう。

「ジャン？ あの……」

「やっと水の館が見えてきたな。徒歩で二十分程度の距離なのに、やけに遠く感じたよ」

私の言葉を遮る様にジャンが言った。

水の館の外観は土の館とほとんど変わらなかった。が、館の中へと足を踏み入れてみると、そこには土の館とは全く違う世界が広がっていた。

建物の造り自体は土の館と同じはずなのに雰囲気は全く違う。良く言えば重厚、悪く言えば重苦しい土の館に比べ、水の館は爽やかで開放的だった。

色が違うだけでこんなに雰囲気って変わるんだなあ、と感心しながらホールを眺め、長い廊下の中程にある一つの扉の前で立ち止まる。

扉の横のプレートには『薬学部 第一研究室』と書かれたプレートが掛けられていた。

「動物学の講師のアルです。こちらから要請があったので、生徒を連れて来ました」

先生が軽くノックをして中へと声をかけると、ゆっくりと扉が開いて中から初老の小柄な男性が顔を出した。

「ああ、良かった。アル先生、お待ちしております。本当に困

つていたんです。専門家が来て下さったなら、もう……」
そこまで早口で捲し立てた後、私たちを見て初老の男性は固まっ
てしまった。

「……大丈夫、ですよ……ね？」

私の方が聞きたいぐらいだ。

本当に、私たちのような新入生で大丈夫なの？ 先生。

「えー、今説明した通り探すマウスは三種類、計三十匹です」

ガラス戸が閉まらないんじゃないか、と思う程に薬品や実験用機
材の詰まった棚が壁面いっぱい設置された研究室。その中で、か
つて窓があったと思われる場所を背にして先生は立っていた。

先生の後ろには天井近くまでの高さがある棚がそびえ立ち、その
上にはさらに段ボールが積まれていた。積まれた段ボールの隙間か
ら、わずかに青空が覗いている。

「では、ジュリアーノくん、探すマウスが薬によって増幅させられ
ている本能は何か覚えましたか？」

「闘争本能、防衛本能、繁殖本能の三種類です」

先生ののんびりとした問いかけに、指名された生徒が試験管やら
顕微鏡やらが雑然と置かれた長机の向こうから声を上げた。

同じような状態の長机やイスが所狭しと置かれているせいで、研
究室は息が詰まるような閉塞感を感じさせた。壁面の棚に張り付く
ように一列に並んで、私たちを胡散臭そうに眺めている薬学部の生
徒の視線も閉塞感を助長している。

この人たちは毎日ここで研究をしているのか。

よく、こんな場所に長居できるなあ。

白衣を着た薬学部の生徒たちを眺めて、ぼんやりとそんなことを
考えていると、

「リリスさん？ 聞いていますか？」

先生に呼ばれてしまった。

「は、はい！ 捕獲するネズミの種類ですよね？」

「そうです。それをふまえて、学園内のどこを探せばいいと思いますか？」

「どこって……」

「では、リリースさんにヒントを出しましょう」

答えに詰まった私に向かって、先生は嬉しそうに言った。

「実は、逃げ出したマウスはもう一種類いたんです。そのマウスたちは食欲を増幅させられていました。十匹とも水の館のある場所で発見されて、動けなくなっていたところを捕獲されました。彼らが捕まった場所はどこだと思えますか？」

食欲を増幅させられて、ある場所で動けなくなったネズミ。

まさか、食べ過ぎて……とか？

ネズミの餌が豊富にある場所は食堂と獣舎の飼料置場ぐらいだ。

獣舎は土の館に隣接している。

「食堂？」

「そうです。このように、ネズミの生態や行動を思い出していけばいいんです。それでは、ここでもう一つのヒントです。繁殖本能を増幅させられたマウスは十匹全てオスです。マウスはどこへ行くと思えますか？」

当然、メスを探しに行く。ネズミの多く集まる場所は……。

「食堂、屋根裏、床下、下水溝……あとは柵の裏や隙間かな？」

「うーん、おいしいですね。マウスはハツカネズミを改良したものです。交配の相手にも同じハツカネズミを選ぶはず。ハツカネズミは比較的乾燥した場所を好みます。床下や下水溝に好んで行くことは少ないでしょう。草地を好みますので、屋外に出ている個体もいるかもしれませんね」

そういえば、捕獲実習の時に人家に侵入するネズミには三種類あるって言ってたっけ。

湿った低地を好むのはドブネズミだ。

「それでは……そこで眠そうにしているミケーレくん。闘争本能を

増幅させられたマウスはどこにいると思いますか？」

こんな調子で、先生はマウスの居場所を推測していった。

闘争本能を増幅させられたマウスは、水の館中のネズミを追い出そうと水の館内の食堂、屋根裏、家具の陰や隙間にいるだろう。もしかしたら、ドブネズミを追って床下や下水溝にまでいるかもしれない。

防衛本能を増幅されたマウスは警戒心が強くなっているため、他のネズミや人間が多い水の館内には既にいない可能性が高い。校外を逃げ回っているだろう。

マウスのいそうな場所をある程度推測したところで、私達は先生の指示に従って、二手にわかれて搜索することになった。

水の館内を搜索するチームと、校外を搜索するチームだ。

水の館内を搜索するチームは、ネズミの気配がする場所にメスのマウスを入れた罠をしかけて捕獲する作戦。

これで繁殖本能を増幅させられたマウスはもちろんのこと、闘争本能を増幅させられたマウスも罠の中のマウスを追い出そうとして罠にかかる。

校外を搜索するチームはネズミの気配がする場所を片っ端から探し出し、驚かせて逃げ出したところを捕まえる作戦。こちらは、作戦というよりも……人海戦術？

こうなってくると、罠を設置するだけの水の館チームは人数が少なくてもいいので、ほとんどの生徒が校外チームにまわされることになる。

私も校外チームにまわされることになった。

そして、私たちがネズミを追いかけている間先生は何をするのかというところ、

「さあ、リリスさん。卵をこちらへ。私が責任を持って暖めておきますね。グルドくん、金魚鉢はその机に置いておくといいでしょう。ルイスくん、君のアマガエルはこの飼育ケースを借りましょう

か

「一緒に連れて走りまわるのが困難な使い魔を世話する一時預かり所を開き始めた。」

微かに草が動く音が聞こえた。

私は息を飲み、ゆっくりとリュカとジャンを振り返る。彼らも足を止めて真剣な顔で小さく頷いた。

二人の歩みにぴったりと合わせて歩いていた二頭の獣も、その場に静かに身を伏せた。さすが野生のハンターだ。身を伏せる時に、僅かな物音さえさせなかった。

また、草が擦れる^すような音が聞こえる。小さな動物が生い茂った雑草の中を歩いている音のようだ。

ジャンが私の顔を見ながら、右手で私の足元の地面を指差した。ここから動くなってことかな？

私は手に持った網を両手でしっかりと握りしめて頷いた。

リュカとジャンは互いに目配せをすると、それぞれの足元に控えている二頭の獣に手振りだけで指示を与えた。

二頭の獣がゆっくりと立ち上がった。雪原オオカミのローは左から、ユキヒヨウのシロは右から、それぞれ弧を描くように音がした。茂みの後方へと静かに移動する。

それと同時に、リュカとジャンも足音を忍ばせながら、音がした茂みを囲むように左右に移動していた。

全員が定位置についたのを確認すると、ジャンがパチンと小さく指をならした。

それを合図にローが左後方から、シロが右後方から茂みに向かって飛びかかった。

茂みの中から何かが飛び出してくる。恐怖に駆られ、持てる能力の全てを発揮して飛び出したものの姿は、人の目では僅かな瞬間しか捉えられないだろう。

でも、私の目にははっきりとスローモーションのように映った。何かが動いた、と思うのと同時に瞳の焦点は動く物体に合わさり、

その細かな動きの一つ一つまでもを克明に映し出す。

後ろ足で地面を蹴り、跳躍して宙を舞い、前足が地面につけられて体が深く沈み込むまでの様子。揺れる長い尾と、ヒゲ。小さな黒い瞳。

ネズミだ。

けれど、その体は茶色の体毛に覆われていた。

網を持つ手を弛めた私の脇を、茶色いネズミは駆け抜けていった。

「また、茶色かよお……」

私と同じ様に猫の目と耳を持つリュカにも、ネズミの姿がはつきりと確認できたようだ。脱力して、その場にへたり込んだ。彼の頭についたタイガーと同じ茶色い色をした耳も、ぱったりと横に倒れる。ちよつと、かわいい。

「本当に白いネズミなんて、見つかるのかなあ」

私も彼にならって、草の上に腰を下した。

私達はそれぞれ三人一組になって、クレスメント学園の敷地内を白いネズミを求めて歩きまわっていた。

敷地内とは言っても、これがかなり広い。クレスメント学園には、本館と四つの別館の五つの大きな建物が建っている。その一つ一つが、ちよつとした城程の大きさがあるのだ。

さらに、その全てにもれなく校庭が併設され、学部によっては関連施設まである。土の館なら動物学の為の獣舎と死霊魔術学の為の墓地、火の館なら戦闘魔術学の為の屋内訓練場と武器修理用の工房といった具合だ。

「他の生徒からも、捕まえたって連絡あったの二回だけだったよなあ？」

リュカがジャンを見上げると、彼は胸に下げたカードを手にとった。

「ああ、一時間程前に二度目の連絡があったのが最後だ」

「水の館の方は？ 何匹ぐらい捕まったのかな？」

私もジャンを見上げて聞いた。

ジャンは手にしたカードの表面を指で軽く叩いたり、弾いたりしながら表示される文字を読んでいる。

彼が胸に下げている黒いカードは、マウスの捕獲を始める前にアール先生から連絡用に配られたものだった。水の館内を搜索するチームに一枚、後は校外を搜索する三人一組のチームにつき一枚が配布されている。このカードはタッチパネル式になっていて、簡単なメールのやりとりができた。

「……グルドから連絡が来ているな。十六匹が罠にかかったそうだから、二度目の罠を設置するらしい」

「十六匹いきい？ こっちは、まだ二匹だってえーのに……。みんな、水の館にいるんじゃないの？」

リユカが盛大にため息をついて、空を見上げた。

「広さが違うから比較にならない。無駄口を叩いていないで、さっさと行くぞ。残りは十二匹もいるんだ」

「って！ 蹴るなよ！ この、変態サド野郎」

「誰が、変態だ！」

また、こいつらは……。

歩きまわって蓄積された疲労に、心労までプラスされそうだと。

「ほらっ、喧嘩なんかしてたら、日が暮れちゃうよ。明日になったら、学園の外にまで逃げちゃうかもしれないでしょ」

私は立ち上がると、手にしていた網をリユカに、肩から下げた空のプラスチックケースをジャンに押し付けた。学園の外にまで逃げられてしまったら探し様が無い、と思ったんだけど……。

「いや、学園内から逃げることは不可能だ」

ジャンは私が押し付けたケースを手にしたまま、戸惑ったようにこちらを見返した。

「え？ どうして？」

「なんだよ、お前。そんな事も知らねーの？」

「入学してすぐに説明があったはずだ。聞いていなかったのか？」

二人とも呆れたような顔で私を見ている。

入学してすぐに説明があったって言われても、いろんな説明がありすぎて全部なんて覚えていない。

そんな、責めるような目でみないでほしい。

「クレスメント学園は外部からの侵入を防ぐ為に、強力な結界が周囲に張られている。その結界の管理は代々空間魔術学科の講師が行っていて、彼らの許可を得た者しか自由に出入りする事は出来ない。俺たちも講師の一人から簡単な儀式を受けたらどう？ あれが認証の証だ。使い魔を呼び出した後も、講師のところへ許可を貰いに使い魔を連れて行ったじゃないか」

そういえば、そうだった。私の卵も空間魔術学の先生の一人に呪文をかけてもらっていた。何学年の担当かは知らないけど、黒髪と髭の似合うダンディーなおじさまだった。

「ええっと、無許可のマウスは学園内から出られないってこと？」

「そういう事だ」

「あのさあ……」

今まで黙って私とジャンのやりとりを聞いていたリュカが、割り込むように口を開いた。

「なんでしよう？」

何を言われるんだろう。

絶対に馬鹿にされると警戒しながらリュカの次の言葉を待っていると、彼は私のことなんか全く気にしていない様子で話し始めた。

「やっぱり、少なすぎると思わねえ？」

「捕まったネズミの数？」

「だから、さつきも言っただろう。広さが違うから比較になら……」
「それにしたって、たった二匹だぞ？ 茶色いのは、嫌になるくらい捕まったってのに」

その中の何匹かは、何度も捕まる間抜けなネズミが混ざっていると思うけど、確かに大量だった。

それに、どんなに広くてもネズミのいそうな場所なんて限られて

くる。見通しの良い校庭の芝生や人工石が敷き詰められた道の真ん中などにはいない。私達も植え込みや校舎の陰や、整備された校庭の外れにある雑草の茂みなどを重点的に探していた。

「もしかして、本当に水の館から出てないとか？」

「そうそう！ そうじゃなきゃ、安住の地を見つけたとか」

「安住の地か……。ありえるかもしれない」

ただでさえ臆病なネズミが、防衛本能を増幅させられている。少しでも人間や動物の気配がするような場所では、落ち着くことなんてできないだろう。その為、一か所に留まらずに敷地内を彷徨さまよつてるんじゃないか？ と思われていたけど……。

「この学園内に人も動物も立ち入らない場所なんてあるのかな？」

私の疑問に答えてくれたのは、ローの豪快な鼻息だけだった。鼻に虫でもついたのかもしれない。

私たちは皆、ローの鼻息をBGMにしながら考え込んでしまった。

この学園で人の立ち入らない場所。あると思う。でも、他の館には出入りした事が無いからわからないし、本館に使われていない部屋なんてなさそうだ。

だいたい、他の館にしても土の館と違って人数が多いから、空き部屋がほとんど無い……。

はっとして、私は顔を上げた。同じように何かを思いついたような顔をした二人と目が合う。

「土の館！」

私たちの声が火の館の校庭に響き渡った。

クレスメント学園の四つの館は、生徒たちの寮としても使われている。どの館も一階が学習スペース（演習室や実験室など）、二階が生活スペース（食堂や談話室など）、三階から六階までが生徒たちの個室になっている。

そして学部ごとに入居する寮が決まっているんだけど、学園三大不人気学部と幻術学の生徒が生活する土の館は極端に人数が少な

った。

三大不人気学部はもちろんのこと、幻術学も入学希望者は他の学部と比べて少ない。幻術学の生徒数が少ないのは、三大不人気学部と同じ寮だからだと噂されている。

その噂は真実なんじゃないかと思う。

奇人変人の宝庫、悪魔学。

陰気で暗い人や不思議ちゃんの多い死霊魔術学。

年中動物臭い上に、館内に使い魔という動物を持ち込む動物学。

こんな人達が集まる寮で三年間を過ごすなんて考えると気後れるだろう。そのせいか、幻術学の生徒はエレザのような、良くいえば大らか、悪くいえば鈍い天然系が多かった。

そんなわけで、土の館の寮は生徒数が少なく使われていない階があった。六階建ての建物の五、六階部分だ。

「ちよつと待つて！」

私はあることに気付いて、今にも土の館へと歩き出そうとする二人を引き止めた。

「人は入らないかもしれないけど、クマネズミが繁殖してるんじゃない？ 食堂に餌がいっぱい仕掛けてあるし」

しかも、いつ見ても中には丸々と太ったネズミが入居していた。

「それなら、心配ないんじゃない？ ほら、一週間ぐらい前にネズミの足音が煩いつて苦情があったら。たしか、二年生が捕まえて医学部と薬学部に引き渡したつてきいたぞ」

ああ、そういえば、そんなこともあった気がする。

「じゃあ、これで決まりだね。土の館の五、六階へ行つて、早いとこ捕まえちゃおうよ」

よし行くぞ！ と、気合いも十分に歩き出そうとした私とリュカを、今度はジャンが引きとめた。

「ちよつと待つて！ 大切なことを忘れていた」

「今度は、なんだよ？」

「いきなり人間が踏み込めば、気配を察知してネズミが逃げ出して

しまう」

確かに。私たち人間なんかよりもネズミの方がずっと敏感だ。見つけるよりも先に逃げ出されたらたまらない。

「踏み込む前に、空間魔術学の生徒に結界を張ってもらおう」

土の館の四階から五階へと続く階段は、誰も立ち入らないように二本のポールに渡された鎖で封鎖されていた。美術館や博物館などの立ち入り禁止区域によく設置されているアレだ。

私たちはポールの片方をそつとずらして横をすり抜け、階段を登りはじめた。階段は照明が消されているせいで薄暗く、人が立ち入ることが少ないからか、どことなくかひくさ黴臭かひくさかった。

ゴシック調のホラー映画のセットのような雰囲気、背筋に寒いものが走る。

私はローのふさふさの体に手を置きながら、前を歩く二人に怖々としていった。ローはちらりと私を一瞥いちべつしたけれど、特に嫌がる素振りを見せずに私の手を振り払おうともしなかった。

よかった。ローが心の広い狼で。だって、何かに触れていないと怖いし、触れているものが狼なら心強い。

薄暗い階段を上がると、開けた踊り場に出た。

他の階と同じように、床には白と黒の市松模様のタイルが敷き詰められているはずだった。

けれど、足元のタイルは白と灰色に見える。長い年月をかけて降り積もった埃が、黒いタイルを覆い隠しているのだ。その上に点々と残されている足跡は、つい最近ここに入ったという二年生のものだらう。

ジャンが立ち止まって、口の前に人差し指を立てて私達を振り返った。私とリュカも立ち止まって息をひそめ、耳に意識を集中させた。

聞こえる。

微かにネズミが走る足音と、甲高い鳴き声。

「当たり前、だな」

リュカが漏らした囁きに、私とジャンも頷いた。

「たぶん、上の階にもいるだろうな。二手にわかれよう。リュカは五階を頼む。俺は上に行く。リリスはどちらか好きな方を選べ」
好きな方を選べって……。

どうせ私は居ても居なくても同じの役立たずですよー、だ。

少しイジケ気味に口を開こうとした時、私の実習着の袖を誰かが小さく引いた。振り向いた時には、すでに手は引かれた後だったけれど、位置から考えてリュカだろう。私の方を見もせずに、ローの頭をやたらと撫でているところも怪しい。

「私は……リュカと一緒に五階を探そうかな？」

なんとなく彼が引き止めた理由がわかった私は、リュカと一緒に五階を探索することにした。

「一人だと、怖いんでしょ？」

階段を上っていくジャンの後姿を見守りながら、そっとリュカの耳元で囁いた。

「はあ？ な、何言ってる……。んなわけねーだろ！」

「なんだ、違うんだ。じゃあ、ジャンと一緒に六階に行こーっと」

「待て！ ちょっと待て」

ジャンの後を追って六階への階段を上ろうとすると、リュカが慌てた様子で私の腕にすがりついてきた。

「怖くないんでしょ？ だったら、一人でも大丈夫じゃない」

「いや、それは……その」

口ごもるリュカの腕を振り払って、階段に足をかける。

「待て！ 行くな！ 待ってくれ……」

私は振り向いてリュカの瞳をじっと見つめた。

絶対に怖いつて認めないと一緒に居てあげないんだから。

「……そうだよ。怖えーよ。こんな墓の側で、死霊魔術学なんて気味悪い学科のある校舎の開かずの間なんて、怖くない方がおかしいだろ！」

自棄やけになつたのか、リュカは多少キレ気味に叫んだ。

勝った。

「そうだよ。私も怖いもん。一緒に居てあげるから安心して、リユカくん」

なんだか嬉しくてリユカの頭をガシガシと撫でると、彼は不機嫌そうに私の手を振り払った。

この階に入ってからずっと聞こえている微かな物音を頼りに、私とリユカは部屋を探索していった。

外を探していた時とは違い、ここで見つかったネズミは全て探していた白いマウスだった。猫の耳と動体視力を持った私たちは、面白いぐらいに簡単にネズミの姿を確認することができた。

そう、ネズミを見つけるのは簡単だった。

でも、ネズミのいる場所まで行くのは思っていたよりもずっと大変だった。

ローを先頭に私とリユカは、白い狼の毛皮をしっかりと掴みながら恐る恐る歩を進めていった。風で窓が揺れて音が鳴る度に息をのみ、クモの巣に引っ掛かつては悲鳴を上げかけ、窓の外に人影や火の玉らしきものが見えた時にはローに抱きつく始末。

ここは墓場の隣で、この時間なら死霊魔術学の生徒が実習もしているはずだ。教室に居ても霊の姿を目にすることは珍しくなかった。それでも、やっぱり場所が違くと怖さも倍増する。周りに人の姿が全くなく、埃をかぶった調度品に囲まれた状態で目撃する幽霊の怖さは格別だった。

なんとかネズミの気配がする部屋に辿り着いた時には、すでに疲れ切っていた。

が、部屋に辿り着いた後も私たちには休む暇などなかった。

猫の耳のおかげでネズミが潜んでいる正確な位置は把握できる。

猫の目のおかげでネズミの動きはスローモーションのように捉えることができる。

でも、私もリユカも猫ではなくて人間だ。自分たちの体はネズミの動き以上に鈍かった。目で追えても体がついていけない。

外でやったように取り囲むことも、スペースが限られていて障害物の多い室内では無理だったので、今度は私たちがネズミを追い出してローに捕まえてもらうことになった。

クローゼットの中に入り込み、ベッドの下に潜りこみ、棚を力任せに揺すってはネズミを追い出す。出てきたところをローがむぎゅつと前足で押えこんだ。

階段を下りてくる足音が聞こえたのは、埃にまみれて咳込みながら四匹めのネズミを捕まえたときだった。

一人と一匹。ジャンとシロだ。

私はベッドの上にもたれかかりながら、近づいてくる足音を聞いていた。

リユカはというと、足を投げ出して床に座りベッドに背を預けて休んで（力尽きて）いる。

部屋のドアが開いた。涼しい顔をしたジャンがこちらを覗き見る。

ああ、なんでだろう？ 無性に腹が立つ。

疲れている時って、心まで荒んじゃうのかな？

「さつきグルドから連絡があつて、二回目の罠に二匹のマウスが掛かったそうさ。こっちは六匹捕まえた。五階の方はどうだ？」

私はジャンに渡したプラスチックケースの代わりに、捕獲したマウスを入れる為に使っていた洗濯ネットを掲げてみせた。

「四匹か……」

ジャンは少し考え込むと、笑みを浮かべた。

「任務終了だ」

終わったあ。

その言葉に私とリユカは大きく息をつき、ローは前足を思いつきり伸ばした。

そう、この時はマウスを捕獲して全てが終わったと思っていた。

この一件が、後に起こる大変な事件の序章になるなんて、この時

は思いもよらなかったのだ。

死霊魔術学の男 1

「また、竜の本を借りるのお？ リリスって、本当に竜が好きなのね」

私が棚から選び出した本の背表紙を見て、エレザが呆れたような声をあげた。

「そういうエレザだって、人のこと言えないじゃん。いつも料理のレシピと騎士が出てくる恋愛小説ばかり。この後、恋愛小説の棚に行つて素敵な騎士様が出てくる本を借りるんでしょ？」

「騎士が出てくるのだけじゃないもん。王子様ものだって好きなのに」

私がからかうと、彼女は頬を少し赤らめて文句を言った。その姿は胸がキュンとしてしまいそうなくらいに可愛い。私が男だったら、抱きしめて頬にキスぐらいしてるかも。

「そうだ、ルパートは何を借りるの？」

このままエレザを見つめていると禁断の道に足を踏み入れてしまいそうなので、私は慌てて後ろの棚の陰に声をかけた。

「悪魔の系譜^{けいふ}。生贄の歴史とその起源と変移^{へんじ}。喚起魔術の実践^{かっきまじゆじ}」

予想はしていたけど、なんてマニアックなセレクションぶり。彼には悪魔学の他に趣味は無いのか？

私は後ろの棚の裏側を覗き込んだ。

あれ？

確かに声が聞こえたはずなのに、そこには誰もいなかった。

「ルパート？」

「なんだ？」

さらに後ろの棚の陰から返事が返ってくる。

「……なんで、逃げるの？ 会話するのも一苦労なんだけど……」

気になってはいいたけど、何故か一月前からルパートは私を避ける様になった。避けるといっても、ある程度の距離を置いてついて

くる。

これではストーカーだ。出会った頃から素質はあると思っていたけど、ついに開花してしまったのか？

「君が交友関係に口出しするなと言ったからだ。傍に居ると寄ってくる男を殴りたくなる。だから一定の距離を置いて見守ることにしたんだ」

見守るじゃなくて、監視するの間違いじゃないかと思ったが、それは言わないでおくことにした。

そういえば、一月程前にミケーレに絡んだルパートを怒鳴りつけたことがあったような……。

以前から私の友達によく絡んではいたけど、あの時はミケーレの手が私の髪に触れたって怒り出して、手を上げようとしたから怒鳴りつけたんだった。

なんて言ったっけ？

私の友達に近づくな？ 私の友達を巻き込むな？

とにかく、そんな意味合いのことを言った気がする。

「うん……。とりあえず、今のままでいいや」

人に危害を加えるよりは、多少不便でもこのまま物陰ごしに会話する方がマシだ。

でも、なんとかならないかなあ？

初めて出会った時よりは、会話も成立するようになってきたし、嫌なことは強く言えば聞き分けてくれるようになった。

ルパートは少しずつだけど、人と関係を築けるようになってきている。最近はエレザとも会話ができているようだし。

これですぐに人に絡んだり、手を上げたりしないようになってくれればいいんだけど。

「ねえ、エレザ。恋愛小説の棚に行った後に、心理学の棚に寄ってもいい？」

「いいけどお、リリスって心理学に興味あるの？ 何か悩みごと？」

「うん、まあ……ちょっとね」

本を読んだぐらいで解決するとは思えないけど、何かのヒントにはなるかもしれない。

私は気を取り直して、もう一冊借りようと思っていた竜についての本を探す事にした。

私たちは今、本館から繋がっている図書館に来ていた。

図書館は警備の厳しい学園の中でも、最も警備の厳しい場所だった。なぜなら、図書館はクレスメント学園外にも魔法で繋がっている唯一の場所だからだ。

もしかしたら、図書館自体が学園の敷地外にあるのかもしれない。それどころかクレスメント島の中には存在していないのかも。図書館へ行くには空間移動用の魔法陣を使用するのだ。

まず、本館内にある図書館行きゲートで、クレスメント学園に所属していることを証明する身分証明カードを貰う。その後、魔法陣を使って図書館へ行き、今度は図書館側のゲートで身分証明カードと学生証を提示する。その時にナビゲーションシステムのついた利用者カードというものを貰って、初めて図書館内を自由に回る事ができた。

この利用者カードにはナビゲーションシステムだけではなく、蔵書検索システムもついている。私はカードを手に取ると「創世史と竜の歴史」という本を検索してみた。

昨日、本館のゲート内にある検索システムで探した時は、この棚にあると表示されたんだけど……。

カードの表面に青い文字が浮かび上がる。

貸し出し中

貸出日：7月13日

貸出者：クレスメント学園所属、ヴァレリー・ロートレック

貸出期限：7月27日

ヴァレリー・ロートレック。

この名前、前にも何度か目にしたことがある。竜についての本を借りると、本に表示される貸出履歴に必ずと言っていいくらい「ヴァレリー・ロートレック」という名が載っていた。

クレスメント学園の生徒だったんだ……。

貸出履歴の方には名前しか記載されないから、知らなかった。

「リリース？ 探し物は見つかったあ？」

「ううん、貸出中だったみたい」

エレザの声に、私は我に返って手にしたカードから視線をはずした。

「早く他のエリアに行かないと、夕食の時間に間に合わなくなっちゃうよあ」

「そうだね、ごめん。卵もジャンに預けっぱなしだし、早く帰らないと。今、ジャンに頼まれた本を検索するから、ちよつと待って」

何日かければ館内全てを見て回れるんだ？ と疑問に思うぐらいに図書館は広がった。

世界中の蔵書が集まっており、一般人には閲覧禁止のエリアまで含めると十五層のエリアがある。エリア間の移動には空間移動用の魔法陣が使われているので、エリア同士がどういう繋がりになっているのかはわからなかった。

地上に十五階立ての建造物が建っているのか、地下に十五階の部屋がのびているのか、それとも想像のつかないぐらいに広い平屋なのか。もしかしたら、エリア同士はそれぞれ離れた場所にあるのかもしれない。

ナビゲーションシステムが無いと遭難者が続出するだろう。ナビゲーションシステムがあっても、私なんかは一人で帰る自信が無い。そして、館内への人間以外の立ち入りは禁止されていた。

ここへ来る為には誰かに卵を預ける必要があったんだけど、預ける相手はグルドかジャンと決めている。

ミケーレに預けるなんて恐ろしいマネは出来ないし、リユカもなんとなく不安だ。

その点、繊細で面倒見のいいグルドと何事にも真面目なジャンは適任だった。だからと言って、いつも無償で預かってもらうのも気が引けるので、かわりにお遣いをするのが暗黙のルールのようになっていた。

「えーっと、『ザヴィエ・ビュラン』作品とその生涯』と……あった！ Dエリアの013bの棚」

ジャンに渡されたリストを見ながら蔵書を検索していく。

隣でエレザが館内の案内図を表示させたカードとにらめっこしている。きつと、どういう順序で本を探していくか考えているんだろう。

エレザにまかせておけば、夕食に遅れることもない。

私はリストに書かれた別の本を検索し始めた。

「……かな？」

「僕は……だから、……する予定」

「リリースはどうする？」

「へ？ 何が？」

急に名前を呼ばれて慌てて顔をあげた。その拍子に手にしたスプーンが滑り落ち、皿にあたって大きな音を立てた。

「だからあ、夏休みをどう過ごすかって話。俺はどっか行こうかと思っただけど、リリースはどうすんの？」

隣でミケーレがテーブルに片肘をつき、その上に顎を乗せてこちらを見ていた。

夏休み？ さっきまで、違う話題で盛り上がってなかった？

図書館から戻ってきた後も『ヴァレリー・ロートレック』の事ばかり気になって、みんなの会話も夕食も上の空だった私は、ぼんやりとミケーレに問いかけた。

「みんなは、どうするの？」

「まったく、大丈夫かよ？ 全然、食ってねーし。夏バテで熱でもあるんじゃないの？」

向かいの席に座ったリュカが身を乗り出して私の額に手をあてて、もう片方の手を自分の額にあてた。

「ああ、なんかよくわかんねえや」

だったら始めから熱なんか計ろうとするな、バカ。

「熱も無いし、夏バテでもないから大丈夫です」

私は呆れてため息をつく、リュカの手を振り払った。

「ミケーレ以外はみんな学校に残るそうだ。俺も学校で過ごす予定だ」

リュカの隣に座ったジャンが、水差しに手をのばしながら答えてくれた。

「みんな実家に帰ったりしないの？」

「うん。帰りたいけど、旅費が無いから。冬に帰る時の為にバイトしてえ、お金貯めるの」

エレザがデザートケーキを口に運びながら、にっこりと微笑する。

「僕はマリアが心配だから、ここに居るつもり」

グルドが金魚鉢の中で泳ぐ、小さな赤い金魚を見つめながら言う。確かに、金魚を連れての長距離移動は大変そうだ。

私は視線を落とし、抱えている卵を見つめた。こいつも長距離移動は大変かな？

クレスメント学園には空間移動用の魔法陣は図書館行きの一つしかない。島外に出るには島の南側に位置する港町キレニアまで騎獣か車に乗って行き、そこから空間移動用の魔法陣を使うか船か飛行船に乗る。

ただ、空間移動は高額なので、急ぎの用事のある人が富裕層ぐらいしか使わない。公共施設なので無料になっている図書館行きの魔法陣しか使ったことが無い人も多い。もちろん私もそのうちの一人。

お金の事を考えると、船が飛行船に乗ることになると思うけど、卵を抱えての船旅はちょっと大変そう。飛行船は空間移動よりは安いけれど、船と比べれば高額だ。私にはちょっと厳しい。

「私も学校に残ろうかな」

「ええ〜？ みんな学校に残るのかよ。なんか俺だけ仲間ハズレっぽくてヤダ」

「だったら、お前も残ればいいだろ」

「それ、無理。半年も学校から出れないなんて息詰まって死にそう。みんなの会話を聞きながら、やっぱり私はまた『ヴァレリー・ロートレック』の事を考えていた。

彼も私と同じように、竜を見たことがあるんじゃないか？

だから竜についての本ばかり借りているんじゃないか？

会って、確かめてみたかった。

「ねえ、クレズメント学園の生徒でヴァレリー・ロートレックって名前、聞いたことある？」

夕食が終わって食堂を出たところで、ミケーレを引き止めた。みんなの中でも一番顔の広い彼なら、名前を聞いたことがあるかもしれないと思って。

「さあ？」

期待に反して彼は首を傾げた。でも、彼の言った次の言葉に私は飛びついた。

「ああ、尋ね人なら在籍者名簿でも見せて貰えば？」

「一般の生徒も見ることが出来るの!？」

「んー、確か見せて貰えたはず……。ま、名前と所属クラスと学年だけしか載ってないって話だけ」

「どこで？ どこに行けば見せて貰えるの？」

「……資料室、だったよーな気がする」

「ありがとう!」

お礼を言つて駆け出そうとした私の腕をミケーレが掴んだ。

「ちよつと待った。資料室まで迷子にならずに行けんの？ リリスちゃん」

「うっ……。」

自慢じゃないけど、私は極度の方向音痴だ。未だに土の館内でも迷子になる時がある。

資料室つていったら、確か本館の三階。ほとんど立ち入った事の無い未知の領域だ。

「連れてつてあげようか？」

ミケーレがにっこりと笑みを浮かべて私を見た。

「連れて行つてくれるなら嬉しいけど……。」

なんか、その笑顔が怖い。ろくな事を考えてなさそう。

「よし！ じゃあ、行こうか。星空眺めながら夜の散歩なんて、デートみたいだよなあ」

「はあ！？ デートなんかじゃないから！」

「そうやってムキになるところが可愛いね、リリスちゃんは」

何故か上機嫌のミケーレに、私は資料室へと案内して貰った。

資料室は本館の三階の長い廊下の突き当りにあった。

入つてすぐの場所にカウンターがあり、眼鏡をかけた赤毛の真面目そうな女性が本を読みふけている。

「あのお……。」

「なに？」

恐る恐る声を掛けると、彼女は本から視線だけを上げて私を睨んだ。

怖い！ 苦手なタイプだ……。

「在籍者名簿を見せて貰いたいですけど……。」

彼女はバンつと一冊のノートをカウンターに叩き付ける様に置くと、片手で無造作にページを開いた。

「ここに名前書いて。ペンはそこ。二十一時になったら閉めるから、それまでに済ませて」

あごでペン立てを指し示して捲^{まく}し立てる様に言うと、再び本に視線を戻す。

私とミケーレは開かれたページに名前を書き、そつとペンを戻すと部屋の奥へと足を踏み入れた。

「またあ？ ほら、そのノートに名前書いて……」

背後からカウンターの女性の苛立たしげな声が聞こえる。

「おおー、ストーカーくん、ちゃんと着いてきてんだなあ」

ミケーレが肩越しに振り返り、感心したような眩きを漏らした。

「在籍者名簿、在籍者名簿つと……。お？ 何かあ？」

資料室は寮の一室程度の広さしかないこじんまりとした部屋だった。窓は無く、壁面一杯に棚が備え付けられている。

その棚を探していたミケーレが、三冊の分厚い本を抜き出して両手に抱えて戻ってきた。部屋の中央に一つだけ置かれたテーブルの上へと三冊の本を置くと、イスを引いて座りながら口を開く。

「さあーて、リリスちゃんのお相手でも探しますか」

「誰もそんなこと言っていない！」

「なんだと！ どういうことだ！」

バンッ！

入口の方から本か何かを叩きつけるような音が響いて、私たちは首を竦めて声を落とした。

「違うの？ わあ、ステキな人！ あっ、クラスメートが名前を呼んでるう。名前はわかったけど、学年と学部がわかんない。どうしても知りたいのぉ かと思っただのに」

「違います」

声を潜めながらも不気味な一人芝居を披露したミケーレを、軽く睨みつける。

「そつだよな。僕というものがありませんながら他の男に目移りするなん

て、そんな酷い話は無いはずだ。そう、僕たちは運命で……」

この狭い資料室には身を隠す場所が無いので、諦めて私の隣の椅子に座ったルパートがブツブツとなにやら呟いている。

うん。聞かなかったことにしよう。

私はミケールが持ってきてくれた本に手をのばした。

「なーんだあ。つまんないの」

そう言いながらもミケールは本を一冊手に取ると、残った一冊をルパートの方へと押しやった。

「ほら、一人一冊。で？　なんて名前だっけ？」

「ヴァレリー・ロートレック」

「ヴァレリー・ロートレック……ねえ」

静かな室内にパラパラとページを捲る音が響く。

私が手に取った名簿は三学年のもので、他の二冊と比べると薄かった。ルパートが手にした一学年のもの比べると半分程の厚さしかない。

これって、半数の生徒はリタイアしちゃうってことだよな？　無事に卒業できるんだろうか？

私が将来への不安を感じてルパートの手にした名簿を沈痛な面持ちで見つめると、彼のページを繰る手がピタリと止まった。

「あつた。死霊魔術学の新入生だ」

死霊魔術学？　同じ土の館に所属する学科だ。

「よかつたな。同じ寮なら門限を気にせずにデートできるし」

「そんなマネは許さん！」

「だから違うって！」

バンっ！

今度は本か何かを叩きつけるような音だけでは済まなかった。

「あと十分で閉めるから、もう出てって！　気が散って、ゆっくり本も読めやしない」

私たちは文字通り資料室を叩き出されてしまった。

死霊魔術学の男 2

遠くから狼の遠吠えが聞こえてきて、私はびくりと肩を震わせ、持っていた野草の束を胸に抱きしめた。

見上げると、茜色あかねいろに染まっていた空は、すっかり濃紺色に変わり無数の星が瞬またたいている。

キレイ……。

と、頭上から梟ふくろうの声が降ってきて、私は恐怖にまた身を竦すくめた。夜の森は静かではなかった。想像していた以上に多くの音に溢れていた。

虫の声、梟の鳴き声、狼の遠吠え、大型の動物が生い茂った雑草の中を移動するガサガサという音。

虫の声をバツクに新たな音がする度に、私は野草を胸に抱きしめて怯えて立ち止まった。

顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっていたけれど、喉の奥からしゃくり上げてくる声だけは漏らさないように必死でこらえていた。

「絶対に森には一人で入っちゃだめよ、リリース」

母の優しい声が脳裏のうりに蘇る。

だって、どうしても月影草つきかげぞうが欲しかったんだもん。

母の声に、私はよりいっそう野草をきつく抱きしめた。

月影草はどんな願いでも満月の夜に叶えてくれるんでしょ？

月影草にお願いすれば、リルとまた会えるんでしょ？

幼かった私は、月影草が実在しない花だなんて知らなかった。

童話の中に出てくる、どんな願いでも叶えてくれる花。それさえ見つけることができたなら、死んでしまったりリルと再会できると思っていた。

物心ついた時から一緒に居て、姉妹のように育ったりリル。

妹が生まれて、大好きな母が妹に取られてしまったように感じて寂しい思いをした時モリルが傍に居てくれた。

私にとってはリルは家畜でもペットでもなかった。大切な家族だった。

そして、知らなかった。

人と犬との間に流れる時間が違うことを。

私にとっての一年が、リルにとっては五年以上の歳月になることを。

ずっと一緒にいられると思っていた。

私がお婆ちゃんになった時、両親が天へと召された後もリルは傍に居てくれると思っていた。

どれぐらい歩いただろう？

可憐な白い花をつけた野草を抱きしめていた腕は強張って、指一本を動かすのにも苦勞する。

まるで機械のように規則正しく交互に前へと出される足は、すでに感覚がほとんど無くなっていた。

肌寒さも感じ始めていた。日が出ているうちは気づかなかったけれど、虫の声と共に秋の気配は確実に近づいてきていた。

「こちらへいらっしやい。人間の娘」

恐怖で竦み上がった心に、疲れきった体に、その声は優しく染み渡った。

だれ？

「こちらです。さあ、光の差す方へ足を踏み出さない」

立ち止まって辺りを見回すと、暗い森の中に柔らかい乳白色の光が灯った。

私は吸い寄せられるように灯りへと足を踏み出した。

灯りを目指してしばらく歩いて行くと、開けた場所へと出た。

ここ、知ってる。

そこは両親と何度か来たことがある場所だった。湧水わきみずの出る小さな泉があり、周囲には背の低い草が生い茂っている。

見覚えのある場所に出で嬉しくなった私は、足の疲れも忘れて泉へと駆け出そうとしたけれど、出来なかった。突然目の前に現れた太い木の枝のような物に阻はらまれたからだ。なんだろう？

目の前に現れた物をよく見ようと目と目と目と目を凝らす。その時になって初めて、今まで自分を案内してくれていた灯りが消えていたことに気づいた。

「急に走っては危ないですよ。人間は傷つき易いのでしょう？」
また、あの声だ。

優しく、キレイで、頭に直接響いてくるような声。

私は木の枝のような物の先を目で追っていた。

それは緩やかな曲線を描いて上へのびて……。

雲が途切れて満月が顔を出した。

月明かりに照らされて浮かび上がった物は、見た事も無い生き物だった。

緑色に輝く鱗に覆われた大きなトカゲ。でも、その背にはコウモリのような羽が生え、その口は大きく裂けて白い牙が覗いていた。

不思議と怖くはなかった。

その体が見た目に反して、人や犬と同じ様に温かいと発見してからは、木の枝と間違えた尾を一晚中抱きしめていた。

私は夢中になって、その不思議な生き物に色々な事を話した。

森へ入った理由。リルのこと。両親や妹のこと。近所のベルントおじさんの馬が子馬を産んだこと。

その不思議な生き物は私の話を興味深そうに聞いてくれた。

トン……トン……トン……

それから……。

ああ、お母さんが泣いている。

私も泣いて……。

トン……トン……トン……

音がする……。

何の音？

トン……トン……トン……

ああ、これは……何かをノックする音だ。

どこを？

私の、部屋？

なんで、ノックなんか……。

あれ？ 前にも同じようなことがあった気が……。

トン……トン……トン……

「うう……ん……ん……ん……」

煩めづいなあ。寝かせてよお、こっちは明日も朝早いつてのに。
ん？ あさ？

うわっ！ ヤバイ！

一気に眠気が吹っ飛び、夏用の薄手の肌掛けを撥はね上げた。

「ごめん！ ちょ、ちょっと待って！ すぐ行く！」

ゴン！

ごん？

直後に妙な音が聞こえて、床に目を向けると……。

「げっ」

見慣れた白い物体がころがっていた。

うわあ。マジでヤバい。

私はベッドから飛び降りると、卵を拾い上げて窓から差し込む月明かりに恐る恐るかざした。

よかった。とりあえず大きな傷は無いみたい。

ヒビとか入ってたら怖いから、明かりつけてよく調べ……。

トン……トン……トン……

また、部屋と廊下とを隔^{へだ}てている扉を叩く音がする。

私は返事を返そうとして口を開きかけ、妙な違和感を感じて窓を見上げた。

私……今、月明かりで、傷を確認した、よね？

動物学の一年生の朝が早いって言っても、早朝の四時半起きだ。

この前みたいに寝過ごして誰かが起しに来てくれたなら、今は五時以降^{以降}ってことになる。騎獣の世話が五時からだから。

そして、今は七月。

朝の五時を過ぎているのに、こんなにキレイに満月が出ているなんて……。

卵をそつとベッドに置くと、枕元に置いてある目覚まし時計に手をのばした。暗い場所であつすらと光を発するデジタルの文字は二時十八分を表示している。

トン……トン……トン……

ずっと背筋が寒くなり、息を飲んで扉を見つめた。

こんな時間に誰が訪ねてきたりするだろう？

火事とか何か緊急のことがあつたなら、もつと激しく扉を叩くか合鍵で室内に入り叩き起すはずだ。

ノックの音は、控え目で単調でいながらも、執拗^{しつよう}に繰り返されてきた。きつと私が夢を見ている時から続いていたんだろう。

絶対におかしい。

トン……トン……トン……

私は卵をベッドに置いて、ゆっくりと立ち上がると何か身を守る武器になりそうなものを探した。

この部屋に備え付けの無駄に豪華な椅子。重くて振り上げるなんて無理。

ハサミ。いくらなんでもこれは物騒すぎる。

こつやつて見ると、ろくなものがない。護身用に木刀でも置いておくんだった……。

仕方が無く、コートかけに掛かっていたハンガーを手に取って、静かに入り口の扉へと近づいた。

右手にハンガーを構え、左手でゆっくりとノブを回す。ほんの少しだけ扉を開いて廊下の様子を窺^{うかが}った。

廊下には誰もいないように見えた。でも、扉の影に身を隠しているってこともあるかもしれない。

私はハンガーを両手で握りしめると、勢い良く扉を蹴り開けた。扉は音を立てて壁にぶつかり、反動で少しだけ閉じかけて止まった。結構いい音をたててしまった。就寝中の皆さん、御免なさい。

これだけ勢いよく壁にぶつかるところを見ると、扉の裏には誰もいなかったようだ。

念の為に部屋から身を乗り出して廊下の左右を確認し、扉の裏側と壁の隙間もチェックしたけど、やっぱり人の気配は無かった。

不思議に思いながらも、部屋に戻って寝直そうと室内を振り返って 息を飲んだ。

部屋の中央に、卵が浮いていた。

私が肌身離さず温めてきた卵が、ゆらゆらと宙に浮いている。

何、これ？ どうなってるの？

どうしていいのかわからずに卵を見つめていると、卵はまるで空中に貼付けられたようにピタリと静止した。

次の瞬間、卵は急に私に向かって猛スピードで迫ってきた。

「きゃっ」

咄嗟にしゃがみ込んで卵をかわす。こんな時だというのに、自分でも驚くほど可愛い悲鳴が口から漏れたことに妙に感心してしまった。私にも、こんな可愛らしい悲鳴が出せたのね。

いや、そんな場合じゃない。

また温めてあげた恩を忘れて襲ってくるかもしれない、と顔を上げると、卵は廊下に出てゆらゆらと相変わらず宙に浮いていた。

そのままゆらゆらと廊下を進んで行く。

私は呆然とその姿を見送っていたけれど、はたと気づいて慌ててハンガーを投げ捨てて卵の後を追った。

見送ってどうする！ あれを無事に孵かえさないと卒業できないってのに！

何が何でも連れ戻さないと。

死霊魔術学の男 3

ゆっくりと廊下を進んでいた卵は、私が掴まえようとして駆け出すと、急にスピードを上げて廊下を突き進んだ。

誠心誠意尽くしてきたのに、この仕打ち。いい性格してるじゃないか。

やっぱり使い魔は使役者に似るのか？

卵は廊下を突っ切って踊り場に出ると、立ち入り禁止の鎖を無視して階段を上がって行った。この先は、この間のネズミ騒動の時に入った五、六階だ。今は使用されていない階で、立ち入り禁止になっている。

私が躊躇ちゅうちゆうして立ち止まると、卵も階段の途中で止まった。ゆらゆらと誘うように揺れている。

この間入った時はリュカやジャンと一緒に、時刻も夕暮れ時だった。

今は深夜。しかも一人。視線の先には宙に浮く卵。

リュカじゃないけど、これは怖い！ 怖すぎる！

「おいで。ほら、いい子だから帰ってきて」

階段の手前で両手を差し伸べ、卵を優しく呼んでみる。

頼むから素直に戻ってきて欲しい。そっちには行きたくない……。

私の願いも空しく、卵はゆっくりと階段を上って闇の中へと消えて行った。

行くしか無いのか……。

迷っている時間もあまり無い。早く掴まえて温めないと、卵の温度が下がって死んでしまう。

私は覚悟を決めて、立ち入り禁止の鎖を跨またいだ。

卵は六階の踊り場で私を待っていた。

私が踊り場につくと、まるで案内でもするかのようにゆっくりと廊

下を進み、ある部屋の前で立ち止まった。そして、半開きになった扉から室内へと入って行く。

半ば自棄^{やけ}になっていた私は、卵が入って行った部屋の半開きになっていた扉を勢いよく開けた。

開いた窓から吹き込んでくる夜の風が頬を撫でる。

その窓の縁に、一人の生徒が肩まである銀の髪を風になびかせながら腰かけていた。私の卵は彼の腕の中に納まっている。

「はじめまして。リリス・エーデルシュタイン」

銀の髪が生徒がゆっくりと、こちらを向いた。

ヴァンパイア 吸血鬼。

彼を見た瞬間に私の脳裏^{のうり}に浮かんだ言葉はそれだった。

線が細く形の良い顎。明かりを受けて浮かび上がる白い肌。うっすらと赤味を帯びた唇からは、今にも白い牙が覗きそうさ。

何よりも目を引くのは、艶やかな銀の髪と、魅惑的な甘さと底冷えのする冷たさが同居したような淡い紫色の瞳。その瞳に射^い竦^{すく}められて、私は金縛りにあったように動けなくなってしまった。

「俺を捜していたんだろ？ やつと会えたんだから、もつと嬉しそうに顔をしたらどうだ？」

彼は唇の端に笑みを浮かべ、窓の縁から身を起こした。

「ヴァレリー……ロートレック？」

私がやっとのことで掠^{かす}れた声を絞り出した時、背後の扉が大きな音を立てて閉じた。

ビクリと体を強張らせる私に向かって、彼は卵を腕に抱いたまま近づいてきた。

「さて、どうして俺を探っていたのか、ゆっくりと聞かせてもらおうか」

「探ってなんか……」

探ってなんかいない、そう言おうとした言葉を途中で遮るように、

ヴァレリーは私の顔のすぐ横に片手をついた。

「資料室で調べていただろう。その後も死霊魔術学の生徒に俺のことを訊き回ったそうじゃないか」

「それは……」

「それは？」

ヴァレリーは壁についた片手に体重を乗せ、身を乗り出した。淡い紫色の瞳で覗き込まれて、心臓の鼓動が速くなる。

「図書館で竜についての本ばかり借りていたでしょ？ それも難しい専門書ばかり」

私は彼から顔を背けて言った。彼の眼を見ていては、まともに話せそうにない。

「そうだな。君の名前も貸出カードでよく見たよ。それで？」

「だから、もしかしたら竜に会ったことがあるんじゃないかと思っ
て。そうじゃなくても、竜が生息している場所のヒントになるような情報を知ってるかもしれないから」

「なるほど。そっちの方が……」

彼は身を引くと、反対の壁際に設置してあるベッドに腰かけた。

「そっちの方って？」

「俺が竜に会ったことがあると言ったら、どうする？」

私の問いには答えずに、ヴァレリーは長い脚を組むと冷やかな笑みを浮かべた。

「どうするって……」

「拉致して、居場所を吐かせるか？ それとも……この場で始末するの？」

「なに……言うて……」

彼の口から出た物騒ぶっそっな言葉に、私の頭の中は真っ白になってしまった。

この人は、何を言っているんだ？

拉致？ 始末？

私はただ会って話を聞きたかっただけなのに。

もう一度、あの時私を助けてくれた竜に会いたいただけなのに。

「さあ、答えてもらおうか。パートナーは誰だ？」

「……パートナーって、何のこと？」

彼が言っていることの意味がわからずに戸惑っていると、ヴァレリーは腕に抱いていた卵に視線を移した。

「これは何だ？ これにつられてやってくるぐらいだから、余程大切なものなのか？」

「つられて？ じゃあ、彼が卵をここまで連れてきたってこと？」

「返して！ それが無いと進級できないの」

「進級、ね」

ヴァレリーは小馬鹿にしたような笑みを浮かべて私を見ると、卵を窓の方へと放り投げた。

卵は放物線を描いて飛んでいき、開いた窓から闇の中へと姿を消した。

え……？

突然のことで身動きがとれず、窓の外へと消えていった卵を見送っていた私は、慌てて窓へと駆け寄った。

「どうしよう？ こんな高さから落ちたら絶対に割れてしまう！」

窓枠にすがりつくと、身を乗り出して卵の行方を確認したけれど、下には闇が広がっているばかり。卵の姿どころか地面すら見えなかった。

「返して！ ねえ、返してよ！ 生きてたのに！」

私は振り返ると、ヴァレリーに向かって叫んだ。

もう、進級のこととはどうでもよくなっていた。

何が生まれてくるのかもわからなかったけれど、卵が割れてしまったことが悲しかった。もしかしたら、明日にも生まれるかもしれない。そんな私に。そう思うと悔しくて涙が溢れてきた。

そんな私の様子に、ヴァレリーは小さく息をつくと無造作に片手を振った。

「カトリーヌ、卵を返してやれ」

彼の言葉が終わると同時に、誰かに肩を叩かれた。

驚いて振り返った私の目に映ったのは、窓の外に浮く見慣れた白い球体。

私は慌てて腕を伸ばして卵を抱き取ると、ほっとしてその場に座り込んでしまった。

よかった。無事で、本当によかった。

「紹介しよう、リリース。彼女はカトリーヌ・ドウ・ミレー」

ヴァレリーの声に顔を上げると、何も無かったはずの窓の外に白い靄もやのようなものが揺らめいていた。白い靄は、すうつとこちらに流れてきて壁をすり抜け、私までもをすり抜けていった。呆然と白い靄を目で追う。

それは次第にはつきりと輪郭を現していき、すぐに風に揺れる純白のスカートへと姿を変えた。

可憐なレースで彩られたそれは、まるでウェディングドレスのようだ。

興味を引かれ、ゆっくりと視線を上げる。

窓から吹き込む風を受けて涼やかに揺れる純白の裾。きゅっと引き締まったウエスト。大きく開いた胸元からは、形のいい胸の谷間が覗いている。

そして、白く細い首の先には……何も無かった……。

「ひっ」

悲鳴は喉の奥に張り付き、空気を飲む音だけが漏れた。

「彼女は結婚式の当日に事故に遭い、首を失った。式場へ向かう為に乗っていた騎獣キョウシヤの御者が突然死してしまい、制御を失った騎獣から振り落とされたそうだ。落ちた場所は切り立った崖で、かなりの高さがあったらしい」

そんな情報、いらないよお。

私は、なるべくカトリーヌさんが視界に入らないように気をつけながらヴァレリーを見た。

何を勘違いしてるのか知らないが、早く解放して欲しい。

「彼女は今でも失った首を探してこの世を彷徨さまよっている。天国へ行きたくても行けないんだ。まあ、霊の辿り着く先が本当に天国なのかは知らないが、情念に縛られたまま現世にいるよりはマシだろう」
ヴァレリーは腰掛けていたベッドから立ち上がると、こちらへ歩み寄りカトリーヌの白い手をとった。優雅にその手に口づける様は、映画のワンシーンのようだ。

「そこで、彼女のような霊を現世から旅立たせる手伝いをする代わりに、少しの間働いて貰う。これが死霊の使役術だ」

そんなことを説明されても困る。私は死霊魔術学の生徒じゃないし。

「霊の情念を断ち切る為には、毎朝祈りを捧げ、聖書の言葉を朗読ろうどくし、霊の話を聞く。だいたい二週間程度はかかる」

彼はカトリーヌから私へと向き直り、微笑を浮かべて片手を差し出した。思わず私も右手の甲を上にもむけて差し出した。が、彼の手は差し出した私の手を無視して上へと上げられて、私の首へとのばされた。

「だが、もっと手っ取り早い方法がある。それは霊の願いを叶えてやることだ。君の首ならカトリーヌも喜ぶだろう」

よ、喜ばなくていい！ 彼女の代わりに首を探して彷徨うなんて冗談じゃない！

手を振り払って後ずさると、ヴァレリーは冷やかな目で私を睨みつけた。

「いい加減、話してもらおうか。パートナーはどこだ？ 死の商人は必ず二人一組で行動するんだらう？」

「さつきから、何も知らないって言ってるじゃない！ パートナーって何？ 死の商人って何？ こっちが訊きたいよ！」

「しらを切り通すつもりか？ これでも、女だからと思って気を使っていたのに残念だ」

「どこが？ さんざん脅しておいて、よく言うよ。」

私が不満の色を隠しめせずに睨みつけると、ヴァレリーはいかにも面倒だというような口調で言った。

「仕方が無いな。脱いでもらおうか？」

「はあ？」

今、脱げ……って、おっしやいました？

あまりの発言に、私は口を開けたまま呆然とヴァレリーの顔を見上げた。

「死の商人に所属する者は、体のどこかに刻印を入れている。それを探させてもらう」

私は卵を抱きしめたまま後ずさったけれど、すぐに足は後ろの壁にあたって逃げ場が無いことを思い知らされた。

背後から吹き付ける風に乱された髪を片手で抑えながら、ここが一階だったらよかったのに、とぼんやりと考える。一階だったなら、後ろの開いた窓から逃げられたのに。

「カトリーヌ、彼女を脱がせろ」

「ちよつと待って！ 幽霊に脱がされるなんてヤダ！」

こんな場所で単独ストリップショーをやらされるっただけでも嫌なのに、首無しカトリーヌさんに触れられるなんて陰湿な嫌がらせとしか思えない！

彼女が白く細い両手をこちらへ向かってのばしてきたので、慌てて片手を振り回して抵抗しようとした。しかし相手は幽霊。私の手なんかすり抜けてしまう。

私の抵抗など何も意味をなさずに、彼女の手がパジャマがわりに着ていたＴシャツの裾にかかった。腕を掴もうとしても空気のように

触れることができなかつたのに、確かに誰かに裾を摘つままれているよ
うな感覚があるのだ。

「やだ！ 変態！ 離してよ！」

Tシャツの裾にかかった手をたたき落とそうとしたけれど、やっ
ぱり私には触れる事が出来なかつた。

白い指先はしっかりとTシャツの裾を掴むと、上へと引き上げよ
うとする。私は手をたたき落とすのを諦めて、Tシャツの裾を押さ
え込んだ。その手首にも、カトリーヌの手がのびてきた。

「痛っ……………」

女性のものとは思えない程の力で手首を掴み、強引にTシャツか
ら引きはがそうとする。

「きゃっ」

裾を押さえていた私の手が完全に引きはがされ、一気にTシャツ
が捲り上げられた。

このままだと本当に脱がされてしまう！

そう思った次の瞬間、Tシャツの裾にかかっていた力も、手首を
掴んでいた力も急に消てなくなった。捲り上げられたTシャツの裾
はふわりと落ちて、露あらわになった肌と見えそうになっていた下着を隠
してくれた。

「カトリーヌ？」

ヴァレリーの怪訝な声に、彼の視線の先を追って、窓の外に首無
しのウエディング姿を見つけた。彼女は見えない壁でもあるかのよ
うに、窓を両手で叩いている。

「何を……………した？」

「何も……………」

ヴァレリーは大腿にこちらへ歩み寄ると、開け放たれた窓へと手
を差し出した。彼の手も見えない壁に阻まれたようにピタリと空中
で止まった。

「……………結界が張られている」

ヴァレリーが小さく呟いた。

「結界？ なんの為に？」

「お前じゃないのか？」

眉を寄せ訝しむ様に私の目を覗きこんだヴァレリーを見返す。

「呪文も唱えず道具も使わずに結界が張れると思う？」

私の言葉にヴァレリーは溜息をつきながら軽く首を振った。

「一体誰が何の為に……」

彼がもう一度手を上げて結界に触れようとした時、勢い良く入り口の扉が開いた。

「ヴァレリー！ 無事か！？」

同時に室内へと一人の生徒が転がり込んできた。浅黒い肌に背中まであるドレッドヘアが印象的な生徒だ。

彼は室内の様子を見て、刃物の様に研ぎすまされた鋼色の瞳に安堵の色を浮かべた。

「どうした？」

「どうした？ じゃねーよ！ こっちは、お前が殺されるんじゃないかと思って、心臓が止まる程ビびったってのに！」

一瞥して気のない返事を返すと窓へと向き直ったヴァレリーに、ドレッドの生徒が駆け寄った。

「お前が居た隣の部屋の窓にも結界が張られたのか？」

「ああ。だからリリス・エーデルシュタインがお前を閉じ込める為に結界を張ったのかと思って……」

そう言っただレッドの生徒が私の顔を見たので、私は慌てて顔の前で片手を振った。

「なんで私？ 関係ないから！」

この人も私の事を何か勘違いしているらしい。もう、なんか泣きたくなってきた。

「いや、リリスじゃない」

私の気持ちを知ってか知らずか、ヴァレリーはきっぱりと否定すると、ドレッドの生徒に向き直った。

「クロード、隣の部屋から、ここへ来る為に結界を破ったか？」

クロードと呼ばれたドレッドの生徒は首を横に振った。

「入り口には張られてなかった。それに、こいつは強力すぎて俺の手には負えねーよ。普通の結界じゃねえ」

「隣の部屋の窓にも結界が張られてはいるが、どちらも廊下へと続く入り口には結界は張られていない。という事は、この階か土の館全体のどちらかを外界から遮断してあるという事か。面倒な事になったな」

ヴァレリーが窓枠に寄りかかって入り口の扉を睨み据えて言うと、クロードも眉を寄せて頷いた。

結界 1

「普通の結界じゃないと言ったな？ どういうことだ？」

「ああ。魔力で張られたもんじゃねえ。こいつは闇の力で張られたもんだ。誰かが闇に属する者を呼び出したか、呼び出す為の儀式の一部として張ったんだろう」

ヴァレリーの問いにクロードは頷くと、窓の結界に片手をかざした。

「呼び出す為の儀式の一部？」

「そうだ。中級以上の悪魔や魔獣を呼び出す為には生け贄を捧げる。その為の狩り場として結界を張って生け贄を放すのさ。あとは悪魔や魔獣がいたぶりながら美味しくいただくってわけ」

そう言うと、クロードは短い呪文を唱えた。窓の結界にかざしていた彼の手から白い光が溢れ、窓を覆いつくす。でも、白い光は結界の中央の一点に急激に収束していき、吸い込まれてしまった。

光が完全に吸い込まれた次の瞬間、赤黒い光が窓の結界から溢れ出しクロードに向かって襲いかかった。

「……グレ！」

ティグレ？ ピグレ？ どちらだろう？

よくは聞き取れ無かったけど、彼がそう叫んで片手を無造作に払うと、赤黒い光は弾けて四散した。

「何？ 今の……」

私は血のような赤黒い光に、言いよつた無き不安と気味の悪さを感じて身震いした。こんな事は初めてだった。

カトリーヌのような視覚的に恐怖を感じる幽霊でも無いのに、あの光を見ただけでおぞましさに鳥肌が立つなんて。

「これが、闇の力なのか？」

ヴァレリーも私が感じたものと近い感情を持ったのか、酷く乾いた声で訊いた。

「そ、普通の結界は破れなかつたら魔力を跳ね返すよ、なんて嫌なおブションついてねーよ。この質たちの悪さが見分けるポイント。返ってくる力の変質具合で相手がどの程度の奴かもわかる。ただ、返ってきた力をまともには受けんじゃねーぞ。いくら元は自分の力だ、つっても怪我ぐらいはするからな」

「わかった。覚えておく」

この二人って、なんだか先生と生徒みたいだ。でも、なぜか先生よりも生徒の方が態度がでかい気がする。

どういふ関係なんだろ？

気になる。……すごく、気になる。

もう、本人に聞いてしまえ！

「あの、さ。二人って、どういふ関係なの？」

入り口の扉へと向かいかけていた二人は、私の声に顔を見合わせ、足を止めた。

何？ この間は。そんなに変なこと聞いた？

「んー、親友つてとこかな？」

ややしてクロードがヴァレリーの肩に腕を回して振り向くと、

「ただのクラスメートだ」

ヴァレリーはクロードの腕を振り払ってそっけなく言った。

「マジで！？ そーゆー設定なのかよ？ うっわ、傷つくわあーって、痛っ」

大げさに悲しむクロードの足をヴァレリーが無言で踏みつけた。

設定って何？ かえってわからなくなっただけだ。

「ひでえ……。こんなに忠実に尽くしてんのに……」

「そんなことより、さっさと結界の範囲を確かめに行くぞ。リリース、一緒に行きたくないなら、ここで待ってる。鍵だけは忘れずにかけておけ」

ヴァレリーは、踏まれた足を抱え込むクロードの横を通り過ぎ、扉の前まで行くとノブに手をかけて振り返った。

「行きます！ 絶対に一緒に行く！」

ここで一人で待つなんて怖すぎる。それに、仲間と別行動をした人が襲われるのって、ホラー映画の定番だし。

置いて行かれては大変と、私もクロードの横をすり抜けてヴァレリーの元へと急いだ。

「あーっ、待て！ 扉は俺が開ける。危ないだろ！」

今にもノブを回して扉を開けようとしているヴァレリーの姿に、クロードが慌てて叫んだ。

この二人って、やっぱりただのクラスメートには見えない。

うーん、先生と生徒というよりも、ご主人様と使用人？

「静かだね。変わった様子は無いみたいだけど……」
廊下は私が来たときと同じく、別段変わった様子は見られなかった。

三、四階と違い部屋数が少ないため、廊下を挟んだ向かい側には窓が並んでいる。空気中に漂う埃ほこりが窓から差し込む月明かりに照らされて白く浮かび上がり、私たちが一步を踏み出す度に乱れる空気の流れに乗って舞い上がった。

私達はクロードを先頭に、辺りに注意を払いながら階段のある踊り場まで歩いて行った。

「よっ、と」

踊り場へ着くと、クロードがひょいっとなんと階段を一段下りた。拍子抜けするぐらいに簡単に、彼の足は一段下の段へと下りていた。

「下へは行けるようだな」

「じゃあ、学園全体に結界が張られてるってこと？」

クロードに続いて階段を下り始めたヴァレリーに私が問いかけた時だった。

「……あーっ」

悲鳴のような声が階下から微かに流れてきた。

「今の……悲鳴、じゃないよ、ね？」

私は足を止めて震えそうになる声をなんとか押さえて訊いた。でも、答えは解っていた。

間違はなく、悲鳴だ。

解っていても訊かずにはいられなかった。違うと言って欲しかった。

ヴァレリーも同じ様に足を止め、私を見た。彼の瞳にも動揺の色が広がっていたけれど、すぐに目を逸らすと前を歩くクロードを追い越して駆け出した。

「おいっ！ 待て、どこ行くんだよ！」

ヴァレリーはクロードの静止の声も聞かずに階段を駆け下りて行く。

「ちっ！ 世話がやける……」

クロードも小さく舌打ちすると、ヴァレリーを追って駆け出した。「待つて！ 一人にしないでよ！」

悲鳴は怖いけれど、一人で置いて行かれることのほうがもっと怖い。私は卵を落とさないように両手でしっかりと抱きしめて階段を駆け下りた。

階下からは先程の悲鳴の代わりに、重い物が壁か床に断続的にぶつかるような鈍い音が響いていた。その音は階段を下りることに大きくなつていき、四階の踊り場が近くなつた頃には煩いほどに廊下中に響き渡っていた。

踊り場では先に着いていたヴァレリーとクロードが、壁の陰から廊下の様子を窺っていた。

私も足音を忍ばせて二人の傍まで行くと、廊下の様子を覗き見た。長い廊下の奥では一匹の黒い獣が身を低くして、一室に向かつて低い唸り声をあげていた。獣はじりじりと身じろぎすると、後ろ脚で床を蹴り扉に体ごとぶつかった。

ドンっという鈍い音と共に木が軋きしむ嫌な音が響き、部屋の中から消え入りそうな悲鳴が上がった。先程から聞こえていた音の正体はこれだったらしい。

ヴァレリーはクロードに何かを耳打ちすると、廊下へと躍り出た。「おいっ！ こっちだ！」

彼の声と物音に、もう一度体当たりしようとして身を低くしていた黒い獣がその動きを止めた。獣が静止したことで、照明が足下に設置された非常灯のみの薄暗い廊下でも、その容姿を確認することが出来た。

その姿は黒い豹のように見えた。

でも、しなやかで力強い脚の先では研ぎすまされた異様に大きな爪が、非常灯のオレンジ色の光を鈍く反射させていた。黒い頭についた二対の耳は周囲の物音を確かめるかの様にせわしく動いている。

黒い豹は伏せていた身を起こすと、ゆっくりとこちらを振り向いた。

僅かに開かれた口の間から真っ赤な舌が覗き、三つの瞳が赤く煌めいた。

黒い獣は悠然とヴァレリーに向かって歩き出した。獣が一步を踏み出す度に長い爪が床の大理石に当たって、カチャリ、カチャリと嫌な音を立てる。

獣が廊下の突き当りと踊り場の中程の位置まで近づいたのを見て私の隣でクロードが呪文の詠唱えいしやうを始めた。

クロードの声を聞きながら、対峙するヴァレリーと獣の様子を窺っていると、自分でも気付かないうちに卵を抱く腕に力が入った。

極度の緊張から掌が汗でじっとり湿ってくる。

薄暗い廊下には獣の息遣いと、呪文を唱えるクロードの声だけが響いていた。

獣の体が深く沈みこんだように見えた。次の瞬間、獣は宙に身を躍らせていた。獣の体は天井すれすれの高さまで飛び上がり、弧を描く様にしてヴァレリーに向かって落ちてくる。

この瞬間を待っていたのか、クロードが廊下へと飛び出した。ヴ

アレリーが真横に飛びのいて廊下の壁に背をつけるようにして、クロードの為に場所を空ける。

獣は獲物が変わったことに何の動揺も見せずに、クロードに向かって爪を振り下ろした。

クロードが後ろへ跳びのきざまに右手を左下から右上へと振り上げる。

突如現れた白い槍状の光が獣の大きく開いた口に吸い込まれていった。

獲物の体に跳びつくはずだった獣は、冷たい大理石の床に頭から着地した。獣の頭が大理石に打ち付けられて、鈍い音が響いた。

獣はしばらく体を小刻みに痙攣けいれんさせていたけれど、口から後頭部へと貫いた光の槍が徐々に輝きを失い、完全に消え去った時には動かなくなっていた。

今の魔法つて、攻撃魔法みたいだったけど……。

それも、最も高度な技術が必要だと言われている光の属性の魔法のように見えた。

でも、クロードはヴァレリーと同じ死霊魔術学の生徒のはず。

彼が制服に付けている校章の台紙は黒。土の館の生徒である証だ。そして彼が結界に対して唱えた呪文は、神学部や死霊魔術学部の生徒が履修する霊的な力や魔力に対する魔法だった。その魔法だつて、新入生が気軽に使えるような簡単な魔法には見えなかった。

普通の生徒とは思えない。

一体、何者なんだろう？

私は動かなくなった獣を調べている二人の後姿を見つめながら考えていたけれど、答えは見つかりそうになかった。

結界 2

黒い獣が執拗しつように体当たりを繰り返していた扉は酷い有様だった。

古びた真鍮製しんちゆうのドアノブは無残にも弾け飛んで床に転がり、扉の中央は大きくへこみ、衝撃に耐えきれずに折れた個所からは室内の明かりが漏れている。後数回体当たりされていたら、扉は壊されていただろう。

私は控え目に壊れかけた扉をノックした。

「ねえ、大丈夫？」

室内から返事は返って来ない。

どうしたものかと思つて、後ろの二人を振り返つた。

「勝手にお邪魔させてもらうしかねーんじゃね？」

クロードがそう言つて、獣の体当たりでできた隙間から腕を入れて中の鍵をはずし、内側からノブを回した。

「お邪魔しまーす」

返事が無いことは分かつていても言わずにはいられない。私は室内に声をかけつつクロードに続いて中へと足を踏み入れた。

室内の間取りは私の部屋と同じようだった。けれど、雰囲気は全く違う。実用的な物しか無い殺風景な私の部屋と違って、こちらは女の子らしい小物で彩られた可愛らしい部屋だ。

ここがエレザの部屋なら何の不思議もないんだけど……ここつて、アルマの部屋……のはず。

土の館の三人しかいない新入生の女子、悪魔学専攻のアルマ・マリーン・ギブソン。真面目で気の強い優等生タイプで、初対面の時にキツイ一言を頂いた相手だ。

入学初日に土の館へと先生に案内された時に挨拶をしたんだけど、「動物は大嫌いだから貴女とも友達にはなれない。動物の臭いと毛がつくから近寄らないで」って言われたのだ。

まあ、でも今は緊急事態だから勝手に部屋に入っちゃってもいい

よね？ 卵は臭わないし、毛も無いし。

私はアルマの姿を探してピンクと赤とフリルでいっぱいの中を見回した。寮の部屋はどこも狭いワンルームで家具の配置も同じなので、彼女の姿を見つuckerのは簡単だった。

アルマは備え付けのベッドの上で、白地に赤いハート柄の毛布にくるまってガタガタと震えていた。

「アルマ、大丈夫？」

私がベッドの傍に膝をつき声をかけると、彼女はビクツと肩を震わせた。それから、恐る恐る顔を上げ、毛布にくるまったまま私の顔を見た。

「リ、リス？」

いつもキツチリと三つ編みを編んでおさげにしている茶色い髪は下ろされて、緩やかに波を打ち肩にかかっている。眼鏡をかけていないこともあって、アルマの顔はいつもよりも幼く見えた。ヘーゼルの瞳からこぼれ落ちた涙が頬に筋をつけ、唇はまだ恐怖で小刻みに震えている。

「リリース！」

彼女は私に抱きつくと、今まで我慢していたのか声を上げて泣き出してしまった。

「廊下で、廊下で変な音がしたっ、から。ドアを開けてっ、様子を見たの。そうしたら、あの、あの、化け物がっ」

私は、しがみついて泣きながら話す彼女の背中に片手を回すと、その背を撫でた。間に卵を挟んでいるので腕がつりそうだったけれど、そこは我慢するしかない。

「早く行くぞ。まだ他にも化け物がいるはずだ」

苛立たしげな声に顔をあげると、ヴァレリーが腕を組みながら私たちを見下ろしていた。その顔には明らかに、面倒なモノを拾ったというような表情が浮かんでいる。

「なんて冷たい奴！ こいつには人を思いやる気持ちはないのか？
「あーっ」と、一年の女子って他にもいたよなあ？ なんてっただっ

け？ 金髪のすげー美人の子」

私がヴァレリーを睨みつけると、不穏な空気を察したのか、クロードが慌てて私達の間に入った。

「その子の安否も確認しといた方がいいんじゃないの？」

エレザ！

私のはつとして口を開きかけた時、ヴァレリーが音を立てるなど自分の唇の前に人差し指を立てて、私とクロードの顔に視線を走らせた。

でも、聞こえるのはアルマのしゃくりあげる泣き声ばかり。

「リリース、その女を黙らせる！」

ついに苛立ちがピークに達したらしい。ヴァレリーの刺すような声が飛んだ。

私かなだめるまでもなく、アルマはビクツと肩を震わせると必死に声を抑えた。

彼女の声ですすり泣きになると、その声に混ざって階下から扉の開け閉めの音や人の話し声が微かに聞こえてきた。

「こっちの物音に下の連中が起きた。まずいな。化け物が集まりだすと大惨事になるぞ」

「何匹いんのかもわかんねーしなあ。ああ、めんどくせえ」

端正な顔に緊張の色を浮かべるヴァレリーとは対照的に、クロードはいかにも面倒だというように大きく溜息をつく、片手で自分の肩を揉みながら首を鳴らした。

「アルマ、立てる？ エレザの事も心配だし、もう行かないと……」

アルマは震えながらも小さく頷いて立ち上がると、ふらふらした足取りで机まで歩き、眼鏡を手に取った。

「迷惑をおかけしてすみませんでした。もう、大丈夫です。行きましょう」

眼鏡をかけて私達を見回した彼女の顔は血の気が失せて青かったけれど、ヘーゼルの瞳にはいつもの意思の強い光が戻っていた。

さすがはアルマ。入学初日に私にきつい一言を浴びせたり、誰

とも行動を共にせず一人で学園生活をおくっているだけはある。
私は彼女の強さに關心しながら、まだ少し震えているアルマの手をとった。

驚いたように私を見返すアルマ。

「実は、私もちよつと怖いんだ。ね？ 一緒にいい」

彼女にだけ聞こえるようにこつそりと囁くと、アルマはほつとしたように笑みを浮かべた。

エレザは無事だった。

彼女も物音を不審に思つて扉の隙間から廊下の様子を窺い、黒い獣の姿を目にして部屋の中で息を潜めていたらしい。

私が扉をノックして声をかけると、飛び出してきた。

「一年の女子つて、これで全員だったよなあ？」

抱きついてきたエレザの淡い金色の髪を撫でながら頷く。Tシャツの裾はアルマの十六歳にしては小さな手がしっかりと握りしめている。

まさに両手に花だ。

もしかして、私つて男に生まれていたらモテたんじゃないかと錯覚してしまいそうになる。

「じゃ、今は一年しかいねーし、下の様子でも見に行きますかあ」
まるでどこかに散歩にでも出かけるような気楽な声に振り向くと、そこにはもうクロードの姿は無かった。

彼は両手を後ろ頭へとまわし、鼻歌でも歌い出しそうなくらいにのんびりと階段へと向かつて歩いていた。鼻歌のかわりに大きな欠伸を一つしたようだ。頭の後ろにまわしていた両手を頭上へと伸ばして背を反らしたりしている。

私も階段へと向かつて歩いていくクロードに続いて、二人の少女を引き連れながら廊下を歩きはじめた。

そういえば、今は土の館には新入生しかないんだ。

二年生は研修旅行中だし、三年生になると実施研修に入るからほとんど学校にはいない。

どこまでも緩いクロードの声を聞いているとあまり緊迫感を感じないけど、これってヤバいんじゃないの？

入学して三ヶ月ちよつとの新入生だけで、何匹いるかわからない化け物を退治して、結界もなんとかしなくちゃいけないなんて……。

私が頭をもたげてきた恐怖を振り払おうと軽く深呼吸した時、

「心配するな。俺たちで始末はつける」

驚いたことに、あのヴァレリーが横を通り抜けざまに声をかけてくれた。

そのまま、クロードの後について階段へと向かいかけたが、何を思ったのか立ち止まって振り返った。

「リリース、その……」

彼は淡い紫色の瞳に戸惑いの色を浮かべて口籠くちごもると、目を伏せた。

「疑って悪かった」

それだけ言うのと銀の髪を翻ひるがえして背を向け、足早に踊り場を抜け階段を下りて行った。

今……謝った？ 私に？

人を見下すことに慣れた、絶対に謝ったりなんてしない人だと思っていたのに。

振り返った時の躊躇ちゆうちゆうするような瞳、伏せた目に影を落とした長い睫まつげ、背を向ける前に一瞬見せた悲しげな表情。

傍若無人ぼうじやくにんでプライドが高く無愛想な彼が、あんな顔をするなんて意外だった。

ほんの少しの時間だったけれど、なんだかヴァレリーの心の奥を覗き見てしまったような気がして、私はどうしていいかわからずに階段を下りて行く彼の後ろ姿を見つめた。

「うわあーっ」

「なんだ？ なんなんだよ！ これ！」

「ぎゃあっ」

突然騒がしくなった階下の物音に現実へと引き戻される。

あの化け物が出たんだ！

「リリース……」

不安げに見つめるエレザと、私のTシャツの裾を握りしめて身をすくめたアルマ。私は二人を交互に見つめて微笑むと、子供に言い聞かせる様にゆっくりと言った。

「下へ行こう。ここにいるよりもクロードとヴァレリーの傍にいた方が安全だから。大丈夫、あの化け物をやっつけちゃうぐらいにクロードは強いんだから、ね」

どうか、パニックにだけはならないで。

私は素直に頷く二人に笑みを返しながら、祈るような気持ちでそればかりを願っていた。

もし、恐怖に駆られてパニックになってしまったら、私には二人を守る自信が無い。

二人を連れて三階へと下りると、そこは蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。

その混乱の中、ヴァレリーとクロードが生徒を掻き分け獣に向かっていこうとしている。

廊下には黒い獣が駆け回り、生徒が悲鳴を上げて逃げ回っていた。突然現れた化け物の姿に平常心を失った者が多いようだ。

逃げようにも自分の部屋がわからなくなのか右往左往する者や、廊下の隅にうずくまってしまった者、追いかけて回されて逃げるだけで精一杯になり廊下を何往復もしている者もいた。

でも、何故かこちらの方には一人も逃げてこようとはしなかった。なんで？ 階段を使って他の階に逃げる人がいてもよさそうなのに……。

それに、階段は廊下の中央に設置されている。廊下は踊り場を挟んで左右に延びているのに、なぜか向かって右側の廊下にはばかり人

が集まっているのだ。

左側の廊下には生徒の姿は無く、どの部屋の扉もぴったりと閉ざされていた。

結界 3

「伏せる！」

突然投げかけられた言葉に驚くよりも先に、体が動いていた。

片手でアルマの頭を抱え、もう一方の手は卵でふさがっているの
で、エレザに体ごとぶつかって彼女を突き飛ばしながら床に倒れ込
んだ。

もちろん、卵は私の体をクッションにして死守。おかげで床に打
ち付けた右肩と肘が痛い。

これも三ヶ月の授業の成果か？

魔法使いになる為に入学したのに、卒業する頃には立派な格闘家
になっていそうだ。

私たちがさつきまで立っていた場所をかすめて、茶色い物体が飛
んで行くのが見えた。

それはかなりのスピードで誰もいない左側の廊下に飛んでいき、
廊下の中程で急反転して静止した。

茶色い物体に見えたものは鳥だった。それも猛禽類もっぎんるいのようだ。

でも、やっぱり普通の猛禽類ではなく、大きな嘴くちばしのついた頭が二
つもついていて、血のように赤黒い瞳を光らせていた。

鳥は大きな翼を力強く羽ばたかせて勢いをつけると、それを水平
に広げて矢のような速さで突っ込んできた。

伏せるって言うから伏せたのに！

この状態では逃げようにも立ち上がれない。

鳥は悲鳴を上げる間も無い程のスピードで迫ってくる。見る間に
二つの嘴が大きくなり、焦げ茶色一色に見えていた姿も体の模様が
はつきりと視認できるようになって……。

避けられない！

私が卵とアルマを抱きしめて目を瞑りつむ身を固くした時、左肩に強
い衝撃を受けた。その衝撃は全く予期していなかった後方からのも

のだった。

「んぐっ」

もちろん背後は隙だらけ。私は反動で思い切り大理石の床に頭をぶつける羽目になった。

「キイエエーエー！」

この世のものとは思えない凄まじい絶叫が響く。驚いて顔を上げると、白い獣が床に降り立つところだった。

ふわふわの白い尾が重力に従って、ふわりと落ちる。

白い獣は首を振って口に啞えているらしい茶色い物体を壁に打ち付けた。

「ギイイーッ」

また耳を塞ぎたくなるような絶叫が上がり羽毛が飛び散った。

茶色い物体はさっきの双頭の鳥のようだ。大きな翼をバタバタとせわしなく動かしてもがいている。

白い獣が首を振って鳥を壁や床に打ち付ける度に気味の悪い絶叫が上がって、宙に羽が舞った。

「大丈夫か？」

ふいに、後ろから腕に手がかかって体が引き起こされた。

「リユカ……」

「うわっ！」

振り向いた拍子にバランスを崩して転びそうになったところを支えられて、初めて自分が正常の精神状態では無かった事に気がついた。

体に感覚がまるで無かったのだ。

立ち上がる事はできても、足が地面を踏みしめている気がしない。スポンジの上に立っているかのように心もとなく、今にも床の中へと沈み込んでしまいそうに思えた。

「ここはマズイ。ローと化け物がいる方まで歩けるか？」

「私はもう大丈夫。エレザをお願い」

「わかった」

リュカは私を支えていた腕を離すと、床に倒れたまま茫然とローと双頭の鳥の激しい死闘を見つめているエレザの元へと向かった。私も油断するとその場に崩れ落ちてしまいそうになる体を奮い立たせて、耳を塞いで座り込んでいるアルマの腕に手をかけた。

私はアルマを支えながらローの隣へと歩いて行った。ローの口には依然として双頭の鳥が啣くはえられていたけれど、その体はぐったりと動かなくなっていた。足下には茶色い羽と白い羽毛が散乱している。

「ここはマズイって、どういうこと？」

私はエレザを抱えながら一つの扉をノックしようとしているリュカに訊いた。

「あつちにいる化け物とローが啣くはえてる鳥、こいつらが下の階から出てきたからだよ」

彼は手を止めて私を振り返ると、顎で踊り場の方を指し示した。

「ほら、あつちの隅。茶色い物体が見えんだろ？ あれはジャンのシロが仕留めた鳥だ。最初にあいつが現れて、次に黒い豹が出てきたんだ。踊り場の傍に居た奴が腕を噛まれて、何人かで部屋に運び込んで手当してる」

リュカが指し示した先には、確かに茶色い物体が蹲すまっていた。

そうか、だから誰も階段の傍には近付こうとしなかったのか……。リュカは扉へと向き直ると無遠慮に叩き始めた。

「おい！ ミケーレ！ 開けるっ」

「リュカか？ 化け物は片付いた？」

扉が僅かに開き、室内から漏れた明かりが廊下と壁に一本の光の筋をつけた。

「片付いた？ じゃねーよ。一人でさっさと逃げやがって。だいたいい、ここはグルドの部屋じゃねーか」

リュカは扉のノブを掴むと、乱暴に引いた。勢い良く扉が開けられて、室内側のノブを掴んだままの金髪の生徒が転がり出てくる。

「いやあー、俺の部屋つて、黒い化けもんのいる方だろ？ あつちに行くよりもグルドんどこにいた方が安全だしねえ」

ミケーレは満面の笑みをリュカに向けたが、彼の隣で青い顔をして立っているエレザに気づいて目を丸くした。

「うっわ。女子寮の方にも出たの？ 化け物」

エレザが小さく頷いた時、ミケーレの後ろからグルドの怯えた声が聞こえた。

「ねえ、ミケーレ。どうしたの？ また、何かあった？」

「ああー、エレザとリリスが逃げて来ただけ」

「二人とも無事だったんだね。よかった！」

ミケーレの返事を聞いて、グルドが室内から駆け寄ってきた。

彼の両手にはしっかりと金魚鉢が抱えられていたが、この三ヶ月で絶妙のバランス感覚を習得したのか、中の水は一滴も溢こぼれていなかった。それどころか、水面がほとんど揺れていない。

「あ、まだ黒いのウロウロしてるけど」

「ええ！？」

室外へと出ようとしていたグルドは、ミケーレの言葉に怯えてたらを踏んで立ち止まった。

それでも金魚鉢の水面は僅かに揺れただけだった。体に水平器でも入っているのか？

「……お前らなあ」

そんな二人のやりとりにリュカが呆れて溜息をつくとき、気を取り直そうとするかのように軽く頭を振ってミケーレに向き直った。

「エレザと眼鏡の子も一緒にかくまってやってくれないか？」

「そりゃ、いいけどさあ。眼鏡の子って？ どこ？」

眼鏡の子を探して視線を彷徨さまよわせたミケーレと目が合う。

「この子。悪魔学専攻のアルマ・マーリン・ギブソン。アルマ、彼は……」

私はミケーレにアルマを紹介し、彼女にもミケーレとグルドを紹介しようと思つて口を開いた。そうして、私の腕にしがみついている

るアルマを見たんだけど、彼女の様子に言いかけた言葉を飲み込んだ。

「アルマ？」

アルマは私の腕にしがみついたまま顔を背後へと向けて、食い入る様に何かを見つめているようだった。

「豹に……鷹^{たか}……」

「どうしたの？ アルマ？」

アルマはやつと声をかけられていたことに気づいたのか、急に私の顔を振り仰いで私の両腕に両手をかけて握りしめた。

「フラウロスよ！ 誰かがフラウロスを呼び出そうとしているの！」

「ふらろろす？」

「ふらふら？」

「ふららんす？」

聞き慣れない言葉に顔を見合わせた私とリュカ、ミケーレに、

「……ふらろろすって、聞こえたけど……」

グルドが遠慮がちに言った。

「そう！ フラウロスよ。三十六の軍団を率いる地獄の大公爵。召還者に過去、現在、未来全ての真実を教えると言われている悪魔なの。豹と大鷹は彼の使い魔よ」

グルドの声にアルマが金に近い薄茶色の瞳を大きく見開いて彼の顔を見上げて頷いた。

そうして、その瞳に不安の色を浮かべて今度は私たちに視線を巡らせた。

「ああ、どうしよう……。フラウロスが呼び出されたら、私たち皆殺しにされるわ！」

「皆殺しい！？」

「うわあーっ。やったあ！」

私たちが驚いて同時に叫んだ時、踊り場を挟んで向かい側の廊下から大歓声が上がった。

ぎょっとして、皆で踊り場の向こう側を振り返った。まるで、プ

レーリードッグのように息もぴったり合っていたんだと思う。たま
たま目が合った生徒が吹き出した。

踊り場を挟んで向かい側の廊下では、たった今まで恐怖に怯え逃げ惑っていた生徒達が狂喜乱舞していた。手を叩き合い、歓声を上げ、飛び上がる者もいる。何事かと閉め切っていた扉を薄く開け様子を見る生徒も続出した。

ここからでは、生徒達や次々と開けられる扉の影になって何があったのかよく見えない。

向こう側へ行ってみようということになり、私たちは怯えて部屋から出ようとしないグルドにエレザを任せると、踊り場を横切り、生徒を掻き分けて騒ぎの中心へと向かった。

そこには死霊魔術学の二人組とジャンとシロの姿があった。彼らの足下には例の黒い豹が横たわっている。

「おお、ジャン。またシロが仕留めたのか？」

黒い豹を見下ろすジャンの姿を見つけ、リュカが声をかけた。

「いや、俺じゃない。俺は手伝っただけだ。仕留めたのは彼だよ」

ジャンは顔を上げてリュカに微笑を向けると、隣で周りの生徒たちに愛想を振りまいているクロードへと視線を投げかけた。

この人って……本当に緊迫感が無いんだから。こんな事してる場合じゃないだろう。

「クロード！ 獣の正体がわかったの！」

私はクロードの様子を見て思わず声を荒げて言った。

「おお、マジで？」

「本当か？」

笑顔で手を振り投げキスマまでしてみせていたクロードと、しゃがみ込んで獣を観察していたヴァレリーが振り向いた。

アルマの話では、突然現れた獣たちはフラウロスと呼ばれる悪魔の使い魔で、彼らが生け贄の肉を喰い、悪魔が生け贄の魂を喰うのだそうだ。

またいつ獣が襲ってくるかわからないということになって、私たちは手分けして廊下で浮かれている生徒たちを自室へと避難させた。そうして一息つくくと、今度は三階の部屋全室を訪ねて生徒の安否を確認してまわった。私とリュカ、ジャンで動物学の生徒の部屋を訪ね、ヴァレリーとクロードとで死霊魔術学の生徒の部屋を訪ねる。問題は悪魔学と幻術学の部屋だった。

アルマもエレザも私と同じで三階には足を踏み入れた事が無いのだ。どの部屋に誰が入居しているかなんて分かるはずも無い。

そこで、二人に生徒のリストを作ってもらい、片っ端から部屋を訪ねて歩いた。

「幻術学のフレデリックさん、OKっと……」

「はあ、終わったあ〜」

私がリストの最後の一人を赤丸で囲むと、リュカが大きく伸びをした。足下ではローが双頭の鷹を啜えてリュカを見上げている。

「……いや、それは、喰わない方がいいと思う……」

ローと目が合ったリュカが微妙な表情を浮かべて首を横に振った。私には分からないけど、リュカとローは言葉を使わずに意思の疎通をできるまでになっただらしい。俗に念話とかテレパシーとか呼ばれる能力だ。

使い魔の能力は使役者の能力に大きく影響される。同じ狼を呼び出したとしても、使役者が有能な魔法使いなら狼が言葉を話したり、魔法を使ったりすることまでできる。

でも、それも信頼関係が無ければ意味をなさない。

リュカとローはこれまでの間に少しずつ信頼関係を築いてきたん

だろう。それは、ジャンやミケーレやグルドだって同じだ。

私は自分の腕の中の卵に視線を落とした。

一体いつになったら、孵かえるんだろ？

なんだか自分だけが、みんなから取り残されていく。

「痛っ」

ポンつと後ろ頭を叩かれて、リュカを軽く睨む。

「何すんのさっ」

「なーに、辛気くさい顔してんだよ？ ぼけっとしてる場合じゃねーだろ」

ポフポフと頭を叩かれる。

私の頭はバスケットボールじゃないっての！

「そんなに叩かないで！ ただでさえ悪い頭がもつと悪くなったら責任取ってもらうからね！」

私がリュカの頭をバシツと叩き返した時、反対側の廊下からクロードの声が上がった。

「そこ、盛り上がってるのはいいけどさあ、ちょっとマズいことになってるだけどー」

マズいこと？

私はリュカと顔を見合わせると、ヴァレリーとクロード、ジャンの元へと急いだ。

「悪魔学の生徒の部屋を全て訪ねたんだが、一人足りないんだ。なには思うが、そっちの方に悪魔学の生徒が一人いなかったか？」

ヴァレリーが、手にしていたリストから顔を上げた。

これは部屋を一室ずつ訪ねてみて初めて気がついたことなんだけど、部屋割りや学部ごとである程度固まっていた。私たちが調べていた左側の廊下に面した部屋は幻術学と動物学の生徒の半数が、ヴァレリーたちが調べていた右側の廊下に面した部屋には悪魔学と死霊魔術学、そして動物学の半数の生徒が入居していた。

もつと早く気づいていてもいいことだけど、なにせ女子は一年生は三人だけ、二年生もたったの七人なので部屋もバラバラだったの

だ。その感覚でいたから、私だけしばらく気づかずに部屋を探していた。

「こつちには、いなかったけど……」

私がリストを確認しながら答えると、

「ああ、鍵かかった部屋以外は全部探したし。そんで、リストの奴らも動物学の奴らも全員いたから、鍵掛かっている部屋は二、三年のもんだろ？ 勝手に入ったりはできねーよなあ」

リュカが腕を組んで眉をよせながら宙を見据えた。

「で、いない生徒って？」

「それが……」

私が訊くと、なぜかジャンが困ったような表情を浮かべて口籠った。

彼はふうつと小さく息をつくくと、眼鏡の奥の瑠璃色の瞳で私の目を見ながら口を開いた。

「ルパート・テイラーだ、リリース」

「ルパートって、お前のストーカー……」

ぼかんと口を開けながらこちらを見たリュカに、思わず頷きそうになって慌てて首を横に振った。

「ストーカーじゃないから。一応、友達……」

一応ってつけてしまうところが悲しい。

でも、素直に友達とも呼べないしなあ。友達は物陰から後をつけたりはしない。

「知り合い、か？」

「そう！ 知人！」

ヴァレリーの少し驚いたような声に、私は強く頷いた。知人って言葉が一番ピッタリくると思って。

「知り合いならさあ、彼が行きそうな場所とか知らね？ 悪魔学の生徒に部屋を教えて貰ったんだけど、鍵もかかってねーし、中にもいなくってさあ」

あそこがルパートの部屋なんだろう。一室の扉をパタパタと開け

たり閉めたりしながら、クロードが怠そうにこちらを見た。

「さあ？」

ルパートの行きそうな場所なんて、全く想像もつかない。
でも、どこへ行ったんだろう？

こんな夜中に一人で……。

もし、襲われたりしたなら悲鳴の一つや激しい物音が聞こえたはずだ。アルマの時のように……。

それとも、エレザのように化け物の姿を目撃したけど、気づかれずにどこかに隠れたとか？

ルパートも豹と鷹を見て、誰かがフラウロスを呼び出そうとしてるってことに気づいたのかな？

「君の夢を見たんだ。夜の魔女、リリスが僕の前に現れて言ったんだ。近いうちに僕に会いに行き、契りを結ぶと！」

不意に、頭の中に初めて会った時に彼が言った言葉が蘇った。

熱を帯びた瞳。私に向けられてはいるけれど、私を映してはいない茶色い瞳。彼が見ているのは、夢で見て以来三年も探していたと
言う　夜の魔女　。

「まさか……」

嫌な予感がする。

彼は、まるで神のように悪魔を崇拜している。その悪魔が、目の前に現れるかもしれないとなったら……。

「フラウロスに会いに行った……とか？」

「まさか。いくらアイツでも、自ら喰われに行かねーだろ……」
リュカが引きつった笑みを浮かべた。

「そ、そうだよね？」

うん、いくらなんでも……ね。

そこまで頭のネジがおかしい人だったら、十六まで平穩無事に生きてはいないはず。この年まで犯罪に手を染めずに全うに生きてい

たんだから大丈夫。

一抹の不安を感じながらも、自分を納得させるように言い聞かせる。

「居場所に心当たりは無いそうです！ 警部」

そんな私の心配をよそに、どこから出したのか小さな手帳？（メモ帳か？）を取り出し、眉を寄せて報告するクロード。

「誰が警部だ……」

ヴァレリーが、その姿を心底嫌そうに一瞥して溜息をついた。

「彼が悪魔に喰われるよりも先に探すしか無いな。生け贄が捧げられれば契約は結ばれる」

「じゃ、そーゆーことで。召還主をぶん殴りに行くついでに探してやるか。で？ どっから行く？」

冷たくあしらわれるのには耐性があるのか、クロードは一向に気にする素振りを見せなかったが、ヴァレリーが言った次の一言に顔色を変えた。

「お前は、ここで皆を守れ」

「ああ？ 何、笑えねー冗談言ってるんだよ？ 俺はお前の……」

クロードは言いかけた言葉を飲み込んだ。ヴァレリーが彼を射るような眼差しで睨みつけたからだ。

「いや、その、まあ……な。ともかく、一人で行かせるなんてマネは出来ねーぞ」

彼はしどろもどろになりながらも、これだけは絶対に譲れないと語尾を強めた。

「だったら……」

ヴァレリーはクロードから視線を外すと品定めをするように私たちを見回して、リュカに目を止めた。正確にはリュカの隣に寄り添うローに、だ。

「彼に手伝ってもらおう」

ゆっくりと視線を上げ、艶やかな笑みをリュカへと向ける。

彼の有無を言わせぬ凄みのある笑みに抵抗できる者はいないらし

く、

「おれ？ ま、いいけど……」

急に指名されたリユカは戸惑いながらも承諾した。

「よくねーよ！ 一人じゃなきゃいいってわけじゃねえ。お前は自分の立場をわかってんのか？」

が、クロードは納得出来ないようで、ヴァレリーの制服の胸ぐらを乱暴に掴むと怒声を上げた。

「よく分かってるさ」

ヴァレリーは平然とクロードを見返し、冷笑する。

その笑みはクロードにはなくて、ヴァレリー自身に向けられているように見えた。自分自身を蔑むなげような微笑。

何故かはわからないけど、この人は自分の事が嫌で仕方がないんだと思った。

「だから、これは命令だ。お前はここで皆を守れ。俺は赤毛の彼と一緒に召還者を止めに行く」

「……っ！ そんな命令守れるかよ。俺の仕事は……」

「もし、悪魔が呼び出されたら、ここで大勢の生徒を守ることが出来るのはお前だけだ、クロード。人の命は平等だ。そうだろう？」

それは、お前が一番よくわかってているはずだ。俺一人の命と百人程の生徒の命。どちらが重いかは明白だ」

なおも食い下がろうとするクロードにヴァレリーは自分の胸ぐらを掴んでいる彼の手を引き剥がすと、反論する余地を与えない厳しい口調で言い切った。

クロードが言葉を失って、鋼色の瞳に怒りの色を滲ませてヴァレリーを見据える。

「くっそ……。わかったよ！ ここで警備員やってりゃいいんだろ！」

しばらくお互いに睨みあっていたけれど、やがてクロードが吐き捨てるように言っつて顔を背けた。

「そう、拗すねるな。すぐに戻る」

そんな彼の背中にヴァレリーが苦笑しながら声をかける。

そうして、淡い紫色の瞳に真剣な色を浮かべてリュカへと向き直った。

「安全の保証はできないが、本当に手伝ってくれるか？ 断っても構わない」

「あ、ああ。誰かがやんなきゃいけねーことだし、一人で行かせるわけにも行かぬーしな。一緒に行くよ」

先程の二人のやりとりに気圧されたのか、リュカが困惑した表情で頷いた。

「なんだか痴話げんかも一段落したようだ。言うなら今しか無い。

「あのお〜」

恐る恐る声を上げた私にヴァレリーとリュカが振り返った。

私は意を決して、ずーつと言いたくても言えなかった言葉を口に
する。

「私も一緒に行っても、いい？」

「えっ？」

ヴァレリーとリュカだけではなく、今まで黙って成り行きを見守っていたジャンや、拗ねてそっぽを向いていたクロードまでもが私を凝視した。

皆が呆気にとられたような表情で私を見ている。

こうなることは予想してたからいいけどね。

どうせ私はリュカやジャンのように頼りになる使い魔なんて従えてないですよー、だ。

私は少し拗ねた気分で皆の顔を見返した。

「卵は誰かに預けるし、足手まといにならないように気をつけるから、ね？」

愛想笑いを浮かべてお願いをしてみる。

こういうのは苦手だから、どうも上手くいかない。顔は引きつるし、不自然に明るい声が廊下に響いてしまった。

「安全の保証はできない、と言ったはずだが？」

「わかつてんのか？ 肝試しに行くんじゃないぞ？」

「おいおい、大丈夫かよ？」

「リリス、何が目的だ？」

ヴァレリーに迷惑がられ、リュカに子供扱いされ、クロードに呆れられ、ジャンには不審がられる始末。

「とにかく！ 一緒に行きたいの。っていつか、行くから！」

私は彼らのあまりに酷い反応に負けじと声を張り上げた。

「駄目だ！」

かんはつ 間髪を入れずにヴァレリーに却下される。

拒否されるのは想定内だ。こっちにはクロードと違って、奥の手がある。

私は一呼吸置くと、ヴァレリーの瞳をじつと見据えて口を開いた。

「死の商人って何？ この騒動も彼らが原因なの？ ずいぶん、警戒していたようだけど、もしかして狙われ……んぐっ！」

皆まで言い終わらないうちに後ろからクロードに羽交い締めにされて口を塞がれた。

「どういうことだ？」

「死の商人が今の騒動に関わっているというのか？」

さつと顔色を変えてクロードに詰め寄るリュカとジャン。

死の商人は思っていたよりも有名な組織だったようだ。総人口三十人、酪農業で細々と食べていくような過疎の村に住んでたから全く知らなかったけど……。

「い、いやあ。ここに来る前に、死の商人の話題になって、な？」

色々説明してやったから、頭から離れねーんだろ？ な？」

クロードは、かなり苦しい言い訳を必死で展開しながら、すが 縋り付きそうな目で腕の中の私に同意を求めた。

私は羽交い締めにされ口を塞がれたまま、うんうんと頷いてあげる。

「これから手を離すけど、余計なこと言うんじゃないぞ？」

耳元で囁かれて、小さく頷く。
覆われていた口元から手が離され、私をきつく抱いていた腕の力が緩む。

クロードの腕から解放された私は、気色けしきばんだリユカとジャンに詰め寄られている彼を尻目にヴァレリーに微笑した。

「一緒に行つても、いい？」

先程、即座に拒否された質問を繰り返す。

「……好きにしろ」

こちらの様子を憚然たげんとした表情で見ていたヴァレリーから、怒りを押し殺した低い声が返つて来る。さらに、今にも噛み付きそうな表情で睨みつけられて、あまりの恐ろしさに私の笑みは一瞬にして凍りついた。

初対面の印象は吸血鬼だったけれど、今の彼を何かに例えるならば狼男だ……。満月の夜に変身する直前って感じ。

その狼男は銀の髪を翻して私に背を向けた。そのまま廊下を大股に歩いて行くと、黒い豹が倒れている場所で足を止める。

彼の背中に遮かざられてよくは見えないが、黒い豹に片手をかざして何やら呪文を唱えているようだ。

なんだろう？

とても気にはなるけど、さすがにあれだけ怒らせた後となつては傍には行きづらい。

でも、気になつて仕方が無い。

私はどンドン膨れ上がる好奇心とヴァレリーを怒らせたことへの気まずい感情の狭間で悩みつつ、彼の背中を見守っていた。

不意に、奇妙な違和感を感じて目を凝らす。

それは、始めは言葉で言い表すことの出来ないような、もやもやとしたものだった。

何かが違う。何かがおかしい。でも……何が？

「っ……！！」

その違和感の正体に気づいた瞬間、私は声にならない悲鳴を上げ

た。

ヴァレリーの足下に横たわる息絶えたはずの黒い豹の前足が微かに動いたのだ。

ぴくりと小さく痙攣けいれんするかのように前足が僅かに跳ね上がった。

そして……ゆっくりと、頭が持ち上がる。

前足が床を捉とらえて踏みしめ、上体が起き上がった。

ポタリ、ポタリと何かが床へと落ちる。

それが、黒い豹の胸から滴り落ちる血だと気づいた時、私は叫んでいた。

「……ヴァレリー！ 逃げて！」

が、当のヴァレリーは慌てる様子もなく、ゆっくりと私を振り返る。その顔にはうつすらと笑みまで浮かんでいた。

「俺をなんだと思っている？ 死霊魔術士の卵だぞ？」

「えっ？ じゃあ、まさか……」

私と、私の声に驚いて振り返った皆の目の前で、死んだはずの黒い豹が自らが流した血溜りの中から立ち上がった。

足下に設置された非常灯の橙色の光がぼんやりと壁に反射して廊下内を照らし出していた。先程まで私たちがいた三階よりも二階はいくぶん明るかった。廊下の片側にしか教室が設置されていない、二階部分は窓からの月明かりが入るからだ。

それなのに何故か今の方が足がすぐむのは、この広いフロア内にいるのが私たち三人だけだからかもしれない。

三階にいた時だつて、化け物を退治した後に廊下に出ていたのは五人だけだった。それでも、閉ざされた扉の向こうに多くの生徒がいると思うだけで心強かった。

「ルパート？ いる？」

私は洗濯室と書かれたプレートがはめ込まれた扉のノブをそつと回し、恐る恐る扉を引くと中を覗き込んだ。狭い室内には突き当たりに一つきりの窓があり、その窓から洩れる月明かりが部屋の両側にずらりと並んだ乾燥機付き洗濯機の姿を浮かび上がらせていた。

「それにしてもさあ、どの部屋にも鍵がかつてねーよな？ この学校。不用心すぎだよなー」

私の肩越しに洗濯室を覗きながらリュカが小声で言った。

彼の手はしっかりと私のTシャツの裾を握っている。本当に幽霊とかその手のものが苦手らしい。ヴァレリーが操る黒い豹がなるべく視界に入らない様に気を使っているぐらいだ。

「監視がいるからな。鍵をかける必要が無いんだ」

「監視つて？」

私は子供のようにくつついているリュカを連れのまま洗濯室に足を踏み入れて、肩越しにヴァレリーを振り返った。

彼は何故か、その瞳を悪戯いたずらっぽく輝かせるとゆっくりと口を開いた。

「死霊魔術学の生徒が、閉館する前に死霊を呼んで監視を頼んでる

のさ」

「……………」

私のTシャツを掴んでいるリュカの手に力がこもった。

「ああ、でも今は結界が張られているせいで館の外に追い出されているけどな」

「それ、先に言ってくれ……………」

苦笑しながら続けたヴァレリーにリュカが弱々しい抗議の声を上げる。

「ほら、今はその窓に張り付いてこつちを覗いている」

ヴァレリーがそう言って洗濯室の突き当たりの窓を指差した時、微かにコンッと窓から音が鳴った。

「うわああーっ!」

今度こそ絶叫を上げて私を盾にして隠れるリュカ。もう耐えられないとでもいうように、背を折り腹を抱えて笑い出すヴァレリー。

私は小さく溜息をつくとき、縋^{すが}り付くリュカを強引に振り払って窓際まで歩いて行った。

やっぱり……………」

全く、もう!

窓の下には銀色に輝く小さな丸いものが落ちている。私はそれを拾ってヴァレリーへと放り投げながら言った。

「ただの硬貨だよ、リュカ。ヴァレリーがアンタを怖がらせる為に投げた……………」

けれど、途中で言葉を失って口を開けたままヴァレリーとリュカを見た。いや、私が見ていたのは彼らではなく、私と彼らとの間にある空間だ。

歪みが出来ていた。そう、表現するのが一番相応しいんじゃないかと思う。

まるで、陽炎^{かげろう}のようにヴァレリーとリュカの姿がぼやける一点があったのだ。それは向こうの二人にも見えているようで、彼らも一様に怪訝な表情で私の方を凝視していた。

その歪みは徐々に広がりヴァレリーとリュカの姿を覆う程に大きくなる、空間に黒い穴を開けた。黒い穴の奥に三つの赤い小さな光が見える。

綺麗だと思った。

その光は黒いビロードで内張を施された宝石箱の中に転がるルビーのように見えた。でも、それはほんの一瞬のことで、すぐに宝石などでは無いと思い知らされた。その光は急速に近づいてくるにつれて、赤黒く生々しい色を帯び始めたからだ。

私はその光の正体に気づくよりも前に、左に飛び退くと洗濯機に背をつけるようにして身を躲した。鼻先を黒い影が掠め、生臭さを纏った風が私の髪を揺らす。

チャツ、チャツという金属が床に当たる音に似た音を響かせて、窓を背にした黒い影が振り返った。

血のように赤い三つの瞳、不自然についた四つの耳、鈍く光りを反射させる異様に大きな鉤爪。あの黒い豹だ。

私に向き直った獣の体が僅かに沈む。

来る！

でも、この狭い洗濯室に逃げ場は無い。そして、あまりにも獣との距離が近すぎる。

私に残された道は顎を引き首を隠して両腕を頭の上に真横に掲げ、急所を守ることだけだった。

「リリース！」

入り口の方からリュカの悲鳴に近い絶叫が聞こえた。

黒い豹が裂けてしまいそうな程に大きく口を開け、飛びかかってきた。

スローモーションのように近づいてくる獣の真っ赤な舌と鋭い牙。頭上にはサーベルのような鉤爪が振り下ろされようとしているだろう。

腕に噛み付いてきたら、隙のできる腹を力任せに蹴るしか無い。痛いだろうな。噛みちぎられたりしたらどうしよう？

一瞬がとても長く感じる。様々な思考が頭の中に浮かんで消えた。

鋭い痛みが、頭を守る為に掲げていた腕に走った。次に襲ってくるだろう激痛を予想して歯を噛み締めて身を固くする。

でも、痛みは襲ってはこなかった。

かわりに何か重いものが床に叩き付けられる気配がして、咄嗟に固く瞑つていた目をおさおすと開ける。

床の上では二頭の黒い獣が転がり回っていた。

一頭がもう一頭の首に噛み付き頭を振っている。噛み付かれた方は低い唸りを上げながら首に噛み付いた獣を振り落とそうと暴れていた。

鮮血が跳ねて私の頬に飛び散った。私は呆然と二頭の獣の死闘を見据えながら、緩慢な動きで頬へと手をのばして血を拭った。

目の前の異様な光景に目を奪われていると、ふいに誰かの手が腕にかかって引き寄せられた。

「何、ぼーっとしてんだよ！」

「ねえ、今のつて……。今のつて！」

そのまま強引に腕を引かれ、洗濯室の出入り口まで引かれていく。「今の！ 見た？ 空間が歪んで、あの獣が……」

洗濯室から出た所でようやく解放された私は、洗濯室内で転がり回る二頭の獣を指差して、かなり上擦った声でまくし立てた。

あれは何だっただんだろうか？

あの黒い豹が出て来た空間。

夜の闇よりも暗い、闇。

あれが、悪魔の棲む地獄と呼ばれる空間への入り口なんだろうか？
「いいから！ んなことより、腕は大丈夫なのかよ？」

リュカが私の言葉を強引に遮って私の両腕をとった。

「腕……？」

きょとんとした私の腕を注意深く眺め回していたリュカが、ほろりと安堵の溜息を漏らす。

「良かった……。かすり傷だ」

ああ、そういえばヒリヒリした痛みを右腕に感じる。

自分の腕に視線を落とすと、肘から下の部分に真横に等間隔で三本の赤い筋が入っていた。血もうつすらと滲む程度で、流れる程じゃない。

「このぶんなら、跡も残んねーだろ。よかったな」

リュカがそう言って笑みを浮かべた時、洗濯室の奥から断末魔の悲鳴が上がった。

何度聞いても馴れない、背筋に悪寒が走る声だ。

私とリュカがびくりとして洗濯室の奥に顔を向けたのと、二頭の黒い豹が床に崩れ落ちるのが同時だった。

「すげえ……マジで生きてるみてーだった」

リュカが床に倒れて動かなくなった二頭の豹を見ながら感嘆の吹きを漏らした。

「生きてるみたいって？　じゃあ、助けしてくれた方の豹はヴァレリーが？」

私は豹を操っていたヴァレリーの姿を探した。

彼は入り口から入ってすぐの場所にある向かって右側の洗濯機に寄りかかるようにして立っていた。

薄暗くて顔色まではわからなかったけど、洗濯機に体を預け肩で息をしている様は酷く疲れているように見える。

「ヴァレリー？　どうしたの！」

「心配ない。魔力を少し使いすぎただけだ。まだ馴れていないから余計な力がかかってしまって、複雑な動きをさせようとすると魔力を消耗してしまう。それより、間に合っつてよかった」

彼はこちらを振り返ると微笑を浮かべた。

「ありがとう。ごめん、私のせいだ……」

「いや！　俺も驚いてぜんっぜん動けなくて……」

「行こう。ここにいるのは危険だ。襲われた時に身動きがとれない」

ヴァレリーは、ほぼ同時に謝りの言葉を述べようとした私たちを軽く片手を上げて制すると、体を預けていた洗濯機から身を起こした。

そうして、ちらりと洗濯室の奥に倒れている二頭の豹へと視線をやると、もつれあうようにして倒れていた内の一頭がよろめきながら立ちあがった。

そのままゆつくりとこちらへ向かってくる。

「うっ……」

リュカが飛びのくようにして黒い豹に道を譲った。

私たちはその後、大事をとって医務室に寄り腕の傷の手当を済ませ（たいした事ないから大丈夫と言ったんだけど、あの黒い獣がどんな菌や微量の毒を持っているかわからないと二人が主張した）、必要になりそうな医薬品を勝手に拝借（くわいせつ）してから、二階を隈無く歩きまわってルパートと結界を張った主とを探した。

自習室、娯楽室、資材置き場、職員用の休憩室……。

その、どこにもルパートの姿もフラウロスを呼ぶ為に描かれているだろう魔法陣もなかった。

その間、襲われること二回。双頭の鷹二羽、黒い豹一頭を相手にして、私たちがだいぶ化け物との戦いにも馴れて来た頃には東の空がうっすらと白み始めてきていた。

「よし！ 最後の大物で二階は終わりか」

リュカが両開きの重厚な大扉の前で気合を入れた。

最後の大物　食堂と調理室が一緒になった部屋　の前だ。寮生全員を一度に收容できるだけの広さがある食堂は、ゆうに実習室二部屋分以上の広さがある。それに、調理室まで併設されている。

誰が言った訳でもないのに、自然と後回しにされていた。

リュカが人が一人入れるぐらいに扉を開き、中の様子を窺う。

「ルパート、いる？」

私は彼の肩越しに中を覗き込み、何度繰り返したかわからない問

いを室内へと呼びかけた。

返ってくるのは静寂ばかり。

「仕方無い。中に入るか」

私たちの後ろでヴァレリーが観念したような声で、中へ入るよう
に促した。

狂宴 2

いつもは生徒で溢れ返り騒々しいほどに賑やかな食堂。でも、今はひっそりと静まり返っていた。

広い室内に響くのは私達の足音と、ローとヴァレリーの操る黒い豹がたてるチャツ、チャツという爪が床に当たる音だけ。普段が賑やかな場所だけに余計に静けさが強調されて、切なさや寂しさが混ざり合ったようななんとも言えない気分になってくる。

食堂内は、東の空から上り始めた太陽のおかげで、辺りが見渡せるぐらいには明るくなっていた。

「ルパート？ いねーのかよ？」

外が明るくなってきたことに勇気づけられたのか、リュカが珍しく先頭に立って、整然と並べられたテーブルの間をローを連れて歩いて行く。

私はリュカの後について歩きながら、テーブルの下をチェックしてみた。やっぱりというか当然というか人影は無い。

「猫の子を探しているわけじゃないだろう」

呆れた声が後ろから聞こえて振り返ると、ヴァレリーが疲れきった表情を浮かべて私を見ていた。

「そうだけど、もしかしたら……わっ！」

ドンつと何かに肩をぶつけて立ち止まる。

「しっ！ 何かいる」

私が肩をぶつけた物体、もとい急に立ち止まったリュカが肩越しに私たちを振り返り注意をうながした。

耳を澄まさなければ気づかないような低い唸りに気づいてリュカの足下をみやると、彼の左足に寄り添うようにして歩いていたローが上体を僅かに低くして牙を剥き出し前方を睨んでいた。

ローが睨み据えている先、そこには食堂と調理室を隔てているカウンタ―があった。食事時ともなれば調理室で調理された料理の大

皿がカウンターに並べられ、それをバイトの人たちが壁ぎわに設置される長テーブルの上へと運ぶのだ。このカウンターは料理の皿を置く一時置き場として使用されていた。

そのカウンター越しから覗く場所には怪しい影などは無いように見えた。

でも、微かに音が聞こえる。

ローの低い唸りと同じぐらいに微かな音。

一定のリズムを刻む様に流れる、これは……人の声？

「ここで待ってる。ちよつと見てくる」

リュカがそう言つてローと一緒にカウンターを廻つたところで、足を止めた。

「なんだよ？ これ……」

見る間に表情を失つた彼が抑揚よくようの無い声で呟いた。

「リュカ？」

そんな彼の様子に言いよつた無い不安を覚えた私は、後ろにいるヴァレリーを振り仰いだ。

彼は私と目が合うと小さく頷き、リュカとおなじようにカウンターを廻つて調理室へと入つて行こうとする。

私もその後へと続いた。

そして、目にしたのだ。リュカに表情を失わせた光景を。

調理室の奥、食堂からは死角になる場所に一人の生徒がこちらに背を向けて立っていた。

濃いグレーのブレザー。同色のグレーに赤と黒のラインが入ったチェックのパンツ。まぎれも無くクレスメント学園の制服を着た男子生徒だ。

その足下には彼を囲む様にして白い二重円が描かれていた。

外側の円と内側の円との間には、今は使われていない古代語で文字が記され、円の中には複雑な模様が描かれている。円の中に左右対称に描かれた図は、広げられた毛皮を表しているようにも見える。

円の外側には四本のろうそくが立てられ、黒猫の頭、コウモリの死骸、ヤギの角、人間の頭蓋骨といった思わず目を背けたくなる物が並べられていた。

悪魔学に詳しくない私にだって、これが何を意味するのかわすぐに分かる。

円の中心に立つ生徒が悪魔を呼び出そうとしているんだ。

そして、後ろ姿しか見えないけれど、クセの無い茶色い髪には見覚えがあった。

私は胸が締め付けられるような息苦しさを感じて、小さく息をついた。

考えなかったわけじゃ無い。

でも、信じたく無かった。

彼は確かに普通の人とは違う。かなり変わっているし、危ない趣味も持っている。

けれど、一線を超えるようなマネはしないと思っていた。

狂気と正気の境界線のギリギリのラインで踏みとどまっている。

それが、私が彼に持っていた印象だ。

「ルパート……」

私は、はりついた喉の奥から声を絞り出す様にして彼の名前を口にした。

ルパートは私の声に振り向く気配すら見せなかった。それどころか、私たちの気配に全く気づいていないようだった。微動だにせず呪文を唱え続けている。

低く一定のリズムを刻む言葉が彼の口から流れ続ける。

「ルパート！」

私はもう一度彼の名前を呼んだ。

今度は、はっきりと。

それでも彼は身動きひとつしなかった。

そんな彼の後ろ姿を見ると、上手く言葉には出来ないけれど、どうしようもなく悔しくて涙が溢れてきた。

「なんで？　なんで、こんなこと……」

「おいっ！　アルマから聞いたことを忘れたのか！」

思わずルパートに駆け寄りうとした私の腕を、ヴァレリーが強く掴んだ。

「アルマから……？」

私の脳裏にアルマの青ざめた顔と、震える唇から紡ぎ出された言葉が蘇る。

「悪魔を呼ぶ為の結界には二重の円が描かれています。内側の円は術者の身を守る為のもの。そして、外側の円は悪魔をこの世へと繋ぎ止める為のもの」

二重の円。

私はルパートの立っている場所を中心にして描かれた魔法陣へと視線を落とした。

「これだけは、絶対に気をつけて下さい。円の中には何があっても足を踏み入れないで。円の内側は悪魔の領域。この世と魔界を繋ぐ空間です。その為に自らの身を守るため術者は内側にもう一つの円を描くのです」

「円の内側は悪魔の領域」

私はヴァレリーを見上げ、アルマから聞いた言葉をそのまま口にしました。その声は自分でも驚くほど抑揚が無く、強張っていた。

ヴァレリーが私の声に頷いた時、ローが鋭く吠えた。

私たちがはつとしてローとリュカに視線を投げると、リュカが苦々しい顔でこちらを振り返った。

「また、あの歪みだ。来るぞ」

彼が見ていた先。カウンターを挟んだ向こう側に、洗濯室で目にしたのと同じ歪みが出来ていた。

それも、二つ。

一つは私の腰ぐらゐの高さに、もう一つは天井に近い場所に、そこだけに水を張ったかのように景色が歪んでいる箇所がある。

「豹と鷹と両方か。リュカ、どっちがいい？」

「鷹の方がいいってさ。ローがそう言ってる」

どちらを担当するか二人が相談している間にも、歪みはどんどん大きくなっていく。すぐに人が一人くぐり抜けられそうな程の大きさになり、空間にぽっかりと黒い穴を開けた。

「こっちは俺とリュカでなんとかする。リリースは魔法陣と奴を頼む」
「まかせとけて。すぐに片付けて手伝ってやるから」

ヴァレリーが肩越しに私を一瞥して黒い穴の方へと向き直り、リュカが前方を見据えたまま片手を上げてひらひらと振ってみせた。
「わかった。二人とも気をつけて」

私が彼らに返事を返したのと同時に、黒い穴から三つ目の黒豹と双頭の鷹が飛び出し、二人へと一気に襲いかかった。

ヴァレリーが操る黒豹が新たに現れた黒豹に飛びかかり、ローとリュカが双頭の鷹の注意を引く。

二人の事は心配だったけれど、ここで私が見守っていてもどうしようもない。

今の私に出来る事は、魔法陣を消してフラウロスの召還を止めること。

悪魔の召還を止めるには外側の円の一部を消して下さい。ほんの少しの亀裂でもいいんです。円が破れれば悪魔をこの世に繋ぎ止めておくことはできなくなります

アルマは確かそう言っていた。

それから、その時に内側の円は決して消さないようにとも。内側の円に亀裂が生じれば、術者の魂は悪魔に奪われてしまうから。

私は石灰で描かれた円を消す為にブラシのような物が無いかと思つて、流し台の方へと顔を向けた。寮生の食事を一手に引き受けている場所だけあって、実家の流し台なんか比較にならない程に長い銀色に鈍く光る台が目映る。

それと同時に目にした物を見て、私は息を飲んだ。

ステンレス製の台の下、同じステンレス製の引き戸がついた棚の
辺りの空間が揺らめいたのだ。
三匹目が、現れる……。

狂宴 3

私は咄嗟とつとに二人を呼ぼうとして口を開きかけた。

もう一匹いると助けを求めたなら、きっと二人のどちらかはすぐに駆けつけてくれるだろう。

でも……。

もし、そのせいで隙ができてしまったら？

なによりも、二人はここに来るまでに疲れ切っている。これ以上、彼らにばかり頼って負担をかけたくなかった。

開きかけた唇をきつく結ぶと、流し台を見据えた。

よく磨き上げられたステンレス製の流し台、その下の引き戸がついた棚の辺りに、そこだけが水中にあるかのように湾曲して見える箇所がある。

大きさはテニスボールよりも一回り小さいぐらい。

黒豹が出てくるまでには、まだ時間がある。

あれが大きくなって黒豹が出てくる前に結界を消してしまえば、

今いる黒豹と双頭の鷹もいなくなるんじゃないか？

私は流し台に駆け寄って隅に置かれていたタワシとアルミ製のタライを手に取り、水道の蛇口を勢いよくひねった。一気に流れ出た水が、タライの底に当たって弾ける。

すぐに水はタライの底を隠すぐらいに溜まった。私はもう一度蛇口をひねって水を止めると、水の入ったタライを抱え、タワシを手にもルパートの元へと駆け戻った。

ルパートは相変わらず魔法陣の中心に立ち、低く囁くような声で一心に呪文を唱えていた。

私が床にタライの水をぶちまけても、その足に冷たい水飛沫みずしぶきがかかって微動だにしない。その様子はまるで何かに取り付かれてでもいるみたいだ。

私は水に濡れた青いタイルと、その上に描かれた白い円へと向き直った。床に膝をつくと、パジャマがわりに着ていたジャージ素材のパンツに冷たい水が染みてきた。水を吸った布が体に張りつく、じっとりとした嫌な感触に身震いする。

片手を濡れた床につくと、もう一方の手に持ったタワシで床に描かれた白い線をこすった。

石灰で描かれた線は思っていた以上に消えにくかった。

鮮やかな青いタイルに、うっすらと白い線の跡が残る。タイルの表面についた細かな傷に石灰が入り込んでいるのか、その残った跡がなかなか消えてくれない。

ちよつとでいいのに。ほんの数ミリでいい。白い円に切れ目が入るだけでいいのだ。

早く消さないと、黒い豹が出てきてしまう！

私は顔を上げ、流し台の方を振り仰いだ。

宙に浮いた歪んだ円。

それは、もう両手で抱えられる程の大きさになっていた。

そして、瞬時に空間にぽっかりと黒い穴を開けた。闇の向こう側から三つの赤い光が近づいてくる。

間に合わなかった……。

私は闇の向こうから、ぐんぐんと近づいてくる赤い光を呆然と見つめながら、持っていたタワシをそつと床へ置いた。その手で水に濡れた青いタイルを探る。

闇から迫ってくる赤い光に見えた物は、室内を照らす窓からの明かりを受けて、ぼんやりと自らの輪郭を浮かび上がらせていた。

ネコ科の肉食獣を思わせる頭には不自然に四つの耳がつき、二つの赤い瞳の上、狭い額の中央には他の二つの瞳よりも一回り大きな三つめの瞳が赤黒く輝いている。

床を探っていた私の手が何かに触れた。

ひやりとした感触と、固くなめらかな質感が手に伝わってくる。

それが何かを確認するよりも早く、見慣れた姿を露にした黒豹は、

まっすぐにこちらへと飛びかかってきた。

大きく振り上げられたサーベルのような鉤爪^{かぎつめ}。真っ赤な舌と鋭い牙を覗かせる口からは、唾液が糸のように風に流されて何本もの筋を作っている。

洗濯室で見た黒豹の姿がフラッシュバックする。

私は手に触れた固く冷たい物を目の前に掲げた。

視界が一面の銀色に覆い尽くされた。

次の瞬間、鈍い音と共に右手に衝撃が走る。黒豹が私が掲げたタライに噛み付いたのだ。

片手だけでは支えられない程の衝撃に、床にしていた左腕を目の前に掲げたタライへと添える。

タライを突き破って白い牙と鋭利な鉤爪^{かぎつめ}が覗いた。

そのままの勢いで押し倒されて、後頭部を床のタイルに嫌というほど打ちつけた。

もう、痛いなんてもんじゃやない。目の前に火花が散るって体験、生まれて初めて味わった。

でも、今は痛がつている余裕なんかない。

痛みを堪^こえてタライの陰から様子を窺^うと、人間よりも早い呼吸に合わせて上下を繰り返す黒豹の腹が見えた。

人間も含めて、ほ乳類にとって腹部は急所だ。内蔵を守る為の骨がないんだから。

あそこを蹴り上げることが出来れば、この状況を打破できるはず！ と、思ったんだけど……。

今の私は、床に膝をつけてタイルを磨いていたところを襲われたので、横座りのような状態になってしまっていた。

足が……出せない……。

そんな事を考えている間にも、全体重をかけてのしかかってくる黒豹の重みと顎の力で、アルミ製のタライはベキベキと嫌な音を立てて変形していく。

このままだと殺される！

いや、喰われる！

私は両手に渾身の力を込めてタライを押し上げ、鼻先まで迫って来ていた爪をなんとか遠ざけた。

そして、震える腕でタライを支えながら、ゆっくり左腿の下になつていた右足をのばす。そのまま右腿を胸まで引き寄せようと、わずかに膝を立てた時だった。

今までタライにしがみついていた黒豹の左前足が、私の顔の真横に振り下ろされた。

耳のすぐ横で、カチャリという金属音に似た音が響いた。黒豹の爪の音だ。

その音に身を竦める間もなく、今度は右前足が振り下ろされる。合わせて十本にもなる小振りの曲刀のような爪に、頭の両脇を挟まれるような格好になつて背筋が冷めたくなつた。

何を、する気だろう？

嫌な予感に鼓動が早くなる。

次の瞬間、私が必死に掲げていたタライが強い力でもぎ取られた。黒豹が首を左右に振つたんだ、と後になつて気づいたけど、この時は驚きと恐怖で何が起こつたのか理解できなかつた。

私と黒豹との間にあつた唯一の障害物が無くなつてしまったわけだ……。

そうになると、赤黒い三つの瞳を見開き、大きく裂けた口から犬歯を覗かせた猛獣と御対面する羽目になる。

顔には血生臭い息が降りかかり、生暖かい涎よだれが糸を引いて落ちてきたんだから、どうやってタライがもぎ取られたのかに思いを馳せている余裕なんてなかつた。

右腿を一気に胸まで引き寄せると、勢いをつけて黒豹の下腹部を蹴り飛ばした。

ギャンつと犬のような悲鳴を上げて黒豹が飛び上がる。文字通り、驚いた猫のように黒豹は背を丸め、垂直にピョンつと飛び上がった。私は、その隙に黒豹の下から這い出すと身を起こした。

けれど、所詮は女の力。しかも、あんな無理な体勢から蹴り上げたんだから、たいしたダメージにもなっていないはずだ。

その証拠に、黒豹はすぐに床に身を伏せると私を睨みつけ、低い唸り声を上げた。

一方の私はというと、食べられる寸前の草食獣のような状態からは抜け出せたものの、相変わらず武器と呼べそうな物は何も無く、華麗に黒豹を撃退できる魔法の一つも身につけていない。

私に出来ることと言えば、黒豹の目を見据えながら後ずさる事だけ。

少しでも黒豹との距離を開けなければ、もう一度飛びつかれたら間違いなく死ぬ。

お願いだから、もう少しの間じっとしてて。

私は祈るような気持ちで、目の前で低い唸りをあげる黒豹を見つめながら、少しずつ後ずさった。

が、黒豹は何故か私からふいつと顔を背けると立ち上がったのだ。もちろん、私のお願いを聞いてくれたわけじゃないと思う。

もしかしたら、さっきの蹴りが効いた……とか？

ダメージは与えられなくても警戒させることには成功したのかもしない。

その証拠に、黒豹は私を気にするように、ときおりこちらをチラツと振り返りながら歩いていく。そして十分に距離をとったところで身を伏せた。

その姿を見た私は、ほっとして床に座り込みそうになった。

でも、なんだか様子が変だ……。

黒豹は身を沈め、頭を下げてじりじりと身じろぎしていた。獲物を狙う肉食獣のように……。

私は黒豹の視線の先にあるものに気づいて息を飲んだ。

黒豹が狙っているもの それは、こちらに背を向けたヴァレリ―だった。彼は全く黒豹の存在に気づいていないようだ。

いや、気づくはずがない！

魔法を行使している最中は、周りの気配が全く感じられないほどに集中している。それぐらいの集中力がなければ魔法なんて使えない。

だから戦場でも魔法使いは後方支援として配属されるか、護衛付きで前線に出るのが常だった。

戦闘魔術学科の生徒でも、よほど優秀な者でない限り魔法を使いながら剣を振るうなんてマネはできない。

まして、ヴァレリーが扱うのは死霊魔術。扱うのが最も難しいと言われる術だ。

「ヴァレリー！ 逃げて！」

私が叫ぶのと、黒豹がヴァレリーに向かって飛びかかるのとはほぼ同時だった。

狂宴 4

ゆっくりとヴァレリーがこちらを振り返って　その瞳が驚愕きょくに大きく見開かれる。

その姿も襲いかかる黒豹の背に隠されて、すぐに見えなくなった。そして、椅子が宙を横切り……って、椅子!?

どこからともなく飛んで来た椅子は黒豹の脇腹に見事に命中し、黒豹と共に壁に叩き付けられた。

なんで？　椅子が？

木製の四本の脚の上にダークブラウンの丸いクッションが乗った椅子。椅子というよりもスツールに近い形をしている。私も毎日お世話になっている食堂の椅子だ。

その見慣れた椅子が、立ち上がってブルブルと頭を振る黒豹の隣に横倒しになっていた。

「ヴァレリー、後ろだ！　お前の黒豹が寝ちまつてる！　こっちは俺にまかせろ」

椅子が飛んで来た方向から聞こえた声に振り返ると、息をはずませて右手に剣を握ったリュカが駆けてくるところだった。

リュカの声にヴァレリーは頷くと、こちらに背を向けた。

ヴァレリーの肩ごしには二頭の黒豹が組み合っている姿が見える。さっき襲われた時に術が解けてしまったのか、下になった方の黒豹は身動き一つしていないみたいだ。

ヴァレリーが小さく呪文を唱えると、下になった方の黒豹が首に噛みついたもう一匹の黒豹をぶら下げたまま立ち上がった。

うっ……。

最初に見た時よりも、かなり凄惨せいきんな姿になった黒豹が起き上がる様は、あまり気分のいい光景ではなかった。

思わず顔を背けると、眉を寄せて何とも言えない顔をしたリュカと目が合う。

それからすぐの事だった。

「おお〜？」

リュカの間の抜けた声が食堂に響いた。

「リュカ!？」

「あれ見るよ! すげえ、止まってる……」

驚いて振り向いた私に、リュカが興奮した面持ちで手にした剣で黒豹を指し示した。

彼が指し示す先には、私に蹴り飛ばされ、リュカに椅子を投げつけられて、ちよっぴり大人しくなっていた黒豹の姿があった。

「あ、れ……？」

私も黒豹の姿を見て、リュカと同じように間の抜けた声を上げてしまった。

空中にピタリと黒豹が貼り付けられていたからだ。そこだけ時間が止まってしまったみたい。

リュカに向かって飛びかかった直後だったんだろう。黒豹の体は前脚の先から長い尾まで、綺麗な放物線を描くように伸びていた。

大きく開けられた口から糸を引いて流れる唾液までもが制止している。

標本のように身動き一つしない黒豹の背後には、黒い穴が口を開けていた。

空間に開けられた黒い穴は徐々に大きくなり、ゆっくりと黒豹の体を飲み込んでいく。優美な長い尾、後ろ脚、うらやましい程に無駄な脂肪の無い均整のとれた胴体部分、光を失った三つの赤い目を持つ頭。

やがて、振り上げられた前脚の爪の先まですっかり飲み込むと、黒い穴は収縮して消えてしまった。

「消えた？」

「消えた、ね？」

黒豹が消えていく様を呆然と見守っていた私は、タワシを手にしたまま、ふらふらと立ち上がってリュカと顔を見合わせた。

見つめ合うこと数秒……。

「そういや、あいつは？ ほら、お前のストーカー」

先に口を開いたのはリュカだった。

「そうだ！ ルパート！」

すっかり忘れていたけど、無事なんだろうか？

慌てて魔法陣の方へと向き直ると、ルパートは相変わらず円の中心に立ったままだった。その姿は、最初に目にした時と何一つ変わっていないように見えた。

私は恐る恐る彼へと近づくと、その肩に手をかけようとした。

私の手がルパートの肩に触れた瞬間、彼の姿が目の前から消えた。いや、消えたように見えただけで、彼は声一つ上げずに崩れ落ちたのだ。糸が切れた操り人形のように。

ルパートの頭が床のタイルにぶつかって鈍い音を立てた。

「ルパート！」

「おいっ！」

倒れたルパートを抱き起そうとして、リュカが彼の肩に手をのばす。

「動かさない方がいい」

その手を、いつの間にか傍に来ていたヴァレリーが抑えた。そして、もの問いたげに見上げるリュカに静かに言った。

「気を失っているだけだと思うが、倒れた時に頭を打っているかもしれない。このまま寝かせておいて医学部の講師か生徒を呼びに行った方がいい。この時間なら、もう他の寮の生徒も起きているだろう」

彼の言葉に調理室の壁に掛けられた時計を見ると、針は六時を指していた。すっかり明るくなった窓の外からは、しきりに小鳥のさえずりが聞こえている。

「リュカ、もし彼が目を覚ました時の為にここで待っていてくれな
いか？ 俺は水の館に行つて医学部の連中を呼んでくる。リリースは
クロード達に結界が解けたことと、悪魔学の生徒が無事だったこと

を知らせに行ってくれ」

「ふああーい」

リユカが大きな欠伸をしながらヴァレリーに返事を返すと、その場に腰をおろした。

「リユカ……ルパートをお願い」

私は、床に胡坐あぐらをかいて座り、片手でローを手招きしているリユカに声をかけた。血の気を失った顔で横たわるルパートの姿が、とても痛々しくて心配だったから。

「大丈夫だって。血も出てねーし、息もしてるし」

不思議だけれど、彼が『大丈夫』だというと全てがうまくいくように感じる。なんの保証も無いのに。これは一種の才能なんじゃないか？ とまで思えてくる。

私は、リユカのよくわからないけれど確信に満ちた『大丈夫』と言う言葉に頷うなづいた。

「ああ、リリース！」

調理室を出て食堂から廊下へと続く両開きの扉に手をかけたところで、ヴァレリーに呼び止められた。

彼は扉を押し開き、私に先に廊下へ出るように促すと、口を開いた。

「ルパート、だったか？ 彼が悪魔を召喚していたことは、まだ伏せておいた方がいい。悪魔の召喚は重罪だ。彼が何故こんな事をしたのかもわかっていないし、それに……」

ヴァレリーはそこで言葉を濁にごして私から目をそらすと、口元に軽く手をあてて俯うつむいた。どこか躊躇ちゅうちゆしているような、何かを考えているような彼の姿に私は小さな不安を覚えた。

きつとヴァレリーも私と同じ事に気付いたのかもしれない。

「……誰かが、裏でルパートを利用していたかもしれない？」

私が途中で言葉を途切れさせたヴァレリーの代わりに声を落とすてささやくと、彼は顔を上げて戸惑いの色を浮かべた瞳で私を見た。

何故そう思う？

いつ気がついた？

彼の瞳がそう問いかけているように感じて、私は彼の淡い紫色の瞳をまっすぐに見返した。

「最初に見たときの様子がおかしかったから。集中しているというよりも、心がここに無いように感じて。誰かが彼を魔法か催眠術で操っているんじゃないかな？ って……」

気のせいだと、考えすぎだと思っていた。

でも、ヴァレリーも同じように感じていたのなら……。

私は固唾^{かたす}を飲んでヴァレリーの言葉を待った。

「ああ、その可能性もある。もし、そうだとしたら彼を利用して人間が口を封じようとするかもしれない。その時に、彼が悪魔を召喚した事が生徒中に知れ渡って騒ぎになっていたら、悪魔を召喚した生徒を一目見ようと押しかける野次馬に乗じて近づき、殺すことはたやすいだろう」

「そんな……」

ルパートが殺されるかもしれない。

そう聞いて言葉を失った私を見て、ヴァレリーは少し慌てたようだった。

「仮定の話だ。まだ、そうと決まったわけじゃない。だが、用心するに越したことはないだろう？ それに悪魔の召喚は重罪だが、幸い死人や命に関わる程の重傷者はでない。極刑はまぬがれるはずだ」

なだめるようにそう言って微笑を浮かべる。

「うん……。じゃあ、行ってくるね」

私はもう一度だけ、リユカと眠り続けるルパートがいる調理室の方を振り返ると、食堂を後にした。

パタパタと階段を駆け下りてくる軽い足音が聞こえたのは、三階へと続く階段を途中まで登った時だった。

「リリースう〜！」

間のびした可愛らしい声。姿を見なくたって、誰が階段を駆け下りてきたのかすぐにわかる。

私は顔を上げて声の主を仰ぎ見た。

「エレザ。どうしたの？」

よほど急いできたのか、彼女は息を弾ませて白い頬をほんのりと赤く染めている。

「あ、あのね。落ち着いて……。落ち着いて、聞いて、ね」

いや、落ち着くのはお前だ！ と、このセリフを発したのがリュカやミケーレあたりだったなら、間違いなくつつこんでいるところだ。

でも、相手はエレザ。この程度のことですつこんでいたら、こちらの体力がもたない。

「うん。私は大丈夫だよ。何かあったの？」

私は彼女に微笑みかけた。

けれど、彼女の後ろから現われたミケーレの姿と、なんとか息を整えて口を開いたエレザの言葉に、私の笑みはすぐに凍りついた。

「リリースから預かってた卵がね……。割れちゃったのお」

ミケーレの腕の中には無数のヒビが入った卵の姿が……。

急に足元の階段が無くなってしまったような錯覚を覚えた。目の前の景色がゆがむ。

「リリース！」

ゆっくりとエレザの姿が遠ざかっていくように感じた時、誰かに腕を強く掴まれた。

「リリース！ しっかりしてえ」

薄れていく意識の隅でエレザの泣きそうな声を聞いた気がした。

白い。

なにもかもが白かった。

白い天井。顔を少し横へと傾けると、視界に入ったのは白い布。そして、ゆっくりと上半身を起こしてみると、私の体には純白の寝具が掛けられていた。

ふと、その染み一つ無い布団の上から黒い何かが転がり落ちていった。それは私の胸の上に乗っていたんだろう。私が身を起こすのと同時に、ちょうど胸の辺りからコロコロと床へと転がり落ちて、フギユツと妙な声を上げた。

生き物？

ベッドから少し身を乗り出して床を覗き込むと、白いタイルの上にはぼつんと小さな黒い物体が落ちていた。

それは小型犬ぐらいの大きさの トカゲ？

トカゲはもぞもぞとベッドの傍まで寄ってくると、立ち上がってベッドの鉄枠に前脚をかけた。首を伸ばして私を見上げる。

トカゲの黒い瞳と目が合った。

トカゲは、その短い後ろ脚を片足だけ上げてジタバタと宙をかきはじめた。

もしかして、ベッドの上に戻りたいのかな？

「きゅうくん」

私ができることに気がついた時、トカゲも自分の短い足ではベッドに這い上がることが出来ないと気がついたのか、私の目を見つめながら悲しげな声で一鳴きした。

そつと片手を差し出してみる。

トカゲは脅えることもなく、私の手に頭をすりつけた。なんだか知らないけど、ずいぶんと私に懐いているみたいだ。

私はトカゲの両脇に手を差し込み抱き上げた。トカゲは犬のよう

に黒い瞳をキラキラさせながら尻尾を振った。

爬虫類って、こんなに人に懐いたかな？

それに声も仕草もまるで犬のようだ。

不思議に思いながらも、抱き上げたトカゲをベッドの上へと戻してやると、トカゲは私にピッタリと寄り添って丸くなった。

安心したように丸くなって寝息を立て始めたトカゲがなんだか可愛く思えて、ウロコに覆われた背をなでてみる。ウロコは思っていたよりも柔らかく弾力があって、しっとりしていた。

意外な感触に感動すら覚えた時、トカゲがビクリと身を固くして顔をあげた。

嫌な場所にも触っちゃったのかと、私は慌てて手をトカゲの背から離れた。でも、トカゲは落ち着くどころか、より一層脅えて布団の中へと潜り込んでしまった。

「どうしたの？」

私が驚いてトカゲに声をかけた時、遠くの方から微かな足音が聞こえてきた。もしかしたら、トカゲが脅えた原因はこれかもしれない。

足音はどんどん近づいてくる。こちらへと近づくにつれて、足音だけではなくなにやら話し声も聞こえてきた。

「……ですから……病人ですので、あまり刺激をしないように……」

「ですが、こちらにも……彼女は重要参考人……証言を……しないことには……」

「しかし、その目撃情報が本当なら……なぜ彼女が……」

聞こえてくる声から判断すると、廊下を歩いているのは三人らしい。

若い女性の声。これはたぶん医務室の看護婦さんだ。

他に聞こえてくるのは若い男性と、中年ぐらいだろうか？ もう

一人の男性よりも張りを失った声。

どこかの学部の講師かもしれない。

布団の中に潜ってしまったトカゲを撫でながらぼんやりと考えて

いたけれど、足音も声も真つすぐに私がいる方へと近づいてくるのを感じて、思わず息を潜めた。

「ここが、リリス・エーデルシュタインのいる医務室です。右側の一番手前のベッドです。他の生徒もいますので、お静かにお願いします」

静かに扉が押し開けられる音と、少し不機嫌そうな看護婦さんの声が聞こえて、私は驚いて間仕切りに使われている白い布を凝視した。

私の名前、呼んだよね？

一体なんの用なの？

それに、なんで医務室にいるんだろう？

私、確かヴァレリーやリュカと一緒にだったはず……それから？ どうしたんだっけ？

いろんな疑問が一気に頭に浮かんできて、それらの答えを見つけれないうちに目の前の布が勢いよく引かれた。

急に視界に色が溢れて、私は軽い眩暈めまいを覚えた。

「ちょっと！ 先ほどから何度も説明したでしょう！ 彼女は体調を崩して……」

看護婦さんが抗議の声を上げる。が、彼女の抗議を全く無視して若い方の男が口を開いた。

「リリス・エーデルシュタインだな」

「はあ……」

濃いグレーの軍服と黒地に十字架に巻き付く白い竜の紋章の入ったネクタイを身につけた茶髪の男は、私の気の抜けた返事に無表情に頷くと、後ろの白髪混じりの黒髪の中年男を振り返った。彼も若い方と全く同じ軍服に身を包んでいた。

ただ違うのは、彼の襟元には若い方の男よりも多くのバッジがついていること。たぶん、偉い人なんだろうなあ。

おじさんは横柄な男に小さく頷くと、私の方へと視線を移した。

「ちょっと君に訊きたいことがあってね。少しいいかな？」

「いいです……けど」

私は感じの悪い若い男と、人の好さそうなおじさんの顔を交互に見比べた。

国際魔法取締局 2

「私たちは国際魔法取締局から派遣された特別捜査官だね。この学園で起こった悪魔召喚事件について捜査をしているんだ」

そう言うと、おじさんは一枚の名刺を私に差し出した。

受け取った名刺には左上に十字架に巻きつく白い竜の紋章　クレメント教のシンボル　と、五芒星ごぼうせいをバックに両天秤が描かれた紋章が印刷されていた。そして、中央には「国際魔法取締局　特別捜査課　主任　テオドル・シモン・ルベーク」の文字。

「国際魔法取締局？　主任？」

国際魔法取締局はどの国にも属さない中立の組織で、魔法関係の法整備や犯罪の取り締まりをしている組織だ。クレメント学園も国際魔法取締局の管轄かんかつか下に置かれている　と、授業で習った。

「主任と言うのは担当地区の責任者みたいなものだよ。私の担当地区はこのクレメント島だね。それで、学園内で事件が発生したと聞いて駆けつけたんだよ」

テオドルさんは看護婦さんが持ってきたパイプ椅子に腰掛けながら、低く優しい声で説明してくれた。そして、振り返って椅子を保持てきてくれた看護婦さんにお礼を言うことも忘れなかった。

紳士って、こういう人の事をいうんだろうか。

私がテオドルさんの物腰の柔らかさや細やかな心遣いに感心している、

「リリース・エーデルシュタイン。君には聞きたいことが山ほどある。まずは一昨日の行動だが、一昨日の夜十時以降、どこで何をしていました？」

有無を言わさない声が頭上から降ってきた。

見上げると、仁王立ちして片手にメモ帳を、片手にペンを持った若い方の捜査官と目が合った。

「一昨日？」

急に畳みかけるように詰問されて戸惑うと、彼はペンでメモ帳をせわしなく叩きながら吐き捨てるように言った。

「下手に隠し立てすると罪が重くなるぞ」

「はあ！？ 罪って何？」

「お前が一昨日の夜に……」

「やめなさい、ロベルト」

茶髪の男が何かを言いかけると、テオドルさんが厳しい口調で制止した。

「しかし、主任。彼女は……」

「まだ、あの時間に目撃されたのが彼女だと決まったわけではないだろう。それに、これは魔法がらみの犯罪だ。目撃証言もどれだけ信憑性があるか疑わしい。誰かが彼女の姿を利用していたのかもしれないしね」

ロベルトと呼ばれた茶髪の男は、まだ何か言いたそうにテオドルさんと私を見比べていたが、やがて溜息をつくとパイプ椅子に腰を下ろした。

「あの……。目撃証言って、なんですか？」

自分の知らないところで何か大変なことに巻き込まれているような気がして不安げに聞いた私に、テオドルさんは優しい笑みを返してくれた。

「そうだね。まず、順を追って話していこう。ルパート・テイラー君のことは知っているね？」

ルパート！

その名を聞いた瞬間に、私の脳裏に昨日から今朝にかけての記憶が一気に蘇った。

宙に浮く卵。窓を背に立つヴァレリーの姿。首なしカトリーヌさんに、ドレッドヘアのクロード。突然現われた三つ目の黒豹と双頭の鷹。怯えるアルマのヘーゼルの瞳。

そして、そして……。

血の気を失った顔で床に横たわるルパートの姿。

「あ の つ！ ルパートは無事なんですか？ 今はどこに！」

私はベッドから身を乗り出すと、テオドルさんに詰め寄った。

「落ち着いて。彼は今、学園長室の応接用の一室にいるよ。取り調べ中だから会わせてあげることができないが、意識も戻って元気にしているから安心して」

テオドルさんの言葉に全身の力が抜けるような安堵感を感じて、私は大きく息をついた。

よかった、無事で。本当によかった。

「彼が昨日の七月十四日の早朝二時頃に悪魔の召喚を行おうとしたことは知っているね？」

「はい」

テオドルさんは頷くと、軍服のポケットから手帳を取り出してパラパラとページを捲めくった。

「ええーっと、第一発見者は君と動物学のレオンハルト・ルーベンス君、そして死霊魔術学のヴァレリー・ロートレック君で間違いないかな？」

レオンハルト・ルーベンス？ って……。

私が聞きなれない名前に考え込むと、テオドルさんも不安になったのか手帳を見ながら首を傾げた。

「あれ？ 聞き間違えたかなあ？ 確かにレオンハルト・リュカ・フォン・ルーベンス君とヴァレリー・ロートレック君と聞いたと思っただけだなあ」

「ああ！ リュカ！ そうだ、リュカってセカンドネームだった！」
そう。動物学クラスではアール先生も含めて、彼のことはリュカと呼んでいたから本名なんて全く覚えていなかった。頭の片隅に長ったらしくて仰々ぎょうぎょうしい名前っていう印象が残っているだけで。

初日にセカンドネームで呼んで欲しいと言い出したのは本人だけか

ら、彼自身もレオンハルトというファーストネームがあまり好きではないみたいだ。このリュカの申し出にアール先生は二つ返事で賛同した。よっぽど呼びにくかったんだろうなあ。

「では、リュカ君とヴァレリー君と一緒に昨日の早朝の五時から六時の間に、ルパート・テイラー君の姿を土の館二階の食堂に併設されている調理室で目撃した、ということ間違いはないかな？」

「は……あれ？」

手帳を見ながら確認するテオドールさんの問いに頷こうとして、ふとある事に気がついた。

「今度はなんだ!？」

「ロベルト」

私を睨みつけるロベルトを諫めて、テオドールさんが手帳から顔を上げた。

「何か気になることでもあったかい？」

「昨日の早朝って……。今日の早朝じゃなくって？ 今日って何日、なんですか？」

「今日は七月十五日よ、リリース。あなたは昨日の午前六時頃に運ばれて丸一日眠っていたの。今は朝の……十時半ぐらいね」

私の問いに答えてくれたのはテオドールさんでもロベルトでもなく、医務室の看護婦さんだった。

「丸一日も!？」

「寝てただから当然だけど、全く記憶が無い!

うわぁ……なんだか、損した気分。」

「具合は大丈夫かい? 急に押しかけて悪かったね」

目を丸くして看護婦さんを見上げた私に、テオドールさんが申し訳なさそうに声をかけてくれた。

「あ、はい。もう全然大丈夫です。それに、ルパートの姿を見かけた時刻も一緒にいた人達も、テオドールさんがさっき言った通りで間違いありません。えっと……その、気にしないで続けてください」
私がそう言うと、テオドールさんは悪いねと一言呟いて、また手帳へと視線を戻した。

「目撃した時、ルパート・テイラー君は魔法陣の中央に立ち呪文を唱えていたんだね?」

「はい」

「その時に何か変わった様子は無かったかな? なんでもいいから気がついた事があつたら教えて欲しいんだが……」

私は、あの時の彼の様子を言っつていいのかどうか少し迷った。でも、国際魔法取締局の人なら信用できるはず。それにルパートも安全な場所にいるみたいだし。そう思っておずおずと話し始めた。

「声をかけても全く反応が無くって、なんだか心がここに無いように感じて……その、まるで人形のようなだと思いました」

私の言葉が終わらないうちに、テオドールさんとロベルトはお互いの顔を見合わせた。

「主任……」

ロベルトが困惑した表情を浮かべてテオドールさんに声をかける。テオドールさんは顎に片手をあてて何かを考えているようだったけれど、私へと視線を戻すと口を開いた。

「ルパート・テイラー君の召喚術を止めたのは君だそうだが、間違いないかな？」

私は怖いくらい真剣なテオドルさんの表情に萎縮いしよくしながらも小さく頷いた。

「よし。では、少し前の事を聞いてもいいかな？」

「はあ……」

なにか「よし」なんだろう？

テオドルさんの目に一瞬浮かび上がった強い光はもうすっかり消え失せて、その顔には優しい笑みが広がっていた。私はそんな彼の言葉に気の抜けた返事を返した。

「一昨日の夜の事を聞かせてもらいたいんだ。一昨日の夜六時から八時までの間、食堂に居たね？ このことは君の友達が証言している。その後、ルパート・テイラー君とミケーレ・グラツイアーノ君と本館の資料室へ行き、閉館十分前まで一緒だった。ここまでは間違いないかな？」

「間違いない、と思います」

資料室でヴァレリーのことを調べていて、あの怖いお姉さんに叩きだされたことを思い出す。あの時はこんな事になるなんて想像もしなかった。ルパートだって、いつもと変わらない変人ぶりだったし……。

「その後、二人と土の館まで戻ったね？ ここまではミケーレ君が証言している。資料室の閉館十分前から三十分程は一緒にいたと。その後から騒ぎが起こった昨日の早朝二時すぎまで何をしていたか教えてくれるかな？」

「その後は……」

ミケーレに土の館まで送り届けてもらった後、まだ食堂や談話室に人がいたから死霊魔術学の生徒にヴァレリーのことを聞いてもらったんだ。そのせいでヴァレリーにあんな呼び出され方をして、酷い目に合わされて……。

ああ、なんか思い出したら無性に腹が立ってきた。ロベルトじゃ

ないけど、彼には聞きたいことが山ほどある。

「談話室とか食堂にいました。十時すぎぐらいまでかな？ で、その後二時ぐらいまで自分の部屋で寝ていました」

「うん。その時間に談話室で君に話しかけられたと証言している生徒がいるね。なんでも、ヴァレリー・ロートレック君について聞かれたとか。なぜ彼について調べていたんだい？」

なぜだろう？

私はこの時、なぜか本当のことを話してはいけないような気がした。優しく質問するテオドルさんに不審なところなんて何もなかったのに。

小さな不安のようなものが胸の奥から芽生えてきて、それに突き動かされるように私は嘘をついた。

「それは……初めて見かけたときから気になって。それで……」

私はテオドルさんから目を反らし、布団を見つめながら言葉を濁した。

咄嗟にミケーレの一人芝居に出てきた私 初恋の相手に近付きたくて色々調べてしまう初々しい少女 を演じたのだ。

効果はあったようだ。

遠慮がちに顔を上げると、テオドルさんは暖かい笑みを浮かべて頷き、ロベルトは盛大な溜息をついて天井を仰いだ。そうして、このことに関してはこれ以上聞かれることはなかった。

「……最後に一つだけ聞いていいかな？」

私の証言を手帳に書きつけていたテオドルさんが、手を止めて私を見た。

「一昨日の十時すぎから昨日の早朝の二時ごろまで自室で寝ていたと言っていたね？ その間に一度も部屋を出ることはなかったかな？ そうだねえ……深夜の十二時ぐらいの時間に食堂へ行ったりしたとか」

「食堂？ いえ、ずっと寝てましたし、部屋からは出てませんけど」

なんでこんな事を聞かれたのか不思議に思っ
て首を傾げると、テオドールさんは手帳をパタンと閉じてにっこりと笑った。

「いや、部屋から出ていないならいいんだ。聞きたいことはこれで終わりだ。協力してくれてありがとう」

「いいんですか？ 主任」

「他に彼女に聞くことなんてないだろう？ それに、ここは医務室だ。長居しては他の生徒にも迷惑だし、彼女の体調のことだってある。せつかく良くなったのに私達のせいで悪化しては申し訳ないだろう」

テオドールさんは不服そうな表情のロベルトを追い立てるようにして医務室から出ていった。扉を閉める直前に私を振り返り「お大事に」と一言だけ残して。

「具合はどう？ もう起き上がれそう？」

国際魔法取締局の二人組が出て行った後、看護婦さんが私のベッドへと近づいてきて声をかけてくれた。

「はい。もうすっかり大丈夫です」

大丈夫というよりも、気を失って丸一日寝ていたことの方が信じられない。

「そう。よかったわ。アール先生を呼んでくるわね。とてもあなたの事を……」

看護婦さんは何故かそこで言い淀んだ。沈んだ表情で小さく息をつくと、気を取り直すかのように軽く頭を振ってから微笑した。

「とにかく、とても心配はしていたから。ちょっと待っていてね」
そう言うと、看護婦さんは廊下へと出ていった。

心配はしていた……心配「は」って……。

看護婦さんの後ろ姿と静かに閉じられていく扉を眺めていると、布団の中に潜り込んでじつとしていたトカゲがもぞもぞと這い出てきた。やつと顔を出したトカゲは、ふんふんと鼻を鳴らしながら周囲の様子を窺^{うかが}っていたけれど、またすぐにするりと布団の中へと隠れてしまった。

アール先生にしては早すぎる気がするけど、きっとまた誰かが来るんだろう。

私の予想通り、さっき閉められたばかりの医務室の扉がまた開けられた。でも、ゆっくりと押し開けられた扉の影から姿を現したのは、全く予想していなかった人だった。

「ヴァレリー？」

私を見舞いに来てくれた……わけないよねえ？

彼は無言で私がいるベッドまで歩み寄ると、間仕切りのカーテン

を無造作に閉めた。

「医務室の看護婦以外に誰かに会ったか？」

「え？」

振り向きもせず唐突とつとつに投げ掛けられた問いに驚いて答えられずにいると、彼は看護婦さんが置いたままにしていたパイプ椅子に視線を落として呟いた。

「遅かったか……」

そして、二つ置かれているパイプ椅子のひとつに腰を下ろすと、ベッドの縁に両腕を乗せてこちらへと身を乗り出した。

思わずのけ反るようにして身を引く私。

ヴァレリーが少し不機嫌そうな顔で睨んでくる。

「なぜ逃げる？」

「だって、近すぎる。寝起きだし、顔も洗ってないし、そんな間近で見られたら、ちよつと……」

せめて髪だけでもなんとかしようと、手櫛で一生懸命に整えていると、

「そんなくだらないことに構っているほど暇じゃないんだ。もう少しこつちに来い。会話が聞こえると拙ますい」

彼は女心なんか微塵みじんも理解してくれず、片手の甲で音が出ない程度に布団を叩きながら声を押さえて言い放った。

「で？ なんの用なの？」

私は、しぶしぶ彼が叩いた辺りまで身を乗り出すと、俯うつむいたまま声を落として聞いた。

「ここには誰が来た？」

「えーっと、国際魔法取締局の人が二人だけ」

顔を突き合わせる程に間近で囁かれた問いに私が答えると、短い沈黙が返ってきた。顔を上げることが出来ないから、彼がどんな表情をしているのかはわからない。私は彼の肩に垂れる銀の髪を見つめながら次の言葉を待った。

「彼らにはルパートのこと以外に何か聞かれたか？」

「……私が一昨日から昨日の朝にかけて何をしていたかとか、後は……なんでヴァレリーについて調べていたのかとか」

私が、ついさっきテオドルさんに質問されたことを思い出しながら答えると、心なしか固い声でヴァレリーが囁いた。

「……それで、俺を探していた理由は答えたのか？」

「言っていない。なんか、よくわかんないけど、言っちゃいけない気がして……その、ヴァレリーに一目惚れしたってことにして誤魔化しちゃった」

あの時は咄嗟とっさに誤魔化したけど、本人を目の前にしてこんなことを言うのは気が引ける。私は、この場から逃げ出したいような気分になって、ますます俯いて布団を見つめた。

「本当に何も言っていないんだな？」

急に強い力で両腕を掴まれて耳打ちされ、私はドキリとして顔を上げた。目の前には、触れてしまいそうな程近くにヴァレリーの顔があった。

「わっ！」

「お前は……少しの間ぐらい静かにできないのか？」

思わず声を上げて身を引いた私を眺めながら、ヴァレリーは呆れたように呟いた。

静かにして欲しいのなら、あまり傍に寄らないで欲しい。そう言いたかったけど、言えるはずもなく、私は不満の色を隠しもせずにヴァレリーの顔をじっと見た。

「なんだ？」

「別に……。あんたの事は何も言っていないし、これからも絶対に言わない。これでいいんでしょう？ だから離してよ、その手」

訝しげに眉をひそめるヴァレリーに、私は突き放すように言っって顔を背けた。

「俺のことはどうでもいい」

ヴァレリーは吐き捨てるようにそう言っって、さらに声を潜めて続けた。

「それよりも、竜を見たことを話したのか？」

「竜？　なんで……」

私が思いもよらなかつた言葉に驚いて彼に向き直った時、間仕切りのカーテンが僅かに開けられた。その隙間から顔を覗かせたのはクロードだ。

「もう行くぞ。看護婦が講師を連れて帰ってきた」

ヴァレリーはわかつたというように軽く片手を上げてクロードに返事を返すと、パイプ椅子から立ち上がりながら早口でまくしたてた。

「リリース、後で俺の部屋に來い。その時にすべて教える。ただ、これだけは約束してくれ」

彼はベッドのふちに両手をつき、私を覗きこむように見た。その瞳には抗えない程の強い光が湛えられていた。

「竜を見たことは誰にも言つな。相手が講師だろうが、特別捜査官だろうが、な」

私がヴァレリーの迫力に押されて頷くと、彼は間仕切りのカーテンを開けてクロードと一緒に医務室を出て行った。

俺の部屋に來いって言われても……。私、ヴァレリーの部屋なんて知らないんですけど。

どうやって訪ねるといふんだろう？　三階の男子寮全室をノックしてまわれとでも？

私がヴァレリーの部屋について思い悩んでいると、今度はかなりご機嫌で浮かれた客が訪ねて來た。

アール先生の情熱 1

「トカゲはどこです!？」

彼が医務室に入って私の顔を見るなり言った言葉だ。

その彼の背後で浮かかない顔をしている看護婦さんと目が合った。

医務室を出る前に看護婦さんが言った通りだった。確かに心配はしていたみたいだ。私ではなく、トカゲの……。

「人見知りするみたいですよ、先生」

私は布団の中に潜りこんだまま出てこないトカゲの背を撫でながら、分厚い本を両手で抱えて息を弾ませているアール先生に返答した。よほど急いで駆けつけたのか、先生は軽く咳き込んだ後、息を整えようとして深呼吸を始めた。

先生ならこのトカゲについて何かを知っているだろう。私は、とりあえずトカゲがどこから来たのか尋ねてみることにした。

「先生? このトカゲ、なんだか私に懐いてるんですけど、どこから入って来たんですか?」

「そのトカゲは……すみません、ちょっと、ちょっと待って、ください……」

先生はよろめきながらベッドの縁に方手をかけると、背を折り苦しげに言葉を絞り出した。

「まったく……。だから言ったでしょう? 普段からろくに体も鍛えていないのに全力疾走なんてするからよ。よく図書館からたつたの十分かそこらで学園まで戻って来れたわね。あんな迷路のような場所から出てくるだけでも大変だっていうのに、さらに本館からここまで走るなんて呆れて何も言えないわ」

看護婦さんが「呆れて何も言えない」といいながらも延々と愚痴を続けながら、先生に水の入ったコップを差し出した。先生は抱えていた本をパイプ椅子の上に置くと、差し出されたコップを受け取り口をつけた。

そうして一息つくと、私の方へと向き直り興奮した面持ちで口を開いた。

「そのトカゲは、リリスさんの卵から生まれたんですよ」

「たまごから？ でも、卵は割れて……」

気を失う直前、私が目にした卵には無数のヒビが刻まれていた。

それに、エレザだつてはつきりと言つたんだ。

卵が割れちゃった と。

「ああ、それは外部の力が加わつて割れたのではなく、内側から掛かった力によつて割れたんですよ。つまり、成長したトカゲが殻を破つて外へと出ようとしたんです。それを見たお二人が誤解してしまつたんですね。私の元へミケーレ君が、卵から頭を覗かせたトカゲを持つて駆け込んできましたよ。まあ、でもそんな事はどうでもいいんですけど」

先生は、卵が割れてしまったと思つて痛めた私の心を、どうでもいいの一言で一蹴すると、パイプ椅子に置いた分厚い本をもう一度手に取つた。

「それよりも、問題はそのトカゲなんです！ こう見えても私は、動物学の講師の傍ら国際魔法取締局希少動物保護課から依頼を受けて希少動物の研究と生態調査をしているんです。ですから私が知らない動物は、ほとんどいないといつても過言ではありません。ですが、そのトカゲには全く心当たりが無かつたんです。そこで、図書館の蔵書を片っ端から漁つて調べてみたら、ありましたよ！」

先生は付箋ふせんのつけられたページを開いて、本を私に差し出した。私はやたらと分厚く重い本を取り落とさないように慎重に受け取ると、リアルなトカゲのイラストが描かれたページに視線を走らせた。

そのページの見出しには 動物界脊索動物門爬虫綱有鱗目オオトカゲ科オオトカゲ属 と頭の痛くなりそうな分類階級の後ろに大文字で クレスメントオオトカゲ と記されていた。

「クレスメントオオトカゲ？」

「そうなんです！ 私も知らないはずなんですよ。実はですね、クレスメントオオトカゲが載っているその本は、絶滅種データブックなんです！」

「アール。ここは医務室なのよ？ もう少し静かにしてちょうだい」
「どんだん声が大きくなつていく先生を嗜めるように看護婦さんがピシヤリと言った。

「ああーっと、要するにですね、クレスメントオオトカゲは十年以上も前に絶滅したと言われている種だったんです。そのトカゲがリスさんの卵から孵ったトカゲにそっくりだったんですよ。ね？」

看護婦さんに叱られて少し頭が冷えたのか、先生は声を落とすと絶滅種データブックに描かれたイラストを指し示した。そのイラストはクレスメントオオトカゲの幼体らしかった。

確かに、布団の中に潜って出てこない黒いトカゲに瓜二つだ。

「……でも、絶滅したんですよね？ なんで、今もいるの？ まるで……」

竜みたいだと続けようとして、私はヴァレリーの言葉を思い出し、慌てて口を噤んだ。

竜を見たことは誰にも言うな

「どうしました？」

急に押し黙ったせいで先生に不思議そうに見つめられて、私は苦し紛れに笑みを浮かべて誤魔化した。

「いえ、なんでもありません。それより、絶滅したトカゲがなんでもここにいますか？」

「そう！ そんなんですよ！」

「先生、また怒られますよ」

子供のように目を輝かせて声を上げた先生に、私は自分の口元に人さし指を当て小声で注意した。隣のベッドの点滴をチェックしていた看護婦さんが、こちらを冷やかな目で見ていたからだ。

「ジャン又は怒らせると怖いからなあ……」

先生は看護婦さんを横目で見て軽く首を竦めると、声を潜めて話し始めた。

「絶滅種と言っても本当に絶滅しているかどうかはわからないですよ。考えても見てください。この世界は広いんですよ？ その中でも人間が日常的に足を踏み入れる場所なんて限られています。未踏とまでは行かなくても、年に数回しか人間が足を踏み入れない地の方が多いくらいです。ですから、ある地域で絶滅したと思われる生物が予想もしなかった場所で発見されたり、同じ地域でも何年も後になって発見されたり、図鑑に載っていない新種が発見されたりすることも珍しくないんです」

先生はそこまでほとんど息継ぎ無しで一気に言い切ると、大きく息を吸った。見ているこっちが息苦しくなる。

「リリスさんのトカゲはクレスマントオオトカゲで間違いないと思います。絶滅種データブックのオオトカゲ属のページ全てに目を通しましたが、そこまでイラストに酷似したトカゲはいませんでしたから。もちろん、今現在生息しているオオトカゲ属にも心当たりはありません。これは凄いいことですよ」

先生はそこでまた言葉を切ると、呆気に取られている私をひたと見据えた。

「世紀の大発見かもしれません」

アール先生の情熱 2

「それはいくらなんでも大袈裟なんじゃ……」

私が先生の熱を帯びた瞳に見つめられて身を引くと、

「大袈裟？ そんなことはありませんよ。絶滅したはずの生物が生きていたんですよ？ 残念ながら召喚によって呼び出されたので生息場所を特定するのは難しいですが、卵があるということとは少なくとも雌雄一対は生存しているということです。これは歴史を変える大発見ですよ」

先生は何故わからないんだと言わんばかりに身を乗り出して熱弁を振るう。

「そ、そうですね」

ここは逆らわずに、大人しく頷いておいた方がいい。

私は相槌あいづちを打って先生の話を聞き流すと、世紀の大発見らしい珍獣が潜り込んでいる布団を見やった。

なんで私のところに来てしまったんだろう？

クレスメントオオトカゲって名前なんだから、クレスメント島にこの子の親はいるんだろうか？

クレスメントオオトカゲ……オオトカゲ……トカゲ……。

「先生？」

私はある事に今更ながらに気がついて、顔を上げた。

「はい？」

私と同じようにクレスメントオオトカゲと思われるトカゲが潜り込んだ場所を見つめていた先生が、気の抜けた返事を返して顔を上げた。

「トカゲって爬虫類ですよ？ 鳥ではなく……」

「え？ ええ……そうですね」

戸惑いの色を浮かべる先生の顔を見つめて私は口を開く。ゆっくりと。一字一句、噛みしめるように。

「私はこの二ヶ月間、なんの為に卵を暖めていたんですか？」

そう、爬虫類の卵は暖めなくても孵^{かえ}るのだ。自力で。

先生に聞いたって仕方がないことくらい分かってる。私だって鳥の卵にしか見えなかったし、絶滅した生物の卵を判別しろと言う方が無茶だ。それでも、誰かに愚痴ぐらいは言いたかった。

そんな私に先生は満面の笑みを浮かべて、信じられない言葉を口にした。

「いやあー、爬虫類で本当によかったですね。正直言って、ほっとしました。鳥の卵だったら、どうしようかと思っていたんですよ」

「はあ？」

目を剥いて聞き返した私に、先生は悪びれた様子も無く続けた。

「鳥の体温は人間よりも高いんですよ。だいたい37.5 から39 ぐらいでしたか……。だから人が暖めても温度が低すぎて孵^{かえ}す事は難しいんです」

「じゃあ、なんであんな事言っただんですか!? 暖めれば孵^{かえ}るって……」

あんな恥ずかしい格好をして、土の館の名物だと笑われてまで卵を暖め続けた私の二ヶ月は何だったの？

湿度も適度に保って定期的に転卵して下さいって言うから、こまめに水拭きして磨いたり、ひっくり返していた努力は無駄だったってこと？

私の為に徹夜して特製抱っこひもを作ってくれたエレザや、事あるごとに卵を預かってくれたジャンやグルドになんて言えばいい？ 言いたい事はたくさんあるのに、言葉にならない。その代わりに悔しくて涙が滲んできた。

「そ、それは、ですねえ」

そんな私を見て、さすがの先生も怯んだのか慌てて弁解し始めた。「水の大陸の山岳地帯に生息するオオウミガラスの仲間がいるんですが、彼らの卵の孵化温度は一般的な鳥の卵より低いんですよ。ちよつど人間の体温と同じか少し低いぐらいです……」

「だから？」

「だから、そのお……」

私が目に涙を溜めたまま睨むと、先生は困ったような笑顔を浮かべて言った。

「その鳥の卵だったらいいなあ、と思ひまして。そうだったら暖めたら孵せるでしょう？」

私は、先生の説明を聞いているうちに、落ち着いてきたというよりも気が抜けて諦観ていかんの域に達してくるのを感じた。どちらにしても、気が静まってきたことには変わりがない。私はひとつ溜息をつくとき、口を開いた。

「よくわかりました。私はそのたった一種類の鳥の為だけに卵を暖めていたんですね？ 何千種もある鳥類の中のたった一種の為だけに」

「何千種ではなく、一万種ちよつとですよ。一万種の中の一つです」

先生はにっこりと笑みを浮かべて私の言葉を訂正してくれた。

その後、私は、クレズメントオオトカゲの生態から歴史 進化の過程から絶滅したと言われるまでの経緯 を延々と聞かされる羽目になった。

途中で何度も睡魔に襲われて意識を失いかけながらも、なんとか地獄の時間をやり過ごして開放されたのは日が傾き始めた頃だ。もちろん先生の講義なんて、ほとんど頭に入っていない。

私は先生に押し付けられた絶滅種データブックを抱えて、自分の部屋へ帰ろうと長い廊下を歩いていた。私の足下では黒いトカゲが必死についてこようとして短い足をせわしなく動かしている。

私が足を止めて屈みこむと、黒いトカゲも足を止めて私を見上げた。

「お前も可哀想に……いい加減な名前までつけられて」

トカゲは小首を傾げて私を見上げた状態で固まっていた。その黒

い瞳には疲れきった私の顔が映っている。

「名前をつけてあげなければなりませんねえ」

先生がクレスメントオオトカゲの生態を一通り語った後、見かねた看護婦さんが　もう昼を過ぎていた　持ってきてくれたサンドウィッチを頬張りながら思い出したように言ったのだ。

「クレス、とでも名付けましょうか」

そうして先生は、数秒の間も置かずに黒いトカゲの名前を決めました。

クレスメントオオトカゲのクレス。

幸いだったのはクレスメントオオトカゲという語呂のいい学術名だったことだ。これがイボイノシシならイボに、フンボルトペンギンならフンになっていただろう。

ユキヒヨウにシロと名付けたジャンに負けない程のネーミングセンスの無さに関心しながら、私は頷いた。トカゲには申し訳ないけど、その時にはもう延々と続いた講義に頭がぼうつとして何も考えられなかったのだ。

私は自分の部屋に着くなり、絶滅種データブックを机の上に置くと、解放された両手を軽く振った。分厚く大きいその本は、両手で抱えていても腕が怠くなる程の重さだった。

紙自体の重さだけではなく、薄い銅板を使った表紙が余計な重量を加算している為、もう本というよりも凶器に近い。これで殴られたら重傷を負うこと間違いなし。ここが戦場なら立派に盾としても使えそうな気がする。

借りたはいいけど、とても開く気にはなれない。きつと返却日まで机の上に静かに置かれていただけになるはず。

先生に押しつけられた絶滅種データブックから視線を外すと、机の引き出しを開けた。文具やらヘアピンやらの雑多なものが詰め込まれた引き出しを、一枚のカードを探してかきまわす。

「あれ？ ないなあ……。ここに入れといたと思ったんだけど」

ちゃんとしらべておけばよかったと後悔しながら、今度は壁際のコートかけに掛けておいた制服のポケットを探った。手に固い物が触れる。

「あつた！」

私はそれをポケットから引っ張り出した。

手にした小さな白い一枚のカードの中央には、十字架に巻きつく竜の姿が金色で浮かび上がっている。クレスメント学園の学生証だ。空いた方の手をカードにかざすと、金色の竜が消えて、代わりにいくつかの絵が浮かびあがる。その絵の中の一つ、伝書バトを軽く指で叩くと、絵が消えて文字が浮かび上がった。

新着メールはありません

後でクレスメントオオトカゲの飼育法を調べて送ります、と言っていた先生からのメールはまだきていないらしい。

絶滅した生物の飼育法なんてどうやって調べるんだろう？ 気に

はなるけど、それよりも今はシャワーを浴びたい。よく考えたら一昨日の夜から顔も洗っていない。

私は学生証を制服のポケットに突っ込むと、そのまま制服を手を取って洗面所へと向かった。ついてきて一緒に入ろうとするクレスを追い出して洗面所兼脱衣室の扉を閉める。服を脱ごうとした時、カリカリと扉を引っ掻くような音が聞こえてきた。

「連れてきましたよおーっと」

クロードが怠^{だる}そうに扉を叩きながら声をかけると、

「開いている。入れ」

室内からは素っ気無い返事が返ってきた。

「はいはい」

「お邪魔しまー……」

私は慣れた様子で扉を開けて中へ入ったクロードの影から室内を覗き見て、思わず言葉を失った。あまりの惨状に。

部屋の間取りは予想していた通り、私やアルマの部屋と同じだった。狭い長方形の部屋の奥には窓が一つ。壁際には備え付けのベッド。反対側の壁際に小さな机と椅子。

そして、扉を開けてすぐのところにはステンドグラスのはめ込まれた扉がある。この扉の向こうには洗面所兼脱衣所と浴室、トイレがあるはずだ。

「あの……入っちゃっていいの？」

私は躊躇^{ちゆうちゆう}せずに室内に踏み込むクロードに声をかけた。彼は部屋のちょうど中央辺りで立ち止まると、私を振り返って苦笑した。

「ああ、床に落ちてんのは、まだ洗ってねーやつだから気にすんな」
そう言う彼の足下には、白いシャツらしき布や黒っぽい布が散らばっている。よくわからない布が広がっていた。思いつきり踏んでいる。

「気にするなって言われても……」

私は床一面に広がる衣類の海の前に、なかなか足を踏み出せずにいた。足の踏み場が無いとはこの事だ。

けないの？ 死の商人って何？ なんでルパートはあんな事をしたの？」

全てを教える　ヴァレリーは医務室で私にそう言った。だから、自分の部屋に來いと。その言葉通りに食堂で皆と別れた私を、クロードが迎えに來た。

彼らは何を知っているんだろう？

ルパートが悪魔を呼び出そうとした理由も知っているんだろうか？

「そうだな……まず、何から話そうか」

逸る^は気持ちを抑えられずに矢継ぎ早に質問した私とは対照的に、

ヴァレリーは静かに口を開いた。

「んー、やっぱり竜についてじゃね？　その子の命に関わる事だしさ

あ

」　クロードがスリッパを脱ぎ捨てて、ベッドに俯^{うつ}せに寝転がりなが

ら言った。

「命にかかわることって!？」

驚いて身を乗り出した私に答えてくれたのは、クロードではなくヴァレリーだった。

「竜を目撃した人間は、失踪したのちに遺体で発見されている」

彼は感情がまるでこもっていない声でさらりと言った。言われた方の私は、その言葉のあまりに物騒な響きに一気に青ざめる。

「……それ、冗談だよな？」

引きつった笑みを浮かべて訊いた私に、ヴァレリーは微笑を返した。天使のような笑みを浮かべた彼の口から紡ぎだされた言葉は、真冬に冷水のシャワーを浴びせられたように私の心を凍てつかせた。「俺が調べたところだと、ここ十年で十三人が、竜を目撃したと周囲に話した後に失踪している。そのうち十日以内に遺体で発見された者が六人。後になって、失踪した付近で身元不明の遺体が発見されたケースが五件だ」

「残りの二人は？」

「まだ見つかっていない」

無事に生きて帰っていてほしいなあ、という私の願いもあっさりと碎かれてしまった。

「ど、どうしたら、いいの？」

「さあ？ 諦めて迎えが来るのを待つんだな」

私の問いにヴァレリーは、その形のいい唇の端に笑みを浮かべて肩を竦めた。

「迎えて？」

大人しく待っていれば助けでも来るのか？

不思議に思っただけで訪ねてみると、彼は浅く腰かけたベッドの端から私の方へと身を乗り出すと、この部屋に入って以来最高の笑みを見せた。それは、無邪気な子供のような笑みだった。彼の唇がゆっく

りと開かれる。

「天国からのお迎え」

「そんな！」

私が悲鳴に近い声を上げた時、

「もう、いいだろ。それ以上虐めると泣いちゃうかもよ、その子」

ベッドの奥の方から声が聞こえた。寝転がって私達のやりとりを黙って聞いていたクロードだ。

彼は私の方へと横向きに寝なおすと、軽く肘を立ててその手の上に頭を乗せて言った。

「まだ、誰にも言つてねーんだろ？ 竜を見たことをさあ」

私はクロードの問いに、少し考えてから口を開いた。

「……ここに来てからは、まだ誰にも。でも、家族とか村の人には話したけど」

「えっ？ 言つちまったの？」

眉をひそめるクロードに、私は泣きたい気分で頷いた。こんな怖いことがあるなんて知っていたら誰にも話さなかったのに……。

「……確か土の大陸、ロートリンデルの出身だったな？ その村の人口は？ 何人に竜のことを話したか覚えているか？」

真顔に戻ったヴァレリーの問いかけに、私は即答した。考える必要がない程の人口しかない村だからだ。

「三十人。みんなに言つて回ったけど、誰にも信じて貰えなかった」

「三十人？ 総人口が？」

眉を軽くあげて呆気にとられたようにこちらを見るヴァレリー。

「そう。総人口が三十人」

私がつっぱりと言うと、彼はベッドについた片手に体重を乗せるようにして、後ろにいるクロードを振り返った。

「すごいな。そんな村つてあるんだな。つーか、村つて言えんのか、それ。集落じゃん」

クロードも寝転がったまま、ヴァレリーを見上げてつぶやく。

私は、そんな二人を「またか」と軽い諦めに似た気持ちで見つめ

た。

故郷の話をする、皆同じような反応をする。

田舎の村なんて珍しいものではないけれど、私が生まれ育った村ほど小さいところは珍しいようだ。そこで十六になるまで暮らしていた私は、「普通」のことだと思っただけに、「普通」では無いと知らされたときは軽いショックを受けた。村は総人口三、四十人ぐらい、町は総人口百人ぐらいだと勝手に思い込んでいたし。

「……いくら死の商人でも、そんな小さな村にまでは潜り込んでいないだろうな」

「その村の存在すら知らねーんじゃね？ 国際魔法取締局も把握してるかどーか怪しいレベルだろ」

「ヴィラールにも、そこまで小さな村は無かったはずだ」

「さすが大国ロートリンデル。史上最小の村まで抱えてんのか」

勝手に史上最小の村にしないで欲しい。もしかしたら、もっと人口の少ない村だって存在するかもしれないのに。

「村のことはいいよ、もう！ それよりも、私はこれからどうなっちゃうの？」

私のことなどすっかり忘れて村の話で盛り上がる二人に声をかけると、ヴァレリーがちよつと笑って言った。

「大丈夫だろう。村の住民から竜の話が漏れることは無いだろうかな。それよりも、これからは誰にも話さないように気をつける」

「なんだか馬鹿にされている気がする。でも、危険が無いならいいや。」

少し釈然とほへまじとしないけれど、彼の言葉に従おう。そう思って頷くと、ヴァレリーの後ろからクロードが声を上げた。

「一応、死の商人についても教えてやった方がいいんじゃないの？」

「どんな奴に狙われることになんのか知つといた方がさあ。ああ、でも知つたところで何が出来るってわけでもねーけど」

「そうだな。巻き込んでしまったこともあるし……」

ヴァレリーは後ろを振り向いて相槌を打つと、私へと向き直った。

「死の商人の名前ぐらいは聞いたことがあるだろう」

ここで知らないと言えば、また笑われそうだった私は、何も言わずに適当に流すことに決めた。

本当はヴァレリーに呼び出されて疑いをかけられた時に、初めて耳にした名だった。

竜の秘密 3

死の商人の正式名称はサマエル商会。

武器や傭兵、奴隷を主な商品として扱っている組織だ。

こういった「商品」を扱っているのは、サマエル商会だけでは無い。驚いたことに、強力な魔法を込めた武器も奴隷も、国際魔法取締局は合法として認めているらしい。

でも、死の商人の異名を持つのはサマエル商会のみだという。なぜなら、サマエル商会の「商品」は、他の武器商人のそれとは違い、非合法のものばかりだからだ。

禁術に指定されている魔法を用いた兵器、クレスメント学園の卒業証書を持たない魔法使い、薬漬けにされて意志を持たない人形のようになった奴隷……。それらの中でも一番の「商品」は暗殺の請け負いだった。

死を司る天使の名　サマエル　を掲げた一流の暗殺者集団。
それが死の商人、サマエル商会だった。

これが、私がヴァレリーから聞いた死の商人の簡単な説明だった。でも、わからない……。

なぜ、彼らが竜を見た者の死と関わっているのか？

なんで竜の姿を見ただけで殺されなければいけないのか？

「……わからない」

思わず漏らした私の言葉に、クロードが呆れた声を上げた。

「マジで？　すげー簡単な説明だったじゃん」

「そうじゃなくって。死の商人のことは分かったけど、なんで竜を目撃したら死の商人に狙われるの？　竜は神の使いでしょ？　神の使いと暗殺者にどんな関係があるっていうの？」

創世記には一匹の白い竜

クレスメント

が自らを犠牲にし

て人々を神の怒りから救った、と書かれている。

紀元元年、神は魔の力を手にした人間を滅ぼそうと地上を水で満たした。その時に魔力を持たない人間と動物達を箱船に乗せ、別の世界へと避難させた。

一方、地上に残された魔力を手にした人間は、当初は魔力を駆使して支え合い空へと逃れたが、四十日間続いた大洪水の前に力尽きて地上へと落ちていく者が現れ始めた。

その姿を哀れに思った一匹の白い竜が、自らの姿を島へと変えて人々を救った。

神は自らを犠牲にし、さらに主の意思　魔の力を手にした者を滅ぼすこと　に逆らってまで人間を救おうとした竜に免じて、地上から水を引いた。

人々はその白い竜に感謝し、竜が島へと姿を変えた年を紀元元年と定め、神だけではなく白い竜にも祈りをささげるようになった。

それがクレスメント教と新暦しんれきの始まりであり、竜が姿を変えた島が、ここクレスメント島だと言われている。

それ以来、竜は新暦二千三百年ごろに絶滅するまで神の使いとして崇拜すつぱいの対象とされていた。

「それは、わからない。なぜ彼らが竜を見た者の口を封じようとするのかは、まだ俺たちにはわからないんだ」

ヴァレリーが、目を伏せて呟くように言った。

その声音は静かで単調だった。けれど、体を支えるためにベッドについた左手は強くシーツを握りしめていた。彼の悔しさを表すかのように。

彼は顔を上げずに続けた。

「ただ、これだけは言える。竜を見た者の失踪には、死の商人が関わっている」

「理由もわからないのに、なんで関わってるってわかるの？」

「失踪した人間の中には平民だけではなく、王侯貴族も含まれてい

るんだ。平民なら死の商人の前に為す術をもたない。だが、権力と金と武力を持つ彼らは違う。身内が失踪したとなれば、私兵や傭兵を掻き集めて搜索するだろう？ その搜索の網を抜けられず捕まった者が何名かいるんだ」

そこまで言つて、ヴァレリーは伏せていた顔を上げた。その顔からは、さつき一瞬だけ見せた苦渋くじゅうの気配はまるで感じられなかった。「捕まった、の？ だったら目的もわかるんじゃない……」

「そう簡単にはいかないんだ。たいがいの場合、死の商人は捕らえられた直後に死んでいる。仲間がすぐに口を封じるからな。だから、彼らからは何も証言を得られないことが多い。残されるのは、死の商人が関わっていたという証の赤い蛇の刻印を持つ死体だけだ」

赤い蛇の刻印。

そういえば、私が死の商人じゃないかって疑われた時にヴァレリーが言っていた。

死の商人の構成員は体のどこかに刻印を入れて……。

「まあ、そういうわけで謎に包まれた組織なんだよなあ。国際魔法取締局が公表してる情報だってさあ、一世紀近くもかけて、死の間際に聞き出した証言を集めて繋ぎ合わせた情報だって話だし」

飽きてきたのか、傍にあつた枕を叩いたり、転がしたりしていたクロードが口を挟む。

「今、死の商人についてわかっていることは、構成員は体のどこかに赤い蛇の刻印を持つこと。トップはサマエルの名で呼ばれていること。そして、仕事は必ず二人一組で行うこと。これは、お互いがお互いを監視し、失敗した者を始末する為らしい」

「そうそう。それで、竜を見た奴を拉致して殺すこと。なんでかはわかんねーけど、竜が絶滅してないっつーことが広まっちゃヤバいんだろな」

「二人も、竜は絶滅してないと思ってるの？」

私が子供の頃に出会ったあの生き物は、間違いなく竜だったと思う。

竜について記された古い文献ぶんげんを調べていくうちに、その思いは憶おく測そくから確信へと変わっていった。

「ちよっと調べただけで、十年のうちに十三人の目撃者が出てるところがわかったし。竜を見て殺された奴を全て調べるなんて無理だろーから、実際に殺された人数はもっと多いだろうな。それに……」
クロードは話の途中で言葉を濁した。彼は困ったような、戸惑うような表情を浮かべてヴァレリーの後ろ姿を見つめた。

「失踪した十三人の中には俺の妹も含まれているからな」
なんとも言えない表情で口を噤くぐんだクロードの言葉を引き継いで、ヴァレリーが静かに言った。

「死の商人、か……」

私は薄暗い部屋の中で、天井を眺めながら、ぼつりと呟いた。

自分の部屋に戻ってベッドの上に寝転んでみても、なかなか寝付けなかった。

色々なことがありすぎて、どうしていいのかわからない。それに私に出来ることなんて何も無いような気がして、それがもどかしかった。

「失踪した十三人の中には俺の妹も含まれている」

そう言ったヴァレリーの瞳には、なんの感情も浮かんでいなかった。彼は静かな声で淡々と、六年前に起こった出来事を聞かせてくれた。

それは、ヴァレリーの妹が父親の狩りについて行った時に迷子になったところから始まった。

幸い、すぐに発見されたけれど、その時に竜に会ったらしく「竜を見た」と喜んで周囲に話していた。彼女の話信じる者は誰もいなかった。ヴァレリー自身も、大きな猪か何かを見間違えたんだろうと思っていた。

でも、彼女は竜を見たと言った日から一週間ほど経ったある日、ヴァレリーや皆の前から忽然と姿を消した。そして、その三日後に近くの湖で遺体となって発見されたのだ。硬直して固まった右手に、一枚の竜の鱗を握りしめたまま。

竜の鱗は今でも市場に出回っている。けれど、たった六歳の少女が手にできるような物ではなかった。竜が絶滅する前は旅のお守りとして安価で売られていたと言われているけど、今では希少価値がついて高額で取引されているのだ。

眉一つ顰めることもなく、ヴァレリーは語った。まるで人伝に聞

いた話を語るかのよう。

その姿を見ていると、胸が締めつけられるような思いに襲われた。妹の死に悲しみも憤りも感じなかったとは思えない。だって、彼は今でも竜と死の商人について調べているんだから。

なのに、その感情を一切表に出さないなんて。ここまで冷静に辛い思い出を語ることが出来るなんて。

私には無理だ。

もし、妹のリリアが殺されたりなんかしたら、何年経ってもその時のことを語るのは辛いと思う。その感情を一切見せずに話すことなんて出来そうにない。

「はあ、だめだ……寝れない……」

暗闇の中にじっとしていると、気付けばヴァレリーの事を考えてしまう。

彼の何かを諦めてしまったような、愁いを帯びた表情が鮮明に浮かんできて苦しくなる。

私は寝返りを打つと、脇腹辺りにぴったりとくっついて寄り添って寝ていたクレスを、抱きかかえるような格好で横になった。

よく考えたら昨日は丸一日寝てたんだ……。眠れなくて当然かも。

何も考えないようにしようと、クレスの寝息に耳を澄ます。クレスの体温と、規則正しく繰り返される微かな寝息を感じているうちに、私の意識もゆっくりと眠りに落ちていった。

「悪い。そっち押さえて」

リュカの声にグルドが無言で頷いて、鉄の固まりを両手で押さえる。それを確認すると、リュカが兜かぶとの形をした鉄の固まりを外側から金槌で叩き始めた。

カンカンという少し控え目な金属音が続いていたけど、不意に一ひと際大きな音が響いた。

「あつ！」

兜を押さえていたグルドが、もうこれで四度目になる驚きの声を上げた。

「ああ……」

リュカも同じく四度目になる落胆の声を漏らす。こちらは回数を重ねるごとに、声は小さくなり、悲哀の色も増していた。

「ああ〜」

私も兜を覗きこんで、つられて落胆の声を漏らした。

リュカが叩いていた兜は外側から内側に向かつて、なかなか目立つ窪みが出来ていた。この窪み、彼が叩く前は内側から外側に向かつて窪んでいたのに……。

叩いては反対側に窪み、更にそれを叩いては元に戻る、ということをもう四回も繰り返している。それに、いくら元に戻ると言っても完全に元の状態に戻るわけじゃない。兜は、こんなことを繰り返しているうちに、修理する前よりも明らかに酷い状態になっていた。

「あーああ、この調子だと夜中になっても終わんないね〜」

私の隣でミケーレが、抱えていたタイガーを慎重にクレスの上に乗せながら言った。クレスの下にはローが大人しく座っている。

ミケーレの前には雪原オオカミとクレスメントオオトカゲと猫で作られた動物積み木が出来上がった。

「っせーな！ 嫌ならついて来なきゃよかっただろ。俺が手伝いを頼んだのはグルドだけだ。なんでお前らまで来てんだよ？」

リュカが吐き捨てるよう言って、こちらを睨んだ。

「なんとなく」

「他にすることねーし、暇だったから」

苛立ちを隠さずにこちらを睨んだリュカに、私とミケーレは一瞬顔を見合わせてから呟いた。

「……俺は暇つぶしの見世物じゃねーよ」

リュカは、そんな私達を苦々しい顔で見ながら言うと、無残な姿

になってきた兜へと向き直った。

私たちは今、火の館に併設されている武具の工房に来ている。工房とは言ってもクレスメント学園の工房は、実際に武具を製造する場所ではなく、簡単な修理をする施設だ。

主に戦闘魔術学の生徒が、授業で破損した武具を修理する為に使っている。今も、ここで金槌を叩く規則的な音が響いていた。何故こんな場所にいるのかというと、悪魔召喚騒ぎの時に食堂でリュカが手にしていた剣が原因だった。

あの時、リュカが勝手に拝借した剣は、食堂の扉の隣に飾られている年季の入った鎧兜が手にしていた物だった。その剣を無理やりもぎ取ったときに鎧兜が倒れて、その拍子に兜にちよつとしたへこみが出来てしまったそうだ。

その責任を取らされてリュカが自分で修理する羽目になり、先程から火の館の工房で悪戦苦闘しているところだった。

リユカは四度目の失敗にすっかり意気消沈して、目の前の兜を暗い目で見つめていた。それをグルドが励ましている。

そんな二人の姿をぼんやりと眺めていると、ある疑問が頭をかすめた。私は二人から視線を外すと、動物積み木へと向き直ったミケールに声をかけた。

「あの兜って、ガイアで実際に使われてたんだよね？」

「前の学園長のコレクションなんだから、そうなんじゃね？ ガイアマニアだったって話だし、金持ってそうだからレプリカなんか買わなそうだし」

彼はクレスの右手を少し持ち上げながら答えてくれた。ミケールが手を離すと、クレスは置物のように右手を少し上げたまま固まった。クレスの下では、ローが右手を少し上げて「お手のポーズ」をとって大人しく座っている。

ガイア 創世記に記されている大洪水の際に、神が魔力を持たない人間を箱舟で避難させた先の世界のことを私たちはこう呼んでいた。

ある年代までは、一般人でも許可さえ取れば自由にガイアへと行けたらしい。古い書物の中には、ガイアの旅行記やガイアの風習について書かれているものも多い。本当か嘘かはわからないけど、ガイアツアーなんてものまで企画されていたという話もある。

さらに、移住も自由だった。

こちらからガイアに移住する者もいたが、ガイアからこちらに移住する者の方がずっと多かったそうだ。何故か私たちの住むエデンは、ガイアでは天上の楽園と呼ばれていて、その為に戦乱に追われた人たちがこぞってエデンを目指したらしい。

エデンに辿り着いた人たちが、ガイアとほとんど変わらない世界

を見て何を思ったのかはわからない。ただ、彼らは同郷の者たちで集まり、四つの大陸に自分たちの故郷と似たような国を作り上げていった。そして、エデンの民と交わり、この地の住民となっていた。

それが、ある年代を境に一般人がガイアへ行くことは禁じられてしまい、ガイア側に作られていた魔法陣も壊されてしまった。

ガイアで魔女狩りが横行し始めたのが原因だとも、当時ガイアで猛威をふるった黒死病が原因だとも言われているけど、詳しいことはよくわからない。

今ではガイアへ行くことが出来るのは、国際魔法取締局の許可を得た一部の研究者と商人のみで、ガイア側からエデンへと来る手段は無いそうだ。エデンへと帰る為には、こちら側から呼んで貰うしか無いらしい。

その為、ガイアから持ち込まれた商品には高値がつく。それに付け込んで紛い物売る者が出てくるのは世の常で……。

「ちょっと落としたりぐらいで変形しちゃう兜なんて戦場で使えるのかな？　なんか薄っぺらいし、あれ」

私が兜を指して言うと、

「あ、リリースもそう思った？　おかしいと思ってたんだよなあ。そんなに簡単にポッコボコになるなんてさ。まあ、戦場で使う為じゃなく儀式用の装飾品として作られた物もあるらしいけど、あれは装飾品にしては地味すぎるよね」

ミケールが今度はタイガーの右手を持ち上げたまま、私の方をちらりと見て笑みを浮かべた。

「やっぱり、あれって……」

「そう、間違いなく……」

私達はお互いを指差しあって、同時に言った。

『にせもの!!』

見事に私とミケールの声が一つになって工房に響いた時、

「それを言つな！」

その声を打ち消すかのように、かんはつ間髪をいれずリュカの声が上がった。

私とミケーレが彼の方を見ると、リュカは目の前の兜を見据えながら呟いていた。

「とつくに気づいてんだよ、これが偽物だつてことぐらい。だからつて直さないわけにはいかねーだろ。学園長の命令なんだからさあ。なんの価値も無い鉄屑だつてわかつてても……」

そこまで言つて、リュカは大きく溜息をついた。

「苦労して直したところで、ただの粗大ゴミの一部なんだよな、これ」

気まずい沈黙が流れた。

グルドが非難するような目でこちらを見る。

この場の重苦しい空気をどうしようかと思つてみると、ミケーレが苦笑しながら口を開いた。

「俺が代わるよ、リュカ。どーせ暇だし」

そう軽く言つて兜を手にしたミケーレを、リュカが訝しげな表情で見上げた。

リュカが何を思ったのか言葉にしなくてもよくわかる。ミケーレにまかせて大丈夫なんだろうか？ そう思っているはずだ。私だつてそう思うもん。

「信用ないなあ。大丈夫だつて。失敗しても、それ以上酷くなることは無いし。それに、リュカが続けてても元に戻すのは無理でしょ」
リュカはミケーレの顔と、手の施しようが無いほどに変形した兜を見比べていたけれど、やがて諦めたのか立ち上がった。

「ああ、リリス。その作品はまかせた」

リュカがさつきまで座つていた椅子に手をかけながら、顎で何かを指し示したミケーレ。彼の視線の先を追うと、そこには動物積み木の姿があった。

これを……どうしろと？

忠犬のようにお手をし続けるロー、もう限界なのかプルプル震えているクレス、既に右手を下ろしてクレスの上で器用にバランスを取り毛づくろいをしているタイガー。

私と目が合うと、ローは何かを訴えるかのようにじっと見つめてきて、クレスは悲しげに鼻を鳴らした。

「フレデリック！ ちょっと、こっちも手伝ってくんない？ その火の魔法でさあ、ほんのちょっと温めてくれると助かるんだけどー」

ミケーレが誰かを呼ぶ声を聞きながら、私はタイガーを抱きかかえた。早く下ろしてあげないと、クレスが力尽きて落ちてしまいうだったから。

「はあ……。せつかくの夏休みだったのに、なんでこんな目に……」
リュカが壁際に無造作に積んであった椅子の一つを持ってきて、
私が座っていた椅子の隣に置いた。

工房は間仕切りのない広い一つのフロアになっていた。床には明るい灰色の人口大理石が敷き詰められ、机や椅子は入り口から見て右側の壁際に積み重ねられていた。反対側の壁際には工具が押し込められた棚が並んでいる。

「夏休みなんだよね。……どこにも行けないけど」

私はタイガーを床に下ろして、クレスを抱き上げながら呟いた。
クレスはびつたりと私に抱きついてきた。ちよと疲れたようだ。

「一般科目の学期末試験が延期になったのだけは助かったけどな」
独り言のように呟いた私の声に、リュカが椅子に身を投げ出すようにして腰かけながら答えてくれた。

ルパートが悪魔を召喚しようとした事件は、私が考えていた以上に大事だったようで、あの日以来学校は休校になっていた。

私たちが悪魔の召喚を止めた日　私が医務室で寝ていた日
などは、それぞれの館から出るのさえ禁止されていたらしい。その翌日にはすぐに学園内を自由に歩きまわることが許されたけれど、学園内から外へ出ることは今でも禁止されたままだ。

そして、あの事件から五日たった今日。全校生徒に向けて重大なお知らせが、伝令くん　クレスメント学園で情報伝達のバイトをしている派手な鳥　から伝えられた。

私たちのところへもシツクが重大なお知らせを伝えに飛んできた。彼は昼食後に食堂でお茶を飲みながら、特にすることもなく、学園長室へと呼び出されたリュカを待っている私たちの真ん中へ降り立つと、早口でまくし立てたのだ。

「オシラセ、オシラセ。チチツ。キヨウカラ、ナツヤスミ。チヨツト、ハヤーイ、ナツヤスミ。キュツ。キカン、シチガツ、ノ、ジューカラ、ハツチガツ、ジューク。ガツキマツシケン、エンキ。ナツヤスミアケ。ピピイ〜ピツ」

いくら事件の捜査が長引いても夏休みが終わるまでには解決するだろう。その時に、ルパートはどうなってしまうだろうか？ 今も、一人で何を思っているんだろう？

「ねえ、ルパートはどうしてるかな？ リュカは学園長室に行ったんでしょ？ 会えなかった？」

私はクレスを抱いたまま椅子に腰を下ろすと、リュカの顔を覗き見た。

「会えるわけねーだろ。重要参考人だぞ。国際魔法取締局の制服着た奴らがいっぱい扉の前に立ってる部屋があったから、たぶんそこにいるんじゃないの？」

「そうだよ。どうしてるんだろう？ 今頃……」

まだ学園内にいるということは、ルパートが何故悪魔を召喚しようとしたのが分かっていないってことなのかもしれない。あの時のルパートの様子は明らかに変だった。ヴァレリーも誰かに利用されているんじゃないかと言っていたし……。

もしかしたら、国際魔法取締局もルパートを利用して人間を探しているのかもしれない。私のところへもテオドルさんとロベルトが訪ねてきたしなあ。あれ以来、会ってないけど……。

「お前が暗い顔してても仕方ねーだろ。なるようにしかなんねーよ」
「知らず知らずのうちに俯いて塞ぎ込んでいた私は、リュカの声に顔を上げた。」

彼はミケーレとグルドの方を見たまま続けた。

「俺たちにできるのは、何か聞かれた時にありのままを答えることくらいだ。後は国際魔法取締局の仕事だろ。俺たちには何もできやしない」

「そんなの、わかってるけど……」

彼の言う通りだ。私には何もできない。

でも、こうなる前には何かできたんじゃないか、と思うとやりきれない気持ちでいっぱいになった。

あの日、彼と最後に別れたのは私とミケーレだった。もしかしたら、あの時点でルパートの様子におかしなところがあつたかもしれない。それに気付いてあげられていたなら、彼を止めることもできたかもしれない。

「……っわ！」

ふいに、頭に手を置かれてグシャッと髪をかき乱された。

「ちよつと、リュカ！」

「だから暗い顔すんなって」

私が頭の上に置かれた手を振り払って睨むと、彼は悪びれた様子もなく言った。私の方を見ようともしないで。

「ほつといて！ 私がどんな顔してようと関係ないでしょ」

「関係あるんだよ。お前から暗い負のオーラが流れてきて、こっちまで感染しそうだ」

「人を病原菌みたいに言わないで！ それに、なんで私の方を見てもないのに、暗い顔してるって分かるの？ 適当な事言ってるだけじゃない！」

私はさっきのお返しにリュカの頭を両手で鷲掴みにすると、髪を思いきりかきまわしてやった。彼の赤みの強い茶色の髪が窓から差し込む光を受けて、炎のように赤く煌めいて美しかった。思わず見とれて手を止めてしまう。

「お？ やったな」

私が手を止めた隙にリュカが振り向いた。その目には悪戯っぽい笑みが浮かんでいる。

嫌な予感がして私が椅子から立ち上がるうとするより早く、彼の手が私の腕を掴んだ。そのまま空いた方の手を私の頭へとのばすと、案の定、髪をぐしゃぐしゃにかきまわされた。

「つや！ ちょっと、やりすぎ！ やりすぎだつてば！」

私も掴まれていない左手で、なんとかリュカの手を振り払おうとする。でも、頭の上の様子なんて見る事ができない。私の手は器用にすり抜けるリュカの手に触れることもできずに、むなしく宙を払うばかりだった。

そうこうしていると、呆れた声が頭上から降ってきた。

「何やってんの？ お前ら……」

私とリュカはほぼ同時に手を止めて、上を見上げた。目の前には怪訝な表情を浮かべて見下ろすミケーレと、疲れた顔をしたグルドが立っている。

ミケーレの手には、偽物の疑惑がかけられている兜が抱えられていた。それは、先程まで無残な状態になっていた物とは思えないほどに見事な曲線を描いていて、まるで新品のようだった。

「それ……どうやって？」

リュカが信じられない物を見るような眼で、ミケーレが抱える兜を見つめた。

「ああ、ちょっと温めて加工しやすくしてから、後は地道に叩いただけ」

「叩いただけって……。早すぎない？ リュカはあんなに苦労したのに……」

私も乱れまくっている髪を手櫛で一生懸命に整えながら口を開いた。

「こーゆーの得意だったから。行商人のキャラバンで育ったからさあ、昔はよく手伝ってたんだよね」

ミケーレは事もなげにそう言うと、兜をぼんつとリュカの方へと放った。

「お、おい！」

リュカが慌てて兜を受け止める。また床に落としたりしたら、振り出しに戻りかねないから必死だ。

無事に兜はリュカの手の中へと納った。それを見届けると、ミケ

ーレがタイガーを抱き上げながら言った。

「じゃ、俺はこれで。四時から約束があるんだよねー」

「……ああ、助かったよ。ありがと」

なんだか妙に楽しそうに帰って行くミケーレの後ろ姿に、リュカが戸惑いながらも声をかける。

「約束って……なんだろ？」

ひらひらと片手を振ってリュカの声に答えるミケーレの後ろ姿を見ながら、誰にもとなく訊くと、

「医学部の生徒に女の子紹介して貰うんだって言ってたけど……」
グルドがぼつりと呟いた。

ミケーレが出会いを求めていそいそと工房を後にしてから、私たちも工房を出てそれぞれの場所へと向かった。

リュカはすっかり元の姿を取り戻した兜を手に学園長室へ行くと言っていたし、グルドは置いてきた金魚のマリアが心配だから部屋へ戻ると言っていた。

私もグルドと一緒に土の館へ戻ると、彼にクレスを預けてからエレザの部屋を訪ねることにした。図書館へ行くために。

工房を出た時に火の館の大時計を見上げると、時計の針はまだ三時を示したばかりだった。夕食までには時間がある。どうやって時間を潰そうかと考えている時、アール先生に押しつけられた絶滅種データブックのことを思い出したのだ。

あれを図書館に返すついでに何か本でも借りよう。そう思い立って、私はグルドにクレスを預かって貰った。

後は、部屋で学期末テストの為に勉強をしているエレザを誘って図書館に行くだけだ。未だに一人で図書館内を歩ける自信がない私には、案内してくれる人が必要だった。学園内でさえ普段行かない場所を一人で歩くのは不安なぐらいだ。

そろそろ休憩でも入りたい気分になつてるといいんだけど……。

私は遠慮がちにエレザの部屋の扉を叩いた。返事は無い。

「エレザ、いる？」

もう一度、今度はさっきよりも強く扉を叩いて声もかけてみる。それでもやっぱり中から返事は無かった。

ずっと部屋に籠っていると疲れるから、気分を変えるのに自習室にも行ったのかな？

私は一度自分の部屋に寄って絶滅種データブックを持ち出すと、二階にある自習室へ行ってみることにした。

階段を下り、二階の廊下を自習室へと歩いていく。

二階の廊下は、夏休みなのに学園内から出られないせいで暇を持って余した生徒で溢れ返っていた。本を抱えて自習室へと急ぐ者。廊下の壁に寄り掛かって立ち話に興じる者。ふざけ合って廊下を走っていく者。

生徒数の少ない土の館でさえこの賑わいぶりなんだから、火の館なんて歩くのもままならない状態かもしれない。館の外にある工房でさえ、場所が空くのを待っている人がいたぐらいだし。こういう時だけは土の館の生徒で良かったと思う。

土の館の良さを再認識しながら廊下を歩いていると、自習室の方から見覚えのある生徒が出てくるのが見えた。あの珍しい銀色の髪は間違いなくヴァレリーだ。

「ヴァレリー！」

私が声をかけると、彼は何故か弾かれたようにこちらを振り向いた。

「何してるの？」

「いや……なにも……」

私が無気なく聞いた一言にも口ごもる。なんか怪しい……。

「それより、リリースこそ自習室に何か用でもあるのか？」

怪しまれていることに気付いたのか、ヴァレリーは無理やり話題を切り替えようとするかのように問いかけてきた。

何を聞いてもはぐらかされるだけだ。そう思った私は、自習室にエレザがいたかどうかを尋ねることにした。

「自習室にエレザがいなかった？ 金髪で空色の瞳のかわいい子なんだけど」

「いつも一緒にいる子か？ 見かけなかったと思うが……」

「そっか……」

どこに行っちゃったんだろう。他にエレザが行きそうな場所ってあったら……図書館ぐらいだ。図書館へ行ったとなると、夕方まで

は帰ってこないだろうなあ。だいたい早く帰ってきたところで、もう一度図書館へ行こうだなんて誘えない。

今日は諦めようかと思った時、とても簡単な事に気がついて、無意識のうちに伏せてしまっていた顔を上げた。ヴァレリーと目が合う。

何も案内してくれる人はエレザじゃなくてもいいんだ。

「今から何か用事ある？」

「……別に」

私の問いにヴァレリーは少し身を引きながら答えた。きっとこの時の私は、貰ったプレゼントを開ける前の子供のように、期待に満ちた瞳で彼を見つめていたんじゃないかと思う。

「じゃあ、図書館に行かない？ ね、いいよね？」

「図書館？ 構わないが、なんで急に……」

「よし、決まり！」

私はヴァレリーの気が変わらないうちに図書館行きのゲートをくぐってしまったおうと思っ、彼の手を強引に引いて図書館へと向かった。

もう、早く絶滅種データブックを返してしまいたかったのだ。この無駄に大きく分厚い本は、机の上に置いてあるだけでも邪魔だった。

勉強しようと思えば、机の半分を占拠しているこの本をどこかに移さなければいけないし、かといって他に置く場所もない。机を使う度にベッドに移し、また机に戻すという面倒な作業をこれ以上繰り返したくなかった。

「なんで？　なんで戻ってるの？」

「確かに地図の表示通りに歩いてきたはずだ……どういうことだ？」
私とヴァレリーは一枚の小さなカードを覗き込んで途方に暮れていた。

私が手にしたカードは図書館に入館する際に必ず手渡される物で、これ一枚で蔵書検索も館内のナビゲーションもしてくれるという便利な物だ。

今、そのカードには館内の地図と、赤い小さな点が表示されている。この赤い点はカードを持つ者の現在地を示していて、カードを持った者が移動すると赤い点も一緒に移動する。

ただ、少し時間がかかるのが難点だった。現在地を確認したい時は、数秒立ち止まって待たなければならない。歩きながら確認することができないのだ。

その数秒が私たちを悩ませていた。少し移動して立ち止まって位置を確認した時には、行きたかった場所とは全く違う場所にいるのだ。

「本当に合っているのか？　そのカード」

ヴァレリーが眉を顰めて、懐から一枚のカードを取り出して地図を表示させた。

待つこと数秒。ヴァレリーが手にしたカードに赤い点が表示される。

そのカードと私の持つカードを見比べて見ると、

「同じ場所みたい……」

「合ってるのか……」

二枚のカードに表示された赤い点は、地図上の同じ場所で点滅していた。

「もう、こうなったら誰かに道を訊くしかないよ」

「訊いたところで、地図を見ながら迷ってる奴に道を教えられる人間がいると思うか？」

それもそうだ。しかも、私たちが見ているのは普通の地図じゃない。ご丁寧に現在地まで表示されるのに、目的地に辿り着けないのだ。

「そうだ！一緒にクレスメント学園のゲートまで行ってもらえば……」

「ゲートまで？見知らぬ人間に、ここからクレスメント学園のゲートまで案内させるつもりか？」

「そ、そうだよ。いくらなんでも悪いよね」

いい案だと思ったんだけど、ヴァレリーに溜息まじりに言われて思い直した。

今私たちがいる場所は、図書館の最深部に近い場所だった。ここからクレスメント学園へと繋がるゲートまで行くには、五つもの空間移動用の魔法陣を通らなくてはいけない。

さすがに、見ず知らずの人に案内して貰うのは気が引ける。それ以前に、あまり人もいなかったりする……。

「まずは、この3Aの魔法陣まで行くぞ」

ヴァレリーが地図上の魔法陣のマークを指の背で軽く叩いた。彼が指し示す先を見て、私は慌てて口を開いた。

「ちょっと待って。4Dだと思うんだけど……」

「4D？ああ、4Dかもしれないな。どっちでもいい。とりあえず魔法陣まで歩く」

どっちでもいいって……。その調子で、気付けば閲覧禁止のエリアに近い、誰も来ないようなエリアに来ちゃったんだけど……。

正直言って予想外だった。

この学校に私以上の方向音痴がいたなんて！

しかも最悪なことに、この私以上の方向音痴は、私とは違って自覚が無い上に行動力があつた。全く迷っている素振りも見せずに堂

々と歩いて行くので、道を間違っているなんて疑いもしなかった。その結果が、これだ。

誰も来ないようなエリアで、同じ場所を何度も行き来する羽目に陥っている。夕食まで時間があるから図書館に行つて本でも借りようと思つていたのに、もうすっかり夕食の時間になっていた。

「本の返却だけにしておけばよかった」

思わず漏らした呟きに、ヴァレリーが振り返る。

「何か言つたか？」

「な、なんでもない！ えっと……おなか空いたなあつて」

私が慌てて誤魔化すと、彼はじつと私を見つめた。その瞳に浮かんでいるのは……哀れみの色？

「……なに？」

「よし。先にカフェに寄るか。確か……ああ、あつた。6Fと12Bのどちらかに行こう。それまで我慢できるな？」

ヴァレリーは小さな子供に言い聞かせるように言つと、私の頭を撫でた。ガシガシと、粗っぽく。

これと同じような仕草をどこかで見たことがある。それも、毎日のように目にしている光景だ。

私の脳裏に赤毛の少年と白い狼の姿が浮かんた。リュカがローの頭を撫でる時と全く一緒だ……。

私は犬じゃない！

歩き出したヴァレリーの後ろ姿に向かって叫んだ。心の中で、だげど。

「おなか空いた。イチゴチョコクレープが食べたいよお」

明りの消されたメニューの看板を見上げながら言つと、

「悪かつた。二つもあるんだから、どちらかには着くと思つたんだが」

珍しくヴァレリーが素直に謝つてくれた。

あれから魔法陣をいくつも渡って、やっとカフェに着いた時には営業は終了していた。

もちろん、土の館の食堂も夕食の時間は過ぎているはずだ。今ごろは、後片づけも終わってシエフもバイトも帰ってしまっているだろう。

「私と同じ方向音痴だったんなら、最初から言ってくればよかったのに」

私は人気のないオープンカフェの椅子に腰かけながら言った。その声は自分で思っていたよりも冷ややかに響いた。

ヴァレリーだけが悪いわけじゃない。案内して欲しいと連れてきたのは私だし、それに一緒になって地図を見ながらルートを決めてここまで歩いてきたのも私だ。

ただの八つ当たりだ。わかっているのに、空腹と疲労からくる苛立ちを押さえられずに言ってしまった。

「すまない。一人で外出したことなどなかったから、地図さえあれば道がわかると思っていただけだ」

ヴァレリーはそう言いながら、小さな丸テーブルを挟んだ向かい側の席に腰を下した。

てつきり、「勝手に連れてきたのはお前だろう」とか「人のことが言えるのか」とか怒られるとばかり思っていた私は、彼の言葉に驚いて顔を上げた。

「一人で外出したことがない？」

「ああ、どこかへ行く時は必ず供の者がついていたし、学校内ではクロードが案内してくれていたから」

思わず首を傾^{かし}げてオウム返しにヴァレリーの言葉を呟いた私に、彼は何が不思議なのかと言わんばかりに答えた。彼の中では、誰かが常につき従っていることが普通なんだろう。

初めて会った時から、どこかの裕福な商人が貴族の子息じゃないかとは思っていたけど、もしかしたらもっと身分の高い生まれなのかもしれない。どこかの領主の息子とか。

でも、領主の息子だったなら名前にミドルネームと称号がつくはずだ。リュカのように。

リュカの本名はレオンハルト・リュカ・フォン・ルーベンス。ロートリンデル王国ルーベンス領の領主の子息だ。

身分の高い貴族には全く見えないけど、そうなのだ。彼よりもジヤンの方がよっぽど貴族っぽい。

領主の子息には貴族には必ずつけられるミドルネームのほかに、領地の前に称号がつくのが普通だった。土の大陸ならフォンだけど、ヴァレリーの出身地である風の大陸ならドがつくはずだ。

けれど、ヴァレリーには称号どころかミドルネームさえついていない。ということは、私と同じ平民のはず。

「ねえ、ヴァレリーの家って……」

大富豪だったりして。冗談交じりに、そう尋ねようとした時だった。

「なんだ!？」

「わっ! なに? なに!？」

突然、目の前が真っ暗になった。

自分の手元も見えない、自分がどこにいるのかさえ分からなくなつてしまいそんな完全な闇。

その中に急に放り込まれて、私は強い不安に襲われた。両手を自分の腕にまわすと、きつく抱きしめる。

「やだ……なんなの？ ヴアレリー、いる？ ねえ、返事してよお」
ヴァレリーが目の前にいるのはわかつていて。でも、声が聞きたかった。

私だけを残してどこかへ消えてしまったんじゃないか、という馬鹿げた考えが浮かんできて、不安と恐怖に押しつぶされそうになる。「ここにいる。なんだ？ システムエラーか？」

向かいから落ち着いた声が返ってきて、私がほつと息をついた時、「本日は図書館をご利用頂きありがとうございます」

唐突に館内に固い女性の声が響いた。

何も見えないとわかっていても、反射的に辺りを見回してしまう。「当館は午後十時を以て本日は閉館致しました。まだ館内にいらっしゃる方は、そのままお待ちください。明日の開館前に職員が救助に向かいます」

感情の無い女性の声が消えるのと同時に、柔らかなオレンジ色の明かりが館内を満たした。ぼんやりと周囲の様子がわかる程度の明かりだ。

私は緊張して強張っていた体の力を抜くと、オレンジ色の明かりに照らし出されたヴァレリーに声をかけた。

「救助つて？」

「遭難者扱いになつたらしい。閉館とともにゲートも魔法陣も閉じられたから、朝までここに軟禁されるってことだ」

ヴァレリーが手に持ったカードを見ながら苦々しげに言った。そして、無造作にそのカードを、丸テーブルの上を滑らせて私の方へ

と寄りこした。

カードはテーブルについた私の腕に当たって止まった。ヴァレリーが寄りこしたカードの表面には「図書館の利用案内」という大見出しと、その下に箇条書きで注意事項が表示されていた。

そこには閉館時間と閉館後の注意　ゲートと魔法陣の一時通行停止や、照明の消灯と光量の調整など　と一緒に遭難者の救助について書かれていた。

注意書きには、閉館後も図書館内に留まっている人は遭難者として救助の対象になること、遭難者の救助は翌日の開館前の午前六時から午前九時までの三時間の間に行われること、遭難者の現在地はカードの発信機から送られる情報で特定することなどが記されている。

「明日の六時……」

私は呆然とカードを見つめた。

早く帰るつもりだったから、グルドにクレスの食事のことを伝えていない。今ごろお腹を空かせているだろう。

グルドも、そんなクレスを前にして困っているはずだ。悪いことしちやっとな。

悲しげに鳴くクレスと、それを見てオロオロするグルドの姿が目に見えかぶ。

私が手元のカードを見つめながら物思いに耽っていると、ガタガタと椅子を動かすような音が聞こえてきた。顔を上げると、辺りを見回すまでもなく、ヴァレリーが椅子を横一列に並べている姿が目に入った。

「なにしてるの？」

「寝る」

不思議に思っただけで尋ねた私に返ってきたのは、愛想も何もない一言だった。

寝る？

ヴァレリーの行動と言葉に共通点を見つけられずに戸惑う私の前

で、彼は並べ終えた椅子の上に横になった。それを見て、やっと彼が椅子をベッド代わりに使うために並べていたんだと気付いた。大富豪の子息たぶんの割には遅い。

「寝心地は、どう？」

少し興味を引かれて聞いてみた。プラスチック製の白い椅子を六個つなげたベッドの寝心地なんて想像がつかない。よくはないだろうけど。

「最悪だ……」

ヴァレリーは制服のネクタイを片手で外しながら苦笑したらしい。表情は薄暗くてわからないけれど、そう答えた彼の声には苦い笑いが含まれていた。

「自分で確かめてみたらどうだ？」

「いい。私はこのまま寝るから」

椅子のベッドで寝るよりも、このままテーブルに体を預けて腕を枕に寝た方がマシかもしれない。ヴァレリーの誘いを断ると、私はテーブルに乗せた腕に頭をあずけた。

しばらくそうしていると、明かりが消される前にヴァレリーに聞こうと思つた質問を思い出した。テーブルに伏したまま口を開く。

「ねえ、ヴァレリーの家って大富豪なの？ クロードってヴァレリーの侍従か護衛？」

返ってきたのは沈黙だった。

もう寝てしまったのかもしれない、そう思いかけた時、ヴァレリーが小さく呟く声が聞こえた。

「そんなものかもしれない」

ずいぶんと曖昧な答えだった。それに、どちらのことについて言つた言葉なのかさえ分らない。

あまり答えたくないんだろうと思つて、私は別の話題を振るうとした。でも、何も思いつかない。

リユカやミケールとだったら、一日中でも話していられるほど話題に困らないのに。ヴァレリーとは、何を話していいのかわからな

い。

だったら寝てしまえばいい。このまま何も考えずにじっとしていれば、そのうち眠りに落ちるだろう。

わかっているのに、寝たくなかった。何でもいいから会話がしたい。自分でもよくわからないけれど、そんな気持ちに突き動かされるようにして口を開いた。

「じゃあ、家族は？ どんな家族だったの？」

「ほとんど会うことは無いから、あまり記憶にないな
また素っ気ない返事が返ってくる。」

「えつと……なんで、死霊魔術学を専攻しようと思ったの？」

やめればいいのに、また質問をぶつけてしまう。これじゃ、^{なや}煩が
られても何も言えない。

「それは言えない」

予想通りに気のない返事が返ってきた。

「そう、なんにも言えないんだね。もう、いい……」

私には何も教えてくれない。きつと、私なんかと会話したくないんだ。そう思うと、少し胸が苦しくなって、枕にしていた腕に顔を埋めた。

「ヴィラールは、風の大陸の内陸に位置する小国だ。ヴィラールの王都オルディアンは標高が高い山の中腹にあるから、風の大陸にあつても冬は雪が降る」

「えつ？」

なんの脈絡もなく語り出したヴァレリーの声に驚いて顔を上げる。

「あの……」

「……眠れなくて暇なんだろう？ ヴィラールについてなら話してやれる。嫌なら、さっさと寝ろ」

ヴァレリーは決まり悪そうに言って、顔を背けた。

「嫌じゃない！ 教えて」

「……オルディアンは、俺の生まれ育った街だ。あまり自由に市街を出歩くことは許されていないが、年に二度開かれる大市

の時と、聖誕祭のときだけは市街に出ることを許された。子供の頃はそれが唯一の楽しみで……」

私が慌てて先を促すと、ヴァレリーはこちらに向き直って語りだした。相変わらず薄暗くて、どんな表情をしているのかはわからなかったけど、その声からは苛立ちとか面倒くさそうな響きは感じられなかった。どちらかと言うと、故郷を懐かしむような暖かい声音だった。

ヴァレリーが語るヴィラルの王都の話は、私の生まれ育った村や近隣の町とは違う部分が多く夢中になって聞いてしまった。

それに、なによりも彼が自分から話してくれたことが嬉しかった。

「……る。……が来る」

「うう……ん。やだ……もうちょっとねる……」

誰かが私の肩を遠慮がちに揺すっている。私は心地よい夢の世界へ帰ろうと、その手を払いのけた。

私とはあまり似ていない母親ゆずりの金髪の少女が、なおも私を夢から引きずり起こそうと肩を揺すった。

『ほら、朝だつて！ 本当に寝起き悪いんだから。毎朝起こすこっちの身にもなつてよねー』

彼女は頬をほんのりピンク色に染めて、小さく形のいい唇をちょっと尖らせて文句を言った。両手は腰にしっかりと据えられている。私はうつすらと開いた目でその姿を確認すると、布団を抱きかかえるようにして寝返りをうつ。次に起こることを予測して、布団を守る為に。

『ほら、お、き、て！』

ついに彼女は大きく息を吸い込むと、一気に布団を引っ張った。

「発見しました！ 6Fエリアのカフェ『エトワール』に二名！」

「失礼します！ カードを拝見させて下さい！」

「確認しました！ クレスメント学園ゲートより入館。ヴァレリー・ロートレック。遭難者です！」

突然、周囲に大きな声が響いて、私は慌てて顔を上げた。

「ここ、どこ？」

「リリアは？」

自分の部屋で、いつものように妹のリリアに手荒く起こされていたはず……。

何が起こったのか状況が把握できずに辺りを見回すと、冷たい目でこちらを見ているヴァレリーと目が合った。

「一応、人が来る前に起こしたぞ」

彼は私と目が合うと、そう言つて椅子から立ち上がった。

ヴァレリーの姿を見て、やっと自分がどこにいるのかを思い出す。昨日、ヴァレリーと一緒に図書館で遭難したんだつた。

さんざん歩き回つて、このカフェについた時に閉館時間になつてしまつて……。私はここでヴァレリーの話を聞いているうちに寝入つてしまつた。

「お嬢さん？　大丈夫ですか？　体調が優れないようでしたら、すぐに医者呼びますよ」

「い、いえ！　大丈夫です！　カードですよね？」

図書館で遭難して救助されるだけでも恥ずかしいのに、この上医者まで呼ばれたら大変だ。私は心配そうに覗込む図書館の職員さんに慌ててカードを渡した。

「……クレスメント学園ゲートより入館。リリス・エーデルシユタイン。確認しました！　遭難者二名に間違いありません！」

職員さんは私が手渡したカードを確認すると、宙に浮いている小さな丸い玉に向かつて声を張り上げた。

この時まで気がつかなかつたけど、よく見るともう一人の職員さんの顔の傍にも小さな丸い玉が浮いている。玉は片手にすっぽりと収まるぐらいの大きさで、淡い水色の光を発していた。

職員さんが声を張り上げると光る玉は小さく震えて、今度は玉の中から人の声が聞こえてきた。

「ご苦労様です！　それでは、遭難者二名をクレスメント学園のゲートまで案内して下さい。よろしくお願いします」

「了解しました！」

職員さんが返事を返すと、光る玉はもう一度小さく震えた。そして、私たちを先導するようにゆっくりと動き出した。

光る玉と図書館の職員さん二名に連れられて、クレスメント学園

行きのゲートまで無事に帰ってくる事が出来たときは心底ほつとした。

私たちは職員さんにお礼を言って、クレスメント学園へと繋がる魔法陣に足を乗せた。両足が魔法陣に乗ったところで、私の周囲を青い光が包み込んだ。

これでやっと帰れる……。帰ったらシャワー浴びて、朝ご飯を食べに行こう。ああ、その前にグルドの部屋に行ってクレスにご飯をあげなきゃ。

軽く目を閉じて、そんな事を考えているうちに青い光が消えていった。

「リリース！」

「ヴァレリー！」

目を開けると、クレスメント学園の図書館行きゲートには、見慣れた二人の生徒の姿があった。

クレスを抱えたグルドと、もう一人はクロードだ。

「用事は済んだのか？」

「ごめん！ グルド。すぐ帰るつもりだったんだけど……」

ヴァレリーがクロードに、私がグルドにと、それぞれ声をかけた時、受付兼待合室へと続く扉が開いて一人の男性が扉の影から顔を覗かせた。

見覚えのない人だった。でも、彼が身に付けている制服には見覚えがあった。テオドルさんとロベルトが着ていた国際魔法取締局の制服だ。

「ヴァレリー殿下ですね？ 学園長室まで一緒に来ていただけますか？ そちらのお嬢さんも一緒に」

殿下って言った……。よね？ この人、今。

私は思わず隣に立っているヴァレリーの顔を見上げた。

「殿下と呼ぶのは止めて頂きたい。国際魔法取締局の方なら我が国の情勢もご存知ですよ？ 主の素性が知れ渡ってしまうことは避けたいのですが」

ヴァレリーが眉を顰めて口を開こうとするより早く、クロードが国際魔法取締局の制服を着た男に厳しい口調で言った。

まるで別人のように丁寧な言葉がクロードの口から出てきて、今度はクロードの顔をまじまじと見つめてしまう。

「申し訳ありません。では、敬称を付けずにヴァレリーさんと呼びする事をお許し下さい」

「そうして貰えると助かる。それより、何故俺とリリスが学園長室に呼ばれているんだ？」

ヴァレリーの問いかけに、国際魔法取締局の男は下げている頭を上げた。生真面目そうな瞳でまっすぐにヴァレリーを見返すと口を開く。

「貴国の隣国であるカリティア王国の王女が、この学園にご入学されたのはご存知ですね？ 面識もあつたと伺いましたが？」

「ああ、何度か公式の行事などでお会いしたことはある。マリアン又王女だろうか？」

それがどうかしたのか？ というようにヴァレリーはクロードに視線を投げた。国際魔法取締局の男も、クロードの顔を見る。その様子はまるで、貴方から伝えて下さいと言っているようだった。

クロードは二人の視線を受けて 正確には、固唾を飲んで成り行きを見守る私とグルドの視線も受けて ためらいがちに口を開いた。

「それが……お前が図書館でリリスと遊んでる間に」

「遊んでなんかいない」

クロードの言葉にヴァレリーが即座に反論する。

「そうだったな。十六にもなって仲良く二人で迷子になってる間にか」

ヴァレリーは何か言いかけたが、思い直したように口を噤むと無然とした表情で先を促した。

クロードも軽口を叩くのをやめたらしい。小さく息をつくとき、真剣な表情でヴァレリーに向き直って言った。

「その、マリアンヌ王女が亡くなった」

「なん、だって？」

ヴァレリーが息を飲む心配が、隣に立っている私にも伝わってきた。

ミケレの災難 1

一国の王女が亡くなった。

その事件はまだ学園内には公表されていない、と国際魔法取締局の男は言った。そして、詳しい事は学園長室で話す、と続けた。

私には何がなんだかさっぱりわからなかったけど、ヴァレリーにはその説明だけで十分だったようだ。

「わかりました。すぐに行きましょう」

そう言つて国際魔法取締局の男とクロードと一緒に学園長室へと向かった。

ヴァレリーはいい。

なんで自分が呼ばれたのかわかってるんだから。

それに引き換え私はというと……。

「リリース・エーデルシュタインさんですね？ 貴方も一緒に来て頂けますか？」

部屋へ帰ろうと思つていたところを、がっしりと腕を捕まれて有無を言わずに連れていかれたのだ。

来て頂けますか？ 言つたよね？ その割には扱いが酷いと思う。

「あ、リリース。クレスにはアール先生に聞いて、ご飯をあげておいたから大丈夫だよ。帰ってくるまで僕と一緒にいるから安心して」

連行されて行く私の背に、グルドが暖かい言葉をかけてくれた。

私たちは図書館行きゲートを出て、長い廊下を歩き、黄金色に輝く手摺りのついた階段を上って行った。

足を踏み入れたことの無い三階 領主階級から王族階級の生徒たちの寮になっている を過ぎて、さらに階段を上ると一枚の大扉の前で立ち止まった。

他の階は階段を上りきると、踊り場があつて左右に長い廊下がの

びている。

でも、ここは違った。

階段を上りきると他の階よりも少し広い踊り場があり、正面に天井に届く程の高さがある両開きの大扉がそびえ立っていた。

光の館らしく、やっぱり正面の大扉も黄金色に輝いていて、表面には十字架に巻き付く竜の浮き彫りも施されている。すごい威圧感と神々しさに、ただ唾然^{あせん}として扉を見上げてしまった。

私たちが立ち止まると、扉がゆっくりと開いた。誰も声をかけていないのに、だ。

「どうぞ、中へお入り下さい。学園長の執務室までご案内致します」
開いた扉の横に立っていた正装をした初老の紳士が、優雅に礼をして中へ入るように促してくれたんだけど、私は国際魔法取締局のオジサンの腕に抱きついてしまった。

だってその執事風の人、透けてたんだもん。体が！

学園長は元死霊魔術学の講師だったって噂は本当なのかもしれない。

さらに、強力な魔力の持ち主で「再生の秘術」と呼ばれる難しい術もマスターしていて、永遠の若さと不死に近い肉体を手に入れたとかいう噂まである。そっちの噂の真相はどうなんだろう？

私は半透明の執事さんの後について歩きながら、入学式の時に一度だけ見た学園長の姿を思い出そうとした。

遠くから見ただけなので顔までは分からないけど、若い女の人だった気がする。

「こちらです。中で学園長がお待ちです」

私がうつすらと学園長の姿を思い出しかけた時、執事さんが一枚の扉の前で立ち止まった。

また目の前の扉が、ノックもしていないのに自動的にゆっくりと開かれる。私たちを案内してくれた執事さんは、一礼すると陽炎^{かげろう}のように揺らめいて消えてしまった。

「どうぞ。開いてるわよ」

室内から妙に艶っぽく、女性にしては少し低めの声が聞こえてきた。

「失礼します」

私の腕を掴んでいた（今は私の方がしがみついている）国際魔法取締局の男が、私をともなつて室内へと足を踏み入れた。

そこは光の館の共用スペースとは打って変わって、落ち着いた色彩で統一された部屋だった。

壁紙は淡いベージュで、注意深く見なければ分からないけれど、同色の糸で草の蔓をモチーフにしたような刺繍が等間隔のストライプ状に施されていた。窓から差し込む光が当たっている部分だけ、模様が浮きあがって見える。

室内の中央には布張りのソファと木のテーブルのセットが置かれ、白い大理石の床にはゴブラン織の絨毯が敷かれていた。入口から向かって左側の壁は、天井まで届く重厚な造りの書棚に占拠されている。

ゴブラン織の絨毯と布張りのソファ以外は同系色のダークブラウンに統一されていた。そして、複雑な模様の描かれた生地で作られたソファと、花や植物などの模様を編み込まれた絨毯も、多くの色を使用しているわりに、この部屋に自然に溶け込んでいた。たぶん、色のトーンが室内の雰囲気と同じように古さを感じさせるからなんだろう。

向かって右側の方へと視線を巡らせると、古めかしい作りの机と椅子のセットが置かれているのが見えた。

その骨董品店の片隅に置いてあるような机に、黒いドレスを着た女性が浅く腰かけて窓の外を眺めていた。

長く艶やかな黒髪は緩やかな曲線を描いて胸にかかっている。髪のかかる胸元は大きく開き、豊かな胸の谷間が惜しげもなく覗いていた。女の私でもドキドキしてしまう。

体のラインを強調するぐらいにぴったりとしたドレスは、腰の辺

りからは逆に幾重にも重なった生地がふわりとしたシルエットを作
つて足元へと広がっていた。

けれど、どこかにスリットでも入っているのか、複雑に重なった
生地の中から白く長い左脚が覗いている。豹柄の高いヒールがつい
たパンプスを履いた脚は、わずかに組んでいるような形でドレスの
陰で見えない右足に乗せられていた。

「もうちょっと待っていてくれる？ 今、あなたの上司が生徒を一
人連れて戻ってくるから」

彼女はそう言って、こちらを振り向いた。

夜の魔女。

前にルパートが言っていた私と同じ名前を持つ悪魔。そんなもの
が本当に実在するなら、きっとこういう姿なんだろう、と思う。

大きくて僅かにつり気味の猫のような黒い瞳には、長い睫毛が影
を落としている。白い肌に映える深紅の紅を差した形のいい唇には
微笑が浮かんでいた。

「え、ええ」

私たちを案内してきた真面目そうな国際魔法取締局の男が答えた
声は、微かに上ずっていた。

「あら？」

夜の魔女は一瞬宙に視線を彷徨まよわせると、すぐに私たちに向きな
おつて微笑んだ。

「ちょうど大扉を潜くったところだわ。もうすぐ声が聞こえてくるは
ずよ」

彼女の言葉通り、廊下の方から人の声と足音が聞こえてきた。声
は私たちがいる部屋へと近づいてきて、やがて会話がはっきりと聞
こえるようになった。

「ねえ、学園長ってさあ、超人だって噂だけど、どう？」

「ど、どうって？ 何がだ？ そんなことより、お前は自分がなん
で呼ばれたのか分かっているのか!？」

「だーから、知らないってさっきから言ってるじゃん。オッサンさあ、記憶力悪すぎじゃない？」

「誰がオッサンだ！ これでも俺はまだ二十三だ！」

どちらの声にも、すごい聞き覚えがある……。

「着いたようね」

夜の魔女がそう言って腰掛けていた机から身を起すのと同時に、執務室の扉が音もなく開いた。

「ミケーレ！」

「あれ？ リリス？」

開いた扉から現れたのは、ロベルトとテオドルさんに連れられたミケーレだった。

ミケーレの災難 2

「なんで、ミケーレが!？」

私は執務室に入ってきた三人を おもに制服姿の二人に挟まれるようにして入ってきた金髪の生徒を 見て驚きの声を上げた。

驚いたのは私だけではなかったようで、

「リリース? なんで、こんなところにいんの?」

ミケーレも目を丸くして私を凝視した。

「さあ? 自分でもなんで連れて来られたのかわかんない」

「俺も。やたら偉そうなオッサンに無理やり連れてかれてさあ。そちの上司っぽい人も何も説明してくんねーし」

「さつきも言っただろ! 俺はまだオッサンじゃない! それに主任に向かつて『上司っぽい人』とは、なんて口の聞き方だ!」

「すまないね。あの場では他の生徒の目があつて詳しいことは説明できなかつたんだ」

広く見えた執務室も人が増えたことと、私たちが一斉に話し始めたせいで急に狭くなったように感じた。おまけに歴史すら感じるような重厚な雰囲気の内も、特売セールで賑わう骨董品店の店内に一変してしまった。

その賑やかな室内に、場違いな程に冷ややかな声が響いた。

「これで全員揃つたんだろう? 何があつたのか詳しく教えて貰おう。マリアンヌ王女はいつ殺された?」

殺された

その一言が室内の喧騒けんそうを一瞬にして静めた。

私は言いかけた言葉を飲み込んで、声がした入り口の方を振り返った。そこには、扉の横の壁に寄り掛かるようにして立つヴァレリの姿と、その横で所在なげに欠伸あくびをかみ殺しているクロードの姿があつた。

感情がまるで籠っていない冷たい声音で物騒な言葉を吐き捨てた

ヴァレリーは、壁から身を起こすと皆の視線を浴びながら悠然と室内を横切り、ソファに腰を下ろした。そして、足を組みソファの背に身を預けると、黒髪の美女を見据えた。

「殺されたんだらう？ 違うか？」

黒髪の美女はヴァレリーの視線を怯みもせずを受け止めると口を開いた。

「ええ、その通りよ。そんな怖い顔しなくても、ちゃんとテオドルさんが説明してくれるわ。長くなりそうだから皆も適当に座ってちょうだい」

彼女はヴァレリーの言葉をあつさり認めると、私たちにソファに座るよう促した。

私とミケーレも状況が全くわからない者同士お互いに顔を見合わせていたが、他にどうすることもできずに勧められるままにソファへと腰掛けた。

私たち生徒四人が座ったソファの向かいに置かれた一人掛け用ソファ二脚には、それぞれテオドルさんと私を案内してくれた男が座り、テオドルさんの斜め後ろにロベルトが立ってこちらを見下ろしていた。

それを見た私は、隣に座るミケーレの肘をつついた。

「やっぱりロベルトって一番下っ端なんだね」

「器小さそうだしねえ。あれじゃ、出世は厳しんじゃない？」

ミケーレも私の方に顔を寄せて小声で囁く。

「ちょっと会っただけの私たちにさえ『出世できない男』と烙印を押されてしまうロベルト。彼の職場での立場はどうなんだらう？」

嫌な奴とか思っていたけど、なんだか少しだけ彼の将来が心配になっってしまった。

自分が話題にされているなんて思ってもいないだらうロベルトは、黒髪の美女に向かって私たちに対する時とは別人のような口調で話しかけた。

「それでは、事件について説明してもよろしいでしょうか？ 学園長どの」

「がくえんちよう!？」

「うっわぁ。マジで？ 噂以上なんだけど」

驚いて身を乗り出す私とミケーレをロベルトが噛みつきそうな顔で睨む。

学園長と呼ばれた美女は、そんな私たちの様子に苦笑しながら皆を見回した。

「自己紹介がまだだったわね。私は、このクレスメント学園の学園長ルビリア・ストラドリン」

そして、最後にロベルトへと笑みを投げかけた。

「事件について説明して頂けるかしら？ ロベルトさん」

ロベルトは一つ咳払いをすると、私たち生徒と学園長へと視線を走らせてから話し始めた。

「本日の早朝四時二十分頃、光の館三階の寮の自室でカリティア王国第三王女マリアンヌ・リゼット・ペルシエ・ド・カリティア王女の遺体が発見された」

「うわ、名前長っ！」

「なんで貴族って無駄に名前が長いんだろう？」

王様とか領主になるとこれに役職名まで付くって言うんだから、社交界とか言う集まり（よく知らない）で相手の名前を覚えるだけでも大変じゃないのかな？

私は手帳を見ながら一息に言い切ったロベルトを少し見直した。途中で詰まったり噛んだりしないで、すらりと言えるだけでも立派だ。

「第一発見者はマリアンヌ王女付の衛兵、アントワーヌ・ポール。彼の話では、前夜の十一時頃に王女が就寝してから部屋の扉の前で警護につき、その後何者かに襲われて気を失った。意識を取り戻して室内を確認すると、ベッドの上にマリアンヌ王女の血にまみれ

た遺体があつたそうだ。その時に室内の時計を確認したところ、時計の針は四時二十分を指していたと証言している。以上から、マリアン又王女が殺害されたのは前夜の十一時過ぎから今朝の四時二十分までの間ということになる」

そこまで言つと、ロベルトは手元の手帳を捲めくつた。

「室内にはマリアン又王女付のもう一人の衛兵、イザベル・ミュラートルも倒れていた。彼女に外傷は無い。彼女もアントワーヌ・ポールとほぼ同じ証言をしている。そして、室内に侵入し自分を襲つた人間の顔も見ている。もちろん、アントワーヌ・ポールも」

ロベルトは手帳から顔を上げ、ヴァレリーに強い眼差しを向けると、再び口を開いた。

「彼らの証言では、襲つた人間は見事な銀髪と薄青に近い紫の瞳をしていたそうです。これは、今は珍しいエデンの先住民の血を濃く残す者の特徴です。この学園内には貴方しかいないと、事前に学園長より聞いております。ヴァレリー・マティアス・ロートレック・ド・ヴィラール殿下」

ミケーレの災難 3

何、言ってるの？

私はお互いに睨み合うロベルトとヴァレリーを見比べた。

「へ？ 殿下って……。王族ってこと？」

隣ではミケーレがしきりに私のブレザーの裾を引いているが、それに答える気にはなれなかった。

ミケーレには悪いけど、今はそれどころじゃない。

「ちよつと、待って」

私は擦れそうになる声をふり絞り、やっこのことでそれだけ言うと、ロベルトの顔を見上げた。

「ヴァレリーは昨日の夕方からずっと図書館にいたよ。私と一緒に

……」

「ええ、そうなんですよね」

私の言葉に身を乗り出して頷いたのは、テオドルさんだ。

「図書館の入館記録の写しはありますか？ フェランド」

私たちを案内してきた男が、制服の内ポケットから一枚の紙を取り出してテオドルさんへと渡す。

テオドルさんはその紙をテーブルの上に広げた。

「図書館の入館記録には、確かにヴァレリー殿下とリリスさんの名前があります。えー、ここですね。七月十九日十五時二十八分」

今度は私たち 私、ミケーレ、ヴァレリー、クロード が身を乗り出す番だった。皆でテオドルさんが指し示す文字を覗き込む。

「そして、退館時刻ですが……七月二十日、今日の六時五十二分になっています。この記録を見るとヴァレリー殿下が七月十九日の二十三時から七月二十日の四時二十分までの間に光の館にいることは不可能ですね」

「しかし、主任」

のんびりとした声で数字を指で追いながら言ったテオドールさんに、ロベルトが反論した。テーブルに両手をつけて覆いかぶさるようにして入館記録の写しを覗き込む。

「その記録が改ざんされていたとしたら？ 王族なんですから図書館から派遣されている管理人を買収するなり、脅して記録を書き換えさせたりすることだって……」

「待ちなさい、ロベルト」

テオドールさんは詰め寄るロベルトを制すると、私に向かって微笑んだ。

「証人もいますよ。ねえ、リリスさん」

「え、あの？」

急に話しかけられて、私は戸惑いながらテオドールさんの顔を見返した。

テオドールさんの横でロベルトが敵意を剥き出しにして睨んでいるのが怖い。そんなに嫌われるようなこと、したかな？

「ずっと図書館で一緒にいたんでしょう？ ちなみに図書館へ誘ったのはどちらですか？」

「私ですけど……」

「信用できません！」

ロベルトが声を荒げた。

「ルパート・テイラーの事件があった夜に、黒髪の女生徒がルパート・テイラーと一緒に食堂へ行くのを見たという目撃情報もあったでしょう？ まだ、その女生徒がリリス・エーデルシュタインでは無いという証拠がありません。彼女はあの事件に関係していたかもしれないんですよ？」

「その黒髪の女生徒がリリスさんだという証拠もありません」

ロベルトとは対照的に落ち着いた声でテオドールさんが切り返した。

「ですが……」

「やめろ、ロベルト。もし仮に入館記録を書き換える事ができたと

しても、リリス・エーデルシュタインが共犯だったとしても、ヴァレリー殿下は間違いなく図書館にいたんだ」

まだ引き下がろうとしないロベルトをフェランドさんが諫めた。

彼は制服の内ポケットから、もう一枚の紙を取り出してテーブルの上に広げた。

「これは図書館の利用案内のデータを出力した紙です。閉館時間と遭難者への対応について書かれた部分だけです」

フェランドさんはそう言ってテオドルさんを一瞥すると、またすぐに広げた紙へと向き直った。

「これによると、図書館の閉館時間は二十二時で開館時間は九時三十分になります。二十二時から九時三十分までの間は全てのゲートが閉じられ、図書館への通行は遮断されます。そして、図書館の警備の厳しさは皆さんご存知の事と思いますが、閉じられたゲートを強攻突破することは不可能です。例外的に、図書館の職員が遭難者を救出する為に一部のゲートを開くことはあるようですが、それも六時から九時までの三時間と定められています。ヴァレリー殿下は図書館行きのゲートから帰ってきたばかりです。図書館内にいたとしたら、入館したのは昨日の二十二時以前ということになります」

「それは……わかってはいますが、そもそも図書館などに行っていないかもしれないじゃないですか。図書館行きゲートの魔法陣がある部屋に隠れていただけかもしれない」

フェランドさんの説明にロベルトが異論を唱えたが、その声には先程までの勢いは無かった。わずかな期待に絶るような弱々しい声だった。

「証人がいます。ヴァレリー殿下は図書館で遭難し救助されています。殿下を救助した職員から話を聞けば、殿下が図書館にいた事はすぐに証明されるでしょう。なにより、ヴァレリー殿下が魔法陣から現れるところを二人の人間が目撃しています。一人はヴァレリー殿下の護衛であるクロード殿ですから証人にはなりません、もう

一人はこの学園の生徒です」

最後の希望もフェランドさんに一蹴されてしまったロベルトは、すっかり気落ちした様子で俯いてしまった。

テオドールさんが、そんなロベルトの肩を労るように軽く叩いた。

「主任……」

ぼんやりとテオドールさんを見上げるロベルト。

「あんまり物事を決めつけてかかってはいけませんよ。私たちの仕事は人の人生を左右するような仕事なんですから」

テオドールさんは、悲哀の籠った眼差しで見つめるロベルトに微笑みかけた後、私たち全員を見回して口を開いた。

「この状況から考えられることは一つです。ヴァレリー殿下は同時に図書館と光の館の両方にいたこととなります」

「ちよつと待つて下さい！ ヴアレリーが……いや、ヴァレリー様が光の館にいたというのは確かなのですか？ マリアン又王女の衛兵の目撃情報はどこまで信用できるのです？ もしかしたら殺害したのは衛兵の二人で、彼らがヴァレリー様に罪を着せるために嘘の証言をしているかもしれないじゃないですか！ そもそも、ヴァレリー様にはマリアン又王女を殺す動機などありません！」

今まで成り行きを見守っていたのか、黙って国際魔法取締局の三人の言葉に耳を傾けていたクロードが慌てて声を上げた。

「マリアン又王女の衛兵の証言は信用できるものです。そして、ヴァレリー殿下がマリアン又王女を殺す動機はあります。それは貴方が一番良くご存知かと思っておりますが？」

そう返したテオドールさんの声は柔らかく穏やかだった。でも、その瞳には相手の心の中までも見通してしまいそうな強い光が宿っていた。

「フェランド、別室で待機してもらっているアントワーヌ・ポールさんとイザベル・ミュラートルさんを連れて来て下さい」

テオドールさんは隣のソファに腰掛けているフェランドさんに声をかけた。そして、立ち上がって扉へと向かうフェランドさんの背

中を見つめながら溜息をついた。

「彼らに会えば、彼らには嘘などつけないことがすぐにわかるですよ。」

誰にもなく言って目を伏せたテオドルさんは、何故か酷く沈痛な面持ちをしていた。

ミケーレの災難 4

フェランドさんが執務室を出て行くと、室内は重苦しい沈黙に支配された。

テオドールさんは相変わらず顔を曇らせたまま俯いているし、その横ではロベルトまでもが眉を顰めて扉を見つめていた。

ヴァレリーは立ち上がって窓際へと移動し、肩と頭を壁に預けるようにして寄り掛かり窓の外を眺めている。その横顔からは、ほとんど感情が読み取れなかった。何を考えているのか分からないけど、少なくとも楽しいことでは無いだろう。

クロードは両腕をソファの背もたれに預けて天井を見上げていた。天井を見ているというよりも、一点を睨みつけているようにも見える。

そして学園長はと言うと、執務机に腰掛けたまま、こちらは床を眺めていた。皆と同じように沈んだ表情で……。

そんな気まずく居心地の悪い空間の中で、私は息を潜めて時間が早く過ぎることだけを祈った。

たぶん、ミケーレも同じ思いでいるはずだ。こういう雰囲気は私以上に苦手だから。

早く帰って来て下さい、フェランドさん。

私が陰鬱な雰囲気いんぷつに耐えかねて扉を振り返った時、ちょうど音もなく開いた扉からフェランドさんが入ってくる場所だった。

フェランドさんの後から、クレスメント学園の制服を着た二人の生徒も室内へと入ってきた。

一人はブルネットの髪に青灰色の瞳の背の高い男子生徒。そして、もう一人は黄味の強い金髪を耳が出るぐらいに短いショートにして、浅黒い肌にエメラルド色の瞳を持つ女子生徒だった。

どちらの生徒も首に黒い革製のチョーカーのような物をつけている。それは、女性の小指の先ぐらいの幅がある黒い革布を、少しゆ

とりを持たせて二重に首に巻きつけただけのような代物だった。二重になった革布の片方の先には銀色の丸いプレートのようなものがついている。

その装飾品とは言い難い無骨で存在感のあるチョーカーは、見る者の関心を引くには十分すぎる程に異彩を放っていた。

「……契約の首輪」

ミケレが、消え入りそうな声で呟いた。

「首輪？」

私がミケレに、彼らがつけている不思議なチョーカーのことを聞こうとした時だった。

「お前っ！ あの時の……」

突然、長身の男子生徒が、彼の前に立っていたフェランドさんを突き飛ばして駆け出した。

「殺してやる！」

彼は憎悪を剥き出しにして叫びながら、私たちが座るソファの横を駆け抜けた。そのまま、窓際に佇むヴァレリーへと迫る。

その時、ダンッと何かを叩くような大きな音がした。

反射的に音がしたテーブルを振り返ると、クロードが宙に身を躍らせて、空いたソファ　フェランドさんが最初に座っていたソファ　を飛び越えるのが目に入った。

さっきの音は、クロードがテーブルを踏み台として蹴った瞬間の音だったのかもしれない。

長身の男子生徒は一気にヴァレリーとの距離を詰めると、彼の制服の胸ぐらを片手で乱暴に掴み、空いた方の手を振り上げた。

でも、振り上げた拳は頭上で止まったまま、振り下ろされることはなかった。

「手を離して頂こう」

冷やかな声が室内に響いたからだ。そして、鈍い光を反射する短刀が長身の生徒の喉元につきつけられているのが見えた。

「聞こえなかったのか？　ヴァレリー様から手を離せ」

逆手に持った短刀の刃を長身の生徒の喉元につきつけたまま、クロードが再び口を開いた。今度はさっきよりも声は低く、口調もあきらかにきつくなっている。

長身の生徒は振り上げたまま固まっていた拳を力なく下すと、ヴァレリーを突き放した。

彼がどんな表情をしているのかは、私には分らなかった。私が見ることが出来たのは彼の後ろ姿だけだったから。

ただ、諦めて下した両手は、きつく握りしめているのか小刻みに震えていた。

「お前のせいで……お前の……」

クロードが短刀を下げると、長身の生徒は崩れ落ちるようにその場に膝をついた。彼は両手で顔を覆うと、声を震わせながら同じ言葉を繰り返す。

お前のせいだ、と

急に襲われたヴァレリーの方は、掴み掛かれた時に乱れたブレザーの襟元を直しながら、何も言わずに長身の生徒を見下ろしていた。

怒るでもなく、蔑むでもなく……ただ、静かに見つめていた。その顔に、微かに困惑と憂いの入り交じったような表情を浮かべて。

「立てるか？ 別室に戻ろう。別室で少し眠ったら落ち着くかもしれない」

今にも泣き出しそうな長身の生徒の肩にフェランドさんが手をかけた。

「嫌だ！」

彼はその手を振り払って振り返ると、フェランドさんを見上げたまま後ずさった。

「眠るなんて嫌だ！ 絶対に嫌だ！ 二度と目が覚めないかもしれないじゃないか！」

彼は青灰色の瞳を張り裂けそうな程に大きく見開き、フェランド

さんを凝視していた。その顔は血の気を失って青白く、半開きになった唇はわなわなと震えて荒い息を吐き出していた。

それは、恐怖に駆られた者の表情だった。

「では、紅茶でも淹れよう。少しは気が鎮まるかもしれない。そうしよう、それがいい」

フェランドさんは自分に言い聞かせるかのように言うと、脅える生徒に手を差し伸べた。そして、おずおずと彼の方に手を差し出す生徒に笑みを返すと、テオドールさんを振り返った。

「別室で休ませます。許可して頂きますね」

テオドールさんが無言で頷くのを確認すると、フェランドさんは男子生徒を連れて執務室を出ていった。

「……これで、彼らがマリアン又王女を殺害出来ない理由が分かって頂けたでしょうか？」

フェランドさんが帰ってくる前より一層重苦さが増した室内に、テオドールさんの力ない声が響いた。

いえ、さっぱり分かりません。

そう言いたかったけど、この空気の中で質問するのは気が引ける。

そこで私は、隣のミケーレの腕を肘でつついた。

「ねえ、王女を殺せない理由って何？」

振り向いたミケーレに小声で尋ねると、

「あの契約の首輪が見えないの？」

彼は訝しげに眉を寄せて私の顔をまじまじと見た。

「首輪って、あのチョーカーのこと？ あれがどうかしたの？」

私が聞き返すと、ミケーレは「まさか知らないなんて……」とぼやいて一つ溜息をついた。

悪かったね、無知で。

「あれはさあ、『契約の首輪』っていう奴隷の証みたいなものだよ。あれ一個で新築の家が一軒買える。だから全ての奴隷に付けられて

るわけじゃないけど、身辺警護用に買われた奴隷には付けられることが多いね」

「奴隷？ 奴隷なの？ あの人たち……」

私は扉の傍に青ざめた顔で立っている金髪の少女を盗み見た。彼女は両腕で自分の体を支えるようにして抱きかかえて俯いている。その彼女の隣に学園長が寄り添うように立って、何事か話しかけていた。

「まあ、あれを付けられてんだから、そうだろうね。で、あれはただの目印じゃなくて、奴隷が主人に逆らえなくする為の『実用的な道具』でもあるんだよね。考えただけでも寒気がするけど……」
私と同じように金髪の少女を盗み見ていたミケーレは、そう言うて目を伏せた。

ああ、まただ。

彼らの事が話題に上った瞬間に、テオドルさんもロベルトも学園長も、皆が同じ表情を見せた。哀れみと悔しさと悲しみが入り交じったような複雑な表情。

今のミケーレは彼らが見せたのと同じ表情を浮かべていた。

自分で聞いておいて今さらだけど、これからミケーレが口にする
ことを聞くのが怖いと思った。きつと、それを聞いてしまったら私
も皆と同じ顔をする事になるんだろう。

私は微かな不安を胸に抱えて、ミケーレの言葉を待った。

「あの首輪には……」

ミケーレは、もう一度金髪の少女の方をちらりと見ると、私の方
へと視線を戻した。

「魔法がかけられてんだよ。一つ一つに個別の暗号が割り振られて
て、主人がその暗号を口にすると首輪が絞まるって魔法が」

なにそれ。

絞まるって、そんな事になったら……。

「そ、奴隷の命は主人の手の中ってこと」

私が何を思ったのか表情から察したらしく、ミケーレが声を潜め
て言った。そして、より一層声を潜めて続けた。

「そんで、もつと最悪なのは、自分に首輪をつけた主人が死んだ時
も、同じように首輪が絞まるってこと。それも、すぐにじゃなくつ
てあらかじめ予め主人が設定した日数が過ぎた後にね。確か……最長で一ヶ月
後まで設定できるって聞いたことがある」

「そんな……」

私は言葉を失った。

彼らは死を宣告されていたのだ。マリアンヌ王女が亡くなった、
その瞬間に。

いつ訪れるかもしれない死の恐怖に脅えながら、首輪が絞まる時
を待つ。それは、数分後かもしれないし、数週間後かもしれない。

眠るなんて嫌だ！ 絶対に嫌だ！ 二度と目が覚めないかも
しれないじゃないか！

青灰色の瞳を恐怖で見開いて叫んだ男子生徒の金切り声が、また

聞こえてくるような気がした。

「よく、こんな残酷な道具を使う気になるよ。だから、貴族ってのは嫌なんだ……」

ミケーレはそう呟いたきり押し黙ってしまった。

奴隷という身分が存在することは話には聞いていた。全ての権利と自由を剥奪はくたうされた者。家畜と同様に取引される値段が付けられた命。

でも……まるで感情を持たない道具のように扱われて、主人の命令一つで簡単に殺されてしまうなんて知らなかった。

彼らと私とは何が違うんだろう？ 全く同じクレスメント学園の生徒にしか見えないのに。

それなのに……。

私もこれ以上何も聞く気になれなくて、何気なく室内を見回した。どうしていいのかわからなくなつて。

その時、困惑した表情を浮かべたロベルトと目が合った。なぜか彼は私と目が合うと、ほっとしたように息をついて、おずおずと口を開いた。

「……あのお、イザベルさんの気分が少し落ち着いたようですので、皆さんに証言を聞いて貰いたいのですが、よろしいですか？ なるべく早く別室で休ませてあげたいので……」

ロベルトは、学園長に支えられるようにして立つ金髪の女子生徒の顔を窺いながら、私たちの様子も窺うという胃が痛くなりそうなことをしていたようだ。

さすがに鈍感なロベルトも、契約の首輪を付けられた少女の気持ちには考えられるらしい。

「そうですね。先ほど別室で伺った話を、もう一度ここで聞かせて貰ってもいいでしょうか？」

テオドールさんが席を立って、イザベルさんと学園長の方へと近づいた。

「私に答えられることでしたら、すべてお話いたします」

金髪の少女は不安の色を滲ませた瞳でテオドルさんを見上げる。テオドルさんは、そんな彼女に優しく頷いて見せると、窓際の方を見るようにと促した。そこにはヴァレリーとクロードが立っている。

「あなたが目撃したのは、ヴァレリー殿下で間違いありませんね」
「殿下!？」

殿下という言葉に、イザベルさんは少し動揺したようだった。

エメラルド色の瞳を大きく見開き、口元を手で覆って驚きの声を上げた。

「え、ええ、あの人に間違いありません。銀色の髪に紫色の瞳の綺麗な人だったのを覚えています」

それでも、彼女は迷いの無い口調で言い切った。窓際に立つ二人から目を離さずに、抑えた怒りを含んだ強い口調で。

「そうですか……」

テオドルさんは顎に手をやり、ほんの少しの間、何かを考えるような素振りを見せた。けれど、すぐにイザベルさんに向き直ると静かに言った。

「では、昨日の夜にマリアン又王女の部屋で何が起きたのか、貴女が知っていることを教えて頂けますか？」

イザベルさんは真つ直ぐにテオドルさんを見つめて頷くと、語り始めた。

「昨夜は、マリアン又様は夕食後に国際魔法取締局の方に呼ばれてこちらで午後の十時すぎぐらいまで例の事件の事で色々聞かれました。それは、ご存知ですよね？」

「ええ、ルパート・テイラー君の事で、いくつかお聞きしたい事がありましたので。担当したのはフェランドだったと思います……」
「はい。その事件の事で自分に疑いがかけられている事に酷くご立腹だったご様子で、私とアントワーヌを伴って寮に戻ると、すぐに寢室に籠ってしまわれました。アントワーヌは寮の部屋の扉の前で私は室内の応接間で警護にあたりました。それから、すぐのことだ

つたと思います。外の扉の方からアントワーヌの誰何すいかの声が聞こえたかと思うと、鈍い音がしました。そして、剣を抜いて身構える間もなく扉が蹴り開けられて、銀色の髪の男が室内へと入ってきたのです。彼は私が鞘から抜くと同時に放った一撃をかいくぐると、横をすり抜けて行きました。その瞬間に首に衝撃を受けて意識を失ったのです。そして……」

イザベルさんはそう言っつて、唇を噛んで俯いた。

「そして……後はアントワーヌが証言した通りです。彼に起こされた私が目にしたのは、全身を血に染めたマリアンヌ様のお姿でした」

ミケーレの災難 6

「ええ、と……。どちらも嘘をついてないってことは、ヴァレリー殿下は二人いるってことになりますよ、ね？」

ロベルトがぼんやりとした声で言った。

その視線は、今にも倒れそうなイザベルさんを支えて執務室を出て行く学園長の後ろ姿に注がれている。

「そうなるね。だが……。ヴァレリー殿下がリリスさんと一緒に図書館へ行くことがなかったら、どうなっていたかな」

「どうって……。目撃者までいるんですから、本部まで御同行頂いて司法の手に委ゆたねられ……」

テオドールさんの言葉に、ロベルトがはっとしたようにミケーレを見た。

ミケーレが嫌そうに身を引く。

「そうか！ それでミケーレ・グラツイアーノを連れて来たんですね！」

「はあ！？ あんた、ここに来る時に『自分がなんで呼ばれてんのか分かってねーのか』とか言ってなかったっけ？ 自分が分かってなかったのかよ？」

「う、うるさい！ それは勢いだ！ お前があんまりペラペラペラペラと煩うるさいから黙らせようと思って……」

「で、なぜこの場に彼が呼ばれたのか教えて頂けますか？」

ヴァレリーが言い争いを始めた二人を横目にテオドールさんに声をかけた。

「それは、貴方の護衛であるクロードさんを、貴方から一時的に引き離したのがミケーレ君だからですよ」

「彼が？ クロードを？」

「ええ、そうですね？ クロードさん。彼から貴方を誘ったんでしたよね？」

ヴァレリーの訝^{いぶか}しむような視線と、テオドルさんの意味ありげな笑みを受けてクロードが気まずそうに口を開いた。

「……はい。ミケーレに医学部の女子と知り合いになったから、一緒に会って欲しいと誘われて。向こうは三人連れてくるから、こっちも三人紹介するって約束したとかで……」

「そうそう。クロードならさあ、ちよつど好みもかぶらないし、モテそうな顔してるから向こうも喜ぶかと思ってー」

ロベルトの相手をするのに飽きてきたのか、ミケーレが横から口を挟んだ。

気が合いそうだとは思っていたけど、いつの間に仲良くなったんだ？ この二人。

「大切な用事、ねえ」

ヴァレリーが唇の端に笑みを浮かべてクロードを見上げた。その目は全く笑ってなく、冷やかな光を湛えている。

「いや、その……それは、あれだ。お前も俺がいなけりゃ一人を外に出ようとなんかしねーだろ？ ほら、寮の部屋にはちゃんと結界を張ってんだから安全だし、国際魔法取締局の職員だって学園内にいるし……」

「ずっと室内に籠っていたら、それこそ今ごろは国際魔法取締局本部の留置所の中だったな」

しどろもどろになって弁解するクロードの言葉を、ヴァレリーは冷たく遮った。

「な、なあ？ この事は国には内緒にしてくんねーかな？ ほら、特にシャルの奴には……」

「よくわかりました。彼がうちの馬鹿を咬^{そそのか}して、私を一人にしたという事です。そうなれば、私は迂闊^{うかつ}に出歩くことは出来ない。

誰にも目撃されなくなり、アリバイがなくなる。そういう事ですね」

ヴァレリーは何かに脅えて懇願するクロードをきれいに無視して、テオドルさんに向かって言った。クロードの方を見ようとするかもしれない。

「ええ、その通りです。それに貴方にはマリアン又王女を殺害する動機までありますからね。裁判で無実を証明する事も簡単では無いでしょう。それに、マリアン又王女が関わっていた事件の詳細も公表されれば、事は貴方の裁判だけでは済まなくなるかもしれませぬ。リリスさんのおかげで助かりましたね」

「そうですね。彼女のおかげで最悪の事態だけは回避する事が出来ました」

ヴァレリーはそう言って、隣のクロードを一瞥いちべつした。

「お前も首が飛ばずに済んだ事をリリスに感謝するんだな」

ちよつと、待って。

何？ なんなの？ なんでこんなに感謝されてるの？

私は意味がわからずに皆を見回した。

クロードなんか、私の手を握りしめて「命の恩人だ」なんて言い出す始末。

「ちよ、ちよつと待ってよ！ 唆そそのかしたって、何それ？ 俺はただ出会の場を提供しただけじゃん」

私と同じように事の展開についていけない奴が一人。ミケーレだ。「詳しい事は後でゆっくり聞かせて貰おう」

「いや、詳しいことって言われても、何も知らないし」

ミケーレがロベルトの手を振り払って、テオドルさんに訴えた。「だいたい、ヴァレリーが王族だったなんて今初めて知つたし、そのなんとか王女なんて会つたこともないんですよ？」

「悪いが、君の言葉を鵜呑みにする事はできないんだ。これから色々調べさせて貰って、その上で関わりが無いと証明されれば自由にしてあげるよ。それまでは、この学園長室の一室に隔離させて貰う」

「そんな！」

テオドルさんの言葉にミケーレが悲鳴をあげた。

いきなり連れて来られて、身に覚えの無い事件の犯人にされかか

ってるんだから当然だ。

このままだと、本当にミケーレがなんだか良くわからない罪で捕まってしまう。そう思って、私はなんとかテオドルさんを引き止めようとした。

「あの……ミケーレが、何をしたって言うんですか？ 確かに、いい加減で軽くてどうしようもない奴だけど、人殺しなんて、そんな事するような奴じゃないです」

「いい加減で軽くてどうしようもない奴って……」

ミケーレが何かを訴えるような目で私を見たが、気にしてはいられない。

「ミケーレは……」

「リリースさん」

私が更に続けようとした言葉を遮って、テオドルさんはじつと私の目を見つめた。

「貴方はミケーレ君の何を知っていると見えるのかな？ まだ入学してから三ヶ月ぐらいしか経っていないというのに……」

「それは……」

言葉に詰まった私にテオドルさんは、ゆっくりと言った。

「彼が火の大陸に拠点を置く行商人のキャラバンで育ったことは知ってるかい？」

「……はい」

「では、彼には両親がいないことも、行商人のキャラバンには様々な人間が集まることも知っているかな？ それこそ、国を追われた犯罪者や荒くれ者なんかもね」

「両親がいないって……」

私は初めて聞かされたミケーレの家族の事に驚いて絶句した。

両親がいないなんて、一言もミケーレは言わなかった。私は何も知らずにミケーレの前で自分の家族の話とかしていたのに……。そんな時もミケーレはいつものように笑って聞いていた。

「関係ねーだろ」

ミケーレの口から、今まで聞いたことがないような冷たい声が漏れた。そして、テオドルさんを睨みつけると、一息に捲し立てた。「そりゃ、行商人には探られたくない過去を持った奴が流れてくるよ。けどなあ、奴らだってもう一度やり直そうとして必死で生きてんだよ。それに、元犯罪者ばかりが集まるわけじゃねえ。たいていは戦争に巻き込まれて住む場所を失った奴らだ。他にも代々家業として受け継いでる奴や、奴隷として買われた先から逃げてきた奴だっている。そいつらは一度だって犯罪に手を染めた事なんかねーのに。行商人ってだけで犯罪者呼びわりかよ！」

「ミケーレ、落ち着いて」

私はミケーレの腕に手をかけた。今にもテオドルさんに掴みかかってしまいそうだったから。

こんなミケーレの姿は初めて見た。

どこか飄々（ひょうひょう）としていて、何を言われても軽く受け流せる人だと思っていた。そういうところが、すぐに感情的になっってしまう私には、いつも羨ましく思えた。

その彼がこんなに激しくテオドルさんを非難するなんて……。

「私の言葉が気に障ったのなら謝るよ。確かに、君の言う通り行商人だからと言って犯罪者とは限らない。ただ、素性がわからない人間が多く集まることは事実だろう？ その中の誰かが君にマリアン又王女の殺害を依頼した可能性だって出てくる。こちらとしては、その事も調べなければならぬんだよ」

「ああ、そう。勝手にすれば。調べたって何も出てこないと思うけどね」

テオドルさんの言葉に、ミケーレは拗ねた子供のように横を向いた。

「ねえ、クロードはミケールが怪しいと思ってるの？」

私は床一面に敷き詰められた服を慎重に足で掻き分けながら、クロードに問いかけた。

クロードに話しかけながらも、視線は床の上から動かさない。油断すると床ではなく服を踏んでしまいそうだ。

「んー、わかんねーな、正直言つて。嘘ついてるようにも見えねーし、怪しいと言えば怪しいしなあ。これがリリースだったら、巻き込まれただけだろって思えるけど」

「私だったら？」

服を掻き分けていた右足が床を探り当てたので、右足に重心を移すと左足を床から外した。両手をひらひらさせてバランスを取っていると、まるで力カシにでもなった気分だ。

「お前に他人を騙せるほどの器量なんかないだろ」

「騙せるかもしれないじゃん」

クロードがいる場所とは別の方から聞こえた声に、私はムツとして顔を上げた。

その拍子にバランスを崩して、左足が服の上に着地したけれど、もうどうでもいい。汚れようが皺になろうが知るもんか。

「お前に騙せるのは動物ぐらいだ。それより、さつきから何をやってるんだ？ お前は」

この部屋の奥 足下に広がる服の海を渡りきった先 にあるベッドの縁に腰掛けたヴァレリーが、私を珍獣でも見るような目で見ている。

「すぐ感情が顔に出る子だからな。そんなんじゃ、カジノにも行けねーぞ？」

ベッドの向かいに置かれた備え付けの机とセットの椅子に座った

クロードも笑いながら言う。

彼は後ろ向きに座った椅子の背に両腕を寄せ、その上に顎を乗せてこちらを見ていた。複雑に編み込まれた黒く長い髪の一束がはらりと落ちて、彼の浅黒い顔に影を落とす。

あの髪って洗う時にどうするんだろう？

どうでもいい疑問が浮かんできて、まじまじとクロードの頭を見つめると、彼は少し戸惑ったようだった。

「あ？ ああ、そうか。床に落ちてるヤツは踏んでいいから。気にすんなって」

が、すぐに一人で納得すると、片手を怠そうに上げて手招きし始めた。

私がバランスを崩して服を踏んでしまったことを、気にしていると思っただけ。本当はもう服のことなんて気にしていないどころか、踏みつけてやれと思っただけ。

クロードの許可を得た私は、堂々と服の上を歩きながら部屋を縦断してベッドまで辿りついた。なるべくヴァレリーが着ていそうな服を選んで踏みつけながら。

国際魔法取締局の人達に解放された私達は今、ヴァレリーの部屋に来ている。

ミケーレだけは、テオドルさんの言葉通り、学園長室から出ることを許されなかったんだけど……。

私はヴァレリーの隣に腰を下ろすと、廊下と室内とを隔てる扉の方へと視線を巡らせた。

一般の生徒用の寮は、長方形の狭い一部屋にバスルームがくっついているシンプルな間取りになっている。

だから、部屋の一番奥に設置されたベッドからは室内が見渡せた。相変わらず服と本が散乱した足の踏み場もない室内が。

これが、一国の王子様の部屋か……。王子様やら騎士やらに憧れているエレザが見たら、泣いてしまつかもしれない。

「ミケーレについては、シャルに調べさせよう。どこまで調べられるかはわからないが」

その王子様が、私の隣で聞きなれない名前を口にした。

「シャル！？ シャルに報告すんのかよ？ 頼む、ちょっと待ってくれ！」

その名を聞いた途端に、クロードが椅子が倒れるんじゃないかと思う程に身を乗り出して悲鳴を上げる。

クロードをここまで怯えさせる「シャル」さんって、どんな人なんだろう？

ヴァレリーが左手を自分の目線ぐらいの高さまで上げると、制服のブレザーの袖口から銀色のブレスレットのようなものが覗いた。

「だから、待ってって！ おい、こらっ」

その様子を見て、ますます慌てたクロードが、立ち上がってヴァレリーの左手に手をかける。

「お前の失敗を報告するつもりはない。だから離せ」

ヴァレリーは溜息まじりにそう言ってクロードの手を振り払うと、ブレスレットに右手を添えて「コール」と短く呟いた。

次の瞬間、ブレスレットから薄青色の光の帯が流れ出て、空中で絡み合ったかと思うと、片手にすっぽりと収まるぐらいの大きさの球体へと姿を変えた。

これ、どこかで見たことがある……。

私が光る玉をしげしげと眺めて首を捻っていると、ヴァレリーがその光る玉に向かって声をかけた。

「シャルロット・マリアンヌ・シャトーブリアン」

「映像ハ繋ギマスか？」

光る玉から人工的な声が流れた。それは女の人の声に似ていたけど、抑揚が無く耳障りな高音で、聞いていて心地のいい声では無かった。

ヴァレリーには聞き慣れた声なのか、全く気にした様子も見せず

に、その光る玉に向かつて答える。

「シャルの許可が取れたなら繋いでくれ」

光る玉は、耳障りな声で短く「了解シマシタ」とだけ言うと、小刻みに震え始めた。

その震える姿を見ると、私の脳裏には図書館で見た光る玉の姿が浮かんできた。

どこかで見たと思ったなら、図書館の職員が使っていた物と似ているんだ。色は少し違うけど。

あつちは水色だったけど、目の前の玉は紫色がかった青色だった。

「シャルロット様カラ了承ヲ頂キマシタ。コレヨリ三秒後ニ映像ト音声ヲ繋ギマス」

光る玉は、例の耳障りな女性の声でそう告げると、飴細工のようにぐにやりと伸び始めた。あつという間に、球体から姿を変え、私とヴァレリーの目の前には一枚のスクリーンのような物が現れた。

その青白いスクリーンにうつすらと映像が浮かび上がる。

「シャルか？ 少し調べて貰いたい事がある」

ヴァレリーが話しかけた時には、もう映像は鮮明になっていて、スクリーンの中には一人の女性が映し出されていた。胸から上の部分しか映っていないので断言はできないけど、詰め襟の黒い軍服のような服に身を包んでいる。

女性の後ろには、腰掛けているソファの深緑色の背もたれと、白いシンプルな壁紙が映っていた。

「……また、何かあつたのですか？」

その女性が僅かに眉を寄せて身を乗り出すと、顎の下辺りで前下がりに切り揃えられた髪が揺れた。室内の照明の光を反射して艶やかに揺れる蜂蜜色の髪は、絹糸で出来ているのかと思う程になめらかで美しく、魅入ってしまった。

黒に近い濃紺色の瞳は、彼女が聡明で気丈な性格だと言うことを教えるように強い光を湛えていた。

スクリーンの中に映し出された女性は、少し目を伏せると、その桜色の形のいい唇を開いた。

「まさか、とは思いますが……クロードが何か問題を起こしたのでは？」

その言葉にスクリーンの裏側にいるクロードが、顔を引き攣らせて必死に手を振った。ヴァレリーに「何も言っな」と合図を送っているようだ。

「いや、そうじゃない。それより、周りに人はいるか？」

ヴァレリーはクロードを一瞥すると、さりげなくシャルさんの疑問を否定して話題を変えた。その様子にクロードがほっと溜息をつく。

「どうやら、シャルさんにクロードはあまり信用されていないらしい。」

「ここは私の自室です。人払いもしてありますし、鍵をかけて音が漏れないように結界も張ってあります。他の人に会話の内容を聞かれる心配はありません。ご安心下さい」

「ずいぶんと用意がいいな」

「ええ、ここは人の皮を被った化物が網を張り巡らせている場所ですから」

苦笑まじりに言ったヴァレリーに、シャルさんはそう言って微笑んだ。

そして、その微笑を崩さずに視線を投げ掛けた。私に向かって……。

「え？ えつと……」

こういつ時って、どうしたらいいんだろう？

特に紹介されてもいないし、ヴァレリーも私に会わせる為にシヤ

ルさん呼び出したわけでもないだろう。なのに、「はじめましてとか「こんにちは」とか挨拶するのはちょっと違う気がする。だからといって、無視するのも気が引ける。

シャルさんは、言葉に詰まって意味もなく笑みを返している私を見つめながら、ヴァレリーに向かって問いかけた。

「こちらよりも……ヴァレリー様の方は、どうなのですか？」

「ああ、彼女のことは気にしなくていい。俺やクロードの素性も知っているし、今回の件にも関わっている」

ヴァレリーの返答を聞いたシャルさんの顔から笑みが消えた。

「ヴァレリー様。出過ぎたことかもしれないですが、一言忠告させて頂きます。貴方がどんな女性とお付き合いしようが一向に構いません。ですが、簡単に心を許すような真似は関心できません。いいですか？ 女性であることを利用して貴方に近づこうと……」

「シャル……。勘違いだ。彼女とはそういう関係じゃない」

延々と続きそうなシャルさんの小言を、ヴァレリーがうんざりしたような口調で遮った。

「では、どういったご関係で？」

シャルさんの眉がぴくりと上がる。

納得できる説明が得られなければ小言を続けさせて貰います、という意思が顔にありありと出ていた。

「彼女が例のリリス・エーデルシュタインだ。前に調べて貰ったことがあるだろう。彼女が死の商人である可能性が低いと言ったのは君だ」

「ええ、リリス・エーデルシュタインという少女が、ロートリンデル王国ルーベンス領ハイゼル村に実在する証拠は確認しましたし、エーデルシュタイン家が代々ハイゼル村で診療所を営んでいるという情報も得ましたから。彼女が、竜を見た娘ですか？」

「ああ、そうだ」

「それでしたら、何を話しても問題はありませぬ。こちらも彼女

の弱みを握っているわけですし」

シャルさんの顔から緊張の色が消えた。

彼女はもう一度私に向き直ると、その顔に天使のような微笑を浮かべる。でも、目は全く笑っていないかった。

ここで聞いた話を一言でも漏らしたら、竜を見たという事を言いふらす

そう言われている気がして、私は声を掛けられてもいないのに、シャルさんを見つめたまま頷いた。

なんとなく、クロードが脅える理由がわかる気がする……。

「それで、私に調べて欲しい事とは？」

シャルさんは、私の様子に満足したように目を細めて小さく頷くと、ソファから少し身を乗り出した。

ソファの手前にはテーブルでもあるのか、彼女がまたソファの背に体を預けた時には、手には一枚のプラスチック製の板を持っていた。ロゼッタと呼ばれる情報端末だ。

それは、クレスメント学園で配布されている学生証を、大型にして高性能にしたような製品だった。

正式名称は知らない。ロゼッタという名前は、その家庭用情報端末を製造・販売している企業の名前だ。

ただ、市場を独占していて知名度も高いので、いつからか正式名称ではなくロゼッタという企業名で呼ばれるようになっていた。

「そうだな……まず、ミケール・グライツィアーノという生徒の素性について調べて欲しい。動物学の生徒だ。それと、この学園に派遣されている国際魔法取締局の職員のリストを転送してくれ」

「かしこまりました。ですが、国際魔法取締局の情報については一般公開されている情報しかわかりませんが、よろしいですか？ 派遣されている職員の顔写真、名前、部署と役職以外の情報はわかりません。外部の人間が国際魔法取締局について独自に調査する事は、国際法で禁じられておりますから」

「ああ、それで構わない」

「それでしたら、現時点でクレスメント学園に派遣されている五名のリストと、追加で本日中に派遣されることが決まった十名のリストをすぐに転送致します」

シャルさんがスクリーンの向こう側でロゼッタを操作すると、スクリーンの映像が二分割されて左側に顔写真の一覧が表示された。顔写真の横には名前や所属等が表示されている。

「これと同じものを、ヴァレリー様の学生証にも転送しておきました」

「これは、まさか……」

スクリーンに職員の一覧が表示された途端に、ヴァレリーが訝しげに呟く声が聞こえた。彼は信じられない物を見るような顔でスクリーンを凝視している。

「お気づきになりましたか？ 派遣が予定されている職員の半数以上にあたる七名が異端審問官です。死者も出ていない悪魔召喚未遂事件の捜査に十五名もの職員が派遣されるだけでも異例なのに、そのうちの七名が異端審問官というのは前代未聞です」

国際魔法取締局の仕事内容についてほとんど知らない私には、シャルさんやヴァレリーが何故驚いているのかよく分らなかった。

「まじかよ!？」

クロードまでが椅子から立ち上がり、こちらへと慌ててやって来てスクリーンを覗きこんだ。

「おい、しかもこのフランコって奴、高官じゃねーか！ あいつら、今回の件に死の商人が絡んでるって睨んでんじゃねーの?」

クロードが指差した先には、白髪が混ざった黒髪の五十代ぐらいの男性の顔写真があった。その横には、『フランコ・ロターリオ・ペルティーレ。異端審問官。第五区域統括責任者』と書かれている。

異端審問官という言葉と、スクリーンに表示された陰気な顔をした男性の顔写真に、私は薄気味の悪さを感じてスクリーンから目を

逸らした。

接点 3

異端審問官が七名派遣されるということが、異例なのかどうかについては分からない。

でも、異端審問官という職業が世間でどう思われているかは知っている。

異端審問官は、この世界で死刑執行人と並んで嫌悪と畏怖の対象となる職業だ。そして、謎に包まれた職業でもあった。

異端審問官の仕事は、私が知っている限りでは、異端者の搜索と審問、そして処刑だったと思う。

特別捜査官が異端者の事件を担当することもあるけど、彼らの仕事は事件の真相究明と犯人の逮捕だ。異端審問官の方は犯人の逮捕権の他に裁判権と処刑の権利も持つ。異端審問官の判断によっては、その場で処刑しても構わない、ということだった。

「ヴァレリー様、何があったのか教えて頂けますね？ ルパート・テイラーの事件では異端審問官は派遣されませんでした。それは、事件の真相究明は特別捜査官の手に委ね、異端審問については本部に連行してからも十分だと国際魔法取締局が判断していたからでしょう。それが急に今日になって七名も派遣するとは、何かあったとしか考えられません」

シャルさんの声が聞こえて、私はスクリーンを見上げた。

彼女はルパートの事件では異端審問官は派遣されていない、と言った。だったら、追加で派遣されることになった七名の異端審問官も、ルパートの審問の為に派遣されたわけじゃないはず。

そう思うと、少しだけ気分が軽くなった。異端審問官という文字が並んだスクリーンを見た時に、ルパートが火刑になるんじゃないかと思ったから。

「マリアン又王女の事は覚えているか？」

「ええ、カリティア王国の第三王女でしょう？ 私のミドルネームと同じ名前を持つお方ですから、とても印象に残っております。たしか、マリアン又王女もクレスメント学園に入学されているはずですよ？」

全く予想していなかった質問だったのか、シャルさんは当惑したように小首を傾げた。

「シャルロット・マリアン又って……。ありえねー、何度聞いても慣れねーよ」

私の隣に腰を下ろしたクロードがぼつりと呟いた。

クロードの声は、幸いなことにシャルさんには届かなかったようだ。彼女は小首を傾げたまま、一言も聞き漏らしてはいけな、とでもいうように真剣な眼差しでヴァレリーを見つめている。

「そのマリアン又王女が殺された。国際魔法取締局の職員が今日になって十名も追加で派遣されることになったのはそのためだ」

「マリアン又王女が！」

シャルさんが息を呑んで、その濃紺色の瞳を大きく見開いた。

「それで、王女を殺害した犯人は捕まったのですか？」

でも絶句して固まったのは一瞬の事で、彼女は口元に白く細い指をあてたまま少し擦れた声で言った。さすが軍人（たぶん）、立ち直りが早い。

「ままだ。だが、国際魔法取締局の連中には、犯人の目星がついているのかもしれないな。たぶん奴らはクロードの言う通り、死の商人が絡んでいると思ったんだろう」

「そうですね。異端審問官が死の商人の討伐に力を入れているのは有名な話ですし……」

シャルさんがそう言った後、考え込むように口を噤むと沈黙が降りた。

ヴァレリーも軽く開いた両脚の上に肘を立てて両手を組み、その

手に額を触れさせるような格好で俯いている。なんだか邪魔してはいけないオーラが漂っている。

「ね、なんで異端審問官が死の商人を追ってるの？」なんて聞こうものなら、この世で最も頭の悪い女を見るような目で見られかねない。

私は咽まで出かかった言葉を呑み込んで、左隣に座るクロードへと向き直って声をかけた。こっちは暇そうに天井を見上げて、ぼーっとしてたから。いや、もしかしたら彼なりに真剣に何かを考えていたのかもしれないけど……。

「ん？ ああ、それは死の商人が異端だから。異端って一口に言っても、宗教上のことだけじゃねーからな。国際法を無視する連中も異端扱いになる。世界の平和を乱す者ってことで。どっちかつーと、国際法を無視する連中を排除する方が本職かもなあ。国際魔法取締局のボスはクレスメント教の守護者であって、クレスメント教の代弁者じゃねーし」

「そうなの？ てつきり悪魔崇拝者とか異教徒とかを無理やり連行して改宗させたり、火あぶりにしたりする人達だと思ってた」

「まあ、世間一般じゃあ、そのイメージがまだ強いかもしれない。むかーし、そういう事をずいぶんやってたから。今は異教徒には関知しない、悪魔崇拝者については犯罪を犯した者だけ更生施設送りにするってスタイルらしいぜ」

うん、聞いてみてよかった。異端審問官がこんなに様変わりしていたなんて知らなかった。

疑問に思ったことは、すぐに聞きなさいって言っていたおばあちゃんへの教えをこれから忠実に守ろう。

「シャル、ミケーレの件の他に、カリティア王国とアクタニア王国の内情についても調べて貰えるか？ それと、今まで通り王妃の言動にも注意していてくれ。前にも聞いたが、彼女の周辺で妙な動き

は無かったんだな？」

私がクロードに異端審問官についての講義を受けている間に考えがまとまったのか、ヴァレリーがシャルさんに問い掛ける声が聞こえてきた。

私もクロードも会話を中断して、シャルさんの返答にじっと耳を澄ます。

「わかりました。王妃様については、特に変わった様子はありませんでした。いつもの取巻き連中以外の人間に接触してはいないようですし、王太子殿下もご無事です」

「まあ、義兄上の身になにかあれば、すぐにも剣を持った来客が来るだろうし、義兄上は簡単に殺されるような人じゃないからな。あの人に関しては心配はしていないよ」

ヴァレリーはそう言って笑ったけど、私には全く笑えなかった。

この人、どういう環境で育ったんだろう？

殺すとか殺されるとか、そういう言葉が日常会話として飛び交うような生活を送ってきたから、感覚がちょっと麻痺してしまってるんだろうか？

「嫌！ そんなの絶対無理！ 無理だから！」

やっぱり、この人は感覚がちよつと麻痺してしまっているんだ。

私はヴァレリーの頼みを必死で断りながら、そう思った。

「これをやれるのはお前しかないんだ。諦める」

「諦めろって、何それ！？ 自分でやればいいでしょ。ヴァレリーならメイド服だって着こなせるよ。保証する！」

私の横でクロードが肩を震わせて俯いた。

そのクロードを軽く睨みながら、ヴァレリーは吐き捨てるように言う。

「着こなせても目立つだろう。この学園で、銀髪で紫の瞳を持つのは俺だけだ。メイドに化けるどころか女装趣味の変態だと宣伝して歩くようなものだ」

「カラーコンタクトとカツラで隠せばいいじゃん」

「無理だ。それでも目立つ。モデルのような女がメイドの格好で校内をうろつけば、多くの生徒の関心を引いてしまう」

モデルのような女って、自分で言うか。

でも、悔しいけどヴァレリーの言葉通り、彼がメイド服を着て歩けば、学園中の男子生徒が振り返るだろう。きっと学園長と競い合えるぐらいの絶世の美女が誕生するに違いない。

「じゃあ、クロードで……無理か……」

私はクロードのメイド姿を想像して、力なくうなだれた。

ダメだ。寂れた裏通りにあるオカマバーのママのような姿しか想像できない……。

違う意味で全校生徒が振り返るだろうし、国際魔法取締局の職員にも不審者としてマークされるはずだ。

「ま、諦めな。リリスならメイド服も似合うだろ」

クロードがぼんぼんと私の肩を叩きながら笑った。

「メイド服が似合っても、国際魔法取締局の職員の間を盗んで、マリアン又王女の遺留品を盗むなんて私には無理だってば」

私は肩を叩いていたクロードの手を取ると、縋るように両手で握りしめて訴えた。

メイドに化けて学園長室に忍び込み、マリアン又王女の血がついた遺留品を手に入れてくれ

これが、ヴァレリーの「お願い」だった。

が、「お願い」というよりも指令に近い。私には拒否権が与えられていないんだから。

ああ、あんな事言わなければよかった……。

軽率な自分の言動に腹が立つけど、こんな事になるなんて思いもしなかったんだから仕方がない。

シャルさんとの通信が終わった後、スクリーンには国際魔法取締局の職員のリストだけが表示されていた。何気なくスクリーンを見ていた私は、その中の一人の職名に興味を引かれた。

特別捜査官と異端審問官の名前が並ぶリストの最後に、その職名はあった。

アニマルマスター

「アニマルマスターって、何？」

私は、半ば呆然としながらスクリーンを指して訊ねていた。

事件の捜査と動物。どこか不思議な組み合わせに思えて、首を傾げる。

「ああ、犬が使われるんだろ。現場に残された匂いで犯人の後を追跡すんだよ。その犬を使うのがアニマルマスターだ」

「へえー、そんな仕事もあるんだ」

「あんだ、動物学の生徒だろ？ なんて知らねーんだよ」

「まだ入学して半年も経ってないし、卒業後の進路についての説明

なんて受けてないもん。それに、そういうのって全部召喚士の仕事だと思つてたから」

「へ？ アニマルマスターって召喚士のことじゃねーの？」

「召喚士は召喚士じゃないの？ アニマルマスターなんて呼ばれてるの聞いたことないよ」

私はクロードと顔を見合わせた。彼が言う通り、アニマルマスターは召喚士の別称なんだろうか。

「アニマルマスターは召喚士とは別物だ」

私とクロードの疑問に解答を与えてくれたのはヴァレリーだった。ずっと学生証と顔を突き合わせて物思いに耽っていたと思ったら、私達の会話もちゃんと聞いていたらしい。

彼は手元の学生証から顔を上げると、スクリーンを見上げて続けた。

「召喚士は呼び寄せた動物の意思を奪い強制的に使役する。アニマルマスターは、周囲にいる動物に協力を依頼する。動物を道具として使うか、パートナーとして共に仕事をするかの違いだ。国際魔法取締局では、事件の捜査には召喚士ではなく、アニマルマスターが使われることになっている」

「なんで、召喚士じゃダメなのかな？」

「さあ？ そこまでは知らない。それこそ、動物学の講師にでも訊いたらどうだ？ それより、犬が使われるのか……。クロード、幻術で体臭まで誤魔化せると思うか？」

ヴァレリーは私との会話を早々に打ち切ると、クロードに問いかけた。

「腕によるんじゃない？ 動物まで騙せる幻術使いがいるって話も聞いた事あるしなあ。ただ、難しいだろうな。幻術自体が高度な技術だし、視覚だけじゃなく聴覚や嗅覚まで誤魔化すとなると、並大抵の使い手じゃ無理だろ」

「もし、犯人にそこまでの技術がないとしたら……捕まると思うか？」

ヴァレリーの瞳に鋭い刃物のような光が閃いた。人を殺める為に研ぎ澄まされた剣のような、強い意思と冷酷さを湛えた光。

この人は目的の為なら人の命など省みないんじゃないか、と思わせる強い眼差しに背筋に冷たいものが走るのを感じた。

もしかしたら、本当にヴァレリーがマリアン又王女を殺害したんだろうか？

そんな疑念が脳裏を掠めて、自分を取り巻く世界が急速に変わってしまったような錯覚を覚えた。

そうだ、私は彼らのことを何も知らない。ヴァレリーが王族だったことを知ったのも今朝のことだ。

彼が犯人じゃないという確証がどこにあるだろう？

「犯人が捕まったら、まずいことでもあるの？」

私は心の中で膨れ上がる猜疑心に、耐えられなくなって口を開いた。

利口な判断じゃない。もし、本当にヴァレリーがマリアン又王女を殺した犯人なら、自分もどうなるかわからない。

それは十分にわかっていたけど、耐えられなかったのだ。自分でも何故こんなにヴァレリーを疑うことが苦しいのかわからなかった。

ただ信じたかった。人を殺したり、無実を証明するために自分を利用したりしていないと言って欲しくて、私は彼を見つめた。

ヴァレリーの青に近い紫色の瞳には、僅かに戸惑いの色が滲んだ。

「それは言えな……」

彼の口からは、図書館で何度も聞いた簡潔な拒絶の言葉が漏れた。何か訊く度に冷たく突き放されて、その度に心のどこかが痛んだあの言葉。

が、今度はあの時とは違った。拒絶の言葉は途中で呟きが変わり、消えていく。

「いや、協力してくれるなら話そう」

代わりに彼の口から流れ出たのは意外な言葉だった。

「私に出来ることなら、なんでもする」

私は迷いの色が消えたヴァレリーの瞳を見返しながら、きっぱりと宣言した。

真実を知りたい一心で、宣言してしまったのだ。

確かに言った、私に出来ることなら、なんでもする
言ったけれど、私には出来ることと出来ないことがある。

クロードに助けを求めて縋り付いたが、

「残念だけど、俺には助けらんねーよ。だって、ご主人様には逆らえねーし」

と、こういう時だけ従順な臣下のふりをする彼に、あっさりと見捨てられた私は追いつめられていた。

「お前にしか出来ないことなんだ。わがママを言つな」

その私に、ヴァレリーが聞き分けの悪い臣下を窘めるたしなような口調で言い放った。

「それが人にものを頼む態度!？」

あまりの言い様に、思わずヴァレリーを睨みつける。

「どう頼めばいい? 床に額をこすりつけて言えば大人しく協力するのか」

それは違うと思う。

床にひれ伏して『命令』するヴァレリーは、ちよつと見てみたい
気もするけど……。

素で誰かに頼みごとをすることと、命令をすることの違いがわか
つてないんだらうなあ。

「なんだ、その哀れむような目は」

「なんでもない。環境で人は育つて言うけど、本当だったんだな
あと思つて」

「は？」

クロードの爆笑をBGMにして、怪訝な顔で私を見返すヴァレ
リーを眺めながら溜息をついた。

とても勝てそうにない。

ヴァレリーは生まれついでの貴族で、支配階級のトップに君臨す

る一族一（王族）だ。

私の方は髪の毛一本にまで平民の血が行き渡った平民の中の平民だ。ご先祖様に貴族の血を引く人がいた、なんて話すら聞いたことがない。

全く知らない人が私達を見ても、貴族の子息とその使用人だと思っただろう。全身から醸し出される雰囲気が違う。

「わかった。やります。やればいいんですよ」

私はヴァレリーの部下Bとして（部下Aはクロード）働くしかない、と捨て鉢な気分で呟いた。

「あら、貴女が新しいバイトの子ね。それにしても、こんな時期に新しい子を入れるなんて、あの人も何を考えてるのかしら」

薄茶色の髪をきつちりと結び上げた恰幅のいい女性が、私にメイド用の制服を押し付けながら首を捻った。

私は愛想笑いを浮かべながら制服を受け取る。

心臓は煩いぐらいに脈打ち、手は緊張で汗ばんでいた。

今からこんな調子では先が思いやられる。任務を遂行する前に心臓が耐えられなくなつて倒れるんじゃないか？

「聞いているとは思うけど、更衣室も休憩室も二階の廊下の一番奥にある部屋よ。そこは厨房、リネン室、掃除用具置き場以外の部屋は許可なく入っちゃダメよ。生徒達の寮がある階と学園長室の掃除は、こちらで時間を指定して指示するから時間通りに行動してね」

パツパツのメイド服に身を包んだ女中頭代理だという女性は、早口で捲し立てながら光の館の階段を軽快な足取りで上っていく。

私もクロードが用意した、『田舎から出てきた娘風』の無駄に長いスカートの裾をたくしあげながら階段を駆け上がった。

「ああ、そうだわ」

階段の中ほどまで駆け上がった時、女中頭代理の女性が急に立ち

止まった。

「わっ！」

私は彼女の大きな背に頭からぶつかり、反動で跳ね返されて手摺りにしがみついた。階段から突き落とされるところだった。

女中頭代理の女性は、くるりと振り返ると、私の腕を鷲掴みにした。そのまま、凄い力で引き寄せられる。

「いい。絶対に指定された時間外に生徒達の寮に入っちゃダメよ。学園長は気にしないけど、あの上流階級のご子息様達は煩いんだから。ちよつとした事でもグチグチ文句言ってくるのよ。掃除するのが五分遅れたつてだけで殴られた子までいるの」

耳元で囁かれた声に、私は素直に頷いた。

ヴァレリーが「あんな頭の悪い連中が居る場所なんかごめんだ」と言い、リュカが「あんな場所に居たら人間不信になる」と言つて毛嫌いして入居しなかった寮の評判は、メイド達の中でも悪いようだ。

ヴァレリーやリュカだけじゃなく、王族や貴族の子息なのに光の館の寮に入居しない人達は結構いるらしい。逆に裕福な商人の子息の中には、光の館の寮に憧れている者達も多いと聞く。

軽蔑されたり、羨望の的になったりと、ずいぶん複雑な場所だ。

私は黄金色に輝く内装に目をしばしばさせながら、女中頭代理の女性の後について階段を上がっていった。

更衣室兼休憩室に一人置き去りにされた私は、付属品がやたらと多い制服をなんとか身に付け、結い上げなければいけない髪の毛と格闘していた。

ここの規則では、肩につく長さ以上の髪は規定通りの髪形に結い上げなければいけないらしい。それは、頭の後ろで丸く一つに纏めあげて白いレースのリボンで飾るといったものだった。

土の館のメイドさん達には、そんな面倒な髪形をしている人なん

ていない。髪が長い人だつて後ろで一つに束ねているだけだ。制服もシンプルでこんなにごちゃごちゃした付属品なんてくつつけていなかった。

「どうやら光の館だけは特別らしい。これも寮生達の要望なのかもしれない。」

「ああー、もうー！」

ついに私は、自分の不器用さと、手に負えない癖毛にブラシを投げ出した。かわりに、ハサミを手にとる。

肩につかない長さなら纏めなくていいなら、切ってしまえばいい。これじゃ一日かかつたつて規定の髪形になりそうにない。

顎の少し下ぐらいの長さで、無造作に切り揃えていく。細かなウエーブのかかった黒髪が床に落ちていった。

濡れていないおかげで、切ったそばからくるくると縮まることもなく、ほつと息をつく。

でも、明日から肩につくぐらいの長さになるまで、ストレート用アイロンが手放せなくなるのかと思うと気が重い。しかも、アイロンを使ったところでストレートになるわけじゃなく、今の状態を保つのが精いっぱいというところがさらに悲しい。

私はハサミを置くと、肩に落ちた髪の毛を払いながら、すっかり短くなつた髪をチェックした。不自然に飛び出した部分とかは見当たらないし、こんなもんでいいだろう。

鏡には、詰襟の黒いワンピースに白いレースのエプロンを身に付けた立派なメイドが、不安げな表情を浮かべて映っていた。嫌になるくらい似合っている……。

私は鏡台に置かれた、白いひらひらしたレースのついたカチューシャを手にとって頭に乘せた。

その時、制服と一緒に手渡された小さなコサージュが、小鳥が囀さえずるような音を立てた。

女中頭代理からの呼び出しだ。身支度に時間がかかり過ぎてしま

ったから、痺れを切らしたに違いない。

私は慌てて、エプロンの右上につけた、薔薇の花を模した乳白色のコサージュに触れた。ベルベットの生地とレースで作られた薔薇の花の根元辺りを摘む。

「ちよつと、支度についてまでかかっているの？ 早く二階の大ホールまで来てちょうだい。夕方からの立食パーティーの準備で忙しいのよ。全員で取り掛かっても間に合うかどうか……」

通信機になっているコサージュからは、思った通り、苛ついた女中頭代理の声が流れてきた。

「すみません！ すぐに行きます！」

私は手早く床に落ちた髪の毛を片づけると、部屋を飛び出した。

どうやって立食パーティーの準備を抜け出して、学園長室に忍び込もうか。それだけを考えながら長い廊下を走り抜けた。

二階の大ホールは、物が満載されたワゴンを押したり、手に布の塊を抱えたりしたメイド達で賑わっていた。

皆、膝丈で裾にレースのついた黒地の制服に、ひらひらした白いエプロン姿で駆け回っている。頭には白いレースのカチューシャ、両手首には制服と同じ生地、これまたレースで縁取りされたりストバンド、足下は黒いハイソックスにエナメルの靴。

私も同じ格好をしているのかと思うと、恥ずかしさで顔が熱を帯びてくる。

「ほら、何やってるの！ さっさと手伝ってちょうだい！」

たくさんのメイドさん達の姿に戸惑って立ち尽くした私に向かって、ヒステリックな声と共に丸い体が近づいてきた。

「これでテーブルを飾り付けて。ほら、あそこで飾り付けをしている子がいるから、詳しいことはあの子に聞くのよ。ちよっと！ 今日の燭台はそれじゃないって言ったでしょう！ 青いガラス製のものよ！」

彼女は手に下げた籠を私に押付けると、またヒステリックに喚きながら、他のメイドさんの方へと突進して行った。

寒色系の色の花が詰まった籠を押し付けられ、その場に取り残された私は、女中頭代理の丸い背を呆気にとられながら見送った。

二階の大ホールは天井こそ高くはないが、広さはかなりのものだった。土の館の食堂もそここの広さがあるが、その食堂二つ分ぐらいの広さはある。

今日の立食パーティーでは、演奏会かダンスパーティーでも催されるのか、広いホールの中央部分を避けるようにして、いくつもの丸テーブルが置かれ、壁際には休憩用の椅子が並べられていた。

そのホールのあちらこちらで、メイド達がテーブルを花で飾り付

けたり、カーテンを付け替えたりと忙しそうに働いていた。中には天井から吊るされたシャンデリアを磨いて、蠟燭をセットしている人までいる。

そういえば、女中頭代理も燭台がどうのとか言っていた。テーブルにも燭台を置いて蠟燭を灯すのだろ。普段は魔法の明かりで生活しているけど、こういうパーティーの時なんかは蠟燭の明かりで過ごすのかもしれない。

それは別にいいんだけど……。

私はあらためてホール内を見渡した。

これじゃ、夕方まで立食パーティーの準備から開放されそうにない。

なんとかして抜け出さないと。

私は花の入った籠を抱えたまま、こっそりと大ホールを抜け出そうとした。

「もう！ 新入りのあなたっ！ 何やってるの！」

が、即座に後ろから叱責する声が飛んでくる。

「あ、あの、ちょっと……」

振り返ると、鬼のような形相で女中頭代理が迫ってくるころだった。

「……お腹が痛くて。トイレに行ってきたいいでしょうか？」

最悪だ。なんて定番で嘘臭い言い訳なんだろう。

ついさっきまで、具合が悪そうな素振りなんて微塵も見せていなかったのに、急に腹痛を訴えるなんて仮病だと宣言しているようなものだ。

「はあ？」

危惧した通り、女中頭代理は怪しむような目で私の顔を凝視した。けれど、口に出してしまったからには、この言い訳で通すしかない。

「すみません。ちょっと吐き気までしてきて……」

私はそう言うと、口元に手を当てながらしゃがみこんだ。

「……はきそう」

「ええ！？ 止めて！ 仕事を増やすのだけは止めてちょうだい！
間に合わなくなるわ！」

女中頭代理の悲鳴と一緒に、彼女の手が私の腕にかかる。

「もういいから出ていって！ ほら、早く」

私は女中頭代理に引きずられるようにして、大ホールの出入り口まで連れて行かれた。

「はあ……なんだって、こんな使えない子を雇ったのかしら。だいたい今日になって急に休みたいなんて、カミラさんも無責任すぎるわ」

私の背を廊下へと押し出しながら、女中頭代理が疲れ切った声音で呟く。

カミラさんというのは、この光の館の女中頭だ。今頃はヴァレリーやクロードと楽しくお茶でもしているだろう。

私をメイドとして学園長室へ潜り込ませるためにクロードが用意したものは、地味な田舎の娘風衣装だけではなかった。

彼は出勤途中だったカミラさんを拉致してきたのだ。

無理やり連れて来られたカミラさんは、それはもう激しく御立腹だったけれど、大金が記された小切手と天使のような笑みで迎えたヴァレリーを見て、二つ返事で協力を約束してくれた。

カミラさんの豹変ぶりは、目の当たりにした私に、やっぱり世の中は金と顔なんだなあ、と実感させてくれる程だった。

私には、天使のような笑みを浮かべて、小切手を渡してくれないくせに！

「トイレの場所は分かるわね？ 悪いけど、あなたに付き添ってる時間は無いから、体調が良くなるようないようだったら、自分で医務室まで行って。医務室の場所は誰かに聞けば教えてくれるわ」

ヴァレリーの私に対する酷い扱いの数々を思い出し、悔しさを噛みしめていると、女中頭代理の声が聞こえた。

ああ、今はそれどころじゃなかったんだ。

今考えなければいけないことは、女中頭代理に怪しまれないように大ホールを抜け出す事だ。

「すみま……」

彼女の声で自分がやらなければいけない事を思い出した私は、大ホールの大扉に縋ったまま振り返った。

「あ、れ？」

しかし、そこに居るはずの女中頭代理は、もうその場にはいなかった。

辺りを見回すと、ホールの中央辺りで、シャンデリアを磨いているメイドさんが乗っている脚立の傍に、小さくて丸い背中が見えた。瞬間移動の魔法でも使えるのか、と疑いたくなる程の敏捷さを感じさせられる。

新人のメイド一人に構ってられないほど忙しいのだろう。

この分だと、誰にも見咎められずに学園長室へ行くことができそうだ。

私は、そつと大ホールの出入り口から離れると、長い廊下を歩き出した。厨房と記されたプレートが掛かる扉を探して。

探していた扉はすぐに見つかった。

廊下の両側には、金色のノブがついた濃い茶色の木製の扉が並んでいた。どの扉もこじんまりとした片開きの扉だったが、ひとつだけ大ホールの扉を小さくしたような両開きの扉があったのだ。

女中頭のカミラさんの話では、厨房は料理を載せたワゴンが行き来するため、出入り口が広くとれる両開きの扉が採用されているとのことだった。

私は扉の隣に下げられた銅製のプレートを確認した。そこには、確かに厨房と記されている。

「学園長室に入る方法？ そうねえ、掃除の時には入ることができると、時間も担当も決まっちゃってしまっているし……」

手にしたコーヒーカップを見つめながら、カミラさんは少し考え込んだ。

ピンと背筋を伸ばして椅子に腰掛けたカミラさんは、まるで教師のようだった。きつちりと結び上げた白髪、細いフレームの眼鏡、襟の詰まった紺色の窮屈そうなワンピースが、彼女が真面目で几帳面な性格だと教えてくれていた。

「ルームサービスを利用するのが、一番いいかもしれないわね」

すぐに彼女はコーヒーカップから視線を上げると、私の目を見て微笑んだ。

「ルームサービス、ですか？」

「ええ、光の館には食堂と呼ばれる部屋は無いのよ。代りに週に何度か大ホールでパーティーが開かれるの。パーティーが無い時や、参加したくない人は部屋でルームサービスを頼むのよ。ルームサービスは朝の六時から深夜の十二時までなら好きな時に頼む事ができ

るわ。軽食と飲み物だけを注文する生徒も多いの。学園長も利用しているわ」

「それなら怪しまれずに入ること簡単そうですね。どうぞ」

ヴァレリーが皿に盛った焼き菓子を、カミラさんの傍にある机の上に置きながら言った。

簡単そうですね、だと？

実際にやらなきゃいけない私の身にもなってよ。入るのは簡単だったとしても、その先はどうするのさ。

私はむっとして、ヴァレリーを見上げた。

彼は私の無言の抗議を涼しい顔で受け流し、私が座っているベッドの端に腰掛けた。

「まあ、ありがとう。ルームサービスを運ぶメイドには担当が決まっていないわ。注文はその日の責任者の元へメールで届くの。それを確認した責任者が手の空いている者に頼むのよ」

カミラさんはそう言って焼き菓子に手をのばした。

私は軽く深呼吸すると、銅製のプレートの下に嵌め込まれているボタンを押した。

「はい。ルームサービスの注文ですか？」

すぐに女性の声ボタンの下スピーカーから流れてくる。

「あ、はい！ えっと……学園長からの注文で、紅茶とケーキを二人分お願いします。紅茶はバイエル風ロイヤルブレンドで、ケーキは適当に見繕って下さい」

学園長はコーヒーが飲めない代わりに紅茶には嫌い、というカミラさんの言葉を思い出しながら答える。ついでにケーキはいつもおまかせらしい。

「わかりました。すぐに用意致しますので、そのままお待ち下さい」
「ここで待つのか……。」

どれくらい時間がかかるんだろう？ あまり時間がかかると、誰

かに見咎められるかもしれない。

そんな私の不安は、杞憂きゆうに終わった。

「お待たせしました」

お待ちくださいと言われて数分もたたないうちに、扉が開いて中からワゴンを押したメイドさんが出てきたからだ。ワゴンの上には美味しそうなミルクフィードと、ティーポットとカップのセットが乗っている。

「本日のケーキはイチゴのミルクフィードです。よろしく願いします」

「ありがとうございます！」

私はワゴンを受け取ると、急いで学園長室へと向かった。

今朝、無理やり連れていかれた時は、大階段を上って正面の大扉から入ったけれど、ワゴンがある今は階段を上るのは無理だ。

私は廊下の突き当たりにあるというエレベーターへとワゴンを押して歩いた。

本当は走り出したい気分だった。けれど、そんな事をしては不審がられてしまう。

逸る気持ちを抑えながら、エレベーターまで辿り着くと、ワゴンと共に乗り込んだ。

大変なのはここからだ。

学園長と国際魔法取締局の職員の間を盗んで、マリアン又王女の遺品を手に入れなきゃいけないんだから。

「はあ、ヴァレリーって、本当は救いようのないバカなんじゃないかな？」

私はぼんやりと照らされた四の数字を見上げながら呟いた。

「私に出来ることなら、なんでもする」

そう言った私に、彼は教えてくれた。

なぜマリアン又王女を殺した犯人が捕まるとまずいのか、を。

「戦争になるかもしれない」

それが、彼が最初に言った言葉だった。
その言葉を思い出す度に、息苦しくなってくる。私は目を閉じると、長く息を吐いた。

ヴァレリーの国ヴィラールと、マリアンヌ王女の国カリティアは隣国だ。どちらも弱小国で、隣接する大国フランドールの庇護の下で平和を維持していた。

ヴィラールとカリティアの二国間には、お互いに侵略戦争を繰り返してきた歴史がある。その小競り合いは、三十年程前に新興国のアクタニアが台頭してくるまで続いた。

アクタニアは、圧倒的な軍事力にものを言わせ、また、時には政略結婚を利用して、破竹の勢いで領土を広げていった。

アクタニアの驚異に晒された二国は、フランドールのお膳立てのもとに講和条約を結んだ。その二国の関係に、きしみが生じ始めたのは一年程前だった。

一年程前に、フランドールの姫君と、ヴィラールの第二王子ヴァレリーとの婚約が決まった。

その情報を知ったカリティア側からは、この結婚が成立する事でヴィラールとフランドールの関係が強固なものとなり、自国がフランドールから見捨てられるのではないかと危惧する声が上がっているそうだ。

そして今、ヴィラールはいつ内紛が起きてもおかしくない状態だった。

現国王は、国民から無能王と揶揄される傀儡かいらいの王で、実際に国を収めているのは側近達だった。その側近達さえも、二つの勢力に分かれて争っている、というのが今のヴィラールの現状だった。

一派は次期国王になる皇太子に与するもの、そしてもう一派は、現王妃であり第三王子の母にあたる人物に与するもの。

ヴァレリーは王妃が放った刺客が、マリアンヌ王女を殺したのではないかと考えているようだ。

ヴァレリーがマリアンヌ王女を殺したとなれば、カリティア側に彼を差し出さないわけにはいなくなる。そうなれば、カリティアが王位継承権第二位の地位にあるヴァレリーを始末してくれるからだ。

また、皇太子派であるヴァレリーが、国を揺るがすスキャンダルを起こしたとなれば、皇太子も責任を問われることになるだろう。世論が動いて、第三王子に王位継承権が転がり込んでくることも期待できる。

ただ、ヴァレリーがマリアンヌ王女を殺したのなら、ヴァレリーの身柄を差し出せば事は収まるかもしれない。

カリティア内では、フランドールとヴィラルが縁戚関係になることを阻止する為に、ヴァレリーを秘密裏に始末しようと進言する過激な人物もいるという。

マリアンヌ王女はルパートの事件の首謀者ではないかと疑われていた。先に王女がヴァレリーを殺そうとしていたのなら、非はマリアンヌ王女の側にあるということになる。

しかし、これが王妃の手の者の犯行となれば、状況が変わってくる。マリアンヌ王女は、ヴィラルの王位継承争いに巻き込まれて殺されたことになる。そうなればカリティアは黙ってはいないだろう。

亀裂の入りかけた二国の関係は完全に崩れ、講和条約は破棄されるに違いない。

これが、私がヴァレリーから聞き出した全てだった。

犯人の口から王妃派の人間の名を語らせてはいけない。それが、ヴァレリーが国際魔法取締局よりも先に、犯人を捕まえたい理由だった。

その一国の命運を賭けた作戦に、ろくに魔法も使えない、取り柄は動物を手なずけるだけの私を起用するなんて。

ただ、メイド服が似合うという理由だけで！

救いようのないバカじゃなかったら、悩みすぎて頭がおかしくなつたんじゃないかと思う。

チンツという軽快な音が、エレベーターが四階に着いたことを教えてくれた。

とにかく、やるしかない。

私は覚悟を決めて目を開けた。が、ワゴンの取っ手を握りしめたまま凍りついた。

開きかけたエレベーターの扉から、見事な胸の谷間が見えたのだ。

「うそ……」

きゅつと絞られたウエスト。腰から足先へ向かって、ゆつたりと広がる幾層にも重なった黒いレース。深く入ったスリットから覗く見事な脚線美。豹柄のパンプス。

そこには、見間違いようもない夜の魔女が立っていた。

赤い唇に妖艶な笑みを浮かべて、広げた両腕をこちらへと向かって差し出しながら、

「お帰りなさい。リリスちゃん」

まるで子供を胸の中に迎える母親のような姿で、彼女は私の名を呼んだ。

「紅茶を運んできてくれたんでしょう？ 私のために」

学園長はエレベーターの扉が閉まらないように片手をかけると、もう一方の手をワゴンにかけて身を乗り出した。

「ちょうど喉が渴いていたところだったの。ありがとう」

濡れたように光る黒い瞳に見上げられて、私は何も言えずに後ずさった。後頭部がエレベーターの壁に当たって小さな音を立てた。

バレた。

バレてしまった！

何か言わなければ、何か……。

「あ……」

からからに乾いた喉から擦れた声が漏れる。麻痺したように感覚の無い舌がもつれて言葉にならない。

「ねえ、ここでメイドごっこをしているぐらい暇なら、私と一緒に来てくれる？」

学園長は私を見上げたまま、少し低めの艶っぽい声で囁いた。

逃げることも拒絶することもできなかった。まるで、魅了の魔法にかけられたように、私はこくりと頷いていた。

これからどうなるんだろう？

軟禁されて異端審問官の尋問を受けることは間違いないだろう。

でも、その後は？

極刑になることはないと思うけど、懲役刑が求刑されたら……。

間違いなく、退学になるはずだ。そうなれば、魔法を使う仕事に就くことはできない。

それだけじゃない。

前科が付いた人間を雇う会社や国は多くない。路頭に迷うことになるんじゃないか？

私はワゴンの取っ手をぎゅっと握りしめた。

「どうしたの？ 執務室はこっちよ、新人さん」

歩くペースが遅くなった私の気配を察したのか、前を軽快に歩いていた豹柄のパンプスがピタリと止まるのが目に入った。

「すみません」

慌てて顔を上げると、立ち止まって肩越しにこちらを見つめる学園長と目が合った。その顔には柔らかな笑みが広がっていて、彼女が今何を考えているのかを覆い隠していた。

それが、さらに私の恐怖心を煽る。

こんな事になったのも全部ヴァレリーのせいだ。

泣き出したくなるのを堪えてワゴンを押しながら、心の中で銀髪の王子様に悪態をつく。

こうなったら、刑期を終えて戻ってきた後は、彼に責任を取ってもらおうしかない。

王子様なら、彼の一存で侍女の一人ぐらい雇えるはずだ。

もう私には、ヴァレリーの部下Bとして生涯尽くす道しか残されていない気がする。

けれど、それまでヴィラルが存続しているだろうか？ いや、それ以前にヴァレリーが無事かどうかもわからない。

私は、ヴァレリーと彼の国がいつまでも安泰でありますように、と絶望的な気持ちで神に祈りながら、学園長の後について行った。

「さあ、どうぞ」

この世の終わりとはばかりに沈んだ私とは対照的に、上機嫌な学園長の声に促されて、私は執務室のソファに腰掛けた。

私と学園長しかない執務室は、厳かな静寂に満ちていた。

今朝、ヴァレリーやクロードと一緒に入った時と違って、執務室と呼ぶのに相応しい気難しい雰囲気にも包まれた部屋に居心地の悪さを感じて身じろぎする。

あの時は人が多かったのと、ミケーレとロベルトが居たおかげで

賑やかだったから気付かなかったけれど、この部屋には人の気持ち
を滅入らせる独特の気配が漂っている。

「気が滅入るでしょう。前の学園長の趣味なのよ。うんざりしちゃ
うわ」

学園長がテーブルの上にケーキとティーカップを並べながら言っ
た。

「いえ、そんなこと……」

「言わなくてもわかるわ。だって、顔に出てるもの」

けらけらと楽しそうに笑う学園長の言葉に、私は思わず自分の頬
を両手で覆った。

「嘘よ。この部屋に入ると、たいていの人は気が滅入るの。厳めし
くて、堅苦しくって。まあ、執務室にはびったりなんだけどね。早
く部屋から出たいと思うでしょう。仕事がとつてもはかどるのよ」
赤面して俯いた私の耳に、学園長の歌うように滑らかに流れる声
と、カップに紅茶を注ぐ音が聞こえてきた。

この人は、一体何を考えているんだろう？

バレた瞬間は、国際魔法取締局の人達に突き出されるものとはか
り思っていた。でも、学園長は私を突き出すどころか、他の人達の
目に触れないように俯いていると注意までして、執務室へと連れて
きたのだ。

「あの……」

「待って！」

意を決して声をかけた私の言葉を制すると、学園長はおもむろに
立ち上がった。

胸元から（！）親指の先ぐらいの大きさの赤い小さな球体を取り
出すと、宙へと無造作に放り投げる。

アレは私も知っている、というよりも、持っている。入学時に学
生証や制服と一緒に生徒に配られたものだ。

あの球体は持ち主の声に反応して、一瞬で魔法陣を描いてくれる

便利な物で、簡易魔法陣と呼ばれている。そのままのネーミングだけだ。

「フイニティアス」

学園長の声に反応して、宙に浮いた球体が膨れ上がった。何本もの赤い光の帯が球体から溢れ出て、部屋の床へと向かってアーチを描く。次の瞬間には、赤い光で描かれた複雑な文様が床に広がっていた。

「さあ、もう何を話してもいいわよ。空間を遮断したから、外部に音が漏れることは無いわ。聞かれたら困るでしょう。お互いに、ね」

「あの、お互いに、って？」

「異端審問官が派遣されることは知っているでしょう。あの連中に私の城の中を我が物顔で歩かれるのは我慢できないのよ。だったら憂いの国の王子様に協力して、さっさと犯人を見つけて滞在する理由をなくしたいと思って」

学園長は私の向かいのソファに座り直すと、長い脚をゆっくりと組んだ。

「城？ 憂いの国の王子さま？」

「そう。この学園は私が支配する城のようなものよ。一応、国際魔法取締局の組織の一つではあるけどね。生徒達は、学園内にいる間は私の監視と保護の下に置かれているの。それを、あの気味の悪い連中に差し出さなきゃいけないなんて、冗談じゃないわ。ウサギを狼の前に差し出すようなもんよ。何をされるかわかったもんじやない」

心底嫌そうに眉を顰めて吐き捨てる、彼女は手にしたフォークで勢いよくミルフィーユを突き刺した。

「憂いの国の王子様っていうのは、あなたのご主人様よ。いつつも物憂げな顔してるから、そう名付けてあげたの。ヴァレリー殿下に頼まれてこんな真似してるでしょう」

そう言って、学園長は切り分けたミルフィーユを口に運んだ。

学園長の話がどこまで信用できるかはわからない。

でも、ここで違つと否定しても、彼女は信じてくれないだろう。何もかもバれているのなら、素直に白状してしまうしかない。

「ええ、そうです」

私は甘い匂いを漂わせている紅茶に手をのばしながら答えた。自分でも驚くほど冷たく固い声が、執務室に響いた。

追跡 1

生暖かく湿った空気が体に纏わりつく中、私はグレーのパーカーのフードを目深に被って、石作りの壁に背を預けて二人を待っていた。

辺りには獣の臭いが立込めている。時折、緩やかに流れる風に乗って臭気が強くなるのを、手にしたハンカチで鼻を覆ってやり過ごす。

早朝の家畜や騎獣の世話の仕事で、動物の匂いには慣れてはいるけれど、湿度と気温の高い時の臭気には耐えがたいものがある。

夏だから気温はしかたないけど、せめて湿度だけはなんとかならないかなあ。

ハンカチで鼻を覆ったまま見上げた空は、灰色の霧のような雲に覆われて星一つ見えない。僅かに月がある場所だけが、朧おぼろげな光を発しているだけだった。

「降らなきゃいいけど」

まだ雨粒は落ちてきていないが、この様子だといつ降りだしてもおかしくない。

ぼんやりと空を見上げながら待っていると、砂利を踏む足音が聞こえてきた。

私は石壁から身を起こして、音が聞こえる方へと目を凝らす。夜の闇の中につつすらと、二つの人影が見えた。

向こうもこちらに気付いたらしい。

背の高い方の影が片手を上げたように見える。

私はフードがずり落ちないように手で軽く押さえながら、二つの人影の元へと急いだ。

「ねえ、マリアンヌ王女の遺品は届いた？」

二人の顔を見るなり浴びせた私の質問に、

「ばつちり」

クロードが手に持っていた小さなビニール袋を掲げて見せてくれた。

そのビニール袋には布の切れ端が入っていた。暗くてよくは見えないが、黒っぽい色の生地のようなのだ。

「なんだろう？ これ」

「マリアンヌ王女が死んだ時に着ていた夜着の一部だ。血のついた部分を切り取って送ってくれた」

まるで、なんでもない事のように答えたヴァレリーの顔を見る。

「って、ことは……この黒っぽいのが、血の色？」

「ああ、赤黒かったから間違いないだろう」

うげえ、やだよ。血の臭いを嗅ぐなんて、考えただけでも怖い。

「今さら嫌だなんて言わないだろうな」

「分かっているって。ちゃんとやるから、そっちも約束は守ってよ！」

私はヴァレリーを見据えたまま、クロードの手からビニール袋をひったくると、獣舎へ向かって歩き始めた。

「約束って、あれだよなあ。絶対に顔を見るなっつー良くわかんねえ約束。ねえ、なんで？」

「どうしても！」

絡んでくるクロードも無視して、獣舎へと急ぐ。機嫌が悪かったのもあるけれど、それ以上に雨が心配だったのだ。

少しぐらいの雨なら平気だろうが、本格的に降り始めたら臭いを辿るのに支障をきたすかもしれない。

「たまんねーな、この臭い」

獣舎の入り口の壁に寄りかかりながら、クロードがぐぐもった咳きを漏らした。制服の袖で鼻を覆っているようだ。

「ま、献体から漂ってくる死臭と薬品の混ざった臭いよりはマシだけど」

クロードが続けて気味の悪いことを呟くのが耳に入る。

私は、彼の言葉をあまり深く考えないようにして（その献体は、死霊魔術学の授業に使うのか？ とか）、いつも獣舎で寝ている一匹の犬の名を呼んだ。

「ロン、おいで」

すぐに獣舎の中から小さな影が駆け出してきた。

転がり出てきた影は、薄い雲を通して差す僅かな月明かりに照らされて、白い部分だけを闇の中に浮かび上がらせながら、盛んに尻尾を振っている。

「しっ！ 静かにして」

私は口を開きかけたロンの前に屈みこむと、小声で鋭く注意をしながら黒い鼻の前に手をかざした。

「うおふっ……」

吠えようとしたところを止められたロンは、口の中で妙な声を上げて身じろぎした。そして、吠えなかったことを褒めてくれ、と誇らしげに胸を張りながら、黒い瞳でじっと私を見つめてくる。

「ロン！ ありがとうっ！」

私はロンの頭をガシガシと撫で回して抱きしめた。耳元に生暖かい鼻息がかかる。

この学校にはロンの他にも四頭の犬がいる。その中でも私は、この毛足が長い白黒のブチの犬が一番好きだった。

容姿はボーダーコリーにそっくりなのに、なぜか牛柄模様の毛色も、社交的で活発な性格もかわいくて堪らない。

「その犬に血の臭いを辿らせるのか？」

ロンを抱きしめて、その家畜の臭いが移った柔らかい毛に顔を埋めていた私は、ヴァレリーの言葉に一気に現実に戻された。

ロンと触れ合っている場合じゃなかった。私にはやらなければいけない事がある。

「……ちよつと違う。ロンに協力はして貰うけど」

私はロンの頭を撫でながら、ヴァレリーを見上げた。

行儀よくお座りをして、何かを待っているロンの尻尾が、パタパタと地面を叩く音が聞こえる。きつと、私がボールか何かを取り出すのを待っているんだろう。

「絶対に私の顔は見ないって約束、ちゃんと守ってくれる？」

「それは、約束すると言ったはずだ」

苛立ちを含んだヴァレリーの声にもめげずに、私はもう一度念を押した。

「クロードにも絶対に守らせて」

「あ、ああ。約束するが……大丈夫なのか？ 何か危ない魔法でも使うつもりなら、止めても構わない。そこまでさせるつもりは無いから。俺は、お前がアニマルマスターよりも先に犯人の足取りを辿れるかもしれない、と言ったから協力して貰おうと思っただけだ。それが、危険を伴う行為だと判っていたら協力を頼んだりしなかった」

あまりに執拗に頼んでしまったせいで、不安を抱かせてしまったらしい。

ヴァレリーが心配するような身の危険は無いんだけど、顔を見られると本当に困るのだ。なんて説明したらいいだろう？

私は考えがまとまらないまま、口を開いた。

「あ、いや違うの。危険は無いんだけど、その、なんていうか……。えーっと、見られたら恥ずかしくて、もう二度と顔を合わせられなくなるかもしれないって」

この暗さでは、私がどんな顔をしているか分からないはずだ。私もヴァレリーがどんな顔をしているのか分からないんだから。それでも、恥ずかしさに赤く火照った顔を見られているような気がして、フードを被り直して目を逸らした。

「うっわ、何それ。マジで見てみてー。すげー気になるんだけど」
クロードの好奇心に満ちた声が追い討ちをかける。

私は逃げ出したい気分襲われて、被ったフードの根元を両手で握りしめて俯いた。

「見たら解雇するぞ」

間髪を置かずにヴァレリーの冷やかな声がクロードに飛ぶ。

「冗談だつて。そんな怖い声出すなよ。でもさあ、どーやって犬も使わずにマリアンヌ王女の臭いを辿んの？」

クロードが、今はまだ顔見てもいんだよね？ と言いながら、フードを捲り上げて私の顔を覗き込んだ。

「……私が犬の代わりに臭いを辿るの」

彼の顔を睨みながら、苦いものを噛みしめるように言った私の言葉に、

「へ？」

クロードが気の抜けた声を上げた。

追跡 2

「いま、なんて？」

「だから、私がマリアン又王女の血の臭いを辿って、犯人の足取りを追うの！ これから魔法を使うから、ちょっと離れて」

私は不思議そうな声で聞き直すクロードに、きっぱりと宣言して立ち上がった。心の片隅に残る迷いを振り払いたかったからだ。

クロードが数歩後ずさるのを確認すると、制服のスカートのポケットから小さなガラスの玉を取り出す。色は違うけれど、学園長が使っていたのと同じ簡易魔法陣だ。

それを軽く宙へと放り投げて、今の私が唯一使える魔法陣の名を口にす。

「コムティリアル カストレア」

私の声に反応したガラスの玉は、白く発光しながら空中で制止した。次の瞬間、玉から幾筋もの白い光の帯が降り注いだ。

数秒のうちに空中に制止していたガラスの玉は消え、代わりに私の足下には、二重の円の中央に六芒星が描かれ、周囲に古代語がびっしりと記された光の魔法陣が出現した。

「コムティリアル？ 状態変化系の魔法か？」

「もしかして犬に姿を変えたり出来んの？ それって難易度高い上位魔法じゃねーか。リリスちゃん、どこで覚えたんだよ」

私が言った魔法陣の名に、ヴァレリーとクロードが色めき立った。彼らの専攻は、状態変化系の魔法とは縁の無い死霊魔術学だ。

クロードは死霊魔術以外の魔法も使えそうだけど、ルパートの一件の時に見せた魔法や、ヴァレリーの護衛をしている事を考えると、たぶん戦闘魔術系の魔法に精通しているんだと思う。

だから知らないのだ。

状態変化系の魔法にも段階があるということ。そして、初心者

がこの魔法を使おうと思つたら、場合によっては酷く惨めな姿になるということ。

「犬に変化することは出来ないけど、犬の鼻と同じ能力を得ることは出来るから。たぶん、マリアン又王女の返り血を浴びたまま逃走した犯人の足取りは辿れると思う」

そう言つて彼らに背を向けると、光に驚いて遠巻きに様子を見ているロンを呼んだ。

「……それって、まさか」
「クロード」

笑いを含んだ声と、それを咎める声を背中に聞きながら、私はロンの額に軽く右手を添えた。ロンが喜んで頭を私の手に強く擦り付けてくる。

ロンの頭の力強さに苦笑しながら、空いた左手を制服の胸ポケットに突っ込んで学生証を取り出した。片手で操作して習つたばかりの呪文を表示させる。

私はルビがふられた古代語の羅列をたどどしく読み上げながら、ロンの黒い鼻先を撫でた。本来なら意味のある文章なんだろうけど、私にはさっぱりわからない。ただの暗号だ。

それでも間違わずに読み上げることに成功したようだ。エリザベスちゃんの耳が頭に出現した時のような、なんとも言えないむず痒さを鼻に感じる。

「すごい……」

鼻に感じていた違和感が収まると、私はあまりの驚きに啞然として呟いた。

まるで音を聴くように、匂いを嗅いでいる。

意識していないのに、数種類もの匂いの質や強さ、発生源までの距離が分かるのだ。

色々な匂いが合わさって、獣舎特有の臭気としてしか感じられなかった周囲の匂いも、今では一つ一つが独立した匂いとして嗅ぎ分

けることができる。

干し草の匂い、家畜の糞尿の匂い、土の匂い、家畜の体臭に至っては三種類の似通った匂い（たぶん同じ種類の家畜）の中に、さらに個体差があることまでが分かる。

これが、犬が感じる世界の一部。

私はパーカーのフードを押さえながら、顔を上げた。

猫の目の能力を得た時と違って、気持ち悪くなるようなことは無さそうに安堵する。あの時は先生が別の呪文で能力を調整してくれたから普通に歩くことが出来たが、私にはそんな真似は出来ない。もし、犬の鼻の能力を得ることで副作用のようなものが出たら、一旦魔法を解除してロンと一緒に水の館まで行かなければならなかっただろう。

ロンは割と大人しい性格の犬だけど、まだ若い。一度も吠えずに光の館までついてきてくれる保証は無かった。

「大丈夫か？」

ヴァレリーの気遣うような声が聞こえた。

思わず振り返り返りそうになった私は、慌ててハンカチで鼻から口元にかけてを覆い隠そうとした。

「ひゃっ!？」

が、私の手は謎の突起物にぶつかり、ハンカチを取り落としてしまった。鼻に鈍い痛みを感じる。

って、ことは……。

私は屈んで地面に落ちたハンカチを拾いながら、空いた方の手を恐る恐る自分の鼻へとのばした。

うわあ、やっぱり……。

思ったとおり、謎の突起物は、普通の人間の倍以上に高くなってしまった自分の鼻だった。びっしりと毛で覆われていて、鼻先はひんやりと湿っている。

「リリス？」

「だ、大丈夫！ だから、こっちは来ないで！」

こんな姿を見られたら、恥ずかしくて二度と顔を合わせられない！

私はハンカチで鼻を覆いながら、二人の方を見ないようにして言った。

「魔法は成功したから大丈夫。今から光の館まで行って、そこからマリアンヌ王女の血の匂いを辿ろう。だから、先に歩いて……下さい」

追跡 3

光の館はクレスメント学園の敷地のちょうど中央に建っている。学園内にある四つの館と正門から光の館へと伸びる大通りには、外灯が設置されていて夜でも明るかった。

その通りを歩いていたら、寮にいる生徒や先生達の目に止まってしまうかもしれない。その為、私達は大通りを避けて、獣舎のある側から土の館の壁沿いに遠回りをする形で光の館へと向かった。

「あー、やっぱり見張りが立ってんなあ。殺人事件があつた後じゃ当然か」

クロードが光の館の周囲を囲む生け垣の隙間から、様子を窺いながら声を抑えて言った。

光の館はクレスメント学園のメインになる建物で、他の四つの館よりも大きく、周囲には整備された庭園が幾何学模様を描いている。さらにその庭園を囲むようにして作られた背の低い生け垣の影に、私達は身を潜めていた。ちょうどこの位置からは、庭園の植木に邪魔をされずに、光の館の正面入口を見ることができた。

いつの間にかこんな場所を見つけていたんだろ。

私は彼らの手際の良さに関心しながら、生け垣の隙間から光の館の正面入口を覗き見た。

クロードが言ったとおり、正面入口の大扉の両脇には、国際魔法取締局の制服を着た男が二人立っている。

「これ以上、近付くことは無理そうだな。少し大変だが生け垣の周囲を一周して匂いを探すしかないか」

「でも、もしマリアン又王女を殺した犯人が、光の館から逃げているなかったら？ それか光の館のどこかに服や凶器を隠してから逃げたとか。そうしたら無駄になっちゃうんじゃない？」

私はなるべく顔を上げないようにしてヴァレリーに問いかけた。

もちろん、フードは限界まで引つ張って、顔の両サイドが見えないようにガードしているし、目からは持参した大判のハンカチでしっかり覆い隠している。

それでも顔を上げて二人と目を合わせる勇氣は無かった。

「そうでもない。匂いを見つけることができないのなら、犯人は光の館の生徒か従業員という可能性が強くなる。マリアン又王女の遺体は血に塗れて^{まみ}いたと聞いた。返り血を全く浴びずに済むとはあまり考えられないし、王女には香を焚く趣味があった。王女の部屋のカーペットにも香の匂いが染みついていたはずだ。靴を履き替えてもしない限り、香の匂いは地面に残るだろう。人の鼻にはわからないくても犬なら気付く。犯人は必ず衣服や靴と凶器をどこかに隠してから自分の部屋に戻ったはずだ。それらを確実に隠すことができる場所を、他の館の生徒や従業員が見つけるのは難しいだろう。ただ隠すだけではなく、絶対に誰にも発見されない場所なくてはならないんだからな。見つければ服や靴に残った体臭や、凶器についた指紋から簡単にバレてしまうだろう。だが……」

「だが？」

「犯人が視覚だけではなく、嗅覚まで惑わせることができる程の腕の幻術使いならお手上げだ。まあ、そうなればアニマルマスターでも見つけることはできないだろうが」

「なるほどねーってことで、リリースちゃん、よろしく」

私が口を開くよりも早く、クロードが一人で納得してぼんぼんと私の肩を軽く叩いた。こういう軽さはミケーレにそっくりだ。彼と気が合うのもよくわかる。それにいつから「ちゃん」付けになったんだ？

文句の一つも言いたいところだけど、ぐっと我慢して（顔を上げるのが怖いので）、私は制服のスカートのポケットを探った。

手に触れたビニール袋を取り出すと、中から小さな布の切れ端を取り出す。学園長が執事さん（学園長室で会った真面目そうなおじ

いさんの幽霊）に命じて、こっそり持ち出してくれると約束したマリアンヌ王女の血が付着した布だ。

ヴァレリーの話では夜着の切れ端だということだけど、この滑らかな手触りと上品な光沢感シルクかもしれない。

袋から取り出した瞬間に、錆びた鉄のような匂いと、香辛料と甘い花の香りが混ざったような匂いが漂ってきた。血の匂いと香の香りだろう。

そつと布の切れ端を鼻に近づけてみる。血の匂いと香の香りの他に清涼感のある人工的な匂いが二種類と微かに酸味のある匂いが感じられた。

人工的な香りの一つは洗濯用洗剤の香りだ。学園の洗濯室に常備されている柔軟剤入りの洗剤と同じ匂いがする。私もよく利用しているお馴染みの香りだ。

もう一種類は、たぶんボディーソープか石鹸の香り。こちらは私が普段使っている学園支給のボディーソープよりも格段にいい香りがするけど、石鹸やボディーソープ特有の棘のない控えめな香りがある。もしかしたら、ボディーミルクとかパウダーかもしれないが、香水の類いではないと思う。

そして、微かに感じる酸味のある匂い。この匂いの正体に気付いた時、私は急に吐き気に襲われて片手で口元を押さえてえずいてしまった。

これは、人の汗の匂いだ。
吐き気に襲われたのは、汗の匂いが強烈だったわけじゃない。汗の匂いの中に生きた人間の体温のようなものを感じてしまったからだ。

強く漂う血の匂いと、確かに昨日まで生きていた人間の体臭。それを同時に感じて、激しい嫌悪感のようなものに襲われてしまったのだ。

私が今手にしている布の切れ端に付着している血。それは、私と

同じように昨日までこの学園で普通に生活していた少女が流した血だ。きつと殺される直前まで、自分の死など想像もしていなかったに違いない。そう思うと苦しくて、これ以上マリアン又王女の死の瞬間を記憶した夜着の切れ端の匂いを嗅ぐことはできそうになかった。

「この布に残っている匂いは覚えたから、この場所から探し始めるね」

私はそう言うと、布の切れ端をビニール袋に入れ、制服のスカートのポケットに押し込んだ。

追跡 4

数歩進んでは立ち止まって屈みこみ、匂いを確認する。その動作を繰り返して、いい加減に膝が痛くなってきた頃だった。

緩やかに吹きつけた風の中に、香辛料と甘い花の香りが混ざったような匂いを嗅いだ気がして、私は風上の方に目を向けた。

そこには光の館の裏手から延びる一本の細い道があった。学園内の他の道とは違って、整備が行き届いた石畳ではなく、雑草除けに砂利を敷き詰めただけの簡素な道だった。外灯も設置されていないところを見ると、業務用の通路なのかもしれない。

「お？ 見つけたのか？」

「わかんない。でも、同じ匂いが流れてきた気がする」

クロードの声に気のない返事を返しながら、私は吸い寄せられるように細い道へと歩き出した。すぐに足の裏に砂利を踏む感触を覚えて立ち止まった。足の下には何の変哲もない白い砂利が広がっている。

風が止んだせいか、探している匂いは漂ってこなかった。足下から立ち上ってくるのは、湿った土の匂いと、道の脇に生い茂る雑草の青臭い匂い、それから微かに感じる動物の体臭。

「気のせいだったのかな？」

そう思った途端に、水を吸った布を頭からかぶせられたような疲労感に襲われた。体中がだるい。今まで一生懸命になっていたのが気付かなかっただけで、かなり疲労が蓄積されていたみたいだ。

疲労感って、なんで期待を裏切られた瞬間に追い打ちをかけるように襲ってくるんだろう。

それでも諦めきれずに、白い砂利の上を少し歩いて立ち止まり、膝をつこうと身をかがめた時だった。

また、マリアンヌ王女の夜着に残った香の香りが鼻についた。今度は錆びた鉄のような匂いもする。

私はその場に座り込んで両手をつき、砂利の上に覆いかぶさるようにして匂いを嗅いだ。

間違いない。

確かに、あの布の切れ端に残った匂いと同じ匂いがする。

「見つけた！」

私は顔を上げて、しっかりとハンカチで顔を覆いながら振り返った。

「あの布と同じ匂いを見つけたよ！」

「マジかよ!？」

「この道を歩いたのか」

ヴァレリーの言葉につられるようにして、白い砂利が敷き詰められた小道へと向き直った。

闇の中に白い小道だけが、ぽつかりと浮かんで見えるように見える。その小道も徐々に白さを失って、飲み込まれるように闇の中へと消えていた。

「ねえ、この道の先って何があるか知ってる？」

「いや、こんな道があることも初めて知ったよ」

「さあ？ ゴミ捨て場でもあるんじゃないの？ 従業員用の通路みてーだし」

私達は少しの間、ぼんやりと白い小道を見つめていた。

「はあ、行ってみるしかないか」

ここで三人で、ぼーっと眺めていても埒があかない。

曇り空で外灯も無いせいで、暗くて先が見通せないけれど、この道自体はそんなに距離は無いんじゃないかと思う。（全く根拠は無いけど……）

それに、もし長い道だったとしても、闇雲に探していた時と比べれば数段マシだ。

私は闇の中に白く浮かび上がる小道を歩き出した。

道の先に小屋の影らしきものが見えてきたのは、歩き出してすぐのことだった。

影は近づくにつれて、その輪郭を鮮明なものにしていった。

それは、私の胸ぐらいまでの高さのある四角い箱だった。中央に開き戸がついていて、向かって右側の上部からは、私の身長よりも長い煙突が突き出しているようだ。その四角い箱の左隣には、レンガがコンクリートで囲まれた小さなスペースがある。

「うわ……。なんか、色んな匂いがする」

辺りにはあまりに多くの匂いが充満していて、眩暈がした。

影が見えてきたあたりから感じていた焦げ臭い匂い。それに混ぜて鼻につくのは、デミグラスソース、バターをたっぷり使ったクロワッサン、コーンスープ……。他にも野菜や肉、卵といった食材の匂いが充満している。

探している匂いが分からなくなってしまっただけじゃないか、と不安になった私は、その場に片膝をついて身を屈め、白い砂利に鼻を近づけた。

大丈夫。ちゃんとマリアンヌ王女の香の香りがする。

起き上がろうと顔を上げた時、ふと視界の隅に砂利の上に黒い紙のようなものが落ちてるのが映った。なんとなく気になって、拾い上げて匂いを嗅いでみる。

なんだか、もう本物の犬と同じように、匂いを嗅ぐ癖がついてしまったようだ。

ハガキぐらいの大きさの紙からは、新しい紙の匂いと印刷インクの匂いに混ざって、微かに嗅ぎ慣れた匂いが漂ってきた。

今にも消えてしまいそうに薄くはなっているけれど、香辛料と花の香りが混ざったような匂いがする。

「ねえ、これ……」

私が手にした紙を二人に見せようとした時、

「おい！ 焼却炉だろ、これ」

クロードが慌てた様子で、前方の四角い箱に向かって駆け出した。そのままの勢いで開き戸を乱暴に開けると、中を覗き込んだ。

「うっ！ げほっ、ごほ……」

すぐに弾かれたように顔を背けて激しく咳き込み始めた。

「お前…… バカだ、バカだと思っではいたが、相当だな。顔を突っ込む前に、焼却炉の中に粉塵が充満していることぐらい気付け」

ヴァレリーが溜め息交じりに言いながら、まだ苦しそうに咳込んでいるクロードの横まで歩いて行くと、焼却炉の上部に片手をかけた。

追跡 5

「クロード、明かりだ」

ヴァレリーは焼却炉の中を覗き込みながら、やっと息を整え始めたクロードに声をかけた。

「うう……人が苦しんでるってのに……鬼だ。真冬の井戸水のような血が流れてんだ、きつと……」

「早く」

「わかったよ。仰せの通りに致しますよ、ご主人様」

せき込み過ぎて擦れた声で呟いた愚痴もあつさりと無視され、彼は半ば投げやりな態度で身を起こした。そして、冷たいご主人様のご期待に沿う為に短い呪文を唱えたようだ。

あまりに短くて呪文自体は聞き取れなかったけれど、クロードの右手には小さな光の玉が乗っていた。簡易魔法陣と同じぐらいの大きさの光の玉は、クロードが手を離しても下に落ちることはなく、ゆらゆらと宙に浮いていた。

クロードが軽く指で弾くと、光の玉は滑るように宙を飛んでいき、焼却炉の中へと入っていった。淡い光が焼却炉の中を満たし、中を覗き込んでいるヴァレリーの姿を照らし出す。

ヴァレリーは制服の袖で鼻と口を覆うと、焼却炉の中へと上半身を突っ込んだ。

「さっきの魔法って一般魔術？」

焼却炉に半身を潜り込ませて何かを探しているヴァレリーの後ろ姿を見守りながら、私はクロードに先ほどの光の魔法のことを訊ねた。

「ああ、明かりの魔法だよ」

クロードはさして興味もないような声で同意すると、思いもかけなかったことを口にした。

「使えると便利だし、簡単な呪文だから後で教えようか？」

「ほんと？　ありがとう！　ああ、でも……大丈夫なのかな？」

クロードの思いもかけない申し出は、私にとって飛び上がりたいほどに嬉しいことだった。

けれど、クレスメント学園の講師以外の人間が魔法を教えることは、国際法で禁じられている。違反者には厳しい罰則が課せられるはずだ。

「バレなきゃ平気だって。それにさあ、アレってほとんど機能してねー法律だし。一般の市民には厳しく適用されるけど、国の上層部に関しては黙認されてんだよ。いちいち取り締まったら、どこの国の軍隊も崩壊するからさ」

「へえー、軍隊の中で魔法を教えるってこと？　そういえば、クロードも入学したばかりとは思えないぐらいに魔法に詳しいよね」

「まあ……似たようなもんかな」

急に言葉を濁したクロードが気になって、彼をじっと見つめると、「んなことより、明かりの魔法はどうすんだよ。教えて欲しいのか？　欲しくないのか？」

これ以上の詮索は受け付けないとばかりに、強い口調で決断を迫られてしまった。

「教えて！　教えて下さい！」

言葉を濁した理由は気になるけど、しつこく訊いて「やっぱり魔法は教えない」なんて気が変わられたら大変だ。

私は慌ててクロードに魔法を教えて貰えるようお願いした。

「クロード、明かりを消してくれ」

私がクロードに魔法の講義の約束を取り付けている間に何かを見つけたのか、ヴァレリーが焼却炉へと突っ込んでいた上半身を抜き出して言った。

「お？　なんか見つかったのか」

クロードの声にヴァレリーは手にした長い棒状の物体を軽く掲げ

て見せた。それは、焼却炉から漏れる明かりに照らされても尚黒く煤けて見えただけで、一振りの剣に違いなかった。

「リリス」

ヴァレリーはゆっくりとこちらへ歩み寄ると、手にした剣を私の前に差し出した。

「この剣の匂いを嗅いでくれないか？」

私はおそおそと空いた左手をのばして、差し出された剣を受け取った。見た目よりもずっしりとした重みに、がくりと手が下がって取り落としてしまいそうになった。

「やっつては見るけど……あまり期待はしないで」

私はヴァレリーにそう言い残して彼に背を向けると、鼻を覆っていたハンカチと右手を除けて、煤けた剣を鼻に近づけた。

心配した通り、剣からは焦げ臭い匂いしか漂ってこなかった。

「やっぱり、ダメ。匂いは消えちゃってるよ」

私はもう一度ハンカチで鼻を覆い直してから振り向くと、ヴァレリーに剣を返しながら首を横に振った。

「そうか」

彼も予想はしていたんだろう。あまり失望した様子も無く剣を受け取ると、無造作に焼却炉の中へと放り投げた。

「はあ、ここまできて進展無しかよおー」

座り込みたいのは私の方だ。あんたはほとんど何もしてないじゃないか。

ぼやいて砂利の上に座り込んだクロードを、少し冷ややかな眼差しで眺めていると、すっかり忘れていた紙の事が脳裏をよぎった。

ここで拾ったハガキぐらいの大きさの紙。あれには何故かマリアン又王女の夜着と同じ匂いがついていた。

「そうだ、これ！ さっき拾ったんだけど、この紙からマリアン又王女の香の匂いがするの！」

私は出すタイミングを逃して、折り畳んでポケットに突っ込んで

いた謎の紙を引っ張り出すと、二人の前に開いてみせた。

「これに？」

「なんだ、これ？」

ヴァレリーが私から紙を受け取ると、クロードが焼却炉から光の玉を呼び戻して紙の真上に停止させた。

光量を抑えた淡い光が、黒地に金文字で中央に描かれた絵を浮かび上がらせた。二重の円の中心に六芒星、さらにその六芒星の上に重ねるようにしてリアルな雄山羊の頭が描かれている。

この絵から連想されるものは一つしかない。悪魔だ。

「何かの書籍の広告のようだな」

ヴァレリーが紙を裏返して呟いた。

裏にはいくつかの書籍の写真とタイトル、そして簡単な紹介文が書かれていた。そのどれもが不穏なタイトルの書籍ばかりだ。

「確かに、これからマリアンヌ王女の香の香りがしたのか？」

ヴァレリーが不思議そうな顔で紙をもう一度裏返しながら訊いてきた。

私が頷くと、彼は「わかった。後で調べてみよう」と言って、その紙を制服の内ポケットへとしまいこんだ。

その後、一応周囲を確認してみたが、マリアンヌ王女の匂いは途切れていて探すことはできなかった。

焼却炉の中からも煤けた剣以外のものは見つからず、これ以上ここを探しても何も見つけることは出来ないだろうということで、私たちは土の館へと戻ることにした。

昨夜のどんよりとした空が嘘のような雲一つ無い青空と照りつける太陽の下、私服姿の生徒達が次々と土の館の大扉から吐き出されてくる。

その様子は、巣穴から出てくる蟻の群れのようなだった。行列を作つて、私がいる校庭までの短い道のりを歩いてくる。校庭に着くなり目的を失つたかのように、バラバラと広がる様子も蟻にそっくりだ。

拡声器を手にしたネズミが、そんな私達を必死にまとめようと、頭に響く不快な高い声を張り上げている。背が低く痩せていて、甲高い声を持つ悪魔学の講師だ。その容姿と特徴的な声から、彼のことを影でネズミと呼んでいるのは私だけではなかった。

ネズミの後ろには黒いローブに身を包んだ男が二人佇んでいた。フードを目深にかぶり、ひきずる程長いローブを着た二人の男の姿は、この青空の下ではひどく滑稽に見えた。それと同じぐらいに気味が悪く、薄ら寒い気持ちにもさせられる。

「異端審問官だよ」

私の視線に気付いたのか、リュカが面白くなさそうな声で言った。「あの人達が？」

「そう、あれが。あまり一般人の前には出てこねーけど、うちの城にはたまに出入りしてた。領内で呪術関係の事件が起きた時とかに呼ばなきゃなんねー決まりだから。うちに出入りしてる奴も気味悪くて、何考えてるかわかんねー奴だったけど、あいつらも同じっばいな」

「みんな、あの格好なの？」

二人の異端審問官は、歴史の教科書の挿し絵から抜け出して来たような姿をしていた。黒いローブの腰の部分にはベルト代わりに荒

縄が巻かれ、その荒縄には革の小袋と短剣がくくりつけられている。胸元には銀製のクレスメント教のシンボル 十字架に巻き付く竜をかたどったペンダントが下げられていた。

「うん。うちに来てた奴も同じ格好してた。あれが伝統ある神聖な衣装なんだってさ。背中にはクレスメント教のシンボルが銀糸で、でかかかと刺繍されてんだよ」

リュカはそう言って盛大に欠伸をすると、寝癖がつきまくった頭を掻いた。

「あーあ、朝っぱらから異端審問官がなんの用だってんだよ。いきなり館内放送で「校庭に集合しろ」って起こされる方の身にもなれっつーの」

「うん、そうだね……」

私は彼と違って、何故急に呼ばれることになったのか知っている。きつとマリアンヌ王女の事件についての報告と、なんらかの調査があるんだろう。

ミケールは大丈夫なのかな？

それに、ルパートは？ 彼はもう異端審問官の尋問を受けたんだろうか。陰気な雰囲気を漂わせる彼らに囲まれている姿を想像して、私は身震いして両手で自分の体を抱きしめた。

「静かにー、静かにして下さーい！ これからー、国際魔法取締局の職員の方からー、重要なお知らせがー、ありますー！」

ネズミの一際大きく甲高い声が校庭に響いた。拡声器があまりの高音についていけず、キーンという不快な音をたてた。

私もリュカも耐えられずに耳を塞いでネズミを睨んだ。他の生徒達も同じだったらしい。一瞬、そこで短い悲鳴が上がり、それが収まると静寂が訪れた。

その瞬間を待っていたかのように、アール先生がネズミから拡声器を取り上げると、

「はい、皆さんこちらに注目して下さいね。こちらのお二人は、国際魔法取締局から派遣された異端審問官の方々です。それでは、どうぞ」

手際よく二人を紹介して、彼らに拡声器を渡した。

「まず初めに、何故我々がこちらの学園に派遣されたのかを説明しましょう」

拡声器を通して、低く抑揚に乏しい声が校庭に響き渡った。

もう拡声器からは不快な音は流れていなかったが、誰一人として口を開く者はいなかった。異様な衣装を身にまとい、目深にかぶったフードから青白い顔の鼻から下だけを覗かせた男の不気味さに、圧倒されていたんだと思う。

そして、異端審問官という職名にも。

「我々が派遣された理由は、光の館の寮で殺人事件が発生したからです。犯行時刻は七月十九日の十一時から七月二十日の四時二十分の間」

淡々と事件のことを伝える声が拡声器から流れてくる。それでも、誰も声を上げることはなかった。

不思議だけど、まるで遠い国で起こったニュースを聞いているような気分だった。そうでないなら、悪い夢を見ているような感覚。

異端審問官の声に感情がほとんど感じられないせいかもしれない。「この学園の周囲には、クレスメント学園の創設者で空間魔術学の先駆者であるフェリクス・ジャヌカンが構築した結界が張り巡らされています。また、その結界の管理を行うことが出来るのは現職の空間魔術学の講師だけです。よって、犯人は学園内部の人間ということになります」

異端審問官はそう言って一旦拡声器を離し、私達を見回した。そして、再び拡声器を口元へと近づける。

「そこで、犯人を特定するために個人尋問及び室内立入り検査を実施します」

止まった時間が動き出したかのように、ざわめきが広がった。

私達の動揺など一切かまわずに異端審問官は続けた。

「本日、午前十時より光の館から開始し、翌二十二日には水の館、そして翌々日の二十三日に、ここ土の館の生徒と職員、従業員全員
の尋問、及び館内全室の立入り検査を行います。詳細と開始時刻は
当日の館内放送でお知らせします。尚、悪魔召喚事件以降に実施さ
れた外出制限は引き続き実施します。但し、特別に許可されていた
図書館への立入りは本日から禁止します。報告は以上です」

事務的にそう告げると、呆然と彼を見上げているネズミに拡声器
を押し付け、身をひるがえした。黒いローブの背の中央に刺繍され
たクレスマント教のシンボルが、日の光を反射して煌めいた。

「はあ？　なんだよ、それ……」

遠ざかっていく銀の十字架と竜から目が離せずにいる私の耳に、
リュカの不服そうな呟きが聞こえてきた。

ネズミが戻ってきた拡声器を手に何かを必死に訴えている。けれど、聞きとりづらい声に加えて、一気に膨れ上がった生徒達のざわめきに打ち消されて、何を訴えているのかわからなかった。

そのうちに、前の方に居た生徒達がぞろぞろと館の中に戻りはじめた。いつの間にかネズミの声も止んでいる。

私も皆と同じように歩きだそうとした時、ジーンズのポケットに入れてあった学生証が、鳥のさえずに似た音を立てた。

誰からのメールだろう？

私はポケットから学生証を取り出した。

学生証の表面には、クレスメント教のシンボルに被せるようにして、「1件の新着メールがあります」という文字が浮かびあがっている。その下には、「差出人：ヴァレリー」の文字。

そういえば、ヴァレリーとクロードとアドレス交換したっけ。

メールを開くと、驚くほど事務的で簡潔な文章が表示された。

「土の館の六階で待つ」

エントランスホールを抜けて大階段を上ると二階の踊り場へと出る。そのまま三階、四階へと階段を上って行くと、二本のポールに渡された金色の鎖に行く手を阻まれた。

ポールの脇をすり抜けながら、初めて立入禁止になっている五、六階へと足を踏み入れた時のことを思い出した。

あの時は、リユカやジャンと一緒にだった。リユカの酷く怯えた顔を思い出して、思わず顔が綻ぶ。

けれど、怯えていたのは私も同じだ。不安と好奇心から身を固くして、息をつめながら階段を上っていた。

階段を上りきった先には、薄く積もった埃で黒い部分が灰色にな

つてしまっている市松模様の大理石の廊下が、左右に延びている。廊下の上にくつもの足跡がついているが、そのほとんどがあの時にジャンがつけたものか、二度目に金の鎖を越えて六階に立ち入った私がつけたものだろう。

ああ、私を六階へと呼び出したヴァレリーやクロードの足跡も多いかもしれない。足跡の多くが一枚の扉の前へと続いているから。私は床に残る足跡を辿って、一枚の扉の前で立ち止まった。

この扉を開けると、夜の匂いを纏った一陣の風が私の頬を撫でていく。正面には卵を抱えた生徒が、銀色の髪を風に遊ばせながら、窓枠に腰掛けて月夜を眺めている。

彼はゆっくりと振り返って、唇の端に笑みを浮かべ、私の名を呼ぶ。

はじめまして。リリス・エーデルシュタイン

扉の把手に手をかけた瞬間に、ヴァレリーと初めて出会った時の事を思い出して、ドキリとして手を引っ込めた。

今はだいぶ慣れてきたけど、初めて彼の青味を帯びた薄紫色の瞳を見た時は、息をするのも忘れる程に魅入ってしまった。彼の事を小説や伝承に出てくる架空のモンスター、吸血鬼だと思ってしまっただぐらいい。

私は気を取り直すと、そっと把手を回し扉を引き開けた。

あの時と同じように、風が頬を撫でて吹き過ぎていった。が、吹き過ぎていった風からは、僅かに湿り気を帯びた夜の匂いは感じられず、正面の窓には銀色の髪の生徒の姿は無かった。雲一つ無い抜けるような青空が広がっている。

ヴァレリーは向かって右側の壁際に設置されているベッドに腰掛けて、相変わらず窓の外を眺めていた。私が扉を開けた気配には気付いたはずだが、微動だにせず窓の外を眺め続けている。

朝も早いし、座ったまま寝てるんじゃないか？

そう訝しく思いながら、室内へと一步、足を踏み入れた時だった。

「リリスちゃん、おはよー」

「わっ！」

出し抜けに真横から低い声が聞こえて、私は飛び上がって扉に縋り付いた。

「ちよつと、脅かさないでよ！　なんでそんなとこに居るの！？」

まだドキドキと早鐘のように打ち続ける心臓の辺りを抑えながら、声が聞こえた方を軽く睨んだ。

「脅かすために決まってるんだろ。それよりさあ、もつと可愛い声でねーの？　興醒めなんだけど」

扉を開けた時にちよつと死角になる位置　扉がある面の壁際に身を隠していたクロードが、顔だけ覗かせて眠そうな声で言った。

「悪かったね、可愛くなくって。こつちだつて、あんたの暇つぶしに付き合うほど暇じゃないんだからっ」

私は彼の額を軽く叩くと、室内へと入った。

微かにカビ臭い匂いが鼻につく。毎回、彼らが窓を全開にしている理由がわかった気がした。

「リリス、急に呼び出して悪かったな」

ヴァレリーの少し笑いを含んだ声が聞こえた。私を無視し続けていたのは、クロードのくだらない悪戯に付き合っていたからかもしれない。

「ううん、別にいいけど」

呼び出した事も二人で悪戯を企んだことも気にしてないけど、あのメールはあんまりだと思っ、と言いつつになるのを、ぐつと堪えて私はヴァレリーの隣に腰を下ろした。

寝具が取り払われてマットレスだけになったベッドは、ちよつと大きなソファのようで座り心地もそれほど悪くはなかった。ただ、少し埃っぽいのは気になるところだけだ。

「あの紙の事で、何か分かったの？」

クロードが静かに扉を閉める音を耳にしながら、私はヴァレリーにずっと聞きたくて仕方がなかった質問を投げかけた。

昨日の夜から、あの悪魔の図柄が描かれた紙の事が頭から離れなくて、もやもやした思いを抱えながら過ごしていたのだ。

「それが……」

言い淀んだヴァレリーよりも早く、クロードがベッドの向かいに備え付けられている机に腰掛けながら言った。

「ミケーレがヤバいかもしれねえ」

「ミケーレが？　なんで？」

私はクロードに向き直ると、震えそうになる声を抑えて聞き直した。何故かはわからない。けれど、酷く嫌な予感がしたのだ。

悪魔の図柄が描かれた紙、殺された王女、突然悪魔を召喚しようとしたルパート。それらが全て繋がっていて、今までの一連の事件を企てた人間がこの学園の中にいる。そう思うと、まだ何かが起る気がして怖くて堪らなかった。

「……俺のせいだ」

気付いたら、呻くように呟いたヴァレリーの両腕に手をかけていた。

「どういうこと？　ねえ、ヤバいって、何？　ミケーレはどうなっちゃうの!？」

「落ち着け、リリース」

私をヴァレリーから引き離そうとして間に入ったクロードの腕を振り払って、一気に捲し立てた。

「落ち着けるわけじゃないじゃん！　誰のせいでこんな事になったと思ってるの？　あんた達に関わらなければ、ミケーレは拘束されたりしなかったのに！」

一息に叫んでしまったから、自分が言ってしまった言葉に後悔した。

彼らだって、好んでこんなトラブルに巻き込まれたわけじゃない。ミケーレを巻き込んでしまったことは、彼らだってずっと気に病んでいたのかもしれないのに。

「ごめん、私……」

「いや、いい。事実だ」

ヴァレリーの辛そうな横顔を見て、ますます苦い気持ちが進み上げてきた。

「あの後さあ、これについて調べてみたんだ」

「気まずい空気を吹き飛ばそうとするかのように、クロードが机の上に置いてあった紙をひらひらさせながら軽い口調で言った。彼がつまみ上げている紙は、あの悪魔の図柄が描かれている黒い紙だった。

「それ、あの時の」

「そ、焼却炉の側でリリスちゃんが拾った紙」

「クロードが私の膝に紙を落とした。私がそれを拾い上げて眺めていると、彼が紙について話し始めた。

「その紙さ、新刊案内っぽかっただろ？ ほら、下の方に出版社名が書いてある」

「……こきゅーとす、ぴーえるしー？」

「そう、それ。で、そのCocytus plcって出版社を調べてみたんだよ。その出版社ってのが、悪魔学関連の書籍を専門に出版してる会社で、刊行物のほとんどは専門的な内容が書かれた書籍だったんだ。例えば、ソロモン72柱の悪魔それぞれについての解釈やら、呼び出す為の儀式の詳細やら、な」

「待つて。それって、マリアン又王女を殺した犯人は悪魔学の生徒か講師ってこと？ だって、この紙にはマリアン又王女が好んで使っていた香の匂いがついていたら、悪魔学の生徒ぐらいしかそんなマニアックな本を読んだりしないんじゃない？ それに教科書として配られているものかも」

「私達、動物学の生徒にもかなりマニアックな書籍が教科書として配られている。動物の捕獲方法のみが詳しく書かれている書籍とか」「そう思うだろ？ それが、逆だったんだよ。犯人は悪魔学に詳しい人物じゃねえ」

「クロードが私の手から紙をひらりと摘み取ると、それで私を指し示しながら笑みを浮かべた。

「どついうこと？」

「俺らも悪魔学の生徒が怪しいと思って、悪魔学の講師にどこの出版社の書籍を教科書として使用してんのか聞いてみた。悪魔学で使用する教科書の出版社はオーヴェルジュ・コレット出版だった。Cocytus picの書籍は採用してねーんだ」

「じゃあ、なんで犯人は悪魔学の本なんて……あ！」

ある事に思い当たって声を上げた私に、クロードが身を乗り出して頷いた。

「気付いたかよ？ ルパートの魔法陣さ。俺も悪魔学には詳しくねーから細かいことまでは分かんねーが、あの魔法陣が短時間で作れるようなもんじゃねーって事ぐらいは分かる。魔法陣自体は知識のある人間なら十分程度で描き上げられるだろうが、問題はあの気色悪いオブジェだ。黒猫の死骸や山羊の角なんかを数時間のうちに用意出来ると思うか？ 人間のドクロの方は墓掘り返せばいくらかも出てくるが、それにしたって用意すんのは手間がかかる。蝙蝠こうもりになると、この学園内で用意するのは不可能だ。ルパートが以前から計画して用意してきたんじゃないや、あれは他の人間が描いたもんだ」

白い二重円を囲むようにして置かれていた四本の蠟燭。黒猫の頭。蝙蝠の死骸。山羊の角。人間の頭蓋骨。確かに、あれらの物を短時間で揃えるのは不可能に思えた。

魔法陣が描かれていたのは食堂に併設された調理室だ。食堂は生徒達にとって第二の談話室のようになっていたから、かなり遅くまで生徒の姿があつたはずだ。それからあの三つ目の黒豹が現れた二時過ぎまでの間に用意できるとは思えない。

「じゃあ、やつぱりルパートは誰かに操られていたってこと？ でも、ルパートをどうやって操ったんだろ？ 人を意のままに操る魔法は禁術に指定されてるし、とても高度で難しい魔法なんですよ？

歴史上でも使えたと言われている人物は数人しかいないはずだし」
私はあの日のルパートの様子を思い出しながら言った。

誰の言葉も耳に入らない様子で、一心に呪文を唱えていた姿や、魔法陣が崩された後、糸が切れたように倒れ込んだ彼の血の気を失った青白い顔を。

「その事なら国際魔法取締局のテオドル主任に聞いた　というよりも注意するよう警告されたと言った方がいかもしれないな。

標的は俺で、企てたのはマリアン又王女だと思っていたようだから　今まで黙って私とクロードの会話を聞いていたヴァレリーが口を開くと、

「そうそう、そのせいで王女様が殺された時に、逆にこっちが疑われる羽目になったんだよ。迷惑なオッサンだよなあ」

クロードが手に持った黒い紙で、今度はヴァレリーを指しながら相槌を打った。

「マリアン又王女が？　どうやって……」

「ルパートの体内から、ある薬の成分が検出されたそうさ。薬学部の生徒が開発中の薬で、その薬を使用すると一種の催眠状態に陥るらしい。まだ研究段階のもので臨床実験が出来る段階ですらないらしいが、その薬をマリアン又王女に売った生徒がいる」

「なんつったかな……欲望や願望を増幅するとかなんとか言ってたよーな……」

欲望や願望を増幅する薬って、アレだ。薬を投与されたネズミが逃げ出して大騒ぎになって、私達がネズミ捕りに駆り出されることになった迷惑な薬。

「その薬、知ってる……」

私がぼつりと呟くと、二人は顔を見合わせた。けれど、二人の顔に浮かんだ表情は全く異なったものだった。クロードが怪訝な表情で首を傾げる一方で、ヴァレリーはその瞳に鋭い光を宿らせて薄く笑った。

「その薬を知っている人間が他にもいるんだな？　まだ市販されていないものだから、その存在を知っているのは薬学部の生徒と講師だけだと思っていたが」

ヴァレリーが珍しく興奮した様子で、急くように問いかけてきた。「う、うん。動物学の一年生とアール先生は知ってるよ。その薬の動物実験に使われたマウスが脱走して、それを捕まえて欲しいって依頼が私達にあつたから」

「なるほどな。それでミケーレか」

ヴァレリーの勢いに気圧されて戸惑いながら答えた私の回答は、彼の期待に沿ったものだったらしい。ヴァレリーは満足気に目を細めると、立ち上がった。

「何がなるほど、なんだよ」

そのヴァレリーに向かって、クロードが不満の声を漏らす。

私も訳が分からず、窓辺に歩み寄ったヴァレリーの後ろ姿を見つめるしかなかった。

彼は窓枠に腰掛けると、私とクロードに向き直った。

「テオドル主任がミケーレを拘束した理由だ。当初はルパートの一件はマリアン又王女の仕業だと思っていたはずだ。だが、マリアン又王女は『俺に化けた』何者かに殺された。となると、薬を買ったという王女も本物かどうかわからなくなるだろう。まるで自分が犯人です、とばかりにそこら中に証拠を残して自ら薬まで買ったんだからな。本当に犯人だとしたら軽率すぎる。他に犯人がいるとしたら薬の事を知っている人間　つまり薬学部の人間か動物学の一年生の生徒と講師だ。そしてミケーレはお前を誘い出し、俺が一人になる時間を作った。俺があの時、図書館へ行っていなければ、犯人の思惑通りに今頃はマリアン又王女を殺害した容疑で尋問を受けているだろう」

「ああ！ だから、あんなに強引に拘束したのか。俺をお前から引き離れた事だけで疑われてたんじゃなかったってことね」

クロードが手の中で黒い紙を遊びながら声を上げた。

私はそんな彼の手元を見るときもなく眺めながら、あまり訊きたくない問いを口にした。

「二人はミケーレがマリアンヌ王女を殺した犯人だと、本当に思ってるの？」

あんなミケーレの姿を見たのは初めてだった。テオドールさんに対して見せた激しい反発も、その後に見せた諦めの表情も。もしかしたら今までにも似たような目に遭ってきたのかもしれない。そう思うと、私だけでも彼のことを信じていてあげたかったし、二人にも彼の事を信じて貰いたかった。

「俺は違うと思ってる。それはクロードも同じだ」

思いのほか優しいヴァレリーの声に顔を上げると、クロードの鋼色の瞳と目が合った。

クロードも私と目が合うと迷いもなく頷いた。いつになく真剣で強い眼差しに、彼も私と同じようにミケーレを救おうとしているんだと確信して、嬉しかった。

「が、ほっとしたのも束の間、ヴァレリーが言いにくそうに続けた。だが、国際魔法取締局の連中は彼が怪しいと思っている。犯人も彼に容疑がかかっていることを知っているはずだ」

「だから、ヤバいんだよ」

クロードも眉をひそめて溜め息をついた。

「ルパートの一件が起きた時には、誰かが俺の命を狙っているのかと思っていた。そして、マリアンヌ王女が殺された時も、犯人の目的は俺に罪を着せ失脚させる事だと思っていた。けれど、気付いたんだ。俺が邪魔なら、何もこんなに手の込んだ回りくどいことをしなくても、もっと簡単に殺す方法はいくらでもあるはずだ」

「ま、簡単に殺させはしねーけどな」

ヴァレリーは拗ねたように呟いたクロードに苦笑を返すと、再び口を開いた。

「犯人は、ルパートの一件の時はマリアンヌ王女に嫌疑がかかるように、そしてマリアンヌ王女殺害の時は俺に嫌疑がかかるように行動している。もしかしたら、俺は国を手に入れる為の駒に過ぎないのかもしれない。戦争をしかけるには大義名分が必要だ。ヴィラールとカリティア間で諍いさかいが起きたなら、それを平定する為と称してどちらかと同盟を結び、大手を振って侵攻することができる。これは憶測だが、裏で手を引いているのは王妃ではなく、ここ数年で急激に国土を広げている新興国のアクタニアかもしれない」

私は言葉を失ってヴァレリーの顔を凝視した。

王家の陰謀に巻き込まれて命を狙われているっただけでも想像もつかないのに、国を手に入れる為に利用されているなんて、私にはそれこそ小説や映画の世界の中の出来事のように思えた。あまりにも住む世界が違いすぎて理解できそうにない。

「それと、ミケーレになんの関係が？」

考える事を止めてしまいそうになる頭を、なんとか働かせて言葉を口に乗せる。今の私が一番知りたいのは、ミケーレの身に何が起ころうとしているのか、だ。

本来なら一人の人間の運命よりも、一国の運命の方がずっと重要なことだと思う。それは私にも分かっていたけど、一国の運命を揺るがす陰謀を田舎の診療所の娘が知ったところで何ができるだろう。「狙いが俺ではなく、ヴィラールと隣国のカリティアだとすれば、犯人に残されたチャンスはあと一度きりだ。ミケーレに『ヴィラールの人間から一連の事件を依頼された』と証言させる事だ。俺が危き惧ぐしていた通り、今回の全ての事件の黒幕がヴィラールの王妃一派の企みだと証言されたなら、ヴィラールとカリティア間の国交は一触即発の緊迫した状況に陥るだろう」

「ミケーレがそんな証言するはずが無いよ。第一、王女殺害の罪を着せられたりしたら、死刑になっちゃうじゃん」

死刑で済めばまだいい方だ。身分の低い私達平民や奴隷が王族を暗殺したりしたら、国によっては拷問まがいの刑にかけられたり、本人だけでなく家族にまで罪が及ぶこともある。それはミケーレもよく知っているはずだ。

だから、どんなに尋問されようと罪を認めたりはしないだろうし、ミケーレがヴァイラルの内情を知っているはずもない。そう思って否定したんだけど、

「そりゃそーだけど、証言する人間は生きた人間だけってわけじゃねーからな。死んだ人間にも証言させる事はできる。ミケーレが依頼を受けたっつー、なんらかの証拠を現場に残して口を封じちまえばいい」

クロードがさらりと背筋が寒くなるようなことを口にした。

「そんな……」

マリアンヌ王女を殺し、ヴァレリーを陥れようとし、今度はミケーレに罪を着せて殺そうとする。人をチェスの駒のように簡単に利用して殺していく犯人の冷酷さに虫酸が走った。

「んなこと、させねーよ。その為にリリスちゃんに来てもらったんだ。なあ、ヴァレリー？」

「ああ、ミケーレを守る為に手を尽くすことを約束する。俺とクロードはこれからテオドル主任に相談して、クレスメント学園着で本を注文した者のリストをCocytus picに請求してもらう。リリスはもう一度メイドになってミケーレに会い、彼に危険が迫っていることを伝えて貰えないか？ 学園長には俺から連絡を入れておく」

二人の決意を秘めた顔に、私も強く頷いた。

「わかった、ミケーレへの連絡はまかせて」
けれど、一つだけ気になることがある。

「……でも、テオドルさんと相談したり、学園長に連絡を取ったりできるの？ こっちの疑いも完全には晴れていないんでしょ？」

二人が光の館をうろついたりしたら、捕まって尋問されそうなんだけど」

そういえばマリアン又王女の夜着の切れ端も、学園長はどうやって二人に届けたんだらう？

一つ疑問が浮かぶと、つられるようにしてまた別の疑問が頭をよぎる。けれど、二つになってしまった疑問の答えは意外にもあっさりと解決した。

ヴァレリーが、考え込む私に意味ありげな微笑を返すと、何もない空間に呼びかけたからだ。

「カトリーヌ、仕事だ」

そうか、カトリーヌさんに頼むのか。

私は目の前に現れた白い影に、短い悲鳴を上げて身をのけ反らせながら、ヴァレリーと学園長には便利な連絡係がいることを思い出した。

サマエルの刻印 1

学園長室の廊下を、コツコツと規則的な固い音が移動していく。その音の発生源は、私の前を軽快に歩く学園長だ。10cm以上はありそうなヒールがついた白いサンダルが、リズムカルに床を打つ。その後ろを、ステンレス製のワゴンを押して、メイド服に着替えた私が付き従う。

片手を腰に当て颯爽と歩く学園長。心持ち俯き加減で、なるべく音を立たないようにしずしずとワゴンを運ぶ私。誰が見ても主人と使用人にしか見えないだろう。

なんだかメイドも板についてきた ような気がする。嬉しくないけど。

そんな事を考えているうちに、前に行く学園長が、一枚の扉の前で立ち止まった。すらりとのびた白い脚は、美しく見える完璧な角度で止められている。

今日の学園長は、ダメージ加工が施されたデニム生地タイトなミニスカート、ターコイズブルーのキャミソールに白いシャツを羽織るといふ夏らしい格好だった。でも、ミニスカートはもう少しで下着が見えそうなほどに短く、キャミソールからは豊かな胸の谷間が惜しげもなく晒され、シャツのボタンはしっかり上から三番目まで外されている。そのせいで晴れた夏の日にふさわしい爽やかさは微塵も感じられなかった。

「ここよ。後はよろしくね」

気だるそうに振り返り、私が押していたワゴンに片腕を乗せて、寄り掛かるようにして身を乗り出すところなど、気も腕っ節も強いスラム街の酒場のウェイトレスのようだ。

「テオドルさんにはこっそり協力を取りつけてあるから、特別捜査官は今日は誰も室内に入らないはずよ。黒服連中は私にまかせて見張りのロベルトもこの事は知っているわ」

私にそう囁くと、学園長は扉の前に立っているロベルトに視線を投げた。

「ミケーレに昼食の差し入れよ」

「あ、は、はい。どうぞ」

ロベルトが妙に慌てた様子で扉を開く。

そんな彼に、学園長が微笑とともに言葉を返した。

「ありがとう。そんなに慌てなくてもいいのよ。胸の谷間ぐらい、どんなに見られても気にしないわ」

ロベルトは顔を赤くして、無言で俯いてしまった。ずっと学園長の胸の谷間を目で追っていたらしい。

いつまでも冷たい目で見ているのも可哀想なので、私はロベルトが開けてくれた扉の向こう側へと視線を移した。

ミケーレは窓から差し込む陽を浴びながら、一匹のトラ猫とチェスに興じていた。

陰気な黒服の男達に囲まれて尋問される日々疲れ、ぐったりしている様子を想像していた私は、この優雅な光景に啞然として一人と一匹を見つめた。まるで、淡い色彩と柔らかなタッチで描かれた絵画のようだ。

彼の緩やかなクセのある金髪は、真昼の強い陽射しを反射して黄金色に輝いていた。それが、ミケーレの線が細く丸みのある輪郭と相まって、彼を宗教画に描かれる天使のように見せていた。

美しい曲線を描く青銅色の脚がついた丸テーブルを挟んだ向かい側では、トラ猫のタイガーがチェスの駒が動く度に前足を出している。タイガーの前足は、淡い青色に光る半透明のチェスの駒をすり抜けて、黒と白の市松模様のチェス盤に何度もふり下ろされていた。

「あれ？ もう昼食の時間？ ありが……」

扉が開いたのに誰も入ってこない事を不信に思ったのか、ミケーレがこちらを振り返った。が、彼も私と同じように笑みを凍りつかせて固まった。

気まずい沈黙が流れる。

「……リリス？ なにやってんの？ バイト？」

凍りついた時を先に破ったのは、ミケーレだった。

「ええーっと、話せば長くなるんだけど……とにかく、ミケーレに会いに来たの！」

頬を引きつらせて問いかけるミケーレに、私は何から説明すればいいのかわからず、強引に会話を打ち切って室内に入り込んだ。後ろ手に扉を閉め、ワゴンを押しながら部屋の中程まで入り込むと、やっと一息ついて改めてミケーレに向き直った。

あまりにも勢いよく室内に入り込んだせいで、ミケーレが身をのけ反らせて、「な、なに？」と上ずった声を上げた。

「あ、あのね。落ち着いて聞いて」

つられて私まで裏声になってしまう。これじゃあ、「お前が落ち着けよ！」ってツツコミを入れられても文句は言えない。

けれど、ミケーレは余程驚いていたのか、彼にしては珍しく素直に頷いて私の次の言葉を待ってくれた。そこで、ひとつ咳払いをして声の調子を整えてから、なるべく刺激をしないように慎重に切り出した。

「まず、ミケーレの命が狙われてるかもしれないの」

どう言い出せばいいのか、この部屋に入る前から悩んでいた私は、ミケーレの様子を窺いながらおずおずと口にしたんだけど、

「ふーん」

まるで他人事のようなリアクションが返ってきて、私の方が驚いて言葉を失ってしまった。

「ふーんって……」

「薄々気付いてたから。このままじゃ済まないだろーなあってさ。殺されたのって王女様じゃん？ なーんか、ドロドロした嫌な事件に巻き込まれたっばいし、こーいう場合って身分の低い身寄りの無い人間が、色んな罪を着せられて殺されるのが定石でしょ。俺なんか、これ以上ないってぐらい適任だし」

ミケーレはちらりとチエス盤に視線を落とすと、淡い赤色に発光するチエスの駒を摘みあげて移動させた。「チエックメイト」という無機質な女性の声が響き、タイガーが耳をそばだててチエス盤の匂いを嗅ぎはじめた。

「で？ リリスちゃんは、どこでそれを知ったの？ 知らせにくるって事は、確信があるんだよね？」

チエス盤を見つめたままミケーレが言った。

彼が見つめるチエス盤の上では、誰も触れていないのに青いクイーンの駒が動いている。タイガーが前足を伸ばして触れようとするが、足は駒をすり抜けて空しく宙を搔く。その度にクイーンの駒は、ゆらりと塵気楼のように揺れた。

「ヴァレリーに聞いたの。それで、ミケーレにこれを渡して欲しいって言われて」

私はワゴンの上に乗せられていたステンレス製のフードカバーを持ち上げた。

「きゅうー」

白い大皿の中央で丸くなって寝ていたクレスが、もぞもぞと起き上がって声をあげる。けれど、彼に見せたいものは、この黒い小さなトカゲじゃない。クレスの周りを囲むように置かれた大小の魔石と装身具だ。ヴァレリーとクロードから、ミケーレに届けて欲しいと託されたものだった。

「へえー、さすが王子様。そんだけの魔石をぽんつと人に貸すなんて、金持ってんだねー」

ミケーレは椅子から腰を浮かせると、大皿から魔石の一つを取り上げた。

「すごいね、これ。治癒の魔法がかけられてる。ヴィラルルの王家の刻印があるから信用度も申し分ないし、これ一個で中流階級の家庭なら三ヶ月は食っていける値がつくよ。こっちは水属性の攻撃魔法かぁ……」

私にはどれも同じように見えるけれど、ミケーレは魔石や装身具の一つ一つを取り上げては仔細しさいに眺めて感嘆の声をもらしている。「ミケーレなら、たぶん使い方もわかるから渡しといて」とクロードが言っていた通り、この様子なら使い方が分からずに困ることは無さそうだ。さすが元行商人。商品の知識は豊富らしい。

「なんか使うのもつたいない気がするけど、仕方ないか。余ったら売ってくれないかなあ。紛争が絶えない火の大陸に持っていけば高値で捌けるんだけどな」

ミケーレは嬉しそうにそう言いながら、大皿の上から銀のブレスレットを手に取って私に差し出した。

「とりあえず、これつけといて」

それは、細い輪の一部を切り取ったような形で、中央に細いラインが一本入れているだけのシンプルなものだった。身に付けたときにちょうど真上にくる位置に、ダイヤのような透明な石が一つ埋め込まれている。

ただ、あまりにも大きい。ブレスレットというよりも腕輪のようだ。もしかすると、ブレスレットじゃなくて腕輪なのかもしれない。

「なに？ これ」

「お守りみたいなもんだよ。それつけとくと、一度だけ盾になってくれる。物理的な攻撃や魔法を弾く結界を一瞬で作るんだ。持続性は無いし、一度しか発動しない使い捨てだけだ」

ミケーレは自分の腕にブレスレットをはめると、私に向かって振って見せた。

「ほら、大きさは勝手に判断して合わせてくれるから。それつけたらチェスに付き合つてよ。やっぱり人工知能相手じゃ、つまんなくつてさあ。タイガーにチェスの相手させるのは、まだ無理だし」

「んー、チェスは知らないから無理。リバーシならいいけど」

私はミケーレに習って、大きすぎるブレスレットを手首にあてがった。

すると、ブレスレットは見る間に縮んでいき、オーダーメイドで作ったかのようにぴったりと私の手首に合うサイズになった。

うわ、おもしろーい。このブレスレットって二重に魔法がかかっているのかな？ 守りの結界と、形状変化の魔法と。

しげしげとブレスレットを見ていると、ミケーレの呼び声が聞こえてきた。

「リバーシでもいいや。リリース、こっち」

「はぁーい」

私は魔石や装身具が乗ったワゴンを放り出し、クレスを抱き上げて空いた椅子に腰掛けた。さっきまでその椅子に座っていたタイガーは、ミケーレの腕の中でもがいている。

ミケーレに会うまで抱えていた不安や緊張は、すっかりどこかへと行ってしまっていた。彼には人を和ませる不思議なオーラがある。この時ほどそれを強く感じたことは、後にも先にもなかった。

サマエルの刻印 2

異変を感じたのは、日もすっかり暮れて夜も更けてきた頃だった。私はあれからずっとミケーレが軟禁されている学園長室の一室にいた。

今までの人生の中で最高の料理を堪能し（土の館の料理もちよつとしたホテル並の味だけど、ここの料理は比べ物にならないくらい美味しかった）、夜食まで用意してもらった頃だ。

私とミケーレは夜食のミルクティーとジンジャーケーキを食べながら、シューティングゲームで盛り上がっていた。

宙に浮かび上がるスクリーンの中で二頭の飛行竜が火の玉を吐く。青い飛行竜が私で、赤い飛行竜がミケーレだ。

実際の飛行竜は色の濃淡はあっても、みな一様に茶色の鱗に覆われている。火の玉だって、こんなに次から次へと吐いたりできないけれど、動きはかなり忠実に作られていて、本物そっくりの飛行竜を手元のウオンド（細くて短い杖）を使って操作して、襲いかかってくる敵を倒していくのは、思わず熱中してしまうぐらい面白かった。

最初に異変に気付いたのは、ミケーレの膝の上で眠るタイガーだった。

「ああー！ また、やられた！ こいつ、強すぎるよお」

青い飛行竜がヒュドラ（九つの首を持つ大蛇）の首の一つに捕まっつて消えてしまい、私は声を上げて座っていたベッドに仰向けに倒れ込んだ。その直後、ヒュンっという風を切るような短い音がして、宙に浮いていたスクリーンが消えた。

「ええー、もう止めちゃうの？」

私は身を起こすと、隣に座るミケーレに向かって抗議の声を上げた。

「しっ！ 黙って。タイガーの様子がおかしい」

「タイガーの？」

小さいけれども鋭いミケーレの声と真剣な表情に、私も声を潜めて聞き返した。そのまま視線を、ベッドの上で胡坐をかいている彼の膝の上へと落とす。

そこでは、今まで丸くなって寝ていたはずのタイガーが、立ち上がって一点を見つめていた。緊張と興奮から黒目が丸く大きくなり、耳はピンと立って扉の方を向いて、どんな些細さいさいな音も漏らすまいと小刻みに動いている。

ミケーレはタイガーをそっとベッドの上に下ろすと、手をのばせば届く場所に置いてあったワゴンから、片手で無造作に魔石を数個つかみ取った。

「パルミシヤスって言いながら、相手に向かって投げつけると発動するから。間違っても俺に投げつけないでね」

彼は私の手の中に魔石を押しつけながら言うと、もう一度ワゴンから魔石を取り上げ、今度は自分の制服のポケットに押し込んだ。

「パルミシヤス、パルミシヤス……」

私はその合言葉（？）を忘れないように口の中で繰り返して呟きながら、ふと視線をタイガーへと戻した。

ベッドの上のタイガーは、相変わらず扉を見つめたまま固まっている。タイガーの耳には何が聞こえているんだろう。

私も息を潜めて扉の外の様子を窺った。

やがて、私の耳にも誰かが廊下を歩いてくる足音が微かに聞こえてきた。壁の時計に目をやる。時計の針は午前二時十五分を指している。

こんな時間に学園長室の廊下を歩く人間は、この部屋の監視をしている国際魔法取締局の特別捜査官ぐらいだ。

けれど、監視は扉の前に一人で、持ち場を離れることはない。そんな事したら監視の意味がなくなってしまう。それに監視の交代は二時間前にあっただけだった。

「ヴァレリー殿下？ どうなさったのですか？」
扉の外から、ロベルトと交代して監視にっていたフェランドさんの声が聞こえた。

私はミケールと顔を見合わせた。

話に聞いていたマリアン又王女が襲われた時と状況が一緒だ。犯人はヴァレリーに化けて、その姿を護衛に目撃させてからマリアン又王女を殺害している。

間違いない。

同じ人間がミケールを殺しに来たんだ！

「リリス、大丈夫だって。俺にはツキがあるんだから。今までだって、何度死にかけたかわかんねーし。その度に運命の女神様が救ってくれた。今度だって平気さ。それに、女にはふられたことがないんだ。女神様だってそっぽを向いたりしないよ」

そう言ったミケールの顔には、いつもの憎めない笑みが広がっている。

でも、自分の命が狙われているのに、怖くないはずがない。さっき一瞬だけ見せた青ざめた表情。あれがミケールの本当の気持ちなんじゃないかと思う。

彼はとても器用だから、私と違って巧みに感情を隠すことができる。きつと、私を安心させる為に無理して笑っているんだろう。

「うん。大丈夫！ 私も守ってあげるから。こう見えても運動神経だけには自信あるんだよ」

上手に笑えたかどうか分からない。私は不器用だから。それでも私にできる精一杯の笑顔を返し、魔石を握りしめて立ち上がった。

大丈夫。

ルパートの悪魔召喚だってなんとか阻止できたんだから、今度だってきつと上手くいく。

「その扉の向こうにいる動物学の生徒に用がある。開けてもらおう

か

「それは、できません。彼は重要参考人です。いくら殿下といえども面会は許されません。それよりも、どうやって光の館へ入られたのですか？ 正面入口にも裏口にも見張りが立っていたはずですが

……」

扉の外からはヴァレリーとフェランドさんの会話が聞こえていたが、

「ああ、見張りなら簡単に扉を開けてくれたよ」

「そんなはず……ぐっ！」

フェランドさんのくぐもった呻き声が聞こえたかと思うと、重いものが床に倒れるような音がした。

「フェランドさん！」

咄嗟とつせに駆け寄ろうとした私の肩に、ミケーレの手がかかった。

「たぶん、無事だよ。彼には目撃者になってもらわなきゃ困るはずだから。マリアンヌ王女の時だって、二人の護衛は無事だったしね。それより、来るよ」

肩越しにミケーレを振り返ろうとした時、鍵が開けられるカチャリという音が室内に響いた。

いやにはつきりと耳についたその音に、私は息を飲んで扉を見つめた。

扉は、まるで私達を馬鹿にしているかのように、ゆっくりと開かれていく。

きっと、本当に馬鹿にしているんだろう。入学したての新生には、逃げることも隠れることも出来ない。

ここに私がいる事は知らないと思うけど、それを知っていたとしても警戒すらしははずだ。

私が悔しさと緊張と恐れの入り交じった複雑な心境で見つめる中、ついに引き開けられた扉から姿を現したのは、まぎれもなくヴァレリーだった。

銀色の髪。淡い紫色の瞳。制服を着ていなかったら女性と間違え

てしまいそうなほどに整った美貌。

酷薄そうな薄い唇に嘲るあざわらような笑みを浮かべ、その口に乘せた言葉は偶然かそれとも……。

「はじめまして。ミケーレ・グラツィアーノ」

初めて私がヴァレリーにかけられた言葉と同じだった。指名されたのは私ではなく、ミケーレだったけれど。

サマエルの刻印 3

ヴァレリーに瓜二つの男は、手に下げていた剣を胸の前まで引き上げて水平に構えると、空いた左手を鞘にかけた。

「君にはなんの恨みも無いが、運がなかったと思って諦めるんだないや、それよりも……」

彼の紫色の瞳と目が合った。

その瞳からは激しい憎悪の念が溢れ出していて、私は目を逸らすことも睨み返すこともできなかった。

こんな激しい敵意をぶつけられたのは初めてだったから。

恐怖を感じるよりも先に、いきなり見ず知らずの人に敵視されたことへの戸惑いの方が大きく、ただ力なく彼の瞳を見返すことしかできなかった。

「この女が余計な事をしなければ、俺の仕事もとっくの昔に終わっていた。恨むなら彼女を恨むんだな」

彼は吐き捨てるように言いながら、鞘から剣を一気に引き抜いた。鞘と剣が擦れ合う金属音に全身が栗立つ。

視線は、照明の明かりを反射して鈍く光る刀身に捕らわれる。

忘れていた恐怖が一気に押し寄せてきて、私はその場から動けなくなった。

体中の感覚が麻痺してしまったような浮遊感に襲われて、息をつめて男の顔を見つめる。

もう口の中がカラカラだった。

その時、手の中で小さな音が鳴った。ガラスが触れ合うようなチヤリっという微かな音。

その音が自分はずっと握りしめていた魔石が擦りあってたてた音だと気づいた時、不思議と金縛りが溶けるように全身の感覚が戻ってきた。

私にも武器がある。

そう気づいた事が恐怖を和らげてくれたのかもしれない。
私は、ずっと握りしめていた魔石を一つだけ手の中に残して、残りを白いヒラヒラしたエプロンのポケットに突っ込んだ。

男が鞘を床に投げ捨て、抜き身の剣を無造作に一振りしたかと思うと、口元に薄い笑みを浮かべて一步を踏み出した。

私も男を見つめたまま後ずさる。

けれど、足がもつれてよろけそうになり、ほんの一瞬だけ目を離してしまった。

ふいに室内に閃光が走った。

驚いて顔を上げると、さっきまで目の前に立っていた男の姿が無い！

反射的に後ろを振り返った私の目に、右上段から剣を振り下ろした姿勢で静止している男の後ろ姿が映った。

彼の前には鳶色とびいろの瞳を見開いて男を見つめるミケーレ。

男の剣はミケーレの首筋へと正確に振り下ろされていたが、その刃はミケーレの周囲にドーム状に出現した光の壁のようなものに阻まれていた。

これがミケーレが言っていたブレスレットの効果なんだろうか。でも、その効果は一回限りだったはずだ。

「ミケーレ！」

ミケーレがはっとしたように私を見返したかと思うと、弾かれるように後ろへと飛び退いた。

「盾か……無駄な足掻きだ」

男は鼻で笑うと、ミケーレに向かって剣を構え直した。

ミケーレを包んでいた光は、無情にも強さを失い消えていく。

男の剣の切っ先が微かに揺れた。

それを目にした瞬間、私はミケーレに向かって駆け出していた。

そのまま身を投げ出すようにして彼に飛びつく。

考えるよりも先に体が動いてしまう性癖と、授業で動物を追い回

して鍛えられた運動神経がこんなところで役に立つとは思わなかった。

いきなり身体ごと投げ出すようにして飛びついた私をミケールが支えられるはずもなく、私たちは後ろの丸テーブルと椅子を巻き込みながら床に倒れ込んだ。

椅子とテーブルがひっくり返る派手な音と、何か（剣だと思う）が空を切る鋭い音が聞こえたのはほぼ同時だった。

直後にミケールの呻き声が聞こえた。たぶん、テーブルに思いっきり背中を打ったか、床に頭でも打ちつけたんだろつ。

気の毒には思っけど、今はそんな小さなことに構っている暇はない。

私はミケールの頭を胸に抱え込むと、背後に迫っているはずの男を振り仰いだ。

狂気に憑かれたような男の瞳と、両手で振りかざした剣の切っ先が私の目に飛び込んできた。

悲鳴を上げる間もなく、剣が振り下ろされる。

そしてまた、さつきと同じ閃光が走った。

眩しさに目を細めながら必死に男を見上げると、剣は光の壁に遮られるようにして空中で止まっていた。

剣の切っ先は私の喉元に突きつけられている。

まるで肉食動物の狩りのようだ。

肉食動物が喉元に食いつくのは、気道を圧迫して窒息死させる為だけど、剣で確実に仕留めるなら心臓や頭を狙うよりも喉を掻ききるのが一番早い。

心臓を狙うには肋骨が邪魔になるし、頭は頭蓋骨を叩き割ることができる重量のある剣や斧、鈍器でなければ一撃で仕留めるのは難しいだろつ。しくじれば暴れ回られて狙いを定めづらくなる。

この男は正確に首（頸動脈）だけを狙ってくる。本能や親から継承した技術で効率良く狩りをする肉食動物のように、この男にも全

く無駄な動きが無い。

こんな時なのに、私は妙に関心して喉元に突きつけられた剣に見入ってしまった。

自分を取り巻く光が徐々に薄くなっていることにも気づかず。

我に返ったのは、ミケーレに突き飛ばされて床を転がった時だった。

正確には、剣が床に当たってたたた音を聞いた時だ。その時になって初めて自分が床を転がっていたことと、ミケーレに突き飛ばされていたことに気がついた。

今まで私達がいた場所には、男の剣が突き刺さっている。

ミケーレもなんとか反対側に避けることができたようだった。

ほっとしたのも束の間、立ち上がるうとしたミケーレの胸を男が蹴り飛ばすのが見えた。

呻いて床に仰向けに倒れ込むミケーレの胸を男が踏みつける。

男が床に突き刺さった剣を引き抜いた。

ミケーレが激しく咳き込みながら、男の足に両手をかけて引き離そうと^{もが}いている。

もう彼を守ってくれる盾は無い。このままだと本当に殺されてしまう！

私は床に倒れたまま、固く握りしめていた魔石を男の後ろ姿に向かって投げつけた。

「パルミシヤス！」

もちろん、ミケーレから聞いた合言葉も忘れずに叫ぶ。

魔石は私の手を離れた瞬間に砕けた。けれど、砕けた欠片は散らばる事無く、一本の鋭利なガラスの塊になって男の背中へと向かっていく。

それはちょうど槍の穂先のような形だった。まるで掃除機のように周囲の空気を吸い込みながら、急激に大きく膨れ上がったように見えた。

三度目の閃光が走った。

咄嗟とつさに目を庇かばってかざした手の隙間から男の後ろ姿を覗き見る。

男の周囲には私達の時と同じように光の壁ができていて、ガラスの塊はそれに突き刺さるようになって止まっていた。次の瞬間、ガラスの塊が粉々に砕け散った。

男はこちらを振り返る素振りも見せなかった。

大きく頭上に掲げられた剣がミケーレに向かって振り下ろされる。

ミケーレ！

声にならない悲鳴を上げる私の目に映ったのは、床に降り注ぐガラスの雨だった。

サマエルの刻印 4

きらきらと光を反射しながら床に降りそそぐガラスの雨に、赤い色が混ざった。

赤い滴はガラスの雨を染め、床に点々と跡を残す。

音を立てて床に落ちたガラスの破片が、踊るように床の上を跳ね回る。

その向こうに男の足と、床に仰向けに倒れたままのミケーレの姿が見えて、心臓がきつく締め上げられたように苦しくなった。

嘘だ……。

こんなの嘘だ！

もう少しで、そう叫びそうになった時、

「パルミシヤス」

苦しげにあの合言葉を呟く声が聞こえて、瞬く間に男とミケーレの周囲が白い霧に包みこまれた。

白い霧が現れた瞬間、男が床を蹴って飛び退いた。男の後を追うように、鮮血が細い弧を描いて宙を舞う。

先程まで男がいた場所には、一瞬のうちに水晶の柱が数本固まったようなオブジェが出現したかと思うと、そこから冷たい空気が流れ出した。

表面がすぐに白い霜に覆われたところからも、その柱は水晶やガラスではなく、氷でできているようだった。

氷の柱の向こうで、ミケーレが男に踏みつけられていた胸を抑えて身を起こすのが見えた。

よかった。無事だったみたいだ。

ここから見た限りでは、大きな怪我もしていないように見える。

でも……じゃあ、あの血は一体……？

床に赤い点を残す血の出所を探して顔を上げた私の目に、だらりと下げた男の左腕が留まった。

濃いグレーの制服から覗く左手には赤い筋が這い、指の先からはポタリポタリと赤い滴が落ちている。

あの血はミケーレではなく、ヴァレリーと同じ顔をした男が流したもののらしい。

よく見ると、制服の左腕の肩に近い位置の生地が裂け、中からは真っ赤に染まったシャツが顔を出していた。

「お前……」

屈辱からか、それとも痛みからか、絞り出すように言った男の声は微かに震えていた。

男が剣を構えて睨み据える先は、開け放たれたままになっている扉の影。

そこには、男に不意打ちされて気を失っていたはずのフェランドさんが、手に小さなナイフのようなものを持って立っていた。

フェランドさんが男を見据えたまま、静かに口を開いた。

「ミケーレくん、リリースさん、ゆっくりこちらへ歩いてきて下さい」
その言葉が終わるか終わらないかのうちに、男が動いた。

ミケーレに向き直って剣を一閃したのだ。

次の瞬間、高い金属音が響いて、私はその場で身をすくめた。

銀色の光が鼻先を掠める。

「リリースさん！」

「だ、だいじょうぶ。はは……」

フェランドさんの慌てた声に、私は白い壁に深々と突き刺さったナイフを横目で見ながら乾いた笑いを返した。

大丈夫とは言ったけど、本当はまだ心臓がドキドキしている。

これはフェランドさんが手にしていたナイフだ。ミケーレに向かって剣を振るった男を止めようとしてフェランドさんが投げたものを、男が弾き飛ばしたんだろう。

私の無事を確認して安堵したのか、フェランドさんは小さく息をつくと今度は男に向かって語りかけた。

「武器を下ろして降伏して下さい。もうすぐ応援が来ます。あなたには、もう目的を遂行することは不可能ですよ」

フェランドさんの言葉通り、廊下を駆けてくる複数の足音が聞こえてくる。

男は鋭く舌打ちすると、室内へと目を走らせて、ワゴンに乗っていた黒い物体を鷲掴みに

「むぎゅっ」

「クレス!!」

黒い物体 それは、この騒動の中で呑気に熟睡していたクレスだった。

猫のタイガーはとつくの間に廊下へと飛び出して行き、今は一番頼りになりそうなフェランドさんの足元から、こちらを覗き見ているっていうのに……。

男は悲鳴を上げた私をちらりと見ると、クレスを頭上へと放り投げた。

黒いトカゲはクルクルと回転しながら天井付近まで上がると、そのまま重力に従って垂直に落下してきた。けれど、そこには男の手はもう無く、かわりに鉛色に光る刀身が！

「やめてっ!!」

研ぎすまされた刀の上に落ち、真っ二つになって床に転がるトカゲの姿が脳裏をよぎって、私は男に向かって身体ごと突っ込んだ。クレスが剣の上に落ちるよりも先に男を突き飛ばそうと思ったのだ。

「リ、リリースさん!?!」

「おいっ!!」

フェランドさんとミケーレが驚愕の声を上げるのが聞こえた。

自分でも無謀だったとは思っ。でも、この時はクレスを助けることしか頭に無かったし、なんとかなるような気がしていた。

私は次にくる衝撃 男の体に激しくぶつかること に備えて、

無意識のうちに歯を噛みしめて目を瞑っていた。

けれど、予想していた衝撃は無かった。

「えっ？」

目標を失って前方にバランスを崩した私の体は、次の瞬間、強い力で後ろに引かれた。右腕が痛いほど強く掴まれている。

その私の目の前を黒いトカゲが落ちていく。

私は掴まれていない方の左手をクレスに向かって差し伸べた。

でも、少しタイミングが合わなかったのか、黒いトカゲは私の手をすり抜けて、床に叩きつけられて悲鳴を上げた。

「ぎゃんっ！」

「くれ……す」

もぞもぞと床を這って逃げようとするクレス。

抱き上げて無事を確認したかったけど、今の私にはできそうになかった。

私の体は男の腕の中に抱き込められ、喉元には剣の刃が押し当てられていたから。

「動くな。痛い思いをしたくなければ、大人しくしている」

耳のすぐ後ろで男の低い囁きが聞こえて、私は頷くこともできずに息を詰めた。

「おい、聞いているのか？」

何の反応も見せない私に苛立ったのか、先ほどよりもトゲを含んだ男の声と吐息が耳にかかった。

そんなことを言われても、こんなにぴったりと剣を押し当てられていては頷くこともできない。頭を後ろへ巡らせて目配せすることだってできやしない。声を出したただけで切れてしまいそうで恐ろしいし。

「はい……」

私は少し逡巡してから、あまり喉を動かさずに済むように消え入りそうな声で承諾の返事をした。

その時だった。

メイド服の詰め襟の部分、今まさに剣を押し当てられている場所
がじつとりと湿り気を帯び始めて、あまりの不快感に身震いした。
頭を動かさないように気をつけながら、何が起こったのか確認し
ようと、目だけを動かして下を見る。

視界の端に映ったのは鉛色の刃。そして、刃を伝う真っ赤な血。
最初、それは私が流している血なのかと思った。

それにしても、痛みは全く無い。
私は視線をゆっくり左へと流した。

剣を握りしめている男の手が見える。その手にも幾筋もの赤い血
の筋が這っていた。

いつの間に持ち替えたのか、男は傷を負った左手に剣を持ち、右
手で私を押さえ込んでいるらしい。

やっぱり男が受けた傷は浅くは無いようだ。

剣を持ち替えたことは、傷を負った左腕では私を押さえ込む
ことは出来ない判断したってことだろうから。

それに気づいたところで、この状況で何ができるわけでもないん
だけど……。

ここは、ミケーレかフェランドさんに教えるべきかな？
でもどうやって？

まさか声に出して言うわけにもいかないし、それ以前に大きな声
を出せそうにない。

アイコンタクトって手もあるけど、「男の怪我は深くて苦しそう
だよ。もうフェランドさん一人を相手にするのも辛いんじゃないか
な？」と、言葉を使わずに伝えることができたなら、それはもうア
イコンタクトではなくてテレパシーだと思う。

何よりも、私の軽率さに呆れて声を失い、冷たい目でこちらを見
ているだろう二人の方を見る勇気が無かった。

男は私の喉に背後から剣をあてがったまま、一步後ずさった。

彼の腕の中にしつかりと抱き込められている私も、自然と男の歩調に合わせて後ずさってしまふ。後ずさると言うよりも、引きずられたと言った方がいいかもしれない。

喉に突きつけられた剣を伝う男の血は、相変わらず私のメイド服を湿らせ、生臭い鉄サビのような匂いを漂わせている。

室内は静まり返り、聞こえてくるのはいよいよ大きくなって近づいてくる足音だけだった。

その音に焦ることもなく、男はじりじりと同じペースを保って後退を続けている。

「フェランドさん！」

「フェランド！」

「二人の生徒は無事か!？」

ついに足音は戸口で止まり、口々に叫ぶ声が聞こえた。

顔を上げた私の目に映ったのは、国際魔法取締局の制服を着た四人の男女だった。

たぶん、フェランドさんと同じ特別捜査官なんだろう。その中に一人、見覚えのある奴がいるし、皆同じ制服を着ている。

「動くな」

室内に駆け込んできた捜査官達は、男が発した低い威圧的な声にぴたりと足を止めた。皆一斉に口も噤くんで、こちらを凝視する。

息詰る緊張感の中、よりによってロベルトと目が合ってしまった。洗面じゅめんに引きつった笑みを浮かべた、なんともいえない顔をした彼から目を逸らし、フェランドさんとミケーレの姿を探す。

二人は後から来た四人に入り口付近を譲り、向かって右側の壁に飾られた小さな風景画の手前に立っていた。

呆れた顔で私を見ているだろうと思っていたフェランドさんとミ

ケレも、怖いぐらい真剣な眼差しでこちらを見つめている。

皆の視線を一身に浴びて、私はあまりの気まずさにこの場から逃げ出したくなつた。

そんな私の思いなど微塵みじんも感じてくれることなく、男はどんどん後ずさつていく。私も素直にそれに従うしかない。

一体何を考えているんだらう？

そう不安を覚え始めた時、唐突に私の体は思い切り突き飛ばされた。

「わっ！」

あまりに突然で予想もしていなかったことに、私は踏みとどまることもできず、大理石の床に無様に転がった。

後ろでガラスが割れる派手な音が響く。ひんやりと湿った夜の風が私の頬を撫でる。

振り返つた時には、もうそこに男の姿はなかった。

窓枠に残つた割れたガラスが、夜の闇をキャンバスに幾何学的な模様を作り出している。床には砕けたガラスの破片が散らばっていた。

一瞬の沈黙の後、まるでその場に縫い止められたように、身じろぎもせずに男の様子を窺っていた捜査官達が一斉に動き出す気配を感じた。

「逃げたぞ！」

「追え！」

「ですが、ここは四階……」

「普通の建物よりも天井が高い作りになっているし、四階以上の高さがああるかも……」

一人は男が割つて逃げた窓に駆け寄つて下を覗き、一人はイライラと室内を歩き回りながら声を張り上げ、残りの一人とロベルトが困惑した様子で窓辺に立ち尽くしている。

「階段を使えばいいだろ！ これだから新人は！」

室内を歩き回っていた一番年長そうな男が声を荒げると、ロベルトを含めた三人の捜査官達が慌てて廊下へと飛び出していった。

私はその様子を横目で見ながら、身を起こそうと大理石の床に手をついた。転んだ拍子に打ってしまった腰の痛みで顔を歪めた時、目の前に誰かの手が差し出された。

「リリース、怪我は？」

「うん、へーき。ちょっと腰打っただけだから。ミケーレこそ、大丈夫？　なんか蹴られてたみたいだけど」

私はその手をとって立ち上がりながら、少し笑ってみせた。

「俺ももうなんともないよ。クレスも無事だったみたい」

疲れた笑みを浮かべるミケーレの肩には、黒いトカゲがちょこんと乗って小首をかしげてこちらを見ている。

「それより……」

ミケーレはクレスを肩から下し、傍にあつたワゴンに乗せながら何かを言いかけたが、その言葉は途中で途切れてしまった。

「お、おい！　フェランドくん！？」

先ほどから声を張り上げていたおじさんが、一際大きな声を上げたからだ。

見るとフェランドさんが割れた窓を上へと押し開きながら、窓枠に足をかけて今にも飛び降りようとしているところだった。

「二人の生徒をお願いします」

フェランドさんは驚きの声を上げるおじさんに振り返りもせず、そう告げると、軽やかに外へと飛び降りてしまった。まるで垣根でも飛び越えるような気軽さだった。

でも、ここは四階。普通の人なら骨折は免れないし、下手をすれば死んでしまう。

「フェランドさん！」

窓へと駆け寄って身を乗り出して下を覗くと、石畳の上に転がるフェランドさんの姿が外灯に照らされてぼんやりと見えた。

一瞬どきりとしたけれど、フェランドさんは何事もなかったかの

ように起き上がると駆け出した。

「さすが戦闘魔術学出身だけあるなあ。上手く衝撃を逃して着地したんだろう」

ほっと息をついた私のすぐ後ろから、しみじみと呟くおじさんの声が聞こえた。

フェランドさんは戦闘魔術学の卒業生だったのか。

だから、この高さから飛び降りても平気で、あのヴァレリーに化けた男にも冷静に対処していたんだ。

私もおじさんの呟きに妙に納得して、走っていくフェランドさんの後ろ姿を見つめた。

「リリース、俺達も追いかけてよう」

「え!?!」

それは一瞬の出来事だった。

私と同じように窓から下を眺めていたミケーレが、ぼつりと呟いたかと思うと、私が答えるよりも早くフェランドさんと同じように窓から飛び降りてしまったのだ。

「ミケーレ!」

フェランドさんは普段から鍛えているから平気なんであって、ミケーレがこの高さから飛び降りて無事でいられるわけがない。

「君! 何をしているんだ!」

私の悲鳴に気付いたおじさんも慌てて窓枠から身を乗り出した。

「あ………れ?」

「おお!?!」

そして、二人して間の抜けた声を上げてしまった。

窓の少し下辺りにミケーレの頭があったからだ。

彼は悪戯に成功した子供のように、楽しそうに笑いながら私とおじさんを見上げている。

その足元には何も無かった。ただ暗い空間があるばかり。

彼は、宙に浮いていた。

「翼だよ」

「つばさ？」

「君、そんな高価な物をどこで……」

「本当の名前はダイダロスの翼、略して翼。ワイズマン社の商品名なんだけど、他に競合する商品が少ないから、宙に浮く魔法を封じ込めた魔石全般が翼って呼ばれてる。これ、王子様が貸してくれた品の中にあつたんだ」

ミケーレは私とおじさんがほぼ同時に浴びせかけた質問に手短かに答えると、私を見上げたまま両腕を広げた。

「おいで、リリース」

「おいで、って……」

私は絶句して柔らかな笑みを浮かべるミケーレと、彼の足の下に広がる闇を見比べた。自然と視線は彼の足下から、外灯の明かりに照らし出された石畳へと下がる。

……落ちたら骨折じゃ済まない気がしてきた。

「やめなさい。君も危ないから早く戻ってきなさい」

迷っているうちにおじさんの手が私の腕にかかった。

怖い。けれど、このまま何もせずここで待っているなんて嫌だ。私はおじさんの手を振り払うと、意を決してミケーレの腕の中に飛び込んだ。

サマエルの刻印 6

私の腕がミケーレの肩にかかり、彼の腕が背中にまわされた瞬間、ふわりと体が浮き上がる感覚があった。

けれど、次の瞬間にはがくんと階段を踏み外した時のような衝撃とともに、私とミケーレの体は落下し始めた。

「ちょ、ちよっと！ 堕ちてる！ 堕ちてるよ！」

私は必死にミケーレの首にしがみついて悲鳴を上げた。

「ああー、やっぱり無理か。リリースなら軽そうだからいけると思ったのになあ」

「やっぱり無理って！ 無理だと思ったんなら初めから試すな！」

「やってみなきゃわかんないじゃん。やる前から諦めてると何もできなくなっちゃうよ？」

「考えなしになんでも試してると、人生そのものが終わっちゃうよ！」

聞き分けのない子供をあやすような口調でなだめられて、私は星空を仰いで叫んだ。

「リリース、うるさい。声が耳に響く……」

悪かったね。ぎゃーぎゃー騒いで。

「き、君たち！」

ミケーレに文句を言おうと口を開きかけた時、おじさんの慌てふためく声が聞こえてきて、私はミケーレにしがみついたまま肩越しに窓の方を振り返った。

「戻ってきなさい！」

そこには、私たちが飛び出してきた窓から身を乗り出して叫ぶおじさんの姿があったんだけど、

「え？」

その姿はやけに遠かった。しかも、あっという間に遠ざかっていくように見える。

スピードに気を取られたのと、気が動転していたのとで気付かなかったけれど、私たちは垂直に落下しているわけじゃないようだ。例えるなら、すべり台を滑っているような感じだった。

見えないすべり台がそこにあつて、それをかなりのスピードで滑り降りている。そんな感覚だった。

「ねえ、どうなつてんの？ これ」

私は両手を振りまくつて叫ぶおじさんから目をそらし、ミケーレの顔を見上げた。

「んー、そのまま落ちたらヤバいから角度つけてみた。なんつーか、前に移動しろつて念じてみる感じ？」

「そんなことできるの？ つていうか、できてる、よね？」

「みたいだね」

「みたいだね、つて…」

いや、もう何も言わないでおこう。諦めよう。

ミケーレがこういう奴なのは知っていたのに、あっさり信用してついでに自分が馬鹿だったんだ。

なんとか死なずに済みそうだし、深く考えるのはよそう。

これ以上言い合つても疲れるだけだと悟つて、私は進行方向へと顔を向けた。いい加減ミケーレを見上げ続けるのも首が痛くなってきたのだ。

外灯に照し出された石畳が、闇の中に白く浮かび上がっている。

その先に、二つの人影が見えた。

取締局の制服を着たフェランドさんと、遠くてよくわからないけど、もう一人はヴァレリーに化けたあの男だろう。闇の中に、石畳よりも鮮やかに浮かび上がる銀の髪が翻ひるがえっている。

彼らは光の館から真つ直ぐに延びた大通りの先にある庭園に、足を踏み入れたところだった。庭園の入口にある小さな噴水を左に曲がつて、生け垣の影に姿を消そうとしているところだ。

「ミケーレ！ 二人がいる！」

「だからさあ、耳元で叫ぶなって」

そう言っている間にも、中央に天使像が設置された噴水がどんどん近づいてくる。

そして当然地面も近づいてくるわけで……。

「や、やだっ！ 墜ちる！ 墜ちっ……」

気付けば目の前には石畳が迫っていた。

私はミケールの肩に顔を埋めてきつく目を閉じた。

頭の隅に「ミケールの体がクッションになって私だけ助かるかも」とか不謹慎な考えが浮かだ時、

「うぐっ！」

まるで見透かしたかのようにタイミングよく、地面に叩きつけられる衝撃とともにミケールのくぐもった声が聞こえた。

「痛っ！」

直後にミケールの首の後ろに回していた両腕に鋭い痛みが走って、私は咄嗟に身を起こして右腕を確認した。

思った通り、右腕には石畳の上に墮ちた時の摩擦で擦り傷ができていて、血が滲んでいた。左腕もひりひりと痛む。きつとこっちも同じような有り様になっているはずだ。

もうなにもかも放り出して、土の館の医務室に駆け込でしまった衝動に駆られた。けれど、そんなことをしたらなんの為に、怪我をしてまで四階から飛び降りたのかわからなくなってしまう。

早く二人を追いかけなきゃ！

そう思っ立ち上がるうとして初めて、自分がどこに座っているのかを思い出した。

「ね、ねえ……いきてる？」

なにか後ろめたいものを感じながら、私は自分の下敷きになっているミケールの顔を恐る恐る見下ろした。

「……重い」

彼にしては珍しく、とても不機嫌な返事が下から返ってくる。すごく疲れてそうだけど、とりあえず生きてはいるみたいだ。

私は急いで立ち上がると、ぐったりした顔で横たわるミケーレに手を貸した。

私たちもフェランドさんとヴァレリーに化けた男を追って、迷路のように入組んだ庭園に足を踏み入れた。

天使像のある噴水を左に曲がると、二人の姿はもうそこには無かった。

腰ぐらいの高さの生け垣の向こうに二人の姿が見えるけれど、そこまで辿り着くには複雑な図形を描くように配置された生け垣の迷路を抜けなければならぬ。

「ここ、突っ切っていつちやう？」

私もすぐにその方法が頭に浮かんだ。でも……

「やだよ、そんなことしたらアール先生に一日中泣き付かれる羽目になる」

目の前の生け垣を指さして聞いてきたミケーレも、私の言葉に眉をしかめた。

「それはキツイね。リュカの話じゃ、アール先生に一日中泣き言聞かされて、もう問題を起こさないでくれって哀願されんでしょ？」

先輩の先生達や女中頭から責められて大変な目に遭ったってさあ。

怒られるよりも辛そう」

生け垣を強行突破する案は即座に不採用になった。

それはいいんだけど、この迷路のような庭を辿って二人のところまで行けるだろうか？

私はちらりと右側へと延びる道を見た。

道はすぐに三差路になっている。普通に考えれば、左に折れると二人に追いつきそうだけど、この庭園の場合は違う。

日中に四階の窓から見下ろした感じでは、いろんな場所に行き止まりやら迂回路やらがあったはずだ。

「ミケーレ、この庭の図形って覚えてたりしないよね？」

私は手を伸ばせば届きそうな距離から遠ざかっていく二人を、もどかしい思いで眺めながら呟いた。

「無理だよ。覚えようと思って真剣に眺めてたわけじゃないし。それより、これ辿ってけばいいじゃん」

「これ？」

「そう、絶対に迷わない目印」

ミケーレはそう言うと言つと制服の胸ポケットから学生証を取り出してカードの表面に左手をかざした。ぼうつとカードの表面が青白い光を放つ。

何をするのかと見ていると、彼は学生証を手にしたまま屈みこんで、その光で地面を照らし出した。

「ほら、あつた！」

「あつ！」

ミケーレが指し示したものは、白い砂利の上に落ちた小さな黒い血の痕だった。

男が流した血の跡を辿る 確かにそれが一番いい案だと思う。けれど、地面に這いつくばって、学生証が放つ弱い明かりを頼りに血痕を探すのは、かなり辛い作業なんじゃないかな？ 次の日には、二人とも酷い筋肉痛に悩まされることになりそう。

同じことをミケーレも思ったようだ。

「照明係は交代制ね」

彼は学生証の明かりを消して、立ち上がりながら言った。

「ちよつと待って。いい魔法を教えて貰ったんだ」

私も白いエプロンのポケットから、学生証を取り出した。

左手をかざしてメイン画面を立ち上げると、クロードからのメールを開く。

教えてもらっておいてよかった。こんなに早く役に立つ時がくるとは思わなかったけど。

私はドキドキしながらメールに記された短い呪文を読み上げた。

クロードの話では、魔力があつて呪文さえ知っていれば誰でも成功するぐらい簡単な呪文だつてことだけど……。

「お？ 何これ、光の玉？」

「うん。明かりの魔法。よかった、成功して」

私の心配も無用に終わったらしく、呪文が終わった時には、空中に淡い光の玉が浮かんでいた。

クロードが作り出した光の玉よりも弱々しい光を放っていて、ふらついているように見えるのは気のせいだと思いたい。

それにミケーレはクロードの魔法を見ていない。こういう魔法なんだ、と思ってくれるはずだ。

「ええーつと、足元を照らして」

私の胸ぐらいの位置に頼りなく浮かぶ光の玉に声をかけた。

本当は心の中で念じるだけでいいはずなんだけど、つい声にだし

て命令してしまふ。ちゃんと指示通りに動いてくれるか不安で堪らない。

じつと見守る私の前で、光の玉はフラフラと揺れながら私たちの足元を照らし出した。

私とミケーレは白い砂利の上に残った血痕を辿って、光の館の庭園を彷徨い歩いた。

まさに彷徨ったという表現がぴったりだった。

あつちに曲がったり、こつちに曲がったりとさんざん振り回されたせいで、やっと庭園を抜けた時には自分たちがどこにいるのか全く分からなかつたくらいだ。

けれど、庭園を抜けて大通をしばらく走っていると妙な感覚に襲われた。

クレスメント学園の大通はどこも同じ石畳が敷かれ、同型の外灯が設置してあって代わり映えがしない。前方にぼんやりと見える別館もどれも外観は同じ造りで、日中でも遠くからでは見分けがつかない。日の光がない今は、黒い大きな影があるだけだ。

でも、この道は何度も通っているような気がしたのだ。

道の両脇に植えられた並木の枝ぶり、植え込みの草花の表情に見覚えがある。それに、風に乗ってほのかに漂ってくる家畜臭。

「この道って……」

「土の館への道かな？」

私とミケーレは顔を見合わせた。

あの男は土の館に何の用があるんだろう？

徐々に前方にぼんやりと見えていた建物がはっきりしてきた。

建物の前方に無数の影があるのも分かる。外灯の明かりを受けて闇の中に浮かび上がる十字架の群だ。

やっぱり、男が向かっている先は土の館だった。

その十字架の群の合間から、

「ステファアーノ！」

唐突に聞き覚えの無い名を呼ぶ声が聞こえた。

遙か前方を走っていた男が立ち止まるのが見えた。彼を追っていたフェランドさんも、謎の声と男の突然の行動に警戒してか、足を止めた。

そのおかげで私たちも彼らに追いつくことができた。

息を切らしながら私たちがフェランドさんの元に駆け寄ると、フェランドさんは一瞬だけ私とミケーレに咎めるような視線を送り、すぐに男へと向き直った。

男の方はといえば、身じろぎもせずに墓地を睨みつけている。

墓地には二つの人影があった。

一人は墓石に腰掛けて男を見つめているヴァレリー、もう一人は彼の隣に立つテオドルさんだ。

「あなたがこちらへ向かっているとの知らせが学園長からありましてね。こうしてお待ちしていたんですよ。深夜に墓地で人を待つなんて、ぞっとしませんかねえ」

テオドルさんが溜息交じりにそう言うと、ヴァレリーが立ち上がって口を開いた。

「墓地なんか慣れているでしょう、ここの卒業生なんですから。学園長から聞きましたよ」

「まあ、そうなんです、何十年も昔の話ですし、私は悪魔学専攻でしたからね。幽霊とか死体とかはちょっと……」

そう言うと、テオドルさんは周囲に浮いている青白い火の玉を気味悪そうに眺めた。

「主任？ どういうことですか？ 私とロベルトにミケーレ君を警護しろと指示したきり姿を見かけないと思ったら、こんなところはずっといらしたんですか？」

そんなテオドルさんを、フェランドさんが少し責めるような口調で問い詰めた。

「何も説明せずに悪かったね。ちょっとと思うところがあってねえ」

テオドールさんが母親に叱られた子供のように首をすくめて苦笑いを浮かべる。その余裕さえ感じさせる様子が、フェランドさんの怒りに火をつけてしまったようだ。

「思うところってなんですか。他の職員には何も言うなという指示と何か関係があるのですか？ 主任はあの時、ちよつと嫌な予感があるだけだから大事にする必要は無い、と私に言いましたよね？」

これのどこが「ちよつと」なんですか。危うくミケーレ君は殺されるところだったんですよ！ 本来ならば、もっと警備の人数を……」

真面目で冷静そうな人ほど怒らせると怖いものらしい。フェランドさんは、視線を男に据えたまま怒りをぶちまけるように捲し立てた。その剣幕は怒られてもいない私が身を縮めそうになるほどだ。

「私が頼んだんです。一緒にいて欲しいとね。ミケーレが襲われた時刻に私が土の館に居たと証言してもらうために。身内のクロードでは、証人として認めてもらえないでしょうから」

ヴァレリーがテオドールさんを庇うようにフェランドさんに説明すると、先ほどから沈黙を貫いている男を睨みつけた。

「暗殺に失敗しようが成功しようが、ここで姿をくramsすつもりだったんだらう？ ステファアーノ・カツラ」

またさっきの名前だ。これが、この男の本名？

男はじつとヴァレリーを睨みつけていたが、ふいに大きく息をつくと手にしていた剣を無造作に放り投げた。

「その通りだよ、王子様。まさか失敗するとは思わなかった」

こちらからは男がどんな表情をしているのかはわからない。けれど、そう呟いた声はとても落ち着いていて、優しい響きさえ感じるほどだった。全てを諦めたような、何かを悟ったような声。

男の姿が揺らいだ。

銀の髪は見る間に短い黒髪に変わり、身長も少し伸びた気がする。気付いたときには、目の前には黒髪で長身の生徒の姿があった。

制服を着ているから生徒に見えるだけかもしれない。後ろ姿からは

彼の正確な年齢までは分からないから、もしかしたら生徒ではなく講師かもしれない。

どちらにしても、私はその後ろ姿に見覚えがなかった。

サマエルの刻印 8

「なぜ、俺の正体に気付いた？」

ヴァレリーに問いかけた男の声は、低く掠^{かす}れていた。ヴァレリーの声とは似ても似つかない別人の声。

「それは……」

ヴァレリーが口を開きかけたが、ステファーンと呼ばれた男はヴァレリーの言葉を途中で遮ると、ゆっくりと空を見上げた。

「いや、いい。聞いたところで意味などなかった」

彼にどんな心情の変化があったのかはわからないけれど、急に気が変わったようだ。彼の声には自嘲するような笑いが含まれていた。私もつられて空を見上げた。

満天の星空。

私が生まれ育った村から見る夜空と、全く同じ夜空が頭上には広がっていた。

都会では、この星がほとんど見えないと聞いたけど本当だろうか？ 私には想像もつかない。日が落ちた後の空には、雲に覆われている時以外はいつも大小様々な光が賑やかに瞬いていた。昔の人は、よくこんなにも多くの星の中から星座を見つけ出すことが出来たなあ、と感心したこともあった。

星がほとんど見えないなら、都会の夜空はきつととても寂しくて味気ないと思う。

どこかで鼻^{はな}が鳴く声が聞こえた。

誰も口を開かなかった。皆、男の次の言葉を待っているようだ。

そこには先程まで張りつめていた緊張した空気は無く、ただ静けさだけがあった。

「俺に聞きたいことがあるなら、今すぐに聞いた方がいいぞ」

沈黙を破って、男がまるで友人に話かけるような親しげな口調でヴァレリーに声をかけた。

村のことや家族のことを思い出して、懐かしさと少し寂しい気分
に浸っていた私は、彼の声に一気に現実へと引き戻された。

男はまだ空を見上げたままで、ヴァレリーはそんな彼を怪訝な表
情で見やりながら訊ねた。

「では聞こう。お前の雇い主は誰だ？」

「知らない。俺は上からの命令に従っただけだ。雇い主の名は聞かさ
れていない。ただ、最近アクタニアからの仕事が急増しているよう
だ。実際に依頼主を教えられたわけではないが、俺が受けてきた仕
事の中に、アクタニアの利益になるようなものが増えてきている。
今回の件も含めて」

男は空を見上げたまま、呟くように言った。彼は魅入られたよう
に空から視線を外そうとしない。その後ろ姿は初めて星空を眺めた
子供のように見えた。

「上からの命令？ では、貴方はやはり単独犯ではないのですね」

「ああ、そうだ」

彼は横から口を入れたフェランドさんを肩越しに振り返った。

そのおかげで私も彼の顔を見ることができた。見ることができた
といっても、この暗さだし、ほんのちよつとの間だったので、そん
なにはつきりとはわからなかったんだけど。

それでも、私には彼が躊躇ちゅうちゅうすることもなくミケーレを殺そうとし
た人間だとは思えなかった。

少しあどけなさが残る丸顔が、長身で細身の体形や大人びた口調
とは不釣り合いで、そのアンバランスさが彼が私たちと同じ年頃の
少年だと主張しているみたいだった。

「あなたは誰の命令で動いているのですか？」

「すぐに分かる」

フェランドさんの質問の何がそんなに気に入らなかったのか、彼
は酷くそっけなく答えるとヴァレリーに向き直った。

「あんたも俺も似たようなもんだな、王子様。自由なんて、この世
に生まれ落ちた瞬間から無かったんだ。あんたの生涯は国の為に捧

げられる。そして俺は一度だって自分の……」

男の言葉は途中で途切れた。風を切るような鋭く小さな音とともに。

そして、私の目の前から彼の姿は一瞬にして消えてしまった。

後に残ったのは、どこからか聞こえてくる何かを引っ搔くような気味の悪い音だけ。

何が起きたのか分からなかった。

直後に誰かが呪文を詠唱する声が入ったけれど、その声の主はすぐに見つかった。

呪文を唱えていたのは、私のすぐ前に立つフェランドさんだったからだ。

そしてもう一人。

いつの間に現れたのか、ヴァレリーを庇うように身構えながらクロードが呪文を詠唱している。クロードが手にした何か たぶん短剣だと思う が外灯の明かりを反射して煌めいた。

クロードは呪文を唱えながら上方を睨みつけていた。彼に庇われるように立つヴァレリーも、その顔に驚愕の表情を浮かべて何かを見上げている。ヴァレリーの隣に立つテオドルさんも、私の前でクロードとは別の呪文を詠唱するフェランドさんも一様に天を仰いでいる。

私も皆の表情と緊迫した空気に戸惑いながら見上げた。

そこに、男が居た。

手を伸ばしても届きそうもない程に高い場所で、彼は喉を搔きむしり足をバタつかせている。

男の姿が見えなくなってからずっと聞こえていた音の正体を知って、背筋に冷たいものが走った。

口元を両手で抑え、もがき苦しむ男を見つめる。目を逸らしたくても逸らせない。馬鹿げたことだけど、私が目を逸らしたら、その瞬間に彼が死んでしまうような気がしたのだ。

「なんだよ、これ……」

隣に居るはずのミケーレの声が、とても遠くから聞こえるように感じる。

本当は数秒ぐらいの出来事のはずなのに、もうずっと長いこと宙でもがく男の姿を眺めているような気がしてきた時だった。

「今すぐ呪文の詠唱を止めろ」

地の底から響くような低く冷たい声が聞こえて、息を飲んで声が聞こえた方角に視線を向けた。

そこには闇の中に白い顔と銀の十字架がいくつも浮かび上がっていて、私は小さな悲鳴を上げて隣にいるミケーレの腕にすがった。

「異端審問官がなんでここに」

呻くように呟いたミケーレの声に、私は闇の中に浮かび上がる白い顔に目を凝らした。よく見ると、闇の中に黒いローブの輪郭が浮かび上がってくる。

総勢7人。その中の一人をどこかで見たような気がして、私はミケーレの肩ごしに右端に浮かんでいる顔をまじまじと見た。

人間だとわかっていても、闇の中に浮かび上がる顔は怖かったから。ミケーレはそういうの平気そうだったし。

「何人たりとも、異端審問官の職務を妨害することはできない」

その右端の男が私たちを一瞥して言い放った。

「マリアン又王女殺害の罪及び数件の傷害罪、偽証罪によって、ステファアーノ・カッラを異端審問官の特権にて絞首刑に処す」

絞首刑に処す

感情がまるで籠もっていない抑揚の無い声で告げられた罪状と死刑宣告が、空中で？もく男の衣擦きぬすれの音と相まって吐き気が込み上げてきた。

なぜか急に、私の脳裏にヴァレリーの足の踏み場も無い部屋と、スクリーンに映しだされた金髪の美少女の姿が浮かんだ。

そして、スクリーンに表示された顔写真の数々。異端審問官の文字と白髪が混ざった黒髪の中年男性の顔写真。そう、今日の前で死

刑を宣告した男と同じ陰気な顔をした……。

やっと思い出した。

ヴァレリーの部屋でシャルさんが送信してきた「学園に派遣された国際魔法取締局の職員リスト」で見たんだ。確か名前はフランコ
なんとか……。

サマエルの刻印 9

私が記憶の底から中年の異端審問官の名前を探し当てた時、まるで祝福するかのように頭上から柔らかな光が降り注いだ。

驚いて顔を上げて空を見上げると、宙づりにされた男の体を支えるように彼の足下に光が溢れて渦巻いていた。男が激しく咳き込む声が聞こえてくる。

今までは暗くてよく分からなかったけれど、男の体を支える光に照らし出されて黒い縄のような影が男の首に巻き付いているのが見えた。縄の先は男の頭上に広がる夜空へと消えていた。

「呪文の詠唱を止めろと言ったはずだ！」

異端審問官たちの間から怒声が上がったかと思うと、鋭い金属音が響いた。

異端審問官の内の一人が、自分の背丈以上もある大鎌をクロードに向かって振り下ろしたんだと気付いた時には、もう三度目の金属音が上がっていた。

大鎌を短剣で受け止めたクロードが、すばやく体を大鎌の下に潜り込ませ異端審問官を突き飛ばした。クロードの肩か肘が異端審問官の鳩尾みそおしにきまつたんだろう。突き飛ばされた男は鳩尾を抑えて小さな呻きを漏らし、たたらを踏んで数歩後ずさった。

その拍子に目深にかぶっていた闇に溶け込む黒いフードがずり落ち、鮮やかな赤い髪があらわになった。

リュカの燃え立つ炎のような朱色の髪と同じぐらいに鮮やかな赤だったけれど、なぜか炎よりも血の色を連想させる赤だった。彼の青白く中性的でどこか妖艶な美しさを秘めた顔と、彼が纏まとう薄気味の悪い黒衣がそう見せるのかもしれない。

異端審問官という職についているんだから、どんなに若くても十八歳以上のはずなのに、大鎌を構え直してクロードを値踏みするように眺めるその顔は、少年か少女のようにしか見えなかった。それ

でいて、妙になまめかしく退廃的な魅力をたたえていて、彼を見ていると得体のしれない恐怖が湧き上がってくる。

その彼の死人のような青白い顔の中で唯一人間らしい紅みが残る唇に、謎めいた笑みが浮かんだ時だった。

「どういづつもりですか！？　すぐに武器を退いて下さい！　命令に従わなかったことは咎められても仕方がないでしょう。ですが、異端審問官といえども職務執行妨害のみで極刑を適用する権限などありません！」

テオドールさんが、大鎌を軽々と操り執拗に攻撃を繰り返していた赤毛の男を叱責した。

「国際法は各国の国民に対してのみ適用される。奴隷を一匹処分したところで、何の罪にも問われはしない。奴隷を処分したことで生じた損失は、後からヴィラール王国に補償すればいいことだ」

答えたのは赤毛の男ではなく、陰気な顔をしたあの中年男　フランコ　だった。

「首輪こそしてはいないが、その男は武器商人から購入した奴隷だろう。その年齢でアルヴィンと互角に渡り合い、光の上級魔法を使いなせる者など訓練された奴隷以外に存在するはずがない」

彼はそう言うと、軽蔑したような眼差しをクロードに向けた。視線だけではない。今までの何の感情も籠っていないような口調とは違い、彼の声には嫌悪感と侮蔑の色が滲み出ている、それを全く隠す気さえないようだった。

クロードは何も答えなかった。ただ短剣を手にヴァレリーとテオドールさんを庇うように赤毛の男に対峙している。

そんなクロードとは対照的に、ヴァレリーが怒りを押し殺したような声で吐き捨てた。

「その狂犬のような部下を早く下げろ。クロード・マティアス・ジルベール、彼はヴィラールの民だ。疑うならヴィラールの役所に問い合わせるんだな」

ヴァレリーの青紫色の瞳と異端審問官の薄灰色の瞳が交錯する。

折れたのは異端審問官の方だった。

「もついい」

彼は片手を軽く上げて、赤毛の男に下がるように指示を与えた。

「なんだ、つまらない」

赤毛の男は不満げに鼻を鳴らしたが、素直に大鎌から手を離れた。男が手を離れた瞬間に大鎌は跡形もなく闇の中に消えてしまった。

「でもさあ、奴隷を養子にするなんて、ヴィラールには随分変わり者の貴族がいるんだね。どんなヤツなんだろ？ 面白そうだから後で調べてみるよ」

彼はずり落ちたフードをかぶり直しながら、ヴァレリーに嘲るような笑みを向けた。

「その変わり者の貴族はお前の目の前にいる。ジルベールは俺の母方の姓だ。王家に籍を置くことは許されないから、母方の姓を与えた。よかつたな、調べる手間が省けて」

ヴァレリーは赤毛の男に負けないぐらい挑発的な笑みを返すと、年配の異端審問官に向き直った。

「異端審問官の管轄は呪術及び悪魔召喚の事案とサマエル商会に関わりがある事案のみはずだ。マリアンヌ王女殺害の件に呪術や悪魔召喚の儀式が行われた形跡は無いと聞いている」

「私たちの捜査が違法だとも言いたいのですか？」

フランコが心外だとも言うように眉を上げてヴァレリーを見据えた。

ヴァレリーも尊大さに関しては異端審問官に引けを取らない。

自分よりも長身で体格もいいフランコを睨みあげて、まるで尋問するような口調で続けた。

「お前達が出てきた理由は王女の殺害にサマエル商会が絡んでいるからだろう。ステファーン・カツラがサマエル商会の手の者だという証拠はあるのか？」

「それは守秘義務に関わることだ。捜査上で知り得た情報を一般人

に教えることはできない」

「では、サマエルの刻印を確認させてもらう。サマエル商会に関わる人間は体のどこかに深紅の蛇の刻印を入れているという噂を聞いた」

そうだった。

私が初めてヴァレリーに会った時も彼は同じことを口にして、嫌がる私の服を無理やり脱がそうとしたのだ。

それに死の商人は二人一組で行動するとも言っていた。その噂が本当なら、ステファアーノには共犯がいるはずだ。

「ダメ、ダメ。無理だよ王子様」

場の空気を全く無視した軽く笑いを含んだ声が、睨み合うフランコとヴァレリーにかけられた。大鎌を振り回していたあの赤毛の男だ。

彼はひらひらと顔の前で手を振りながらヴァレリーに声をかけた後、同意を求めて頭上にいるステファアーノに声をかけた。これから処刑されようとしている人間に、親しげにさも愉快そうに声をかけたのだ。

「サマエルの刻印は死後に浮き出るんだから。死んだ後じゃなきや拝めないの。ねえ、ステファアーノくん」

頭上から返事は返ってこなかった。いつの間にか激しく咳き込む声も止んでいたけれど、私は赤毛の男のようにステファアーノを見上げる気にはなれなかった。

「ねえ、聞いている？ もう話せるん……」

「アルヴィン」

フランコがたしなめるように名前を呼ぶと、赤毛の男は舌打ちして顔を背けた。

「あーあ、興醒めだよ。これから死ぬ人間との会話ほど楽しいものはないのに」

赤毛の男がそう呟く声を聞いた時、何故か急にやり場のない悔しさが押し寄せてきて涙が溢れて頬を伝い落ちた。

生きる為には殺すしかなかった

血を吐くような悲鳴に似た叫びが頭の中に響く。

違う。

これは私の声だ。私の中に突然沸き起こった感情を代弁しただけだ。

暗くて冷たく、血の匂いしかない。けれど、ずっと泣いていた。救いを求めて。

助けなんて来ない事をわかっていたのに、誰かがここから自分を助け出してくれると僅かな希望にすぎることだけが全てだった。

紅い蛇が僕を縛る

僕？ 僕って？

この感情がどこからくるのか分からずに困惑する私の胸に、フランコの言葉が冷たく染み渡った。彼の言葉に断ち切られるようにして、自分ではない誰かの心が私の中から消えていくのを感じた。

「これ以上我々の仕事を妨害する気なら職務執行妨害で告訴する。貴方とその部下には取締役本部に被告人として出廷してもらおうことになるだろう」

ヴァレリーがフランコを睨みつけたまま、静かに言った。

「クロード、魔法を解除しろ」

「おいっ！ まだ何も聞き出せて……」

クロードが抗議の声を上げかけたが、

「わかったよ」

ヴァレリーの横顔を見て諦めたように呟くと、短い呪文を口にした。

クロードが短い呪文を唱え終えた瞬間、辺りが闇に包まれた。

目の前にかざした自分の手のひらの輪郭さえ判別できない深い闇の中で、周囲に溢れていた音も微かに感じていた夜の風も、人の気配までもがきれいに消えてしまった。

すぐそばにいるはずのミケーレの息遣いさえも感じられなくなってしまうと恐怖に押しつぶされそうになった時、闇の中に真っ白いスクリーンが浮かび上がった。

白いスクリーンに映し出されたのは、若い男と四、五歳ぐらいの男の子の後ろ姿だった。たぶん親子なんだろう。手をつないで夜空を見上げている。

空にはこのことと同じように無数の星が瞬いていたけれど、地上は一面の雪景色だった。

彼らが立っている場所は小高い丘になっているのか、遠くの方に民家の屋根や小さな教会の鐘楼しよんぐう、柵で囲まれた牧草地が見えた。私の故郷のハイゼル村に似た、時代から取り残された小さな農村のようだ。村の規模はこつちの方がずっと大きいけれど……。

「もうそろそろ帰ろう。寒くなってきたよ」

父親らしい男が空いた方の手で大げさにベージュ色のコートの上から自分の腕を擦って見せると、男の子がつないだ手を何度もひっぱりながら父親を見上げた。

「やだ！ まだ見てるの」

あどけない頬を不満げに膨らませて父親を見上げた横顔を、私はどこかで目にしたような気がした。でも、思い出そうとしても頭が重くぼんやりとしていて、何も考えられなかった。

「本当に　は星が好きだなあ」

あきれたように笑って男の子の頭を撫でる父親。

名前だけが聞き取れなかった。その事がなぜかひどく悲しくて仕

方がなかった。

もう、本当の名前を思い出せないんだ。僕も、あいつも

誰かがそう呟く声が聞こえた時、スクリーンの映像がぷつりと消えた。

「リリースさん、大丈夫ですか？」

「え!？」

気がつくともミケーレとフェランドさんが心配そうに私の顔を覗き込んでいた。二人の顔の後ろには星空が広がっている。

それになんだかい匂いがする。甘くてちよつと爽やかな香り……
……つて!

ふと目の端に特別捜査官の黒地に白い竜が刺繍されたネクタイが映って、私は慌てて飛び起きた。

「わっ! すいません! 私……!」

一体なにがどうなってしまったのか、私の体はフェランドさんの腕の中に収まっていたのだ。ちょうど地面に片膝をつくような体勢で、私の体を抱きかかえてくれていたらしい。

「気にしないでいいよ。無事でよかった」

フェランドさんはそう言って優しく笑いかけてくれたけれど、私の方は気にせずにはいられない。まだ心臓がドキドキしている。

「急に倒れるからマジでびびったよ。フェランドさんが受け止めてくれなかったら、頭から地面に突っ込んでたんじゃない? なに?」

貧血?

「えつと、貧血っていうか……」

安心したようにため息をついて立ち上がったミケーレの向こうで、皆が集まって何かを話し合っているのが見えて、私は言いかけた言葉を飲み込んで逆に彼に尋ねた。

「あれ、どうしたの?」

「あれは……」

「見ないほうがいい」

浮かない顔で言葉を濁したミケール。私の視界を遮るように移動して硬い表情で一言だけ呟いたフェランドさん。

私は二人の様子に嫌な予感を覚えて、フェランドさんを押しつけて皆が集まっている場所へと駆け出した。

まず最初に目に飛び込んできたのは深紅の蛇だった。

地面に横たわる黒髪の男の首に、とぐろを巻き鎌首を持ち上げて牙を剥いた紅い蛇が痣あざのように浮き出ていた。彼の首には赤黒い縄の跡もくつきりつついている。それは、ステファアーノ・カツラの変わり果てた姿だった。

「これで解つただろう。この男は紛れもなくサマエル商会の者だ。後はこちらで処理をするので、お引き取り願おう」

ステファアーノの肩と顎に手をかけ、紅い蛇を見せつけるように彼の首筋を集まった人たちに晒していた異端審問官が顔を上げた。あのフランコだった。彼はぐるりと皆を見渡すと、最後にヴァレリーの顔に目を留めた。

「まだ、何か？」

「死の商人は必ず二人一組で行動すると聞いた。この学園のどこかに共犯者がいるはずだ。なぜ聞き出さなかった？」

「それは、ただの噂だ。共犯者が居るといふ証拠は我々の調査では出てこなかった」

フランコは抑揚の無い声でヴァレリーの問いに答えると、背後に控える部下に手を差し出した。彼の手に白い布が手渡される。彼はそれを無造作に広げると、横たわるステファアーノの亡骸にかぶせた。白い布が精気を失った横顔を覆う直前、あのスクリーンに映し出された子供の顔と重なって見えた。

ステファアーノ・カツラ。

彼もまるで子供のように星空を見上げていた。魅入られたように、まるでその瞳に夜空を焼き付けようとしているかのように……。

「あー！」

あの子供は彼だったのだ。あの映像は彼の一番幸せだったころの思い出なんじゃないか。

そう気付いた私は、白い布に覆われたステファアーノの体を見ていられなくなつて顔を背けた。

「どうかしましたか？」

その途端に、冷たくまとわり付くような声がかげられた。見なくてもわかる。フランコが私を獲物を狙う蛇のような目で眺め回しているはずだ。

悟られてはいけない。

私がステファアーノの記憶の一部を見たことを、この男には絶対に悟られてはいけない。

理由も根拠もなかった。ただ、動物が本能で危険を察知するように、私の中の何かがそう警告していた。あの時、医務室でテオドルさんに咄嗟に嘘をついた時よりもはるかに強く、眩暈めまいがするぐらいに。

震えそうになる手を握りしめて振り向こうとした時、

「どうしたもこうしたもないわ」

私の肩にしなやかな腕がまわされて、驚く間もなく柔らかな体に抱きしめられていた。フェランドさんの香水の香りよりももっと甘くて華やかな香りが私を包み込む。

顔を上げると華奢きゃしゃな顎をわずかに突き出し、黒い瞳に怒りを漲みなぎらせてフランコを睨みつけている学園長の顔が見えた。

「十六歳の普通の女の子が死体見せられて平気でいられると思つてるの？ さつさとそれ回収してここから出て行ってちょうだい」

「言われなくてもそうしますよ、ルビリア先生。私たちの職務は罪人の追跡と処罰及び遺体の回収ですからね。もうここに用はありません」

フランコが私たちに対する時と違って慇懃無礼いんぎんぶれいな態度で口の端に笑みまで浮かべて答えた。すぐに部下達の方を振り返り指示を飛ばすと、白い布がかげられたステファアーノの体が宙に浮き上がった。

「そう、ならいいんだけど……」

黒衣を翻し去っていく異端審問官たちの背中に、思い出したように学園長が声をかけた。

「ああ、そうだね。死の商人は必ず二人一組で行動するって噂、続きがあるの知っているかしら？」

ぴたりとフランコの足が止まった。

他の異端審問官たちと宙に浮いたステファアーノの体は、そのまま止まることなく遠ざかって行く。その様子は葬列のようにも見えた。「続きとは？」

「実行犯は二人。その他に三人目の共犯者がいるって噂。作戦が失敗した時のための処刑人がね」

「ただの噂でしょう。それに噂なら私も一つ聞いたことがあります」
ゆっくりとフランコが振り返った。その薄い唇の上にはあいかわらず笑みが浮かんでいる。

「あら、どんな噂かしら？ 興味あるわ」

「死の商人に関する様々な噂の出所の大半が、この学園だということですよ。まあ、これもただの噂でしょうが」

そう言っ値踏みするように学園長を見回すと、フランコは他の異端審問官たちの後を追うようにして夜の闇の中へと消えていった。

さようなら、僕のリリース 1

長い夜が明けた。

異端審問官たちが去っていった後になってやっと駆けつけた新人特別捜査官三名とテオドルさん、フェランドさんから簡単な事情聴取を受け開放された私は、一睡もできずに学園長室の一室で明るくなっていく窓の外を眺めていた。

みんなはどうしているだろう？

私と違って彼らは今回の事件の渦中にいたので、事情聴取も長くかかっているようだった。

特にヴァレリーは一国の王子様だから、今後の対策なども話し合ったりするのかもしれない。もしかしたら、もう学校に来れなくなっちゃうかも……。

膝の上で猫のように丸くなって眠るクレスが寝返りを打った。その頭をそっと撫でると、包帯を巻かれた自分の腕が視界に入って忘れていた痛みがひりひりと襲ってきた。ミケーレと一緒に光の館から飛び降りたときにできた擦り傷だ。

一連の事件の犯人だったステファアーノ・カツラはもうこの世にはいない。けれど、本当にこれで全てが終わったんだだろうか。

異端審問官は共犯者などいないと断言していた。

でも、私が聞いたあの声は？

もう、本当の名前を思い出せないんだ。僕も、あいつも

私が見たものがステファアーノの過去だったとしたら、あれも彼の声だったんじゃないかと思う。

あいつって一体誰のこと？ それに……なんで私にだけ彼の声が聞こえたり、彼の過去が見えたりしたの？

学園長の執事から悲しい知らせが届いたのは、膨れ上がっていく疑念を抱えながら何もする気になれずにベッドに腰掛けている時だった。

それはマリアン又王女の二人の衛兵が、今朝息を引き取ったという知らせだった。

彼らに残された命の期限は二日だったのか。

その知らせを聞いた時、私は彼らの死を悼むより前に死を宣告されてから命を失うまでの日数を冷静に計算していた。

「事情聴取や事後処理に追われて二人の葬儀に参列できそうにないので、代わりに見送ってあげて欲しい」との学園長からの伝言を聞いたときも、疲れてるし面倒だなと思ってしまった。

こんな風に感じてしまうのは、あまりに多くのことがありすぎて疲れているからだと思いたかった。

少しずつ自分が冷たくて嫌な人間になっていくような気がする。

二人の葬儀が行われるのは、メモによると風の館に併設された礼拝堂らしい。時間は午前九時。あと一時間後だった。

私はクレスを抱きかかえ、執事さんから手渡されたメモを持って部屋を後にした。

薬学部の生徒に売って貰った白い百合をメインに作られた花束を二つ抱えて、礼拝堂の扉をくぐるとそこには先客がいた。

小さいながらも天井が高く、大きめに造られた窓と高い位置に嵌め込まれたスタンドグラスから降り注ぐ柔らかな光が、礼拝堂内を満たしている。その鮮やかな色彩の中で、一人の男子生徒が所在なげにベンチに腰掛けていた。長い黒髪を幾本もの細い束に編み込んだインパクト抜群の髪形は彼しかない。

「クロード」

私が声をかけると、クロードが振り向いた。その顔には疲労の色が浮かんでいた。

「もう事情聴取はいいの？」

「ああ、俺の方は。ミケーレも今ごろ客室で寝てんじゃない？ ヴァレリーの方はまだ色々あるみたいだけど、俺がいても暇なだけだし」

「でも、傍離れちゃったらずいんじゃない？ 大丈夫？」

「へーき、へーき。学園長がついてんだぜ？ この学園一の大魔法使い様がさあ。もしあの巨乳の姐さんが対処できないような事態が起こったら、俺なんかいたってなんの役にも立たねーよ」

クロードがそう言って苦笑した時、白い法衣を身にまとった司祭と宙に浮いた二つの棺が礼拝堂に入ってきた。

棺はそれ自体に魔法がかかっているのか、それとも司祭が何かの魔法を行使しているのかわからないが、司祭の後を一定の間隔を置いてついてきていた。

私たちの横を通りすぎるときに司祭が軽く会釈をした。どこかで見かけたような気がするので、きつと神学部の講師の一人なんだろう。

私とクロード、司祭以外に誰も礼拝堂の扉をくぐる者はいなかった。

二つの棺が祭壇の前に安置されると、がらんとした教会の中に司祭が祈りを捧げる声だけが響いた。

「カリティアの王室から遺体の引き取りを拒否されたらしーぜ」

埋葬が済んだ真新しい墓の前に花束を供えていると、後ろでぼつりとクロードが呟く声が聞こえた。

立ち上がって振り返ると、クロードはアントワーヌ・ポールと記された墓石を眺めていた。

「その墓に入ってるのは、そいつじゃなくて俺だったのかもしれないんだよなあ。ヴィラールじゃなくカリティアに売られてたら、そいつの代わりに首輪つけてマリアン又王女の護衛をやってただろうし。で、俺の墓をそいつがこうやって眺めてんの」

私は何も言えずに二つの墓石に視線を落とした。

昨日の夜に彼が奴隷だったことを偶然知ることになったけれど、今でも信じられない。それは、真新しい墓の下に眠る二人の生徒に

ついても同じだ。私にはクロードも彼らも私やミケーレと同じ普通の生徒にしか見えなかった。

「運がよかったってことなんだろうーな」

運がよかった

そうなのかもしれない。私と彼らを違えたのは、きっとそれだけのことなのかもしれない。

私は今まで自分が恵まれているなんて考えもしなかった。「こんな田舎は嫌だ」とか、「貴族の家に生まれて豪華な屋敷で暮らしてみたかった」とか、不満や憧れを口にすることはあっても、あの村に、あの家族の元に生まれてきたことに感謝なんてしたことがなかった。

それは私にとって「どこにでもある普通の家庭」で「代わり映えのない田舎の日常」だったから。

本当は「普通の家庭」なんてものはどこにも無かったんだ。私が「普通」だと思っていたことは、他の人たちから見たら「普通」じゃなかった。

私はなんて傲慢で無知だったんだろう。

「あの、さ。そのー、ありがとな」

ふいにかけられた礼の言葉に驚いてクロードを不思議そうに見上げると、

「……ヴァレリーのヤツを助けてくれて」

彼は居心地悪そうに顔を背けて呟くような声でそう言った。

「助けたっていつでも……一緒に図書館で迷子になっただけなんだけど……」

私も図書館で救助された時のことを思いかえして罰の悪さに言葉を濁した。エレザが見つからずに、代わりに自習室をうろついていたヴァレリーを無理やり図書館に引っ張っていった時は、まさか二人揃って遭難するとは思ひもしなかった。それにしても……。

「なんでヴァレリーは自習室なんかでうろつろつしてたのかなぁ」

妙に落ち着きなく辺りを見回していたヴァレリーの様子を思い出

して呟くと、クロードが嘖き出した。

「自習室？ は、あいつ自分の部屋にも帰れなかったのかよ。ったく、マジで世話のやけるご主人様だな」

「それって、土の館の中で迷子になってたってこと？」

「だろうなあ。あいつのことだから絶対に認めねーだろーけど」

「図書館でも堂々と迷子になってたしね。あの根拠のない自信ってどこからくるんだろ」

「ああ、あれね。あれは王族病だろ。もう一生治んねーよ」

「本人も全く自覚ないし……」

私はクロードと顔を見合わせると、お互いに笑い出した。

なんだか久しぶりに笑えた気がする。ヴァレリーには悪いけど。

「クロードとヴァレリーって本当に仲がいいよね。主従関係っていうよりもまるで友達みたい」

ひとしきり笑いあつた後、光の館への道を並んで歩きながらずっと不思議に思っていたことを何気なく聞いてみた。

陽はもうすっかり昇りきって、空の高い位置からじりじりと照りつけている。

クロードが陽射しを少しでも遮ろうと目の前に手をかざし、前方に見えてきた光の館を眺めながら口を開いた。

「それがあいつが望んだ唯一の条件だから」

「条件？」

「必要な時以外は敬語も敬称も禁止。それと絶対に死ぬな。ああーつと、唯一じゃなくて二つか」

「ずいぶん変わった条件だね」

「まだガキだったからなあ。初めてあいつに会ったのってお互いに十歳のころだったし。今でも覚えてるよ。俺に首輪をつけようとした商人に「そんな物はいらぬ」って一喝した様子。俺はあいつの泣き出しそうな顔をぼーっと眺めててさあ。なんでこいつはこんな

顔してんだろーなって思ってた。俺が死のうが生きようがこいつにはなんの関係もないのにつて不思議でたまらなかった」

沈黙が流れた。

たぶん、私に話そうかどうか迷っていたんじゃないかと思う。

クロードは少しの沈黙の後、言葉を続けた。

「これは後で知ったんだけどさ。俺は死んだ奴隷の代わりに買われたんだ。その奴隷つてのが例の首輪を付けられて、あいつの母親の警護を担当してたんだけど、母親が亡くなった一週間後に死んだ。ヴァレリーはその奴隷にずいぶん懐いてたらしい。まるで本当の兄のように慕ってたつて。で、母親と心を許せる使用人の二人を一度に失った傷心の幼い王子様のために、周りの人間が近い子供の奴隷を買い与えようとしたんだな。でも結局そいつらの意図の斜め上を行っちゃつて、あいつは俺を養子にして自分と同じ教育と待遇を要求したから取り巻き連中は焦りまくつてさあ」

その時の様子を思い出したのか、クロードは頬をゆるめた。

光の館に併設されている庭園がもうすぐそこまで見えてきていた。「警護だけじゃなくて王子様の話し相手になることも仕事だつてんだから、最初はすげー苦労したよ。ガキがいつぱいいる場所で育つたけど、そいつらはただの同居人だったしなあ。気付けば死んだり売られたりしていなくなつてたから、人との接し方つてもんがわかんなくつて。今ではこんなんだけど、当時は笑い方すら知らなかったんだぜ？ 何が面白くて何が悲しいのかわかんねーの。人と共感するつて感覚が欠如してたんだろーなあ」

クロードはそう言つて目の前にかざしていた手を下ろすと、道の脇に作られた植え込みを見やった。クロードの視線の先の植え込みの影には、クレスがいる。全身真っ黒のクレスは私たち以上に真夏の直射日光は堪えるらしく、植え込みの影から出てこようとしなかった。

私たちの足音とクレスが植え込みを歩くガサガサという音、それと光の館の方から生徒が談笑する声が聞こえていた。

「ああ、わりい。こんな話聞かされても反応に困るよな。はあ、なんでこんなこと話始めちまったんだ……って、お？ お迎えがきた」
クロードは深くため息をついたかと思うと、目の前に広がる庭園を指さした。

庭園の入り口からはちょうどヴァレリーが出てくるところだった。彼は私たちに気付くと一瞬片手を軽く上げて、まっすぐにこちらに向かってきた。

彼がああ迷路のような庭園を迷わずに抜けられたなんて奇跡だ！
と思っただけれど、彼のすぐ後ろから眠そうな目をこすりながら、鮮やかな真つ赤なドレスを着た学園長が出てきた。

「じゃあ、後は頼むわね。専属ナビゲーターさん」

学園長はクロードの姿に気付くと、だるそうに手を振りながらきびすを返した。ヴァレリーがなんとも言えない嫌そうな顔で後ろを振り返る。

「まあ迷子になって保護でもされたのか？」

「迷子になんていない！」

噛みつきそうな勢いで否定するヴァレリーの様子を見ると、彼自身も自分の方向音痴にコンプレックスを抱いているのかもしれない。
「帰るぞ」

ヴァレリーはすこぶる機嫌の悪そうな声で一言そう告げると、足早に私たちの横を通りすぎようとした。

「帰るってどこへ」

慌ててヴァレリーの腕を掴み訊ねたクロードに、

「ヴァレール」

彼は疲れ切ったような声で自分の国の名を口にした。

さようなら、僕のリリース 2

ヴァレリーが国へ帰ってしまっ

それは、彼がヴィラール王国の王子であり、マリアンヌ王女殺害の容疑をかけられそうになったと知ったときから、ずっと予感していたことだった。

たとえマリアンヌ王女を殺害したのが彼じゃなかったとしても、一度は帰国して状況を説明しなければならぬだろう。それにヴィラール王国の中にも王子様の安否を案じている人たちがいるはずだ。「ヴィラールって、今からか？ 聞いてねーよ」

クロードが不服そうな声をあげると、

「今言った」

いつものように間髪を入れずにヴァレリーが素っ気なく答える。

このやりとりも、もう二度と見ることができないかもしれない。そう思うと胸が締めつけられるように苦しくなって、私は二人から離れると植え込みの影に隠れているクレスを抱き上げた。

「マジめんどくせーんだけど……」

背後でクロードがだるそうに呟く声が聞こえた。

「俺も気が重いけど、そうも言っていられないだろう。今回のマリアンヌ王女の件で、明後日にフランドールでヴィラールとカリティアの要人を集めて会議が開かれることになった。その会議の場で事件の顛末を報告しなければならぬ。証人としてテオドル主任と学園長にも出席してもらおうことになる」

「明後日なら明日の朝、出発すりゃいいんじゃない？」

「その前に義兄上と王妃、それからヴィラールの高官どもに報告しなければならぬ」

「はいはい、わかりましたよ。すぐに荷物まとめて迎えを手配しますよ。丸一日以上寝ていませんが、喜んで働かせていただきます」「寝ていないのは俺も同じだ」

どうやら話はまとまったようだ。クロードが盛大なため息をつく
と、来た道を引き返していった。ついさっき埋葬に立ち会ったばかりの二人の墓がある墓地が併設された土の館へと戻るのだ。

私はクレスの背を撫でながら、その後ろ姿を見送った。

「リリース、色々巻き込んでしまったな」

不意にかけられたヴァレリーの声に振り返ると、彼は軽く頭を下げて両手を自分の首の後ろへとまわしていた。銀色の髪が彼の頬に影を落としている。

何をしているのかと見守っていると、ヴァレリーの首元から彼の髪と同じような銀色の光がこぼれ落ちた。彼はそれを手早く片手の手のひらにまとめると、私の方へと差し出した。それは陽光を反射して神々しいぐらいに光り輝く銀のネックレスだった。

「護符のようなものだ。とっておいてくれ」

クレスを片手に抱き直して空いた左手を差し出すと、ヴァレリーは私の手の中にその銀色のしずくをさらりと落とし込んだ。銀のネックレスには親指の先ほどの大きさのペンダントヘッドがついていた。盾のような形をした土台を四分割し、それぞれのスペースに凝った模様が彫られている。その中心に、さらに精巧に彫られたトカゲの尾とコウモリの羽を持つ鳥（コカトリス？）が羽を広げていた。大きく開いた嘴くちばしに小さな無色透明の石を銜くわえている。

「スキュータム 通称、盾と呼ばれる魔法がかけられた魔石がはめ込まれている。コカトリスはヴィーラルのシンボルだ。売ればそこそこいい値段になるだろう」

これは……あれじゃないだろうか？

あの、エレザの大好きな騎士道物語の定番。物語のクライマックスに王様やお姫様から頂くありがたい褒美ってやつ。

悪い魔物に攫さらわれたお姫様を救出した騎士が、王様から「よくぞ

娘を助けてくれた。そなたこそ真の英雄」なんて言葉と共に伝説の剣とか授けられるのだ。

私は複雑な心境で手渡されたネックレスを眺めた。手渡された時に添えられた「売ればそこそこのいい値段になる」という言葉も私の心に冷たく染み渡った。

私が欲しいのはこんなものじゃない！

ネックレスをヴァレリーに突き返して、そう叫びたかった。

でも、私が欲しいものって何だろう？

私はヴァレリーに何を求めているんだ？

私にとって彼はただの同校生にすぎないはずだ。

知り合ったのだからつい最近だし、誤解されて脅迫まがいの尋問を受けたり、まるで召使いのようにこき使われたりしたただけだ。楽しい思い出なんか全然ない。

もう二度と面倒なことに巻き込まれずにすむ上に、高価な品まで頂いたんだから喜んでもいいはずなのに、ちっとも嬉しくなかった。それどころか、とても大切なものを失ってしまったような、楽しかった時間が過ぎ去ってしまった後のような喪失感が押し寄せてくる。「おいっ！ 早く帰らなきゃなんねーんだろ？ 迷子になってる暇なんかねーぞ」

私が褒美のネックレスを手に思い悩んでいると、クロードが苛立たしげにヴァレリーを呼ぶ声が聞こえてきた。

「悪い、すぐ行く」

ヴァレリーがクロードに向かって声を返して歩き出そうとした時、

「待って！」

私は自分でも驚くほど強い口調で彼を引き止めていた。

「どうした？」

「リリスちゃん？」

引き止められたヴァレリーだけでなく、クロードまでが怪訝な顔で私を振り返る。

それはそうだろう。

私だつてなんでこんなことをしたのか不思議でならないんだから。でも、引き止めた以上は何か言わなければいけない。

「えつと……どうしてあの時、ステファアーノの名前を知っていたの？」

「こんな事を聞きたいわけじゃなかったけれど、他に何も思いつかなくなった。それに不思議に思っていたのも事実だ。だから咄嗟に口をついて出たんだと思う。」

「あの時つて？」

「虚をつかれたような顔で、ヴァレリーが私を見返す。」

「ほ、ほら。昨日の夜、墓地でステファアーノの名前を呼んだでしょ？ 本人もなんで正体がばれたのか驚いてた感じだったし……」

「あの夜、逃げるステファアーノと彼を追うフェランドさんを、私とミケレがさらに追いかけていた時、唐突に現れたヴァレリーがステファアーノの名を呼んだのだ。あの時点では誰もがステファアーノの正体に気付いていなかった。なのに、ヴァレリーは彼の名前を知っていた。」

「ああ、あれか……焼却炉でリリスが拾った紙のことは覚えているか？」

「うん、マリアンヌ王女の香の匂いがついたやつだよ。確か新刊案内の広告」

「ヴァレリーは軽く頷いて続けた。」

「あの後、Cocytus plcからクレスマント学園着で本を注文した者のリストを取り寄せたんだ。注文者はフランドール在住のニコール・シャイエという男だった。その男のことをすぐに調べさせたんだが、リストに載っていた住所は存在していなかった。たぶん名前も偽名だろう。そこで注文者を探すのは諦めて、学園内で本を受け取った人間を探すことにした」

「それがステファアーノ・カッラ？」

「いや、マリアン又王女だった」

「マリアン又王女がなんで？ だって王女は利用されただけなんでしょ？ 何も知らなかったはずじゃ……」

私の言葉を遮って、戻ってきたクロードが呆れたような半ば感心したような声で言った。

「ご丁寧に偽装工作してたんだよ。そんな細かいとこまでさあ」
偽装工作？

首を傾げる私に、ヴァレリーが問いかけてくる。

「学園に届く荷物は全て検査されるのは知っているだろう？」

「うん。危険物とか持ち込まれないように、だっけ？ 入学してすぐに説明を受けた気がする」

そう、クレスメント学園の警備は恐ろしく厳しいのだ。人の出入りももちろんだけど、物の出入りもきっちり監視されている。学園に届く荷物はボールペン一本でさえ検査されてデータベースに登録されるので、仕事量が膨大で専門の職員がいるぐらいだ。

「当然犯人もそのことは知っているはずだ。だからあまり期待してはいなかったんだが、事情を学園長に説明して、新入生が入学してからの四ヶ月程の間に生徒に届いた荷物のリストを見せてもらったんだ。すると、六月二十三日にコウモリのはく製、ヤギの角、書籍一冊という記述があった。受取人はマリアン又王女」

「それって、誰かがマリアン又王女宛に送りつけたってこと？」

「そうだ。たぶん、学園外にいるサマル商会の人間に頼んだんだろう。そんな気味の悪い品を送りつけられたら、リリースならどうする？」

「もちろん、すぐに捨てるよ。嫌がらせとしか思えないもん」

「マリアン又王女もそうしたんだ。捨てられたゴミは集められて焼却炉へと運ばれる。ゴミが焼却される時間は決まっているから、その前に犯人はゴミの中からマリアン又王女に送りつけられた品を回収したんだ。マリアン又王女に荷物が届いた日に用務員を呼び止めてゴミを見せてもらった人物が、ステファアーノ・カッラだった。正

確には、マリアンヌ王女の護衛の一人、アントワーヌ・ポールに化けたステファーン・カッラだ」

「そうそう。この後がまためんどくせーのなんのって……誰かさんは指示するだけで全く手伝ってくんねーし」

愚痴るクロードを無視してヴァレリーは続ける。

「大切なものを間違って捨ててしまったからゴミを見せて欲しいと言ってきた生徒はアントワーヌ・ポールだった、と用務員は証言している。だが、ゴミが焼却炉に持ち込まれるのは毎日午前十一時頃。その時間は授業中だ。アントワーヌ・ポールは授業に出席している。その日の授業に出席していなかった生徒は六名いたが、うち三名は一緒にさぼっていたと証言している。残りの三名のうち一名は医務室に、一名は図書館にいたことが証明された。残ったのが薬学部のステファーン・カッラだったんだ」

「そっか……」

もう引き止める理由が無くなってしまった。

私は貰ったネックレスを見つめながら、努めて明るく訊ねようとした。

「ねえ、これって紋章だよな？　もしかしてヴァレリーの……」

「悪いが、もう行かなければならない。あまり時間が無いんだ」
言われると思った。

けれど、私が想像していたよりもヴァレリーの声は優しかった。

もっとイライラした調子で怒られると思っていたのに。今はその方がよかったのに。

そうすれば、このどうしようもなく苦しい気持ちも吹き飛んで、いつものように文句の一つでも言ってやれた。

「また……戻ってくるよね？」

私はネックレスを見つめたまま、ためらいがちに訊いた。手のひらを微かに揺する度に、怪鳥が銜えた小さな石が陽射しを受けてき

らきらと瞬いてきれいだった。

「そのつもりだ。卒業しなければ俺もクロードも公の場で魔法が使えないからな」

「いくら貴族の間じゃ形骸化してる条項っていつても、いつ持ち出されて足すくわれるかわかんねーからなあ。一応卒業証書は取つとかないと」

のんびりと間に入ったクロードの声に何故かほっとして、私はネツクレスを制服のポケットにしまい込んで顔を上げた。

「そういうものなんだ」

「あつちでもこつちでも誰かを貶めようと虎視眈々と狙ってる連中はっかなんだよ、社交界って」

「愚痴ってないで、そろそろ行くぞ」

「はいはい。じゃ、またな。リリースちゃん」

「うん、またね」

私はクロードに手を振り返しながら、言う勇気の無かった言葉を心の中で呟いた。クロードの前を歩いている、無駄にプライドが高く、人を顎で使うことに長けた王子様に向かって。

戻ってきたら、また今までのように話しかけてもいい？

腕の中のクレスが、無垢な黒い瞳で私を見上げてきた。

さようなら、僕のリリース 3

「なに、やってるのお？」

聞き慣れた間延びした高い声に、私は一心にページを繰っていた手を止めて本から顔を上げた。

淡いブロンドの柔らかかそうな髪を軽く手で抑えながら、私が開いているページを覗き込んだエレザに笑みを向ける。

「ちよつと調べもの。これって、紋章だよな？」

私は手にしていたネックレスを彼女に見せた。細い銀の鎖の先には親指の先ほどのペンダントヘッドがついている。

「うわあ、これ本物？ すごおい、どこで手に入れたのお？ いいなあ」

エレザはネックレスを目にした途端に顔を輝かせた。瞳を潤ませて食い入るようにネックレスを見つめる姿は、ちよつと鬼気迫るものがある。

女の子だから、アクセサリーが好きなのかな？ とも思えなくはないけど、それにしたって反応が少しおかしい。

「ヴァレリーから貰ったんだ。色々と協力してくれたお礼だってさ」

「ふう〜ん」

私の言葉に、エレザが意味ありげな笑みを浮かべた。

「な、なに？」

「なんだろう？」

さつきも変だったけれど、それ以上に妙だ。

「ねえ、リリース」

「うん？」

「私はリリースのことお、応援してるからねっ
ますます意味が分からない。」

「は？ 応援って？」

私は彼女の意図が全く理解できずに、かなり調子はずれな声をあ

げてしまった。その私に、エレザが満面の笑み返してくる。

「決まってるじゃない。リリスの初恋！」

「は、はつこいいい!?!」

ありえない! 絶対にありえない!

初恋って、私がヴァレリーを好きだとか、そういうこと?

啞然^{あぜん}としてエレザを見上げた私に、彼女は小首を傾げた。

「あ、ごめ〜ん。もしかして初恋じゃなかったあ? う〜んと、じ

ゃあ、リリスの恋があ、成就するように応援するからね!」

いや、そこじゃなくって……。

「初恋も何も、恋なんてしてないから!」

私が全身全霊を込めて強く否定すると、エレザは不満そうに頬を膨らませた。

「じゃあ、なんでそんなに寂しそうにしてるのぉ? そのネックレス

眺めてぼーっとしちやつたりい」

「これは……ただ気になるだけ! 紋章って同じ家系でも人それぞれで違うんでしょ? それに、ほら!」

私はペンダントヘッドを裏返して見せた。

そこには古代語で短い言葉が刻まれている。

「これ、なんて書いてあるのか気になるし」

その古代語を目にした瞬間に、エレザの頭の中からは私のことなどすっかり吹き飛んでしまったようだ。

ネックレスを乗せた私の手を両手で包み込むと、夢見る乙女のような顔でうっとりとして呟く。

「モットーだあ、きつとこれ。わあ、すてき!」

「モットーって?」

「えつとねえ、紋章って身分によって種類が色々あってね。ヴァレリーは王子様だから、正式な紋章はもつと大きくって図案も複雑だと思つのお。その正式な紋章のね、一番下に記される座右^{せうじく}の銘のよ

うなものでえ……」

ああ……。

やっと今になって、エレザが食い入るようにネックレスを見ていた理由がわかった。

彼女はアクセサリーに興味があつたんじゃないやなくて、紋章に興味があつたのだ。紋章といえば、エレザの大好きな騎士様にはかかせない重要アイテムだ。

このままでは、延々と紋章について熱く語られてしまう。

アール先生にクレスメントオトカゲについて半日近く熱く語られた悪夢が蘇ってきて、私は慌ててエレザの言葉を遮った。

「ありがとう！ なんとなくわかった！ で、なんて書いてあるか読める？」

幸いエレザは紋章についての講義を途中で遮られたことに機嫌を損ねた様子もなく、眉根を寄せて古代語を解読しようと挑戦してくれた。けれど、すぐにギブアップして談話室内を見渡した。

「んー、ちよつと無理かも。ジャンなら読めるかも……あ、いたよお」

エレザが目を留めた先は、広い談話室の中でも特等席と言えるソファセットが置かれた窓際だった。

窓際の一面に、一人がけのソファ二脚が小さな丸テーブルを挟んで置かれているセットが、四セット等間隔に並んでいる。そのソファセットの一つ、一番奥まった場所にあるソファに黒髪の生徒が座っていた。

ジャンは本を手に、向かいに腰掛けるリュカと何かを話あっている。テーブルの上には広げられたノートと、散乱する筆記用具。たぶん、勉強でもしているんだろう。

初めて真剣に勉強しているリュカの姿を目にして、期末試験が夏期休暇明けに延期になったことを思い出して憂鬱な気分になった。

私も後でジャンかアルマに色々教えてもらおう。半分寝ながら書いた謎の暗号で埋め尽くされている私のノートは、何の役にも立

たないし。

「ジャン！　ねえ、古代語を解説してほしいんだけどお」

私やリュカと違って試験結果を気にしなくてもいいエレザ（意外と真面目で優秀）が、大きな声を上げて手を振った。

その声に気づいたジャンとリュカが私達を振り返ったけれど、気づいたのは彼らだけではなかった。談話室中の生徒が、何かとこちらに注目し始めている。

「これ、これえ」

エレザは談話室中の視線を受けても一向に気にした素振りも見せず、私の手からネックレスを取り上げると振りまくった。

ジャンとリュカが呆然と、エレザと空中に銀色の円を描くネックレスを見つめている。が、そこはいつも冷静沈着なジャン。すぐに我に返ると、周囲の好奇の目にめげることなく、こちらへと歩いてきてエレザの手からネックレスを受け取ってくれた。

「うわ……なんでモットーって、今でも古代語じゃなきゃ登録できないんだろーな。別に共通語でも母国語でもいいじゃん」

ジャンの手の中的ネックレスを嫌そうに眺めながら愚痴ったのは、呼んでもいないのについてきたリュカだ。

そのリュカをエレザが軽く睨む。

「古代語じゃないと雰囲気が出ないじゃないっ。わかってないんだからあ」

私は二人のやりとりを尻目に、真剣な面持ちで古代語を眺めているジャンに声をかけた。

「……読めそう？」

「何も求めず、何も恐れず……じゃないかな？」

さすが優等生！　私が二つの辞書を広げて一時間近く格闘していた一文を、何も見ずにあっさりと解説しちゃうなんて！

「さすが！」

「すごいー！」

「おお！ 難しい本ばつか読んでるだけあるじゃん」

「誰のモットーだ？ まさかとは思うが、リュカじゃないよな？」

ジャンは私とエレザの羨望のまなざしと、茶化すリュカの言葉に、居心地悪そうに眉をしかめてペンダントヘッドを裏返した。

「ああ、ヴィラールの王子様のものか」

コカトリスが描かれた紋章を目にして、ジャンはそう呟くとスクリーンを見上げた。

談話室の東側の壁際に常設されたスクリーンでは、マリアンヌ王女殺害事件のニュースがまた流れている。今日はどこの局もそのニュースばかり流している。

ヴィラールの国旗を背に、王や王妃達とともに会見にのぞむヴァレリーの姿も何度も報道されていた。

何も求めず、何も恐れず

どこことなく悲壮感が漂う言葉と、スクリーンに映し出されたヴァレリーの姿が重なる。正装に身を包み淀みなく質疑応答をこなす姿は、私が知っている彼とはまるで別人だった。

ヴァレリーがスクリーンに映る度に、私とは住む世界が違うとつきつけられているようで苦しくなる。

初恋。

エレザの言葉が急に耳に甦ってきて、どきりとした。違う。

私はヴァレリーに恋なんてしていない。

よりによつて、なんでヴァレリーなんだ。あんな自意識過剰で、横柄おっへいで、意地悪で、プライドばかり高い奴！ いいところなんて顔だけじゃないか。

そうだよ。そんなこと……あるはずない。

「リス？ どうし……」

「そうだあ、リュカは領主様の息子なんだから、大紋章も持つてるよね。リュカのモットーって、どんな言葉あ？」

心配そうに私の名前を呼ぶリュカの声と、それを遮って響いたエ

レザの明るい声に、私はぼんやりと見上げていたスクリーンから視線を下ろした。

これ以上物思いに耽っていたら二人になんて言われるかわからない。

それに、エレザじゃないけどリュカがどんな言葉をモットーにしているのか聞いてみたい気もする。

「リュカのモットーかあ。確かに気になるかも」

「はあ？ なんだよ、いきなり。覚えてねーよ、そんなもん」

「覚えてない？ 生涯ついてまわって、最後は墓に刻まれる言葉だぞ」

急に自分の事が話題になって戸惑うリュカに、ジャンの厳しい声がかかる。

「覚えてねーもんは仕方ねーだろ。てきとーに紋章官につけてもらって国に提出してもらったし」

「お前……そんな大切なものを、なんて適当な……」

ああ、また始まった。

「もう！ 喧嘩しないのぉ」

一生懸命止めようとしているエレザには悪いけど、私はもうこの二人の争いいさかにはすっかり慣れてしまっていた。もちろん、止める気なんて全く無い。

「モットーも読めたんだし、もう放つといてどっか行こう。きりが
ないから」

私がエレザの肩に手をかけて、そう言った時だった。

「お取り込み中悪いんだけど、リリスちゃんをお借りしてもいいかしら？」

背後から急にかけられた声に振り返ると、談話室の入り口の扉に片手をかけた学園長が、艶やかな笑みを浮かべて私たちを眺めていた。

さようなら、僕のリリース 4

土の館のエントランスの扉を開けると、暑くてどんよりとした空気が全身にまとわりついてきた。空はどこまでも青く晴れ渡り、太陽はじりじりと容赦なく照りつけている。

相変わらず露出度満点の学園長の姿も、この陽射しの中では様になっっていた。

濃いブラウンのトングサンダル、マイクロミニ丈の白いティアードワンピース。頭にはピンクベージュのレースとコサージュで飾られた古風なストローハットまでかぶっている。そして、豊かな胸と形のいいヒップを強調するように、ぎゅっと絞られたウエスト部分には、宝石とスタッズで装飾が施された薄茶色の皮ベルトが巻かっていた。まるでリゾート地にでもいるかのような格好だ。

学園長はうだるような暑さをもともせず、ゆったりとした襟ぐりから覗く胸の谷間と、歩くたびに揺れるスカートからのびる長い脚を惜しげもなく晒し、颯爽と歩いて行く。

私にはそんな元気は無い。

太陽の陽射しを跳ね返すぐらいに堂々と歩く学園長の後姿に尊敬の眼差しを注ぎつつ、とぼとぼとついて歩きながら考えるのは、早く光の館に逃げ込みたいということだけだった。

光の館に着けば、空調の行き届いた快適な室内と氷をいっぱい入れたアイスティーが待っている……はずだったのに、学園長は私のささやかな願いを裏切って光の館を迂回し始めた。

「あの……どこに行くんですか？」

さすがに暑さに耐えられずに聞くと、

「裏門。あなたに会いたって言う人がいるのよ」

学園長は足を止めずに肩越しに振り向いて微笑んだ。

「裏門……」

ここから、まだまだかかる。

しかも、ついたところで快適な室内も氷をいっぱい入れたアイスティーも待っているはずがない。

私の中に残ったわずかな気力が一気に萎えていくのを感じた。なぜこの真夏日にわざわざ裏門で人に会おうと思ったのか。

私は裏門で待っているという『私に会いたがっている人』を恨めしく思った。

光の館を迂回して、二十分ぐらい歩いただろうか。

ようやく前方に裏門が見えてきた。

裏門と呼ばれてはいるものの、実際には表門よりも大きく、表門と同じように門の右脇には警備員が常駐する小部屋が併設している。表門と違うのはきらびやかな装飾が全く無い上に、積み上げられた石の表面はごつごつとしていて薄緑色の苔まで生えていることだ。

裏門は主にクレスメント学園に出入りする業者の人達が使うので、実用性さえあればいいということなんだろう。表門より大きいのも物資搬入の為だと思う。昔は荷を満載につんだ馬車が、今はトラクターがこの裏門を出入りしている。

その殺風景な裏門の門扉の前には、一台の大きな車が停まっていた。細長い箱のような車体は上方が白、下方が濃い灰色に塗り分けられ、ちょうど中央に紋章が描かれている。五芒星の上に両天秤は、国際魔法取締局の紋章だ。

車のそばには人影も見えた。特別捜査官の制服に身を包んだ人たちが数人と、クレスメント学園の制服を着た男子生徒？

特別捜査官たちに囲まれている生徒の横顔をみとめて、私は思わず声を上げていた。

「ルパート！」

男子生徒が振り向いた。

青白い顔が昼の陽光のもとで、より一層青白く見えた。彼は驚いたような顔でしばらく私を見つめていたが、何も言わずに顔を伏せ

た。

私の方も名前を呼んだはいいものの続く言葉が見つからない。

私は特別捜査官たちとルパートの方へと足を速めながら、学園長に尋ねた。

「会いたがつてる人つてルパートだったの？」

「そうよ。彼はこれから更生施設へ行くの」

「更生施設!？」

足が止まる。

ルパートがおこなった悪魔召喚は重罪だ。彼が更生施設に送られるだろうという事はわかっていた。

それでも、実際にその日が来たのだと知らされると、信じられない思いでいっぱいになった。

私の背を学園長が軽く叩いた。それに促されるように、また歩き始める。

「心配しなくても大丈夫。長くても五年もすれば出てこられるわ」「でも……」

「彼にとつては、このまま学園にいる方が将来苦しい思いをすることになるかもしれないのよ」

納得できずにいる私に、学園長は静かに諭すように説明してくれた。

未成年の悪魔崇拜者はマインドコントロールによる被害者が大半だということ。

親族や身近な人物に悪魔崇拜者がいるケースがほぼ100%で、彼らとの交流を絶たなくてはならないこと。

植え付けられた価値観を変えるには長い時間が必要なこと。

そして、更生施設を出て人並みの生活が出来るようになった人たちもたくさんいるということ。

「退学扱いにはしないから、また戻ってきたら学び直すこともできるわ」

学園長は最後にそう付け加えると、特別捜査官たちの方へと向き

直った。

「まだ時間はある？」

「はい。三十分程度でしたら……」

答えたフェランドさんの言葉を、途中で固い声が遮った。

「いえ、行ってください」

ルパートが真っ直ぐ学園長とフェランドさんを見つめている。

「いいの？ もう会えないかもしれないのよ？」

「はい」

ルパートの声に迷いはなかった。

「よろしいのですか？」

「本人がいつて言ってるんだから、いいんじゃないかしら？」

困惑した顔でこちらの様子を窺うフェランドさんと学園長。

そんな顔で私を見られても困る。

会いたいと言ったのは、私じゃなくてルパートの方だ。

その事は二人も十分承知しているようで、戸惑いながらもフェラ

ンドさんは部下に指示を出し始め、学園長はルパートに何やら話し

かけ始めた。

何もする事の無い私だけが、ぽつんと炎天下のもとに取り残され

た。

車に乗り込む特別捜査官二名を見守り、車の後部扉を開くフェラ

ンドさんの姿を見守り……。

って、ちよつと待て！

何か話があったから呼んだんじゃないの？

この溶けてしまっいそうな暑さの中、ただ馬鹿みたいに突っ立って

る姿が見たかったってこと？

嫌がらせかと思っただけけど、どうもそうでもないらしい。

なぜなら奴はあの一瞬目があつたのを最後に、一度も私を見よう

としないからだ。

涼しい顔で学園長と話したり、車の後部扉を眺めたりしている。

なんだか、だんだんムカついてきた。

「ちよつと！ 何か話があったんじゃないの!？」

私は我慢出来ずに、後部扉から車に乗り込もうとしているフェランドさんとルパートの後ろ姿に向って声を上げた。

怒気を含む声に、ルパートとフェランドさんが振り返った。

振り返ったルパートの顔を見た途端に、さっきまで感じていた憤りはどこかへいつてしまった。

彼の顔に浮かんでいた表情が、自分に怒りの矛先を向けている相手に対してのものとは思えなかったからだ。

ルパートは微笑を浮かべていた。

もしかしたら、ルパートの笑顔を見たのは初めてかもしれない。

こんなふうに笑えたんだということに驚いたけれど、それ以上になぜ今笑うのかということに驚いて、私は彼の笑顔をぼかんと見つめることしかできなかった。

「さようなら、僕のリス」

別れの言葉にも何も返せずに、呆気にとられて立ち尽くす私の前で、ルパートは車の中へと消えていった。

裏門の門扉が開けられて取締局の紋章をつけた車がゆっくりと走り出しても、私はその場を動けずにいた。

ルパートが別れ際に見せた微笑が忘れられない。

あれはなんだったんだろう？

「あの子、最後まであなたの事を口にしなかったのよ」

「私のこと？」

振り向いた私に、学園長は軽く頷いて続けた。

「ええ、彼が悪魔を召喚しようとした日の夜に、あなたが彼の部屋に入っていくのを見たという生徒がいたの。それだけじゃ無いわ。

他の生徒はあなたが男子寮のある三階の廊下を歩いていたと証言しているのよ」

「それで、ロベルトがあんなに……」

ルパートの悪魔召喚を止めた後、エレザが持ってきたヒビが入った卵を見たシヨックと疲労が重なって倒れたことを思い出した。

目を覚ますと医務室のベッドに寝かされていて、すぐにテオドルさんとロベルトが訪ねてきたのだ。あの時のロベルトは、まるで私を凶悪犯罪者でも見るような目で見ていた。

「ずいぶん失礼で嫌な奴だと思っただけけど、疑われるような証言がたくさんあったからだったのか。」

黒髪の女生徒がルパートと一緒に食堂へ行ったという証言があったことは知っていた。確かマリアンヌ王女が殺害された翌日、ヴァレリーと一緒に学園長室へと連行された時にロベルトの口から聞いたはずだ。

でも、『黒髪の女生徒』じゃなく、『私』だと断定するような証言まであったことは知らなかった。それを皆の前で口にしなかったのはロベルトの心遣いだったのかもしれない。嫌な奴だったけれど、思ったよりもちゃんとした捜査官だったのかも。

「ルパートの部屋に行ったことなんてありません。部屋がどこかも知らなかったし」

「わかつてるわ。ステファアーノ・カツラは幻術に長けていたんだもの。あなたに化けてルパートに接触したんでしょね。でもね……」

学園長は帽子のつばに軽く手を添えながら、裏門から続く石畳の道を眺めた。ルパートを乗せた車は、ゆっくりと坂を下って緩やかなカーブにさしかかろうとしている。あのカーブを曲がると、こちら側からは生い茂った木々に遮られて見えなくなってしまう。

「あの時点ではルパートを操った犯人の正体も、その犯人が幻術を使うということも誰も知らなかったわ。テオドルさんが、その可能性を推察していたぐらいだね。だから第二の事件が起こるまでは、あなたが一番疑わしい人物だったの」

車はカーブの途中から大きな木に遮られて見えなくなった。その先はずっとつとつそうとした森が続くばかり。私は学園長の言葉を聞きながら暗い森と、その下に広がる青い海を眺めていた。

あの森を越えた先には小さな漁村があるだけだ。車はカーブの先の分かれ道から南の方へ向かい、クレスメント島唯一の町キレニアへと行くはずだ。私は車の姿が見えなくなっても、森へと続く道から目を逸らすことができなかった。

その私の耳に、学園長の言葉が子守歌のように響く。

「ルパートは何度もあなたのことを尋ねられていたわ。でも、一言もあなたのことを口にしなかった。全て自分が一人でやったことだと、そう言い続けたの」

「どうして……」

「あなたを守りたかったんでしょね。彼が召喚しようとした悪魔の名はフラウロス。フラウロスは他の悪魔から身を守るために召喚されることが多いのよ。これは私の想像でしかないけれど、あなたに化けたステファアーノはルパートに助けを求めたんじゃないかしら。薬学部の生徒が作った研究中の薬を飲ませた状態だね。それで彼はあなたを守るためにはフラウロスを呼ぶしかないと思っ込んだ。本

人は何も話さなかったから、本当のところはわからないけれど」
私を守りたかった？

ルパートが私を？

悪魔を呼んだのも私を守るため？

「ルパートが守りたかったのは私じゃない」

彼が守りたかったのは私じゃなくて夜の魔女だ。彼の夢に現れた黒髪に黒い瞳を持つ絶世の美女。男に淫らな夢と快楽を与える悪魔。けれど……。

ルパートは本当に私じゃなく、夜の魔女を守りたかったんだろうか。

どこかの時点で私が夜の魔女ではないことに気付いていたとしたら？

初対面の時は条件にぴったり（絶世の美女は除く）の女を見つけ喜びで細かい部分が見えなくなっていたとしても、数ヶ月も一緒にいたら何かがおかしいと気付きそうなものだ。だって、私はあまりにも夜の魔女とはかけ離れている。

それでも私を守ろうとしてくれたのかもかもしれない。

もしそうなら、私はどうしたらいいんだろう？

別れの挨拶も、お礼も言えなかった。

何も知らなかった。

ルパートが悪魔を呼ぼうとした理由も、私をずっと庇い続けていたことも。何一つ知らずに送り出してしまった。

「帰りましょう。ずっとここに立っていたら熱射病になってしまうわよ」

学園長に促されるままに、私は土の館へと歩きはじめた。

ルパートが守ろうとしたものが、私なのか、それとも夜の魔女なのか。それを知る日はいつか来るのかな？

私はもう一度裏門を振り返った。

できるなら今すぐルパートを捕まえて、あの微笑の意味を問いただしたかった。言いたいこともいっぱいある。

でも、また会うことができたら真つ先に謝らないと。
あの日、何も言えないまま送り出してごめんなさい　と。

「土の館に帰る前に、簡単なテストにつきあってもらえるかしら？」
唐突に学園長がそう言ったのは、光の館の前にさしかかった時だった。

特に断る理由もなかった私は、素直に学園長の後について光の館四階へと向かった。

なんとなく土の館に帰りたくなかったというのもあった。帰っても試験勉強をする気にはなれそうもない。広げたノートの前でぼんやりとルパートの事を考えてしまう自分の姿が目に見えなかつた。

学園長は学園長室内にある執務室につくなり、おもむろに一枚の紙に絵を描きはじめた。

「なんですか？　これ……」

学園長が描き上げたのは動物のようだった。判別できるのはどがつた耳と、四本の足、尾のようなものだけだ。犬か猫のように見えなくはないけれど……。

「犬にしか見えないでしょう」

犬？　犬だったのか、これ。

お世辞にもかわいいとは言えない犬の絵をまじまじと見つめてみると、学園長はきれいにマニキュアの塗られた指でとんとんと紙を叩いた。

「今、この犬に名前をつけたわ。それを当ててみてくれる？」

「え？」

「いいから、なんて名前だと思う？」

これは一体なんのテスト？

戸惑いながらも、私は飼い犬によくありそうな名前をあげていった。

「うーん……シロとか？　ボス？　レオン？」

「正解はオニキスよ。やっぱりこの程度じゃダメみたいねえ。次は……」
言葉とはうらはらに、さして残念がる様子も見せず、学園長は室内を見渡した。

すぐに彼女はソファから立ち上がると、机の上に散乱していた書類の中から一枚のチケットを引つ張り出して私に差し出した。質問する暇も与えてくれない。

「これを私に送った人の名前を答えて」

「ええ！？ そんなのわかりませんよ」

「いいから、ちよつとやってみて。チケットは持つても持たなくてもいいわ。意識を集中させればいいの。そうね、私の心の中を読むような気持ちで」

送り主を当てろって言われても……。

私はチケットを受け取ると、言われた通りに軽く目を閉じて意識を集中させてみた。

意識を集中させるといつても、やり方なんてよくわからない。ただ、学園長の心の中を一生懸命探ろうと自分なりに努力しただけだ。もちろん、何も浮かんでこない。

手に持ったチケットの紙の質感と、執務室内に響く時計の秒針の音がいやに生々しく感じられただけだった。

「はぁあゝっ。 やっぱり無理です。なんにもわかりません」

私は無意識のうちに止めていた息を大きく吐き出して、チケットを学園長に返した。

「そう。何か感じたり見えたりしなかった？」

「うーん。特に何も」

「そう……」

学園長は何かを考えるように小さく呟くと、そのまま執務室を出ていってしまった。

「え？ あの……」

ソファから腰を浮かした私を残して扉がぱたんと閉まる。

「どろじょひ……」

まさか勝手に帰るわけにもいかない。

しかたなくソファに座り直すと、学園長の帰りを待つことにした。

アニマルマスターへの道

学園長がその手に一振りの剣を携えて戻ってきたのは、ソファに座り直してテーブルに用意されたままになっていたアイスティーに口をつけてすぐのことだった。

「これで、さつきと同じ事をやってみて。これでもダメなら私の勘違いだったってことね」

そう言っつて学園長が差し出した剣は、ずいぶん古びたものだった。けれど、骨董品と呼ぶには武骨で地味すぎた。

柄にも剣を収めた鞘にも装飾はほとんどなく、無数に刻まれた大小の傷からは錆まで浮いている。骨董品に縁の無い私が見ても観賞用に高値で取引される品のように思えなかった。

「あの、これは？」

私は差し出された剣を受け取った。それほど長さもなく細身と言っつていいぐらいの剣なのに、手にずっしりとした重みを感じる。

「この剣の持ち主を当てて欲しいの」

やっぱり、そうきたか。

そんな真剣な顔で見られても、何度やっても無駄だと思っただけどなあ。

でも、やらなければ帰してくれそうにない雰囲気だ。

私は謎のテストに挑戦するために、目を閉じ意識を集中させた。両手で支えていた剣の重さが消え、時を刻む秒針の音が遠くなる。

今までとは何かが違う。
そう感じた瞬間、まぶたの裏に青空に立ち上る黒煙が浮かび上がった。

執務室に居たはずなのに、今日の前を埋め尽くしているのは、古風な衣装に身を包んだ人の群れだ。

私はその中で群衆を必死にかき分けていた。目指す場所は、誰もが口々に何かを言いながら眺めているあの黒煙が立ち上る方角のよ

うだった。

頭の中に私じゃない誰かの声が響く。

違う！　そこにいるのは私じゃない！

これは、あの時と同じだ。

ステファアーノ・カツラの死の瞬間に居合わせた時に見たものと…

…。

あの時は映画でも見ているように、暗闇の中でスクリーンに映し出される光景を眺めていた。

でも今は、自らの手で人波を押し分けている。

むせ返るほどの人いきれと薪が燃える匂いに、私は激しく咳きこみながらも立ち止まろうとはしない。

見たくない！　行っちゃだめ！

その先に待っているものが何かはわからない。ただ恐ろしいものだという確信に似た予感につき動かされて私の中の誰かに必死になつて訴えた。

けれど、どんなに頑張つてみても私の声は届かなかった。

私の体は決して立ち止まろうとはせず、やがて人波の間から黒煙の正体が垣間見えた。

一本の木に縛りつけられた少女。その足下にはうずたかく薪が積み上げられ、放たれた火が勢いを増して今まさに少女を飲み込もうとしていた。

「クレム！」

私は声を限りに叫んだ。

私の口から放たれた私のものではない絶叫は、周囲の喧騒にかき消され、体は人波に押し返されて少女の姿は見えなくなった。

「クレム……」

もう一度ささやくように名前を呼んだ声は、間違いなく私の声だった。

充滿していた人の体臭と熱気も煙の匂いももう感じない。さっきまでの喧騒も幻だったかのように周囲は静まり返っている。

そう。あれは幻だったんだ。

手に戻ってきた剣の重みを感じて、私は恐る恐るまぶたを開けた。傷だらけでボロボロになった剣が目映った。この剣はあの幻の中では、きれいに手入れされた状態で私の腰にさがっていた。

でも私はこの剣の本当の持ち主を知っている。

私はこの剣を、それ以上に大切な何かをあの火刑台の上の少女に返そうとしていた。

「この剣の持ち主は……クレム」

顔を上げると、学園長が同意するように頷いた。

「ええ、クレムよ」

その表情からは彼女が何を考えているのか知ることができなかった。

「今のは……何？」

怖かった。

燃え上がる炎の鮮やかな赤。周囲を埋め尽くす人たちが発するむせ返るような体臭。薪が焼ける匂いと黒煙。悲鳴と歓声と怒号が入り交じったざわめき。

あまりにもリアルなその光景も怖かったけれど、それ以上に怖かったのは少女の姿を見た瞬間に胸に湧き上がった感情だった。

衝撃と悲しみと後悔が混じり合い溶け合って、叫ばずにはいられなかった。その後押し寄せてきた圧倒的な虚無感。

何もかも青い空に吸い込まれて消えて無くなっていくような感覚。自分がどこにいるのか、何をしようとしていたのか、生きているのかさえも分からなくなった。

全てを失う瞬間って、あんな感じなんだろうか？

私は慌てて持っていた剣をテーブルの上に置いた。置いたというよりも放り出したと言った方がいいかもしれない。

この剣に触れていたら、またあの幻を見るんじゃないかと怖くなってしまうのだ。

「ごめんなさいね。でもこれぐらい強い思いがなければ読み取れな

いんじゃないかと思って」

学園長はそう言って、私が放り出した剣に手をのばした。

「嫌な思いをさせてしまったけれど、これではつきりしたことがあるわ」

いつもの艶やかな笑みを浮かべて話す彼女からは暗い影なんて微塵も感じない。

でも剣に触れた長い指は微かに震えていた。

もしかして、あの光景は学園長の記憶？

クレムと叫んだ声は、学園長の声によく似ていた気がする。

「ねえ、リリス」

学園長は剣をぬいぐるみでも抱くように抱えて、優雅にソファに腰掛けた。白いワンピースとストローハットのせいかな、今日の彼女はいつもよりずっと幼く見えた。まるで私とほとんど変わらない年ぐらいの少女のように見える。

けれどさっきの幻が学園長の記憶なら、少なくとも彼女は五百年以上も昔から生きていたことになる。私が見たものはきつと魔女狩りの情景。それに広場を埋め尽くしていた人たちの服装は……。

「今、私の年齢のことを考えていたでしょう？」

図星をつかれて顔を上げると、不機嫌そうな学園長と目が合った。

「え？ いえ、違います！ そんなことは……あの……」

慌てて否定したものの、訝しげに私の目を見つめる学園長を前に言葉が続かない。

「まあ、いいわ。そんなことよりも、魔力には二つのタイプがあることは知っているわね？」

「えっと……私たちが一般的に魔力と呼ぶ力と、それとは別に超能力とか第六感とか呼ばれる力、ですよね？」

「ええ、そうよ。自分の意思でコントロールして、自在に力の質を変えることができるのが私たちが魔力と呼んでいる力。一型に分類される力ね。この力に呪文や紋様で方向性を与えて利用するのが魔

法。それとは別に自分の意思でコントロールしきれない力が二型。超能力や第六感とも呼ばれている力で、この力は発動自体はコントロールできる場合があっても力の質を変化させることはできないわ。一型が自分の意思で好きなように色付けできる水だとすると、二型は始めから色がついているようなものね。その色は変えることができない。だから、どんなに二型の力が強くても魔法を発動するための原動力にはならない」

学園長はそこでアイスティーに口をつけて一息つくくと、とんでもないことを言つてのけた。

「その二型の力をあなたが持つてるの」

「はあああ？ な、なんで私が……」

超能力とか、嘘でしょ？

二型の力は一型の力とは全く別もので、一型の力を持っている人がみんな二型の力を持つているわけじゃない。逆もそうで、一型の力を持っていない人が二型の力を持っている場合もある。

そして、この二型の力は一型の力以上に珍しい力なのだ。一型の力を持つ人がエデンで百人に一人だとすると、数万人に一人とかそんなレベルだと思う。

まるでクジにでも当たったような気分だった。それもハズレが無いはずのクジでハズレを引いたような気分だ。

思わずアイスティーを吹き出しそうになった私に向かって、学園長はさらりと続けた。

「なんでって言われても本当のことなんだもの。この剣の持ち主を当てたじゃない。もう疑いようは無いわ。それに、あの夜にあなたが動揺したのは、ステファアーノ・カツラの死の瞬間に何かを見たからでしょう？ そう思ったからこのテストをやってみただから。あなたの力は二型の中でも超感覚的知覚と呼ばれる力ね。人や動物の強い思いが伝わってしまうんだと思うわ」

学園長の説明を聞いていると、頭の中が真っ白になってきた。

やらなきゃいけないことがたくさんある（期末試験の勉強とか、

あと進級試験に向けてクレスと交流を深めることとか)のに、その上に妙な力まであると言われてもどうすればいいんだ。

この先、頻繁にさっきのような幻を見るようになったらたまらない。

「治す方法とかないんですか？」

「無いわ。そもそも病気じゃないし」

「じゃあ、この先もつと酷くなったりとか……」

「さあ？ それはどうかしら。徐々に力が増していく人もいれば落ち着く人もいるし、途中で力を失う人もいる。あなたのように突然力を持つ人もいるしね。二型の能力テストは一型の能力テストやIQテストと同じように入学時に全員に実施するの。そのテストで引っかけた者だけにテストの意味と結果を知らせて学科選びの参考にしたり、一型の力を持たない人に対しては今後の生活について相談したりするんだけど、あなたはその時はパスしているのよね」

それはそうだろう。この学園に入学する前には不思議な幻を見ることなんてなかったし、他にも変な体験なんてしたことがない。ただ他の人よりも動物がなついたぐらいだ。

「今からでも遅くは無いわ。神学科か精霊魔術学科に専攻を変える？」

「冗談じゃない。」

毎日礼拝堂にこもって祈りを捧げたり、一日中森の中でぼーっと木を眺めてすごすなんて性に合わない。

「絶対に嫌です！ 専攻を変える気はありません」

これ以上ないってぐらいに強く拒絶すると、学園長は苦笑して言った。

「そう言うと思ったわ。じゃあ、せっかくだからアニマルマスターを目指したら？」

「アニマルマスター？」

「ええ、可哀相だけどはつきり言ってしまうと、あなたに召喚士は無理よ。今回のことがあってあなたについて調べたの。あなたの魔

力 一型の能力ランクはC。動物学が専攻できるギリギリのライン。それでは召喚士になれたとしても呼べる動物は限られてしまわうわ。召喚士としてあなたを雇う国や組織は、まず無いと思った方がいいでしょうね。まあ、動物学の生徒全員が召喚士を目指しているわけではないけれど」

それは私も分かっていた。

私の魔力で呼ぶことの出来る動物は犬や猫が精いっぱいだ。犬だって大型犬になれば呼べるかどうか怪しいぐらいだと思う。

だから初めから召喚士になることは諦めていた。

学園長の言葉通り動物学は召喚士を養成するだけの学科では無い。召喚士以外の道に進む生徒もたくさんいる。私もその一人になるつもりだった。

まだ具体的な目標は何も決まっていなかったけれど、獣医か野生動物の生態調査関連の仕事にでもつけたらいいなと漠然と思っていた。

でも、アニマルマスターという職業にはなじみがなかったから、全く選択肢に入っていなかった。その存在すらつい最近になって知ったばかりだ。

「アニマルマスターって、召喚せずに動物を操る人たちでしたっけ？ 今回も国際魔法取締局から一人派遣されていたらしいですけど……」

「ええ、そんなところね。アニマルマスターは召喚士並に厚遇されるわよ。もう世界各国からスカウトがくるし、国際魔法取締局でも常に募集しているわ。それだけ国際試験に合格する人がほとんどいなくて、希少価値がある職業ってことなんだけど」

「うわぁ……全然ダメじゃん。私なんか目指せる職業とは思えないんですけど……」。

「そんな顔しないで。希少価値があるのは試験に合格するために超感覚的知覚が必要だからなのよ」

「超感覚的知覚が？」

「そう。アニマルマスターが一番重要になってくるのは、動物との意思の疎通。超感覚的知覚を持たない人でも長く動物と一緒にいればある程度の意思の疎通は出来ると思うわ。でもアニマルマスターにはそれ以上の能力が求められるの。そうね……召喚士と使い魔のような関係を他の動物とも築けるぐらいかしら？ 召喚士は使い魔として召喚した特定の個体以外の動物はモノとして意思を剥奪した状態で使役するけれど、アニマルマスターは信頼関係を築いた上で協力してもらわなければならないのよ。それも時間をかけずにね」

「時間をかけずにつて……まさか出会って数分で……とか？」

「そのまさかよ。動物と信頼関係を築くには長い時間が必要になるわ。でも、超感覚的知覚を持つ人はその時間を短縮できるらしいの。自分の感情や意思を言葉を使わずに伝える方法に長けているからかしら？ アニマルマスターは高位聖職者や精霊術士と同じで、二型の超感覚的知覚を持つ人にしかなれない職業なのよ。挑戦してみる価値はあると思うけど、どう？」

「やってみます」

私は迷うことなく、アニマルマスターの国際試験に挑戦しようと思っただ。

力を消す方法がなく一生つきあっていると聞かないといけないのなら、力を活かす職業に就くのが一番いいように思えたし、何よりも進むべき道が見えたのが嬉しかった。

この学園に入学してから、いつも自分だけが取り残されているような気がして正直焦っていたのだ。

ジャンやリユカはきっと召喚士になるだろう。誰よりも飲み込みが早く、どんな授業も苦もなくこなしていくミケーレも彼が望む道に進むだろう。彼が望めば召喚士にだってなれるはずだ。グルドはここを卒業したら実家の仕事を継ぐと言っていたし、エレザはきつと優秀な幻術士になるはずだ。

私だけが人並み程度の能力しかなく、何の目標もないままに流されるように学園生活をおくっていた。

魔力があつたからクレスメント学園に入学して、動物が好きだからという安易な理由でなんとなく動物学を専攻して、日々の授業に追われながら気付けば数ヶ月が過ぎていた。

誰にも打ち明けることはなかったけれど、自分だけみんなよりも劣っているような気がして辛くなることもあつた。

一緒にいればいるほど「私はみんなにふさわしくないんじゃないか？」という思いが頭をもたげてきて不安になる。そんな自分が嫌で仕方がなかった。

打ち込める目標が出来たことで、やっとみんなと同じ場所に立てたような気がした。

「じゃあ、きまりね。アール先生にも私から伝えておくわ。喜ぶでしょうねえ、先生。彼はね、本当は召喚士じゃなくてアニマルマスターになりたかつたのよ。あなたがアニマルマスターを目指すと聞いたら、喜んで協力してくれると思うわよ。それはもう、はりきつて教えるでしょうね」

はりきつて教える……。

私はアール先生を喜ばせる星の下に生まれてきたらしい。もうこればかりは諦めるしかない。

アール先生の満面の笑みが脳裏をよぎって、私の中に少しだけ不安が広がった。少しだけ……。

アリスからのメール

学園の生活には慣れましたか？

アリスは元気です。

昨日、鍛冶屋のグレースがマーガレットの咲く丘へ連れて行ってくれました。

お兄さまにも見せてあげたかったです。

少年は壁に背を預け、微かな吐息を漏らした。

その手には一冊の本がある。

数時間前に少年が図書館から借りてきたものだが、濃い緑色のキヤンパス地にマーガレットの花畑が印刷され、金の装飾文字でタイトルと著者名が箔押しされているという、ずいぶんとメルヘンチックな装丁のものだ。

十六、七の少年が好んで手に取るような本には見えない。

線の細い飾り文字で記されたタイトルと著者名は、

マーガレットの咲く丘で

グレース・ミラー

「鍛冶屋のグレースか……今時鍛冶屋なんか居るのかよ」
ミラー

少年は悪態をつきながらしばらく本の表紙を眺めていたが、おも

むろにページを捲りはじめた。

内容には一切目もくれず無造作にページを繰る。すぐに少年の手は止まった。

ノンブルに目を凝らし、張り付いた数ページを剥がすと、目当てのページを見つける。

七十四ページ。

七十四。

それは、少年が今の名前と共に与えられた数字だ。

彼の誕生日 七月四日 であり、彼への暗号でもある。

この学園にいる間の三年間のための数字。

少年は、主人公の少女が幼なじみの少年とたわいのない冗談を言い合いながら学校へと向かうシーン、が描かれた七十四ページの余白部分に右手をかざした。

少年が手をかざすと、何も印刷されていないはずの余白部分にうつすらと茶色い染みが浮かび上がった。小さな点だったそれは、見る間に広がっていく。

やがてただの余白だったはずの場所に、共通語でも少年の生まれた国のものでもない文字が現れた。

少年はその文字に素早く目を通すと、さきほどと同じように右手をかざした。文字は潮が引くように引いていき、小さな点になり消えていく。ほんの数秒でそこに文字があったという形跡は一切無くなってしまった。

「指示に従え か……」

少年は本を閉じると備え付けの机の上に投げ出し、窓辺に寄った。窓には朝から降り続く雨が、今なお止む気配も見せずに透明な筋をつけ続けている。

窓から外を覗くと雨に打たれ続ける灰色の十字架の群と、ときおり思い出したように浮かび上がる青白い光が見える。

ステファアーノ・カツラが死んでいった場所。

何の感慨も覚ええずに、少年は自分の指示の元に死んでいった薬学

部の少年のことを思い出した。

次は自分が切り捨てられる番だ。

彼は雨音を聞きながら薄く笑った。

春が来ればステファアーノの代わりに新しい人間が送り込まれる。

その者の指示に従うことが少年に与えられた新しい任務だった。

ちょうどステファアーノが少年の駒としてこの学園に送り込まれたように、今度は彼が駒となる。何も知らされないままに名前も知らない人間の命令に従い、失敗すれば切り捨てられる。

少年にはこうなる事が分かっていた。分かっていたながら彼は、自分が立てた計画を自らの手で潰したのだ。

だから後悔はしていなかった。

ステファアーノの命と、これがその代償だ。

だが少年には一つだけ気になることがあった。それは、なぜあの時ヴァレリーを殺せなかったのかということだ。

彼にとってあの場で障害になるのはただ一人、ヴァレリーの護衛のクロードだけだった。ヴァレリーがクロードと別行動をとると決まった時からヴァレリーの死は決まっていたようなものだ。

悪魔の召喚を待つまでもなく一瞬のうちに命を絶ち、それをあの黒い獣たちの仕業に見せかければよかったのだ。後は事件を調査するために派遣された特別捜査官が、マリアン又王女を捕まえてくれたはずだ。その為の下準備は抜かりなく整えてあった。

ヴァレリーの亡骸を添えるだけで今回の仕事は終わるはずだったのに、彼にはできなかった。

ヴァレリーが口にした言葉のせいかな？

人の命は平等だ。そうだろうか？

危うく吹き出すところだった。

温室でぬくぬくと育ち、同じ人間の首を鎖でつなぐような立派なご身分の人間が、よくそんなきれいな事を口にできるものだと思えて笑ってやりたかった。

だが、ヴァレリーが浮かべた自分自身を蔑むような微笑を見た時、

少年は思い直した。

この王子様は本気でそう思っている。いや、思ったがっているのだと。

その時に殺したくないとは思った。けれど、殺せなくはなかった。では、なぜ……。

そう自分自身に問いかけてみても答えは一つしか出てこなかった。少年はヴァレリーを殺せなかった本当の理由にすでに気付いている。それを認めるのが妙に悔しくて他の理由を探しているのだ。

聞いたこともないような過疎の村から来た黒髪の少女　　リリス・エーデルシュタイン

少年にはリリスを殺すことができなかった。

ヴァレリーを殺すとなれば、彼と一緒に行動していたリリスも殺さなければならぬ事態に陥るかもしれなかった。それだけは避けたかったのだ。

リリスに恋愛感情を抱いているわけでは無いと少年は思っている。むしろ逆だった。

彼はリリスを憎んでいた。

自分とは真逆の世界を、日の当たる場所を生きてきた彼女が不快だった。

恵まれた者特有の無神経さが彼の心をえぐり、無邪気な笑顔と言動が彼をいらだたせた。

自分とリリスは、疎まれながら冷たい雨にさらされて街を彷徨^{さまよ}う野良犬と、愛情を注がれて快適な室内で何の不自由も無く生きるペットのようだと思った。

リリスは、餓えることもなく虐げられることもなく生きてきた。これからもそうやって生きていくのだろう。そうして彼女は自分のような者がいることを知らずに死んでいく。汚いものを見ることさえないのだ。

そう思うと、彼女が苦勞せずに入れた全てを奪いあげて、冷

たい雨の中に引きずり出したくなる衝動に駆られた。

そのあまりに強い感情は彼を戸惑わせた。

この学園に入学してリリースに出会うまで、少年は感情を高ぶらせることなどなかったからだ。

リリースに対する強い憎しみに引きずられるようにして少年の心は少しずつ変わっていった。

生徒同士のくだらない会話に付き合い、無意味な授業に真剣に取り組んでみせる。時には些細なことで張り合ってみせる。

それは彼がクレスメント学園の生徒として演じてきた姿だったが、いつの間にかそれが演技では無くなっていた。

くだらないと思っていたことを楽しんでいる自分に気付いた時、彼のリリースに対する憎しみは消えていった。

その時から少年にとってこの学園は楽園に変わった。

三年という限りのある楽園に。

彼は自分に感情を思い出させてくれたリリースを、そして初めてできた友人たちを、この儂い夢ほかなのような生活を失いたくないと思った。たとえその後何が続いているとしても。

だから彼は二度目のチャンスさえも潰してしまった。ミケーレを救うためにステファアーノを見殺しにした。

彼はステファアーノの力では、この学園のトップでエデンの魔力を誇るルビリア・ストラドリンの監視の網をかくぐることが不可能なことに気付いていた。

ルビリアがミケーレを餌にマリアンヌ王女殺しの犯人を誘き出すとして、薄々感づいていながら、少年はステファアーノがミケーレを殺そうとするのを止めなかった。

ステファアーノの最後の足掻きあがを、動向を探るために飛ばしていた蜂の目を通してただ眺めていただけだ。

それどころか、ルビリアがミケーレを助けるのがあと一歩遅ければ、自分がステファアーノを処分するつもりでいた。

ステファアーノの剣がミケーレの首筋に触れる瞬間に、剣とミケーレの間に現れて剣先を包み込んだ白い物体。それは間違いなくルビリアの操る死霊だった。

あの瞬間にステファアーノは自分の運命を悟ったはずだ。にもかかわらずあの場から逃げ、土の館へと向かったのは僅かな希望にかけたのか、それとも……。

「俺を道連れにするつもりだったのか……」

どちらにしても無駄な足掻きでしかない、と少年は思う。けれど、それを笑う気にはなれなかった。

自分がこれから歩もうとしている道にも先などない。

「いつそ全てを終わらせてしまおうか」

それは悪くない考えに思えて、少年の頬に笑みが広がった。

反吐へどが出るような仕事を続けながら生き長らえる時間など惜しくは無い。

二年半後に卒業を迎えた時に、人生の幕も閉じてしまう。そうすれば幸せな時を永遠に閉じこめることができるかもしれない。

「アリス、お前のお兄さまは反抗期らしい」

ステファアーノのかわいい妹はなんて名前だったのかな。

ふと、そんなくだらないことが頭に浮かんで、少年は窓に手をついたまま少女によくある名前を次々にあげていった。

シンシア、リタ、エリーゼ、ビアンカ……どれもじっくりこない。やっぱりアリスが最高だ。

どんなに自分の名前が変わっても妹の名前はアリスであり続けた。だから刷り込まれて愛着が湧いただけだろうか。

「いや、この名前だけは本当に気に入ってるよ。俺にアリスという名をくれてありがとう、サマエル」

彼はずいぶん長いこと、そのまま降り続ける雨を眺めていた。

アリスからのメール（後書き）

第二章には目次ページ下部のリンクから入れます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0140h/>

アニマル・マスター

2011年10月5日03時12分発行